あたりに對して、審に理をあらたむべしとて、諸大臣の議論紛紛たれば、日中に至るまで決する事能はさるに、賈后の心、此議久しく決せずんば、眞の情必ず漏出んかと、恐るゝが故を以て、卽ち簾内より宣言して、此の事を解いて曰ふ、太子まことに不仁を懷くと云へども、宗廟の嫡系なるを念へば、是を容忍び寬して、重き典法をとゞめて、免して庶人となし、東宮に居らしむべからずとあるに、衆官なほ以て此議を定めされば、賈后はもだえて簾を掲げ、親ら衆臣公卿に諭して曰く、太子は我家の子なり、今渠れ自ら不道を爲す、律よろしく正典によらば、原より其の死を得ん事、それ幸なり、汝諸大臣、何ぞ妄に短長を議して、是の若くに猶豫にわたるやと云へども、衆官なほいまだ退かず、賈后、宦官を遣し、是を宣慰して曰く、今此一事によりて、衆臣の廷議に日をわたる、甚だ神思を勞せん、太子の情たとひ過なくは、後自ら當に明白ならん、君臣各宜しく膳につくべし、此の議は來日再び議すとも、未だ遲からじと云ふ、是に依りて衆々公卿、先づ朝を退き出づ、かくて賈后は、惡黨孫慮に、ひそかに令し、惠帝の旨を詐り、太子ならびに、前の亡妃の所生の三子、司馬叡、司馬臧、司馬尙を合せ、一同に車輿を以て騙り送つて、金墉城に往しめ、こゝに暫く安置く、又陰に人を使とし、才人謝玖を縊り殺す、是卽ち太子の母なり、朝野の人々、この言を聞知つて、涕泣せずと云ふ者なし、太尉の官王衍は、太子廢出せらると聞くより、乃ち上表し、請うて太子との婚姻を絶の情を陳ね、わが身の禍を免れんとす、帝もとより模糊したる人なれは、王衍が表を見、たゞ誠とし是を信ず、王衍が次女惠風は、心に貞潔を存するものなりしかば、父の所爲の倖さいはひをのぞむ、薄義と思ひ、恨みて切に王衍が命を拒ぎ　心に誓願を立て、太子と同じく、志を金墉の内に守るに、王衍是を責め、女の志を奪ひ、他人に嫁を改めんとすれば、惠風が曰く、烈女二夫に身をゆるさず、一馬一鞍是古の大禮なり、且へ民の家、村庄の女だも、尙ほ心を易へざるに、まして況や、天子の儲君に官たるをや、死せば卽ち死すべきのみ、何ぞ多言を雜へんやとて、王衍が再三に是をすかし怒り、さまざまにすれども、遂に其の操を二つにせず、其の後賈后は父妹女の賈午と謀を示し合せ、孫慮をして、ひそかに毒酒を持たせ、金墉城に往去つて、賈后の命として、太子に死を賜ふ、太子は孫慮に向ひ、吾れ實に罪なきを、事みだりに後宮の計るを以て、枉て害を蒙むる事、內外皆是を知る處たり、吾もし既に罪あらば、何ぞ多官の者共を集會し、面り是を糾め正し、法を以て、首を斬り懸て天下に示し、四海の人の子たらん不肖の者に示さじるや、しかるを今妬母の譖りを以て、過なき子を殺す、何ぞ人君の仁たらん、悠々たる蒼天、我を生ず、何爲ぞ此不孝にあへるやと歎く、孫慮が曰く、必ず多言なる事なかれ、但この酒を飲み玉へ、吾れこの命を受け、餘事さらに解せずと云ふ、太子大に怒り、吾れ一死を惜むに非ず、儞この賊奴、われを賺して宮に入れ、この橫行を圖らんとす、今吾まさに朝に入つて明に訴へ、其の後金墉に觸れ中り、首を碎いて死するとも、斯にいまだ遲からず、汝が如き刼狗の手に死なんやと、言もはてず奔り出て行かんとす、孫慮慌てゝ懼れをなし、かくては身の大事ぞと、袖の中より、藥を春く杵をとり出し、太子の腦門を惜しげもなく連擊に扣くにぞ、太子眩るめいて地に倒るゝを、孫慮はすかさず、毒酒を以て其の口に灌ぎ入る、太子涕泣面に滿つ、須臾あつて七孔より流血し、一言にも及ばずして、死し去り玉ふぞ哀なる、天日これが爲に光なし、尉氏縣と云ふ處、この日より三日の間、つゐて血を雨ふらす、天の戒しむる處とぞ聞えける、此の後如何なる世のはてとか成り行かんと、心ある輩の眉をひそめ涕を流がして、太子無罪の哀れさを憤らぬ者はなし、

通俗續三國志卷之十三

趙王倫謀廢賈后

晉の太子司馬遹は、枉げて賈后の爲に殺さるゝ事、天の威にやあたりけん、天變しきりに打つゞいて、太白星晝る見え、妖星東南に出て、さまざまの禍をしめすに、張華が少子張韙深夜に仰いで、天象を觀れば、一星の光彩、搖々てまさに墜落んとする狀のごとし、其大さ、月に擬すべく見えたりけり、張韙見て、これ何の星ぞと問へば、張華が曰く、中台の華蓋星なりと教へける、張韙また明夜に至りて見るに、光り滅し跡たえ、其の影全くなかりける、爰に於て張韙は、父を諫めて云ふ、今天道しば〳〵變異を示して、人を警しむるは、是みな頃年人事みだれ、親は子を殺すの世上、つひに世民のみだれを引出すべき先兆にあらずや、大人の職、司空の官に任じたるに、今天道の凶を見ながら、人事の失を正す事あたはさらんや、然らば又何ぞ其の位を去つて禍をのがれ、其の清名を全うして、家の祀を保たさる、且へ中台星は、下三公の位に應ず、若はやく退ぞく事を求めずんば、恐くは禍の其の身に及ばんとする事をと、しきりに曰ふに、張華曰く、吾赤心を以て國に仕ふる事をと、心ある輩の眉をひそめ涕を流がして、太子無罪の哀れさを憤らぬ者はなし、

れども、虐后朝に臨む、今これを匡正すとも、生民まさに其の害に勝へさらん、その上また、天道は悠遠にして、理玄く奥深し、豈能く蔑くに應ずるのしるしあらんや、靜にして待つに如じといへば、張韙猶しきつてこれを諫るゆゑ、今は張華も心ならず、上表して歸を乞ふと雖ども、惠帝、賈后もろともに、此の事を免さず、身老病にあるならば、官にありながら、養生すべしと、頻にとゞめ玉ふにより、張華はそれより張韙がいさめも、聞き用ひずしてをはりける、惠帝は張華が病めるよしを申すにつき、尚書僕射の官、王戎、字は濬中を擢んでゝ、司徒の官となしたまふ、これ王導が從兄なり、王戎又こゝに阮瞻、字は仲容をすゝめて、中書舍人の官となす、これ王咸が子なりける、王衍、字は夷甫を以て、尚書令の官となせり、是王戎が弟なり、樂廣、字は彥甫を、河南の尹となす、胡輔母、字は國彥をすゝめて、樂安太守となす、謝鯤、字は幼輿を長史となし、畢卓、字は茂世を以て、吏部侍郎となす、阮籍、阮咸、阮修を以て、皆掾吏となす、惠帝これ等に從へり、此數人は皆清談を祖とし尚び、逍遙放達にして、甚だ政教を以て、心に關る者にあらず、惟り酒を飲み、逸遊を好み、閑談詩賦を嗜で、自適となす者共なり、中にも王戎は、三公となりながら、何事も時と共に浮沈して、幷びに國の爲、遠き猷をなす事なく、徒らに聚斂のみを心として、政事に思をなす事なし、さるに依り、下民おのづからこれに慣つて、利欲にわしる、又劉伶、向秀が輩ら大飲をこのみ、忌憚る事もなきを、却てこれ等を竹林の七賢と稱して、虚名をのみもてはやし、太子新に死すといへども、これを聽かざる者のごとし、晋の政の衰へたるは、實に王戎より始れり、其の比、司馬倫の部下の將佐に、司馬雅、士猗と云へる二人の者あり、曾て衞督將軍、殿中の郎將たるとき、太子の宮に給侍して、深く太子の爲に愛せられし、後に趙王に從ひ、齊萬年、郝元度等を討ずるの功あつて、洛陽に回り、いまだ事には任ぜさるが、こゝに太子の殺さるゝを聞き、大に太子を感じ念ひ、即ち趙王に說き、賈后を亡し、うらみを報ぜんとせしかども、趙王決斷の意なく、其事を果さゞれば、敢てそれより言を進めず、士猗が曰く、諺に云る、上に賈ふは下に賈ふにしかずとか、今われ事に幹たらんと欲すれども、趙王すでに決斷なし、須らく孫秀に重く賂うて、內にあつて此事をたすけ趙王をせめすゝめば、趙王も亦允とし、したがひ給ふべしと、二人事を議し、金珠等をとりもつて進め、密に孫秀に對面して此の事を語るに、孫秀聞き、最と同じて曰く、國君すでに妬后の言を听き、正しき嗣を廢し殺す事、吾亦其の過を悔やむ、豪者は當にこれを憤るべきの事なり、われ趙王に

すゝめて、此事をなすべしと、即ち二人議を定め、其計をはかつて、即ち孫秀は趙王倫に說きける、賈后みだりの妬を以て、つひに太子を害したる、これ國家の大兇人たり、先に張華とはかつて、太后ならびに楚王を殺し、今また太子を殺す事、臣民皆これ恨むる處なれば、大王若し罪を問ふの師を起して、二人の者を誅したまはゞ、人皆喜悅の思をなすべしと、頻りに進めたりければ、趙王倫の曰く、吾また日夜籌つて、此の事をなさんと思ひながら、恐くは諸王の服せさらんかと、尚いまだ決せさりき、今爾が云ふ處を聞けば、遲滯に及ぶべき處にあらずとて、早く諸將を召して策を定めらる、又孫秀が張華を合せて誅せんとて、趙王に讒したる、所以をいかにと尋ぬるに、先年張華が孫秀を、しきりに誅せんとしたりし、其の遺恨を今はらさん爲なりける、かくて將佐の輩、趙王の召に應じて、來り會する者どもには、許超、士猗、張泓、殷渾、路始、閻和、司馬雅、駱休を始として、趙王の第宅に集り、大に此議をはかりける、又趙王は人を遣し、密に張衡、張林の兩人を招いで宴を設けて、これ等と盟を定む、其の時張林進で曰く、前朝漢の呂后すでに劉氏の祚を危うす、其時の親王、劉肥、劉章が輩ら、力を絳侯、灌嬰と助け合せて、呂產、呂祿を剪除きたる故にぞ、漢の世は永く保ちき、今齊王冏は、王京に其の鎭近うして、五日には至り達すべし、部下又其の兵士、甚だ强壯なり、又淮南王允は、勇三軍に冠として、江淮の勁卒萬餘あり、昨者に上朝して、太子の殺を辨ぜんとしたまふを、賈后詔を矯り、城外に囮て强て、鎭に回らしめんとす、これによつて心甚不分を懷いて居たまへり、何ぞ請うて城に入れ、餞をなさんとかこつけて、共に與にこれを謀らさる、しからば諸親王、再び誰にか畏をなすべき、趙王聞いて、張衡督が言、まことに是なり、孤が擅に事を議の譏に於ても、甚疑を避くるの理に宜しとて、即ち大司務の官、閻和をつかはし、齊王を請じ、又郎中の令游顯を使として、密に淮南王を請うて城に入らしむ、さて自らは先つて宮に入り、賈后に見えて言ふ、しかれば齊王と淮南王と昨日に書ありて告ぐ、今度太子の罪なくして、貶死せらるゝの旨を申べ、明め請うて王妃王子の葬りをなさんとなり、娘々宜しく其來を待ち、善言を以てこれを慰め、親親たるの義を示し玉へと云ふ、賈后是等の計ある事を知ず、即ち其の言を允とす、趙王此日より府中に於て、密に其の事を謀る、齊王等もすでに怨を發し、數日ならさるに兵を帶て城外に到る、趙王人をして急ぎ迎入れ、相見の禮畢り淮南王一同に宴飮す、酒過ぎて數めぐり、相たがひに欵情を盡す、其の後趙王言を開いて曰ふ、今賈后權を弄し、

朝廷を輕じ、汝南王を誅し、楊駿、衞瓘を族し、剩へ皇太后、皇太子を酖殺せしむ、其の意謀つて、晋室を危めんとす、賈謐、賈模が輩も、亦不日の程に、呂祿、呂產が事をなすべし、二王の英名世を蓋ふ、豈坐ながらにして、晋室の亡を見て救はざるべき、齊王の曰く、吾輩賈后の所爲を見て、心懷にこれを思ふと雖ども、兵力單弱にして、權柄また他人に在れば、徒に自ら悲ふるのみ、淮南王の曰く、今我三人此にあり、同じくこれ一般の帝族たり、此にこの擧をなさんに、何の難き事かあらんや、併ながら、こゝに一件のつゝしみあり、いまだ詔を奉ずる事なうして、擅に京城に入らば、恐くは彼が疑を生ぜん事を、預じめこれが備をなして、彼が算りごとにあふ事なかれ、趙王聞いて、其事われ先だつて賈后を賺し置いたれば、何の疑をかなすべき、明日早く一本の書をすゝめ請て、皇孫を國に封じ、太后太子の山陵を請うて、葬をなさんといへと議し定め、すでに書を朝に上る、張林は齊王の到ると聞き、殿中の侍御楊珍、左衞督副李儼、右衞督副蔡璜と、私に趙府に到り、三王に參見し、張衡、殷渾等と俱に約を定めたり、各いふ、大王速に發すべし、遲き則は漏るゝ事あらんか、齊王の曰く、諸賢相助けて孤が忠心に稱ふ、しかしながら、朝廷の詔旨をも得ずして、以てかれ等を執ふる事をせば、兵權なほ郭章が手にあり、倘々我等放なうして、兵を擧げて朝に入らば、郭章必定して、兵を勒し阻て拒がん、兩家互に伏せずんば、仇を成して殺戮に及ばん、勝負いまだ逆め料るべからず、其の上反亂の名を得べき事こそ本意ならね、趙王の曰く、しからば且く吾が人を遣し、張華に見えさせ、其の詔書を出さしめん、閻和聞て、張司空、亦剛烈の人に非ず、必して此の大事を聞かば、敢て主たらじ、我に一計あり、來日趙大王宮に入り、先賈后に見え詐りて言へ、先日東安王司馬繇、廢せられし其恨を懷く所に、今皇太子の、枉げて死され玉ふを聞き、舊の屬官を集め、楚王の故の將を併せ、兵を興し朝に入り、仇を報い怨を逃んとす、又東宮の衞士も各、これが助けをなすといはゞ、賈后この言を聞き大に驚き、事を信として、大王に問計らん、しからば卽ち奏して兵士を添て、東安王を壓ふと稱し、機に乘じて齊大王の兵を招き入れて、京中を守り監せしめ、共に東安王を壓すと云へ、齊王はまた其のとき乘を帶びて、朝に入つて恩を謝すと稱せんに、彼卽ち其手足を措の處なからんと計れば、趙王この議に從うて入內し、賈后に對して、此事を談ずれば、后大に驚き、此の若きは先づ預めこれが防ぎをとゝのへて、其の謀をなさしむべからず、汝まことに君を愛ひ、國を愛すといひつべし、更に聖上に奏して、我自ら處すべきやうありとて、身をもだえて怒りける、時に趙王、賈后に向うて、齊王司馬冏は、本より忠正のものなり、幸昨日京に入來る、これ皇孫の爲に封をこはんとなり、先これを大司馬として、東城を鎭守せしめんと申し請ひ、趙王外に出て、齊王をして兵を領し、朝に入つて恩を謝せしむ、さて又司馬雅を遣し、張華に會せしめて曰しむ、今趙王、齊王の小將をして、司空に會せしむる事他事に非ず、共に王室を助け匡して、君の側の患を摧除せよとなり、其については、公今師保の任たれば、一つの密詔を三王に代つて乞たまへ、熊は元忠たる事を失はされと云ふ、張華が曰く、今天下、澄平、百僚職を奉ず、賈后政に干ると雖ども、賈模、賈謐の賢に任ずるあり、未だ常に上を罔ゆる事なし、太子の廢てらるゝは是れ自ら其の禍を得たり、甚の患を除く事かあらん、子何の妄語をかなさんとするぞ、又諸王たちの事は、これまた自ら相ひ戕ひ殺す事をせり、なんの后と干らん、子みだりに言をなして、逆をなさんと思ふならんと云ふ、司馬雅は、張華が遮り拒を見て、再びこれを顧みずして出で怒り、其下に向ひて、乃まさに其頸に加はらんとしても、老賊猶此言をなすやとつぶやき、卽ち趙王に回り報ずれば、趙王大に怒り、卽ち齊王に約し、兵を將ゐ雲龍門に住まつて、外兵を阻み拒がしむ、許超、司馬雅、士

猗、閻和等に兵を率ゐさせ、賈黛を防がしめたり、張泓、孟平等は、淮南王の兵を將ゐ內に入り、駱休、張衡、張林、卞粹、路始等と、內應をなさしめ、乃ち詔を矯り、三部の司馬に勅して曰ふ、中宮妬を懷きて、賈謐等と謀り、太后を害し、太子を枉殺す、今聖上の密旨を奉り、淮南王允、齊王冏等をして、宮に入つて賈后を出し、以て社稷を安んぜしむ、能く令に從ふ者あらば、爵關內侯を賜はん、又詔に逆ふ者あらば、其誅三族に及ばん、朝中內外痛く、太子の枉死せらるゝを思うて、賈后の殘忍を惡める折からなれば、一たび趙、齊、淮南の三王、事を擧するのよしを聞き、盡く踴躍て、門を開き衆を放ち、兵を帶びて內に入る事をなさしむ、淮南王司馬允、親ら向前にすゝめば、三軍皷うち噪ぎてみだれ入る、趙王は賈黛の備なきを見るより、許超等に命じ、皆入て相助けしむ、是に由て衆將大に喊をあげ、競ひ進み、閤を排いて入る、尙書郎師景、恐くは事の矯りあらんかと怪しみ疑つて、親王の下知するを肯はねば、立どころにこれを執へて斬しむ、諸々の門に値る者共、この由を見聞して、皆こと〳〵く奔散りぬ、それよりは敢て碍はる者もなし、賈后は變ありと聞くより、急に禁兵に出て守れと云ふ所に、張林、卞粹、蔡璜、李儼等、兵士を帶びて、湧くがごとくに出來り、大に呼づて曰ふ、帝の

密詔を奉じ、賈模、賈謐等を收へしむ、衆皆吾にしたがつて、宮に入れと下知して廻る、又齊王は、眞先に進んで、宣言して曰く、賈后何に在る、皇太子何の罪あつてか誅したる、汝貞德を失ひ、皇太后を廢し、淫亂朝廷を汚穢し、朋黨を招き、奸佞を結んで、我晉室を危めんとす、これに依て、今聖上の密詔を奉れり、汝が罪すでに盈ち、まさに典刑を免さゞるに在れども、帝の正婚、六禮の誼を思し召すが故に、姑く其科をなだめ、廢して庶人となせり、速に宮を出で、往て金墉城に赴くべし、遲延に及ぶ事なかれと云ふ、賈后聞いて、聖上日夕に我と事を同らし、起居しばらくも違はず、意旨みな我より出づ、此詔いづれよりいづるや、衆軍これを聞き用ふべからず、乃ち假言なり、張林、卞粹、あざ笑つて、しからば昔日に太傅と、汝南王とを殺し、太后を逐出し、太子に毒を賜るの宣も、亦皆僞に皇上の、出す處の詔なるや、今改めて何ぞ言の眞假を言ふ、自らこれを顧みよ、賈后此れに答ふべき言のなければ、急に忙しく逃れて、宮の後に入り、景樓閣に登り、金鑾殿を望んで、萬歲皇帝、汝方一國の主たりながら、一婦をだに保ち全うする事あたはず、詔を假し、妄に廢すや、今日我に及ぶと思ふとも、不日ならずして、まさに汝に及ばん、髮を結ふの情を念うて、速に來りて相救へと大に叫はる、衆軍すでに宮に混れて、これを尋ぬれども、賈后の在所見えざりけり、然所に、閭上に當つて聲するあり、二王是を聞て張林に命じ、兵士を催し樓に上りて、擒下れと下知せしむるに、軍人さすがにこれを憚つて、敢て動ずる者なきを見、淮南王大に怒り、親ら樓に登り、軍士を喝りてこれを捉て行しめ、つひに逼つてとらへさす、賈后この者共を叱りける、淮南王曰く、爾ぢこの賊妬の婦、我家の事を壞らんとし、以て許多の忠臣國戚を害せる、其枉逆の積なるに、尙ほ多言なる事容るべきやと、立どころに命して、車輿の內に推上せ、尙書和郁を使とし、節を持せて、金墉城の舊宮の內に去らしめ、兵士をして、嚴しく門々をかため、人の出入を閉がしめたり、三王は乃ち帝を請うて、正殿に出御なさしめ、諸大臣をことゞく集會し、賈后十惡の本を上りて、軍士等をして其黨與を搜捕へ、賈模、賈午、韓諝、董猛、郭章、程據、孫慮、趙燦、解結、崔謀等を、俱に東の市に赴かしめて、法憲に行すべしと相議す、又張林乏料をつかはし、張華、裴頠を捉へしめたり、時に張華は其の子張韙と、さきに趙王の約ありて、賈后を廢するの旨あり、如何せんと、講論して居たりける、張韙は父に向つて、吾すゝめて歸を乞玉へと言へるを聞玉はず、今また趙王に怫り逆ひたまふは、禍の事遠からじと、言もいまだ已まざるに、

張林兵士を帶びて至り、張華に謂ふ、請ふらくは司空の肘に此械を上せん、張華が曰く、卿ち枉て忠臣を害せんとするや、張林聞て、太后の廢太子の枉、汝一言の理を伸べず、賈后に阿り位を貪り、虛誕の尸曠、眇として聞事なし、何を以てか忠とせん、もしまた汝ち、諫めたりとも、其言從はずんば、何ぞ速に去らざるやと責むるに、張華言のいふべきなく、遂に縛を受けたりける、趙王すでに殿上に宣言し、賈后、賈午が兇悖科をのべ、八座の大臣詳に定奪を擬し、以て國法を正し、奸邪を警戒たまへと云ふ、惠帝は二王の、皆戎裝を披き掛け、諸々の武士、皆明盔明甲を著し、刀鎗凜々、戈矛森々たるを見るに、心慄き膽戰ひ、さながら針毯の上に坐するが如く、怖ろしければ、乃ち趙王に謂て曰く、卿等是れ王室の至親なれば、即ち朕と一體なり、今國の爲功をたて、以て惡逆を除き、法を施し行ふ、何ぞ旨を請ふに及ばん、よろしく事を正すべしとあれば、こゝに於て、郭賈等を一班にとらへ、盡く皆首を斬り、號令して三族を夷しける、此に張華が二子、三孫、皆殺されたるに、張韙が長子、張輿、字は公安のみ、川中に往て藥をとるゆゑ、この禍を免れけり、裴頠は亦過すくなければ、北族を免すべしと云ふものあるに、趙王、孫秀も、己れが爲惡をなす事もなければ、刑其の身にとゞまり、二子は遠方に從されける、爰に雍州の刺史解系も、兄解結が罪に因て、死るべきに極りけり、此の由を司馬彤聞知て、則ち趙王の府に至り、免さん事を請求めたまへども、趙王解系に怨あるゆゑ梁王に謂て曰く、解系外にあつて、知らずと云へども、若しこれを誅せずんば、解結がゆゑを以て、かれ奸を構ふべき者なりとて、遂に一家族誅せられけり、こゝに奏して、太后太子の位號を復して本の如くになし、皇孫司馬威を臨淮王とし、楚王の子、司馬範を襄陽王となし、以て司馬璋の祀を繼しむ、趙王倫自ら太宰となり、都督中外、諸軍事の官となつて、一切の兵權をかねたり、孫秀は、侍中兼中書令の官となり、諸々の政柄をとる、許超等を始として、心腹の將士、一十二人、皆將軍の官にすゝみ、其の封祿をゆたかにす、齊王を封して車騎大將軍、兼司徒となす、趙王は孫秀と計つて、大に朝士の心を買はんとおもふの念あれば、この度賈氏を誅するの功を論じ、其例に從つて、爵を賜ひ祿をまし加へらるゝ者、共に計へて七百餘人に至りける、趙王自ら大政を取り、乃ち世子司馬夸を僕射とし、復相府の官屬を選んで、時の名士をまねき、己れが幕下に從はしむ、王堪、劉模を左右の司馬とし、束晳を記室とし、荀菘等十人を中郎とし、陸璣等十人を參軍とし、

蔡璜等二十人掾簿とし、衙兵萬人をそらんで、張泓これを掌る、荀組、李重の二人をすゝめて、趙府の長史とせんとす、李重は趙王の不臣の心あるを察して、招きに應ぜさりけるを、趙王威を以てこれに加へんとする故、一旦職に付くと雖ども、一月あまり徘徊し、遂に病と稱し、食はずして死したりける、趙王は孫秀がすゝめによつて、朝に入つて惠帝に奏し、賈后を誅して、太后謝妃太子の魂を慰め玉へと曰ふに、惠帝あへて趙王の威にもとる事かなはず、即ち潘岳を召して詔を造らす、潘岳これを推し拒ぐに、孫秀怒つて、其の己れに逆ふを妬の色、すでに形にあらはれければ、潘岳恐れてこれをしたゝむ、書訖れば、趙王心腹の臣をして、詔を賫たせ、鴆酒をあはせ、金墉城に趣きて、賈后を毒殺せしめける、報いのほどこそ恐しけれ、偏のなせる罪惡は、偏にかへる理り、これ天運の誡たり、

孫秀設計害淮南王

趙王司馬倫は、賈后を殺し威を朝廷にふるへば、朝士はこゝに目を側め、敢て異議する者なし、趙王ときに孫秀と惠帝を廢し、司馬冏を位に立てん事を商議る、孫秀が曰く、此事尚いまだ行ふべからず、それを如何といふに、淮南王は智謀の多き人ゆゑ、世皆其の勇猛に懼る、殊に惠帝の同父弟たれば、よも大王の心に從はじ、若し此事を強て行ひたまはゞ、彼かならず以て、今の大王の行跡は、彼の西漢の王莽が、孺子嬰を立て、位を簒ひし如くなりと思はゞ、敢て事なるまじ、且へ前日賈后を除きし時、淮南王の其功も、亦輕々しく彼の人を見なしがたし、又齊王冏は、大王と今深く志し厚しと云へども、事出來なば、齊王冏も大王をすてゝ、淮南王を助くべし、さればまづ此二人を、去るべきの途あつて後にこそ、事をば則ちはかるべけれ、それに付ては吾に一計あり、大王明日朝に入つて奏言し、淮南王の功を論じ、其の功大にして職輕しとて、正に大尉の官に進め玉へ、大尉は又文官なれば、これ外は優にすゝむるに似て、内の實は其の兵柄を奪ふなり、それ此の如くなすときは、淮南王たとひいかほどの勇略ありとも、兵權一たびさりて後、する處なけんと云ふ、趙王此の言を聞きて大に喜び、以て謀を得たりとす、次の日はやく朝に奏して、淮南王を大尉になす、詔を侍御史、殷渾にもたせて、淮南王の府中に至らしむ、淮南王は詔をうけ、即ち長史陳徽、大將孟平等を召して、評議して曰く、今や朝廷何の爲に、一旦に吾を陞げて、大尉とはなすらん、豈にこれ親王たる身を以て、朝臣と同列ならんや、陳徽が曰く、聖上もとより愚庸の

人なるゆゑ、陞るも黜くるも、皆これ執政の心による、今此の行、必ず是奸人の謀る處にして、大王に兵權を掌らせじとの故なるべし、孟平が曰く、吾此を知る事あり、必ず孫秀が謀ならん、一切に從ひたまふべからずと云ふ淮南王大に怒り、即ち詔書を以て、殷渾に向ひ、當面て辨じて曰く、此の命聖意の出る處にあらず、孫秀が奸謀ならんと責めらる、殷渾は淮南王の勇烈なるに懼れ、答應にも及はざるに、淮南王怒りにたへず、即ち下知して殷渾をとらへておし込め、帳下の兵士、精卒すぐつてこゝに七千餘人を、自ら手配し、孟平を卒に將とし、速に趙王の府中をさして押し寄る、趙王は變ある由を聞き、慌しく次の子司馬虔に令して、張泓等を相そへ、各軍兵を整へて拒ぎ戰ふ、淮南王司馬允、大に呼はつて曰ふ、趙王と孫秀と謀りて、咎なき司空張華を殺し、枉て裴侍中までを害し、私の黨を置き、將に社稷を危ふめんとす、汝等皆朝中禁衞の兵たりながら、何ぞ逆を助けて亂をなす、義によるの好漢は、同じく來つて共に不道を誅せよ、衞士の兵、この言を聞くより、大半は散じ去り、又大半は淮南王の陣中に入つて相助けゝる、元來淮南王の兵卒は、皆江淮の勇者一人當千、殊に淮南王、親ら陣に臨んで下知すれば、趙王の兵、中々當り安からずや思ひけん、盡く走りて府に逃げ入りける、

敵は是に勇をなし、箭を射る事雨の如くなれば、趙王の體に及ぶ者あまたなり、去程に敵味方、いどみ戰ふ事、三日三夜に至れば、趙王の軍兵は、十分窘め迫められて、事すでに急に及びけり、淮南王の兵ども、少し攻めあぐんだる體にて、承華門に屯し、三陣を結びける、此に中書監陳淮は、吾弟陳徽が、淮南王の所にあるを以て、此の軍を和睦させ、非の後陰かに淮南王を助けて、孫秀を討せんとはかり、こゝに帝に奏して曰く、今趙淮の二王爭ひ戰ひ、互に兵民を殺傷して、是非明ならず、事恐らくは大難に及ばんか、乞ねがはくは陛下只今、臣に禁兵を統領する事を許され、難賊、白虎の御旛を賜へ、前み去つて軍を解かんと申す、惠帝此奏を聞き、卿は是文官なり、いづくんぞ兵に將たるべき、今梁王の部將伏胤こそ、羌賊を征伐したる有功のものなれば、これに命じて軍を解せんと、即ち伏胤を封じて殿前將軍となし、禁兵三百を賜ひ、難賊の旛をもたせて、各々兵を散ずべきの命を傳へしむ、誰かしらん、此漢、元より孫秀が親しき黨なると云ふ事を、孫秀この事を聞くより、趙王に相議し、事成らば伏胤に、大職を給ふべき事をゆるして、淮南王を策らしむ、伏胤兼て此議を成さんと思ふに、まして大官の約あるをや、何の仔細に及ぶべき、即ち惠帝の命を奉じて前み來り、二大王闕を解くべ

きの詔ありと傳ふれども、淮南王再三に至りて、猶これを信ぜず、大將孟平是を聞いて、既に詔旨あり、必ず故のあるあらん、君の命には逆ふべからずと云ふ、淮南王これに從ひ、軍に命じて、伏胤を內に入れしめ、縄に跪き詔を受んとするとき、伏胤歩蹈上り、前んで劒を抜き、淮南王を砍り下す、淮南王も急に刀をとると云へども、伏胤に先をうたれ、其の頸手に應じて地に倒る、孟平是を見て赶け、急に進み救ふといへども、これ又伏胤が爲めに一刀を、項中へ砍中てられ、乍ち伏しけるが、斃れながら兵士を叫んで、伏胤を殺せと云ふ、伏胤聞いて、孟平を打捨て、走りて門內に入り、承華門樓に登り、高く叫つて、諸將無禮なる事を得され、自ら夷滅を取らん、今聖旨あつて道ふ、趙王權を專らにし、淮南王妄りに干戈を動し、帝都を亂る、其罪反叛に同じ、これに依つて、各皆首を斬る、趙王にすでに王祐を差してこれを誅戮せり、淮南王已に事に死する上、皆三軍を平定にして、速に營中に回るべし、此の雜虜の據を見ずや、如し此令を听かずして、大軍一たび出るほどならば、汝が等三族まさに命を保がたからん、衆〳〵將士これを聞き、吾輩あへて散ぜざるに非ず、上訴して、淮南王の冤を明さんとす、伏胤が曰く、朝中自ら定議あり、汝等が識る處に非ずとて、自ら城樓に上り止つて動かざれば、衆將これを斬り攻むべきやうなく、只城樓をまもり護つてひかへたり、此に齊王冏は、淮南王はやすでに殺されけると聞くより、早く趙王の府に至り、乃ち來り慰めて、淮南王の兵を下知して去らしむ、孫秀已に計の成を見、爰に趙王と同じく入朝し、奏して言す、淮南王司馬允、驍勇を仗りたのんで黨を聚め、孟平等と謀を合せ宗廟を亂り、同氣の親族を戕賊ひ大政を奪はんとして、私意を行ふによつて、これを誅し申すと云ふに、惠帝これを奈んともする事あたはざれば、惟に孫秀が乞に任せて、草詔をなさしめ、淮南王の罪を暴白にし、其の將孟平が一家を族殺さしめ、老幼一人も其の誅にもるゝものの無からしむ、罪み淮南王の妻子に及んで、これを滅さんと欲すれども、此の議は齊王肯はざるによつてさて止みぬ、時に孟平が兄、孟觀は、出て邊關を守り居たるに、趙王詔を行ひ、密に秦涇州の總官、司空の官桐機が方へ、よそながら諷じて、盡く其親屬を誅するに即ち其首を函にして回報ず、司馬允の手に屬したる將士共の、散じて所緣にしたがふ者の外、いまだ營中に千百人も止りける、其中に旗隊の首たる者、其の職あるものをば、盡くとらへて一族を殺しける、こゝに誅滅をかうむる者ども、凡百五十七家とぞ聞えけれ、まことに慘酷しき事どもなり、聞及ぶ輩は、酸辛眉を顰めぬ者はなし、

孫秀計に石崇を殺戮

伏胤すでに、淮南王を殺せるが功なりとし、趙王の意を以て詔をかすめ、爰に驃騎將軍になされ、代つて淮南王の職を領せしむ、趙王は孫秀が、此度あやうきに臨んで、勝を致すの事、機謀ある者なりとして、愈々寵の厚を加へらる、孫秀も又自ら、淮南王を誅するの功、特に勝れたりと思ひあがりて、尤も横逆を肆にして、我まゝをふるまへば、人々渠が志しに背じと、諛らふ輩ら、門に至らぬ時刻もなし、これにても猶あきたらずや思ひけん、官人商豪の家にかぎらず、美物寶器を藏め儲ふるものありときけば、即刻人を遣して、これを取つて府中に奪入る、すこしも其の意に違者あれば、禍福立どころに見せずと云事なし、これに因て、人の畏るゝ事虎の如くなりける、こゝに散騎常侍の官石崇は、晋朝一人の富を重ね、奇玩珍寶おのづから、天子の府庫にも增りて、饒なる家なりければ、その比世上にもてはやして、石崇王愷とこそ稱しける、王愷は王太后の弟として、其富貴類なけれども、石崇が寶にくらぶれば、三分にして其の一にだに及ばず、此頃石崇が家の中に、一の美妾を買得たり、其價値六斛の明珠にかへたればとて、其の名を綠珠といふ、もとより音律笙簫、琴、瑟の調べまで、其妙を極めずと云事なければ、石崇はこの女を、又無きものに愛しける、孫秀は此よしを聞きつたへて、人をしてこれを求むれども、石崇つひにこれを與へさせば、孫秀恨んで、趙王倫に讒をかまへ、潘岳と共に合せてこれを殺しける、綠珠も又石崇は、己が故にて罪を得たりと愛ひなげき、吾なんぞ女なりとて、二姓に仕ふるの事あらんやとて、即ち堂の上より落ち、身を毀りて死たりける、孫秀は石崇が家藏を沒して、こと〴〵く吾が寶となしたるに、限りなき寶物數百萬に及びける、又私に人を四方に遣し、石崇が族と云ふなれば、とらへてこゝに殺す處、四五十人にあまりける、趙王司馬倫かくのごとく橫逆をなし、大奸の孫秀を用ひて、其の議にしたがひ、威武を奮ひ耀かせば、王侯といへども、敢て其の下知に順はずとぞ云ふ者なし、こゝに閻和と云ふ者、ひそかに趙王倫に謂つて曰く、惠帝を廢し、自立して天下を知り玉へとすゝむるを、趙王これを允となし、即ち孫秀を召んでこれを議る、孫秀聞いて、いまだこれを行ふによからず、今齊王司馬冏の職、車騎將軍たれば、威名甚だ重うして、人みな是を敬へり、況や大王と、今まで同事の人なるを、豈これをして、俄に心を屈し、臣たらしむべき、大事を擧んと思召さば、決してこの人を除き去りたまへ、趙王聞いて、前日淮南王を誅るさへ、危く事を壞らんとせし、

重てこれを謀らんに、何の手だてかよかるべき、孫秀聞いて、臣に一計あり、熟〻是を謀るに、明日朝に奏し玉はんやう、齊王父子皆な國家に大功あり、以て平泉將軍に封じ、假りに黃鉞を賜つて、相國の事を行はせ、許昌曹魏の舊都の地に鎭とし、以て奸黨を遏め防がせ、朝中の大事をば、杏啓りて行はんと云はゞ、彼必ず悅んで疑はじ、もしや齊王一たび外に出でなば、はじめて事を行ふによけんと云ふ、趙王即ち此の謀を信じ、次の日奏して、早速に宣旨を下し、齊王の府に至りて、詔をつたふ、齊王大に怒つて曰く、當日賈后の亂を平げ、淮南王の難を救ひたるは、皆悉く我が功なるに、今事すでに定らげば、吾を又外鎭に出し、大に權柄を一統し、獨とどまつて不法の事を圖らんとすやと、乃ち案を拍いて立つて、こゝに是非を與に較べんとするを、長史孫洵、參軍董艾、急に入つて諫めて曰く、大王の怒者は、正にこれ何の爲ぞ、若し趙王と、長短を爭ひ競はんとしたまふや、是火を擧げて、自ら焚くより甚し、狂夫もせざる處なり、今滿朝の諸臣は、皆孫秀が黨與にして、此賊また狡譎事人に過ざたり、前日淮南王を計るの事を、見たまはずやと止む、齊王の曰く、吾も又賊倫が勢の大にして、與に敵を爲しがたき事を、知らさるにはあらねども、但此は、事の不平なるより起れるなり、如何ぞこれを忍び得べき、孫洵が曰く、小さきを忍び得さるときは、正に大謀を亂らん、臣が愚見によらば、明日朝に奏し玉はんやう、齊王父子皆な國家に大功あり、以て平泉將軍に封じ、假りに黃鉞を賜つて、相國の事を行はせ、許昌曹魏の舊都の地に鎭とし、以て奸黨を遏め防がせ、朝中の大事をば、杏啓りて行はんと云はゞ、彼必ず悅んで疑はじ、もしや齊王一たび外に出でなば、はじめて事を行ふによけんと云ふ、趙王即ち此の謀を信じ、次の日奏して、早速に宣旨を下し、齊王の府に至りて、詔をつたふ、齊王大に怒つて曰く、當日賈后の亂を平げ、淮南王の難を救ひたるは、皆悉く我が功なるに、今事すでに定らげば、吾を又外鎭に出し、大に權柄を一統し、獨とどまつて不法の事を圖らんとすやと、乃ち案を拍いて立つて、こゝに是非を與に較べんとするを、長史孫洵、參軍董艾、急に入つて諫めて曰く、大王の怒者は、正にこれ何の爲ぞ、若し趙王と、長短を爭ひ競はんとしたまふや、是火を擧げて、自ら焚くより甚し、狂夫もせざる處なり、今滿朝の諸臣は、皆孫秀が黨與にして、此賊また狡譎事人に過ざたり、前日淮南王を計るの事を、見たまはずやと止む、齊王の曰く、吾も又賊倫が勢の大にして、與に敵を爲しがたき事を、知らさるにはあらねども、但此は、事の不平なるより起れるなり、如何ぞこれ

听いて尤と同じ、次の日入つて恩を謝し、趙王の功德をさかんに稱すれば、趙王は齊王の推尊む事を聞き、心中大に悅んで、齊王を侄と稱して曰く、この度、假節鉞となす事は、專ら征伐を意に任せ、凡そ不道の者あらば、旨を請ふに及ばずして、移を傳へてこれを誅せよ、威をおとして、叔が身を忝しむる事なかれと、齊王悶これを拜謝して出て、即ち孫洵等と、本部の人馬を整へ點じ、一同に打越えて、許昌の地に赴きける、新舊合せて五萬人の著當にて、京洛の地を出でたりける、

通俗續三國志卷之十四

趙欵謀叛計姜發

趙王は斯くて、齊王悶を外鎭に遣り遣くるの後、遂に忌み憚の貌なく、朝臣を侮つて、私に孫秀を召んで、如何が大事を行ふべきの時至るや、孫秀聞いて、遲いまだ行ふべからず、然りと雖ども、內中はもはや行ひ得べきに似て、外鎭の事必ず服し難からんか、吾前に慮るに、趙欵と云ふ者あつて、全蜀の兵を掌總れり、これは賈后の近き姻戚にて、正に后の仇を報いんと思ふべし、彼乃ち智謀老練し、久しく戰を經たるの將なるを以て、賈后もこれを外の援の爲として、成都の刺史とはなし置きたり、彼れ賈后の仇をはからんと思へども、いまだ辭のなすべき事あらさるを以て、今に至つて其の事を發せず、大王必ず位を圖るの心あらば、趙欵等を召回し、關西の地に於て、後の患を去りたまへ、さて渠を召さんとせば、凡にては來るべからず、詔して川中に至らしめ、趙欵忠心あつて、國を衞り蜀を治むるの功あり、これに依て、大狄長の職となし、以て孟觀が任に代らしむ、宜しく朝に入つて勅をうけ、兵を帶びて鎭に赴けと云はゞ、此美官たるを以て、必ず心に疑はずして來るべし、此術こそ餌を設けて鰲を釣るの計なれと云ふ、趙王これを信じながら、もし趙欵が賈后の誅を聞いて、肯て來らさるときの爲めに、汶山の太守內史の官耿滕を、成都の刺史とし、兵に將とし前み去らせて、趙欵に代らしめば、趙欵身を起つる事を得さらんとて、即ち心腹の人、袁龍を使とし、詔を持せて成都に往き、趙欵に大狄長の總制、三邊の職を授けしむ、早速入朝して、兵をまし加へ勅を受くべし、それに着いて耿滕をも遣すは、其速に代り起たんが爲なりと云ふ、さても趙欵は蜀に在つて、已に京に於て、賈后の黨の誅滅せらるゝ事を聞知る故、恐くは我身も、彼の親戚に沾へば、其累ひに罹りぬべきかと、時々に驚懼の心をなす折から、反て朝廷より袁龍が到來つ

て、官職を增し加へらるゝの儀あつて、又徹て入朝すべきの旨あり、つく〳〵おもふに、これ一段の甘言、趙王と孫秀が謀たるを察すれば、乃ち一班の僚屬部將たる、杜淑、張燦、常俊、費遊、許舍、衙玉が等をあつめ、共に此の事如何にとはかる、杜淑が曰く、公はこれ賈后の親黨たり、今后の族、姻家の末末に至るまで、悉く皆其の科にかゝれる、しかるに明公一人、此の僻蜀にあるを以て、たま〳〵遠境たるが幸となつて、此累を逃れたるにあらずや、しかるに今此加官あるべき事共思はれず、この理を察せずして、安に入朝あらん事は、たとへば虎を落せる陷穽に入り、鳥を待てる網罕にかゝるに等しからん、趙歐聞いて、しからば何を以てか、返答せん、張燦つゐて曰く、某が所見によらば、たゞ一向に行かざるに定め、西川の險により、坐ながら、朝廷の變を視ん、事の成敗はいかなる事の出來んも、いまだ、計り易からずと云ふ、趙歐點頭きて、まことに二公の言ふところ、倶にこれ吾を愛するの忱より出でたり、併ら今但智謀の士を少きたり、それが大事を謀畫んに、何ぞ歐が一心にて成得べき、張燦又曰く、明公はもとより、姜維が二子の多才智略の士なるを知れるや、長子を姜發、字存忠、別の字は、繼約と云へり、其の次子は、姜飛、字は存義、別の字は、守約と云ふ、存忠は極めて智謀あるの者にて、深く父が兵法を得心す、皆是諸葛孔明が眞傳なり、漢亡びて今にいたるまで、仕の路に干からず、逃れ隱れて、青城の山中に居をなし、人をして、在所を知らしめず、弟の存義は、勇猛三軍に冠たり、まことに萬人に敵すべし、これ等ぞ川中第一の豪傑と稱すべき、趙歐曰く、吾亦曾て其の名を聞けり、しかしながら漢節を守りて居るの輩なれば、招くとも來るべからず、何如ぞ其の來りて、相資るに道あらんや、杜淑が曰く、吾一の計あり、府尊自ら青城山の廬にゆき、今趙王のために逼められ、身の浮沉こゝにあり、されば兄弟來り助けて、此の難をのがれなば、必ず劉氏の子孫を訪得て、立て西川の主となし、以て趙王を拒いで、共に永く背かざるべしと云はゞ、兄弟常に漢業を復するの志あるゆゑ此の說にしたがふべし、事成るの後に至つては、時勢を看てなすべきに、何の仔細かあらんと說く、趙歐大に喜び、次の日に至つて、贄禮の具ことゝく辨じ備へ、一二人の從者をつれ、杜淑と同じく青城山裡に攀登り、姜家の二子の居所を尋訪はんとす、姜發兄弟は、庵を深林の塢に結び溪泉を汲み、枯槹を折つて、淡飯麁食に身を堅うし、兵法を講じ、鎗棒の手を演べ、一月ばかりして、一度は麓の家にかへり、母を省み、家人の耕種を點檢し、又山の奥に入る、この日は姜飛家にかへり、親を省み故主の功業、兄弟の孤立に

て建てがたき事を覩ずる折から、忽ち一鵲飛來り、喧しく鳴き噪ぐ、姜發が曰ふ、これ必ず甚の佳客あつてか、こゝに今至るべきと云ふに、剝啄の聲門にあり、兄弟聞て、これ賓客に疑なし、若逢ふまじき者ならば、避けのがるべき爲なれば、偸出てやうを見よと、童子を出し、弟の姜飛は物の隙間より、陰にこれを窺ひたり、門外にたてれるは、兩人の官客、馬より下りて恭をなし、方巾素服にして、從者書匣をさゝぐと報ず、二人さながら、避けかくるべき人とも見えず、又何等の人とも知らねば、姜發は衣服を整へて出むかふ、兩人も禮恭しく、步行して雙びすゝむを、姜發延て草堂に入り、禮を叙べて動し問へば、原より成都の太守なりける故、姜發しきりに居位をすゝめ、禮を行すと雖ども、趙歐これを肯はず、姜發曰ふ、君侯親ら茅庵に臨降ある、何事の故ならん、愚兄弟久しく、仕の路を辭し、巖穸を甘んじ蔽廬を守る、幷にいまだ少の過失をも聞なまず、趙歐が曰く、他の事有るが故に非ず、久しく賢昆、玉靑山に豹隱したまふと聞く、まことに璞、荆穴に藏るゝが如し、今吾小事のあるあり、一度び府中にまねき到して、煩はさんと欲すれども、恨むらくは、公の輕しく彼處に臨みたまふまじき事を思ふにより、老夫自ら來つて拜懇す、願はくは一良策を求め得て、以て蒼生の厄を救ひ、老夫が命を全うしたまへ、姜發が

日く、山人が才涼く鄙しといへども、先父忠に死したると、老母の殷しき訓あるとを以て、心を立て永く矢うて、首陽の跡を追ふとも、周の粟を爲さん事を願はず、貴顯はまことに望む處に非ずと辭す、趙歐重ねて、君子寶を懷いて邦を迷すと才あるを展べずして、父母の光を照さゞる、これ亦孝道に非さるなり、故主傾くといへども、なほ子孫のあるあり、これを尋ねて奉ぜん事を思はざるも、亦忠義に非ず、吾固より二君、晉の爲に屈せざる事を知れり、但し今晉室常に自ら、相魚肉となり、張華、裴頠を始め、多くの賢良殺沒せられ、楚王、淮南王、ともに罪なうして逆せらる、今司馬倫、嬖人孫秀が言を听き信じ、復來りて我を召ぶ、我一たび上京せば、卽ち其の計策の中に墮ちんは鳥獸の斃網に入るが如くならん、僕窘め迫められて、與に計に與るの人なし、二君かれて、晉に報ゆるの心あるを聞により、敬で、告るに心の裏を以てす、一たび荆棘を開いて、迷途を出づる事を得ば、齡を沒し、身を終ふるまで、敢て君が心に相負じ、且人の語るを聞けば、昭烈帝の後、隴中に流落すと、情を盡してこれを尋ね、二君と共にこれを立つべしと云ふ、姜發等、趙歐が言ふ處を聞き、乃ち爲に謀をなして曰く、府尊遠く西陲を守る、隘險まことに入りがたし、但し其召に赴かずとも、彼これを奈んせん、趙歐聞て、今晉朝よ

り汶山の太守耿縢、代を促して、早く少城にあつて、事すでに極れり、去間今閬下同じく成都に至り、共に大事を謀り、耿縢を退けてたべ、然後に劉氏を訪うて、共に漢業を興すべし、豈君の名を成さらんやと云ふ、姜發は、もとより趙欵に從つて、出て仕ふる事は望まされども、其劉氏を興さんと云ふ嬉しさに、卽ち領掌して曰く、若し明公復び劉氏の祀を存し玉ふ事を得ば、寔に吾兄弟の至願なり、心に銘して力を効し、明公の大德に報ぜさらんや、幸に公、まことに言を食み、僞り玉ふ事あるべからず、趙欵聞いて、何の僞ると云ふ事あらんと、これが爲に矢をなす故、遂に姜飛も出て趙欵を拜しける、趙欵これを見るに、姜飛が身長、八尺有五寸、虎眼、鳶肩、劍眉、鐵面、凜々として、自然と勇將の器備はりたり、杜淑これ等の器量に感じ、此二君あつて助をなさば、何の耿縢を患ふる事かあらん、且川蜀を亦望むべしと大に悅ぶ、姜發は疏飯一飡、烹雞、釀酒をすゝめ畢り、母に暇を請ひ、家僮を整しめ、それより俱に、成都の府中を望んで去る、趙欵が部將常俊は、兵卒百餘人をひきゐ、車輿を以て、これを路に迎へ、直に府堂に進めて禮を叙ぶ、趙欵が子、趙瑛、僚屬の費遠、衙玉、張燦、許貪が輩、悉く出て會し、共に酒宴をなして悅びを盡しける、趙欵衆人に向つて曰ふ、昨に列君に見ゆる事を得、

今其愛を蒙れば、吾此所を離るゝの思なし、明日耿縢此に到つて、我に代るを拒がば、これ詔に逆ふと云者なり、其實に難事たり、諸君何の高見あつてか、これに處すべき、敎を吝む事なかれと云へば、杜淑が曰く、螻蟻だに尙且つ命を惜めり、公一たび禍を受けば、我等皆免るゝ事を得じ、たれか其智あつて、妄に無益の死に就くものあるべき、只今仰せられし、詔に逆ふの二字を案ずるに、人善あつて來らば、善を以て對へ、兇あつて來らば、兇を以て對へんに、何の逆ふとか云ふべき、望むらくは存忠先生、一の主となつて、これに使あらん事をと云ふ、姜發其時、先に論ずる處、これを拒よりの事なし、ついては耿縢が來らんをさゝへんに、何の難き事かあらん、若し其の兵をひいて、城下まで到るを待て戰はゞ、其勝負いまだ知るべからず、思ふに趙明府、來日官吏を先つて遣し、これを迎へ接せば、耿縢こゝに來つて、かならず相見あるべし、其とき委曲の計策を以て、埋伏の內に納れ計らんと、諸將と共に耳に語り、筆に談じ、其職々を定めければ、各々點頭いて散じける、趙欵はすでに姜發が謀策の如く、一々埋伏の將を處々に分ち置き、下屬を使者に遣し、耿縢を迎へける、耿縢ときに少城にあつて、功曹の官陳恂と談じて曰く、常の定れる法式として、新に任ずるの官員到るときは、本府の官吏必ず先づ、遠

境まで、迎へ接するならひなるに、今や成都の官吏、なんぞ一人もこゝに來れるあらざるや、陳恂聞いて、往々の例とする處は、舊官先づ去つて、新官の後に臨むが故、佐掾、貳官の者、人を遣く接するなり、今趙公久しく此郡に鎭誕たり、こゝに於て今一旦に改調せられ、其の心懌びざるのゆゑか、一には亦いまだ、舊官に離れざる故を以て、大人先づ至れども、いまだ人を遣さゞるならんと、正議いまだ了らざるに、忽ち報じて趙太府の書吏あつて、交代を迎へ請ふといふ、耿縢報を聞き、これが事を說問をはりて、裝束をとゝのへ、馬を起して行かんとす、陳恂が曰く、趙公は賈后の姻戚、豈晉朝を恨みざる意なからん、殊に大人は、もとより趙公と善からぬ中なり、趙王、孫秀亦二公の睦じからざるを挾つて、この交代を令せるは、兩なから容るす處なからんためなり、今大人忻然として、渠の迎ふるを信ぜば、趙公など舊恨を思ふのあやまりを受けざらんや、しかし大人みだりに往く事なく、趙公の成都を去るの後往きたまへ、しばらく先づ人を差し、彼が迎ふる時は卑遜し、願はくは少く少城に留り居て、細作を遣し、彼虛實を探りて後、代に赴かんも、いまだ何ぞ晚しとせんと云ふ、耿縢聞て、此朝廷の勅命を以て、吾交代となる、私に其職任を、奪ひ要むるに非されば、何の疑をか生ずべき、且つ今去らずんば、彼以て吾

を誤るゝとせん、彼がみだりに疑ひて際をなさば、自家の部下精兵五千あり、他たとひ異志ありとも、吾れ何ぞ懼れんや、陳恂又曰く、今李特、亂を作して成都を劫ずも、趙欵が成都の刺吏に成りたるを以て、避けて綿竹を出しなり、此の如く李特だも恐るゝ老將の奸謀を、思ひたまへと云へども、耿縢これを用ひねば、是非なく陳恂は歸りける、夫より耿縢は座を立て曰く、備ち我門に向つて誇る事なかれ、吾趙欵を見るに、甚だ謀勇なし、もとより吾對手にあらず、何の過て慮る事をかなさんとて、親ら當先がけ、意氣揚々として、成都の山道を望んで行を馳せ、すでに進んで隘口に入らんとせしが、樹木蔭密叢茂りたる處を見、細作をして、向に前で探視せしむるに、回り報じて、何の動靜なしと云ふ、耿縢自ら思ひて曰ふ、變あり變なし、皆此の所にあり、既に平靜なるうへは、料るに何の妨かあらんと、遂に坦然としてすゝみゆく、行くこといまだ數里ならざるに、忽ち听けば、山頂に鑼聲响き、兩邊より、費遠、衙玉、常俊、許貪、四員の川將、兵を引て殺出す、耿縢これを見るより、喝令して隊伍を定め、馬を跑せ鎗を挺げ、卽ち許貪を取て相鬪ふ、許貪これに敵しがたく見えければ、常俊づゝいて又至る、耿縢は勇を奮つて刺擊てば、二人の者皆怯れ、少し辟易して見えたるに、耿縢陣を衝き出で、少城に回らんと、馬の

頭を轉らす所に、姜飛かくれて林中にありしが、耿縢が、やゝ勝を取るを見て、恐らくは走らんかと、そのまゝ鎗を挺げ、馬を躍らせ搶き出で截住め、大に呼て曰く、來者財物を將て獻出し、哀みを吾等に求めよ、倘を放してかへさん、何ぞ敢て拒ぎ敵して、討死にせんとするや、耿縢は姜飛が勇威のさかんなるを見、あやうくも思量すれば、遁去らんと馬を走らするに、姜飛いづく迄かと、截とゞめて鎗を交ゆれば、後面の四將も、又大に喊をあげ、赶け來り、共に鎗をとつて殺進む、姜存彧は、今日初ての闘なれば、正に雄威を展べて、敵味方の膽を震はせんと思ひ、乃ち吾が精神を抖擻て相戰ふ、其の鎗さき雨點の急なるが如くにして、耿縢もいまは架へ隔つるに及ばず、十合ばかりの間に、手慌しく心亂るゝ所を、姜飛鎗を捨てつゝと逼り入り、耿縢を懐き住め、腰帶をひつとらへ、つひに是れを生擒りて、馬をはせながら鞍上に横さまにひつさげ、大に叫んで曰ふ、衆兵に過の干る事なし、速く降を投して、刀を受くる事を免れよといへば、耿縢が兵士共、皆拜み倒れて降を乞ふ、常俊、許貪等の四將は、此の兵を一所にまとつて驅たて、みだりに一人も走り脱る事をゆるさず、收め引ゐて城中にかへり、先だつて此の趣を、趙歐につけければ、趙歐大に喜び、自身に軍を出向へ、耿縢をば早く斬殺し、酒宴を設けて慶賀をなし、重賞を三軍にぞ行ひける、然後人を使し、少城の消息を探らせける、かくて耿縢が功曹陳恂は、先だつて耿縢を諫むれども、これを听かざれば、其の必ず敵の爲に殺されん事を決定し、正にあとより兵を起して、往て救はんとせし處へ、忽ち成都の細作、少城に至つて、城の體を探り見しが、僞り謂つて、昨者流民の寇賊ども、耿太府の財寶の多からん事を察しけるが、人數を大に集め、險處に衝出でゝ大に戰ひしが、終に官東皆々其害を被り畢んぬ、故に趙太爺、人數を起し賊を尋ぬといへども、其の勢ひ多なるを以て、先小人をして報げしむ、耿太府の後軍も、なほ留つて川に在り、早く來て救ひ給へと云へども、陳恂これを寔とせず、耿爺五千の護兵あり、怎ぞ山賊これを破り殺すべき、此は是趙太守、假りに詭計を施して破れるなり、倘なんぞわれを瞞すや、今倘を殺すべけれど、命を助くるぞ、再びかへつて趙爺にいへ、朝廷會て他に負かず、何ぞ妄りに同僚を殺し、詔命に抗り違ふ、猶ほ頭を洗つて戮を俟ち、百姓を害する事を免れよ、倘たゞに歸すも殘念なり、これ我が奸を察するの證にせよと、左右に下知して、報げたる人の兩耳を割去つて逐出す、それより一面に行文を、各々の府縣に回らし、兵を引て會せしむ、又使人を帝京に報じ、然うして親ら各處に往て、鄉兵の豪傑を勸め說き、共に同じく仇を

復し、罪を問ふの軍を促す、旬日の間に於て、兵萬人を得たりける、

姜發設計破陳撫

爰に西夷の校尉陳撫と云ふ者あり、其の身鄧艾が征伐に隨つて、大功ありし、謀猷の老練宿大將にて、勇略豪傑たる者なり、又幕下の參謀趙模と云へる者、其の智遠く事の機明にして、力量人にこえ、藝術ならびなき英士なり、又部下の精兵三萬餘ありけるが、陳恂が行文を一見するより、乃ち榜を出し、日を擇んで兵を起し、趙歐が罪を問はんと打立ちける蜀川の細作此の樣を探得、急ぎ成都に入つて、西夷の校尉陳撫が、兵を起してすゝみ來り、罪を問ふの軍を以て、近日境に入ると報ぐれば、趙歐聞いて大に驚き、急に姜發兄弟、ならびに杜淑等を請うて、此の事如何と商議る、姜發が曰く、此の事難きにあらず、併ら我もし兵を興して、共に他と戰はんは、もとよりこなたの勢ひ、順ならざる所あつて、恐らくは勝理なからん、今かれ山を越えて前み來る、我は又逸を以てこれに應ぜんに、何の慮を用ふる事をかせん、但し我が境内に入しむべからず、明日先づ精兵を以て、要害の路に伏せ、其の不意に出て一戰して、陳撫を擒にすべし、しからば他郡の兵は、再びおそれて來るべからず、力を盡す事、たゞ此の一擧にありと云へば、趙歐即ち計に隨つて、精兵一萬を點じ、姜飛を拜して前部將軍となし、許貪、費遠を副將とし、一同に前んで埋伏せしむ、時に姜發三人を戒めて、此去て敵を拒がば、陳撫を以て、耿縢が比と思ふべからず、宜しく心を用ふべし、其の兵過半至るを待つて、伏兵を起し中を擊つべし、我また兵有りて、接應すべしと云へば、三人は計を承けて出去りけり、張燦、衞玉の二將は、四千の兵を領じ、接應の爲に前み去る、斯て各各險處に至り着き、深谿の地を擇んで、埋伏をなし、陳撫が至るを、今や〳〵と待ちにける、すでに其の日も午の時ならんとする比、旌旗日を蔽ひ、劒戟は凝霜を戰かすかと覺えて、數萬の大兵、浩々湯々として、大水の如くに進み來る、陳撫其の身は高馬に打のり、手に太刀を横へ、親自ら當先に進んだり、姜存義は、陳撫が兵の、半ば過るを見るより、一聲の鐵砲を吶かすれば、伏兵吶きに應じて殺て出づる、陳撫是を見、恐くは後軍の兵の奔敗せんかと、急に忙しく馬を勒し、身を轉し、大に叫んで曰く、趙歐妄りに鎭臣を殺し、朝廷の命に違逆けり、吾この故に兵を提げ罪を問ふ、汝等みな晉の祿を食みながら、安んぞ叛を助くる事を得て虐をなす、姜飛が曰く、晉朝の奸人、相聚りて不道をなし、故なきに人の國を滅し、

人の祀を絶つに至る、こゝを以て天理これを容さず、自ら相戕ひ破り、婦としては姑を殺し、母としては子を害し、忠臣むなしく夷滅し、みだりの奸佞、權を專らにす、此れ天、晉を亡さんとするの時なり、儞が輩尙ほ死の旦夕に在る事を知らず、猶悶言をなすや、陳摠言を听いて大に怒り、卽ち刀を舞して、直に姜飛を取りて相敵す、姜飛喝つて曰く、老賊何ぞ無禮なると、鎗を挺げて接り戰ふ、二人馬を交へ、一冲一合、連に鬪ふ事、二時ばかりすれども、いまだ勝敗を分たざるに、許貪、費遠、兩翼を分つて、一齊に殺りかゝる、陳摠勇を奮ひ、拒ぎ敵して合戰ふこと、いまだ久しからざるに、忽ち喊のこゑ天にひゞき、張燦、常俊の二人力を生ずるの兵を引いて、鼓うち躁き、陳摠が兵に殺て入れば、晉兵大に敗れ、陳摠亦戰を棄て走る、成都の兵これを見、勝に乘じ赶け往く、山路崎嶇ちて溪廣ければ、逃るゝ兵自ら押し壓され、相踐んで死する者道に滿ちて、直に危きに在るを、後より急に赶け來る者ども、喊の聲地に震ひて、遁らんとする處に、陳摠が參軍趙模、兵を引いて來り救ひ、車の輪を用ひて木頭に併べ横へ、たち截て隘路を塞げば、さながら逆茂木を引いたるが如くにして、成都の兵進む事あたはざるにぞ、成都の軍は、初めて兵を收めて回らんとす、かゝる處へ、趙瑛、杜淑、兵卒二百を引いて來り至り、衆人に下知を加へて曰く、姜存忠の令あり、速く小路を偸に過ぎて、陳摠を遮り止め、走り去る事をゆるすべからず、然らずんば再び來り戰ふべし、其折は必定して、勝ちがたかるべきぞと喚ばる時、日すでに西に落かゝりて暮れなんとす、張燦、常俊の二將是を聞いて 趙瑛と一つになり、はやく兵を引いて、馬にむち打つて馳せたりける、もとより路の案内は知つたり、山を越えてすゝみ去り、先へ廻つてひかへける、陳摠、趙模の兩人は、やうやくに成都の追兵を拒ぎ止むるゆゑ、赶け來る者もなく、悉く退きたれば、こゝに軍をとゞめ、議つて曰く、今老賊が詭計を被り、危かりし、若し參謀の救應ずるに非ずんば、幾ど兵馬を折き盡すに至るべきと云ふ、趙模聞いて曰く、某し曾て公に謁るが如く、隣郡と合し、一同に征進したまへと云しはこゝなり、早く兵を促して、此界を行過ぐべし、他界に轡を綴うすべからずと謁むれば、陳摠も一同し、令を下して疾走り、剛て縦に引かへせば、忽ち听く一聲の砲の响、暗紛に動じて、趙瑛、常俊、張燦が小路を取つて廻りし兵、早く大道を遮りて、晉兵を把住む、陳摠は顧て、趙模に告ぐ、前路に伏兵あつて路を阻つ、參謀何を以てこれに處せん、趙模が曰く、勁兵先の陣にありし、此處量るに是些少ならん、明公は暫く後を斷て、赶迫の兵をとゞめ、吾當先して賊兵を、殺り退くるを待て、廣漢に回去り玉へ、何の懼るゝに足らんや、陳摠が曰く、然ばあらず、天日すでに晩れ、山路險難なるに、我が兵、人困じ馬病みぬ、其の上先の敗の一陣に、雜兵心膽已に却く、恐らくはたとひ戰ふとも勝たざらんか、しかし此の高山に上り、險の要害に據り住つて、其夜分を待ち、敵兵の、自然に退くをうかゞつて、徐かに去らん、豈これ安逸にして、兵を回すに非ざらんや、趙模が曰く、賊すでに心を起して、來り阻む、焉ぞ敢てただには善回らんや、ひとへに前去つて、殺退るぞ上策なる、一たび山に登らんに、彼の將士到り集り、圍住めらるゝ程ならば、我が軍中粮少く水絶え、數日内に坐ながら困しみ、厄を受けん、外郡しらねば救ひ援くる者あらず、ゆゝしき大事を引起さん、君の算恐くは、いまだ妙に非ずといへども、衆兵も亦曰ふ、路險にして日暗し、彼兵の多少も知らず、號令物色ともに、認め難くして、恐らくは戰の、不便なるべき事をやと否めば、陳摠つひに趙模が策を听ずして、衆兵と山に上つて據りすまふ、姜飛、杜淑の二將も、恐くは趙瑛等が、敵と對して失あらんかと、亦皆すゝんで爰に來り、陳摠すでに山に上つて、據住ふと聞くより、軍士に令し、速に路口を圍みとゞめ置き、はやく人を飛して、趙欵、姜發が方に告やれば、姜發、則時に來つて、自ら四方の路道を看めぐり、平と險とをよく心得、乃ち前後に兵をくばり、下山の路兩條の處に、兩の寨をかまへ、其の餘の小路をも、皆々令して斷きらせ、惟西南の谷口、尤も極めて要路あるをば、樹木を砍りてこれを屑ね並べ、軍士に令し、この所流を輪りて、油斷なく巡守れ、只是敵を困しましめて、とり止めよ、かならず與に戰を交ゆべからず、しからば、數日の内に、悉く餓死すべし、切に一人も走り漏すべからず、其去て救を求むる事を、防ぐべき爲なり、其餘は必ず意に掛けずと云ふ、陳摠は天明に至るを俟つて、乃ち趙模と議して曰ふ、我いま此を衝き下つて、廣漢に殺ぬけんと思へり、但し是賊兵ども、逸を以て我を守れば、恐は軍兵共を傷らん事を、參謀を煩すに、吾爲に後を斷つ事をなせ、老夫親ら當先かけん、趙模が曰く、我兵纔に定まり、賊兵正に很れり、今遽つて下るべからず、且く一日を過し、今晩に至り、膽勇あるの軍士を擇み、ひそかに山を下り去らしめ、遥に少城に告やり、陳恂、功曹の、來り救はん事を乞うて、其の西南の谷口に至らしめ、然らずんば、恐くは此隘口を出難からん、陳摠聞いて、賊兵下に在り、焉んぞ人を出すとも、能く去る事を得べきや、且へ陳恂が兵數千に過ぎず、すでに耿公殺さるゝを見、我が兵また敗ると報げんに、必然と畏懼をなし、肯て來りて遠くこゝを

救はんや、兵法に、これを死地に置いて、而後生するの術あり、已に今夜四更以後に至りて、見粮を盡して、各皆飽食し、一齊に衝て下るべし、趙模しきりに諫めて、彼を侮る事なかれ、隘口一時に出で難からんと止むれども、陳摠さらに用ひず、縱ひ賊兵あつて守るとも、敵の分儕さぞあらん、吾何ぞ懼れんやとて、遂に衆旗の隊長に囑して、軍士に令を調へ、其の夜の三更に飯を造り、四更時分に山を下り殺出て、且つ衝鎭に回るべし、然らずんば惟この死地に困しむのみならず、數日に盡く餓鬼とならん、各宜しく力を効し、向前かけて廣漢に回け、重賞を行ふべしと曰へば、衆士みな應諾して去りにける、成都の軍中張燦は、半夜にあたつて山上を見れば、其の陳軍の中に於いて、燃火さかりに燒烟大に起つて、人馬の聲喧聞しきを聞き、急に寨中に入り、姜存忠兄弟に見え、今陳兵の軍中に在て、山上一夜燈火を斷ず、軍兵亂動す、其勢ひ下り擊んとするの狀に似たり、二公の高見、何れにありやと告げたりけり、

姜氏兄弟、斬陳摠、趙模等

姜存忠は、張燦が至り報ずるを聞き、乃ち點頭て曰ふやう、我つく〳〵と料り見るに、陳摠山上に水なく、粮また減少なるを以て、必然として、今夜逃げ走らんとするならん、彼若し一たび此の山を離れ、其の險要を失せば、彼を擒となす事安かるまじ、諸君各々よろしく心を用ひて、他をして、衝下つてのがすべからず、併しながら、險要に據り守つて、共に鋒を爭はず、只走り出づる事を容されよ、又吾が弟は、兵士一千に將とし、其の中に遊戲し、戰を挑むべし、敵を誘めて滯住めよ、然らば陳摠一日の間にして、自然に其の力疲れて、遂には耕につきぬべしと、手に取るやうに計つて、乃ち費遠、常俊の兩人に下知し、東南の路を把とゞめさせ、張燦、衙玉を西北に差向けけり、正西の寨すでにこゝにあれば、我と杜世良は、これを守らん、又西南の谷口は、最も要害きびしきに、兼て通路をきり斷てば、さして多兵は入るべからず、趙瑛は弓箭の手、五百を帶びて、前往いて守り住め玉ふべし、許監軍は引兵一千、谷口の邊に往來し、救應をなすべし、かまへて慢りあるべからずと下知すれば、兵士みな命を領じて、其持口々々へ向ひ行く、姜飛は山下にとゞまつて、陳摠が衝下るを伺ひ候つ、まさに五更にならんとして、天色すでに黎明なるに、陳摠衆兵を率ゐ、當先かけて殺下す、姜飛是を見て、喊聞大に震はし、兵を引て、去路を阻て住めんとす、陳摠怒つて、刀を揮て接り戰ふ、二人刀劍を交へて架け隔て、各勇威を逞しうし、戰上三十餘

合に至るとき、趙模又後軍を引き來り、陳摠と一所になり、一齊に陣を衝き、西南の谷口を望んで走り行く、姜飛これを赶はず、人を使はして許貪を促し助をなさしむ、陳摠は、隘口に至つて見れば、大木を倒して路を塞ぎ、遮ぎり住めて、さらに行進むべきやうもなし、しばらく思惟する處に、一聲の砲起り、趙瑛喝令して、弓弩を齊しく發すれば、箭先はさながら雨點のごとし、趙模が曰く、此の處兵少く、只路を壘斷を賴み、必ず用心ふかゝらじ、壘木を移し拆きて、吾これより出づべし、箭の盡る時あらんぞ、急にこれを攻めよと云ふ、陳摠これを尤と同じ乃ち親ら射る箭を冒し、當先に下知して進む、正に攻擊事半なるに、喊の聲起つて、許貪が兵助け來て殺かゝる、陳摠これを見、急ぎ忙て敵を迎へ、刀を擧て奮ひ砍る、許貪これに抵り當れど、住めがたければ、只に退き走ゆく、かゝる處へ、姜飛は馬を跑たて、到り、先に進む趙模と接り戰かふ、趙瑛是を見て、また鎗を挺げ殺り出す、陳摠思ひけるは、西南頭の谷口も、かくては出づる事かなはじと、卽ち此方の戰を打棄て、東西に向つて走り行く、方に隘口に及ばんとする處に、砲の聲又起つて、費遠が一隊殺りかゝる、陳摠大に怒り、刀は雪を捲く如く、憤りを發し、砍て入る、費遠尺寸のあひだ、少も離れず追つゞいて、其の刀を隔て抵る、陳摠は衆兵を呼んで、一齊に衝出進む事、いまだ百步ならざるに、常俊又殺りかゝつて支へ止む、陳摠大に吼えて、直前かくる其の勢ひ、まさに當るべからず、險しくつひに擋き脫す、かくて敵のさゝふる處なきやと思ふに、又許貪至りかゝつて、常俊と二人、力を併せ拒ぎ止む、陳摠は此の者共の死を守て拒ぎとゞむるを見、さては此の路も脫し難しとや思ひけん、遂にそれより西の路上に走せたりけり、趙模が曰く、我等西より殺て來るに、安くんぞ又西に轉り去るべき、急に北路に往て、少城に出づべしとすゝむれども、陳摠これをも听かず、只に西を望んで行く事、いまだ二里ばかりならんかと思ふ處に、杜淑兵を引いて殺出し、陳摠を討止めんとす、陳兵共、是を見て大に駭けども、陳摠これを異ともせず、乃ち刀を揮つて來戰ふ、姜發は寨にありながら、虛聲を張て勢を助くる喊の聲は地に震ひ、砲の響きは天に連る、陳摠大に懊りて後悔し、忽ち馬を轉して、北に向ひて走り去る、時すでに未を過れば、人馬まさに倦んとす、縄に隘處に到るとき、張燦、衙玉が伏兵、大に喊つて起立ち、路口にあたつて把り住む、姜存忠は、陳摠が北に向つて走るを見、急ぎ杜淑を喚來し、陳摠いまだ疲るゝを見ず、英勇なほ在るあり、汝ち急に兵を引いて、此より少城の路上に超え出で、遮つてこれを把とゞめよ、吾自ら兵を調へ至つて、應ぜんと云へば、承

て馳出す、又姜飛を喚び來し、これに謂りて曰ふ、陳揔此去て惰極らん、張燦、衙玉の二將、決然として他を阻て住る事かなはし、儞赶け去つて戰ひ止めよ、我又各兵を促し進め、倶につゞいて戰はゞ、定めて彼者共を擒にし、斬戮せんと思ふぞよ、はやく力を戮して、これを殺り止めよと下知すれば、姜飛は馬を拍て赶かけ去る、陳揔と張燦は、北の谷口に在り、互に鋒を爭うて、戰ふ事一會すれば、又趙嶽が助をなし、衙玉と相鬪ふ、二人の趙將は、こゝを破られ叶はじと、拒き阻つと雖ども 陳揔、趙嶽が勢ひを、かけとゞむる事あたはねば、遥ちに殺り出行事、すでに三四里ばかりも過ぐらんと思ふに、背後につゞいて砲の响き天に轟き、一員の大將、其威熊虎の如く、馬を驟せて追ひ至る、陳揔其の來り近づくを見、只に馬を勒し、刀を横たへて待かけたり、姜飛、高聲に叫で曰く、校尉は乃ち老成の前輩にて、深く利害を明し、善く時勢を知る人と思ひつるに、此に到つて計窮り、力盡ると見ば、何ぞ早く降を投して、助をも乞ひて、定めて生ながら擒となり、虚に威名を挫かんとするや、今見よ前後皆吾が兵なり、縱へは翅ありとても、亦此羅網は出難からん、陳揔怒つて、兒曹輩、敢へて此罔言を左すや、吾れ曾て漢を平け、呉を滅し、羌を收め遼を定めて、屢々多の戰功を立て、手づから敵の上將を、殺戮する事無數なり、汝何等の人なれば、かくの如くの無禮をなす、好好向前で刀を受け、以て反亂の罪に伏せ、姜飛閑もあへず、鎗を挺げ、さうまゐると殺り進む、陳揔刀を揮つて心得たりと接住め、二人武勇を施し、威力を盡して、一連の戰上三十餘合、直に殺得て風をなせば、砂は山麓に迷ひ、塵は林嵐より起つて、なほ未だ勝敗なし、姜飛が曰く、這の老頭兒吾れ儞が飢疲れて、まさに憊を知る、還つて馬より下りさるか、恐くは命を保ち難からん、陳揔が曰く、小畜生、いまだ死活を知らずして、猶亂道をなせるや、吾年まさに垂白なりと云へども、汝が如き鼠賊を斬るに於ては、猪犬を屠るより安かんなれ、姜飛亦罵つて曰く、此の老賊、已に魂ひ體を離れながら、自ら矜つて、能く勇に誇れる、敢て我と戰ふ事百合せんや、陳揔が曰く、この兒輩奴、敢て前輩にまさらんや、戰をなす事三百合なりとても、吾なんぞ意とせんと、兩方怒つて遂に各精神をなげうつて、又戰ふ事三十餘合なり、正にこの凶神の惡殺鬼にあひ、猛漠の強徒に逢ふがごとく、兩下並に、少の讓る氣色もなく、戰酣ならんとして、いかに〳〵と見る處に、一片の喊の聲、砲の响の起るよと听けば、張燦、許貪、衙玉の三隊、三路を分つて赶かけ來る、陳揔思ふに、これ等の猛勢にては、とても勝難き事を知り、敢て戰を戀はず、刀を揮つて當先かけ、一條

の血路を砍わけて走りゆく、趙模も兵を催し來つて、衝き走つて往を見、姜飛等後より隨つて、いづくまでと赶かけ去る、陳揔は後面の喊聲も、漸くに遠さかれば、心中暗に喜んで曰ふやう、幸に脫出で、此地まで來れば、たとひ賊兵至ると云ふとも、懼るゝに足らずと、言もいまだ畢らさるに、一聲の砲の响き起るときけば 姜存忠が兵を調べて、常俊、費遠、杜淑の三將を先に回はし、山坳なる中に伏せ置きたるが、起立て截り向ふにてぞありける、陳揔が曰く、反賊さても此の如く大膽なるや、吾を窘辱しむる事こゝに至れり、おのれ遁さじと刀を揮つて、前みかゝつて相戰ふ、いまだ十合にも至らさるに、姜飛と諸將とさしつき、盡く赶け來るを見て、さしもの陳揔も、今は心に怯れをなし、馬に策つて逃れ去る、されども姜飛、張燦が人數をまとつて尾に接き、したゝく慕うて追ひ進む、陳揔今は怒りにたへず、扨もしつこき賊徒かなと、憤氣胸に塡ち、怒れる目直に裂け、趙模に向つて曰ふやう、吾幼より、三國を併せ衆ねたるにも、未だ曾つて敗あらざるを、今此の如くなるは、あまりに越て無念なり、儞まさにわれを助けよ、此の小賊を誅して、以て羞恥をこゝに雪ぐべしとて、再び馬頭を引かへし、戰を合せける、いまだ五合ばかりにして、姜飛が一鎗に左の肋につき中てられる、陳揔さすがの勇將なれど、痛手なればたまりもあへず、兩脚はやく鞍を離れ、馬より下へ倒かさまに撞き落され、いまだ生死は知れさりけり、參謀趙模これを看、急にすゝんで救はんとするに、再び姜飛一鎗を、陳揔が喉に中て、指し殺せば、趙模今は爲すべからずと、急に命を逃れ、北を望んで馳せ奔る、杜淑、費遠は、馬を雙べて尾につき追進む、二里ばかりの内にして、すでにこれに及びつく、趙模も敵の急なるを看、身を回して力戰すれば、成都の兩將勝事あたはず、やゝともすれば殺立てられ、頃あつて張燦、又助け到りて、傍より攻入り、三將にて揉み合ひたれば、さすがの趙模も防ぎかねて見えたるが、杜淑が一鎗に、あへなく中りて、馬より下に剌れてつひに擒となる、陳兵どもこれを見て、多半は降人に出れば、一半は逃れ散して、少城に落行きける、怜れむべし陳揔、趙模、兩員の謀勇の將たるも、運極れば一朝にして、盡く錄敵の下に死する事よと、惜しまぬ者ぞ無かりける、

通俗續三國志卷之十五

陳恂爲趙嶽被殺

斯て陳揔が、討もらされの兵卒共、早く少城に逃去つて、陳

恂に告げ報ず、陳恂は狄道の人にて、もとより智謀ある者なりければ、敗兵の報を聞くより、定めて賊兵勝に乘じて、必ず此の小城をも併せ取らんと思ふべしとて、早く近城の百姓どもに觸れをなし、連家村里の、貨財米粮を搬ばせて、城中に移し入れ、磚石を運んで、城上に堆む事、高さ一丈許りに至り、民間の壯丁を令して、其の上に立て、抛打すべきの支度をなし、兵軍を分つて各門を守らせ、一面に急を告ぐるの文書を發して、壯兵を招き、又梓橦の太守辛冉が方に使を飛せて救を求め、城の垣まで修ひ補めて、寄來る敵を待居たり、爰に趙欵は、成都府の中に在りて、戰ひの勝負覺束なきが故、人をさしつかはし、衆將の消息を探り問はしむるに、忽ち飛騎あつて報來り、已に陳恂、趙模を斬り、大に勝て兵を回すよしを道ふ、趙欵、踴躍笑つて曰ふ、川中この老たる猾を、已に去るの後、吾れ更に悞るゝ者なしと喜び、早く駕を命じ、自ら出て五里の外に迎へ、二姜と轡を並て歸り、宴を設けて慶賀をなす、時に諸將と議して曰く、今や諸公の相扶たるを以て、幸に二の仇を除き、大なる禍を免るゝ所なり、但し吾天子の旨に抗ひ逆ふ事を、郡縣に知るならば、必然として軍兵爰に來らん、しかるに吾錢粮充たず、士馬廣からずして、全く戰ひ禦ぐことをなしがたし、今何の計あつて、吾が進退の宜しきを敎へんや、姜發が曰く、一做らずんば二休せずとか、既に陳恂を斬を以て、兵威全く振ひ、人々皆膽を落す、此破竹の勢ひ運かるべからず、即ち兵を進め、陳恂を擒に拿へ、少城を奪ひ得て、一には耿勝が殘黨を剪り除ひ、二には其の一郡の錢粮を治め、三には西蜀の咽喉たる、要害をとり斷つときは、川中に覇たるべし、趙欵この議に同じ、即時に兵を起し、少城に殺て至り、城の西面を押取り圍で、息をも休ず責めたりける、陳恂、日夜防ぎ守つて、柔方に隨ひ、救ひ應ずれば、趙欵が兵共、磚石枯木に打傷られて、死する者算を知らず、趙欵は諸將を召んで責めて曰く、本より儞等と心を同うじ、力を戮せ、共に事業をなさんとす、然るに今此の一つ少城を攻むるに、其の兵萬を以て算ふ、されども今日已に十日に到るまで尅ちを見ず、みだりに士卒を亡すは、何を以てかよく其の志を得べけんや、衆將の曰く、某等來日に到り、力を協へて是を攻ほすべし、昨日城上より、磚石廣多に打墜す、是に罹りて軍士の傷廢に遭ふ者、多く出で來れば、いまだ十分の力を入れて、逼近つかず、其の抛擲を誘き盡さしめんとす、されどもいまだ、是を下し盡さずと云ふ、趙欵聞いて、一座の郡城、磚石焉んぞ能く盡んやと難ず、諸將の曰く、明府憂ふる事なかれ、保く是を破るべし、趙欵是を悦んで、いよ〳〵將

士を勵ましける、次の日になりければ、諸將共士卒をあつめ、志を激し、これほどの小城を攻あぐむは、勇士の恥とする處なり、はやく是を攻破れと、各自ら門を分ちて士をすゝめ、城を扣きて攻めたりける、陳恂も攻破られてはかなはじと、自ら城上に立つて軍士を下知し、方略をつくして、守の兵を所々にくばり、城に襲りて固く防ぐに、辰より申の刻に至り、各すこしの息事なく、兩家の射矢に死するもの、城上城下に屍を積む事、遍く滿つれども、是を下す事を得ずして、多く傷を帶び、本陣に引かへる、趙欵深く衆將を罪して責めたりければ、各是を安んぜず、乃ち姜存忠に告げ知らしむ、我等死をかへり見ずして力を効し、城を拔かん事を欲すと云へども、陳功曹、防ぎを善して守る故、奈ともする事あたはず、爰を以て、成功をなす事克はず、しかるを府主大人、我等を罪せんとし玉ふ、我等なんぞよく、飛で其の城に入る事を得ん、乞がはくは、貴兄の一言を府主に達し、數日を寛容なし、計策を思ひ想うて、以て是をとる事を得せしめ玉へ、只に力を恃んで、妄に攻めば、徒に衆命を傷らんのみと歎く、姜存忠が曰く、兵法にいはゆる、兵卒十倍にして城を攻め、旬ばかりにして尅さる者は、將の災なり、是を以て趙公是を慮る、諸君且らく退いて待玉へ、吾他日方略のなすべきあつて、各將の皆々功を建つべきやうを成さんと云へば、衆兵、拜謝して退き去る、姜發乃ち帳に上り趙欵に見えて云ふ、竊に聞く、大人諸將の城を攻めて、克たざるを見て、彼等が罪を責め玉ふとかや、愚是を靜に思惟するに、昔し樂毅は、戰國の高士たり、齊兵と、濟西の地に一戰して、半月にもならざるに、連に齊の國の七十餘を抜きたり、其の後一つの即墨と、莒とを圍んで、三年まで尅つこと克はず、是其の內に田單あつて、謀をなす故なり、樂毅が智、前には濟西に能にして、後に即墨に拙きにあらず、且うへ兵法に、十倍にして圍とこそ說きけるに、今七にして什の功を速になさんとする、たゞに士卒を傷らんのみ、是兵を用ふるの善にあらずと云ふ、趙欵聞いて、然る時は兵を堅城の下に頓めて、倘救の至る事あらば、其まさに奈何せんや、姜發が曰ふ、いさゝか吾、謀を設けて是を取るべし、しばし事を待ち玉へと云つて出けるが、忽ち陳恂が、梓橦の太守辛冉方へ遣して、救を求むるの書を、士卒奪得來つて、姜發に見す、姜發見て喜び、即ち入つて趙欵に告て曰ふ、某爰に一計を得たり、少城を破らん事、此の一擧にありとて趙欵が耳に附て、低言て云ふ、趙欵言をきいて大に喜び、令を三軍に促して城を圍ませ、又姜存忠、計を行つて、即ち姜飛、祉淸、費遠、常俊に、帶兵五千を相そへ、旌旗をさしかくしてゆき

去り、杜淑、阮邕、衛玉、張燦は、門を分つて攻めうてば、趙瑛、許奕、往來して應し救ふ、其威勢はなはだ盛んなり、城中の百姓、敵の威勢の盛なるを見、大に驚懼したりける、陳恂是をなぐさめ勉めしめて云ふ、只よく力を竭して、保ち守るべし、今明日の間には、辛冉が救の兵到つて、賊兵を追ひ拂ふにてあらんと云ふに、衆人皆々心を齊して守り戰ふ、朝辰の時より、未の刻に至つての城攻に、趙兵の傷くもの甚だ衆く出來る、趙厥乃ち親ら城下に至り、覩めぐる事一回し、令を傳へて曰ふ、今日しばらく兵を收め、諸將皆々寨に回れ、明日吾みづから、此城を破るべきやうあるぞと、わざと城中へ聞ゆるやうに下知して、兵士をさつと引き擧たり、陳恂城中に有つて此の言を聞くより、乃ち亦是も親ら遍ねく城中を見回りて、城垣の頽壞もありやと、吟味をなす折から、正東の上より、一騎の武者、飛が如くに至り來るを見れば滿身血に汚れ、眉額皆やぶれ、連に叫んで命を救へと云ふ、城上より是を見、一小軍集つて、即ち城より大繩をさげて、此の武者をひきあげたり、斯て陳恂此者を呼んで、其の仔細を尋ぬれば、軍人貼の內より、一封の書を取出し、大將へ呈上る、陳恂拆いて是を看れば、乃ち辛冉が名字の書跡とはみえながら、盡く血のために汚されて、辨白がたう見えたりけり、其辭に曰ふ、功曹の檄至るが故を以て、すみやかに兵士を整へ、粮を集めて前み來り、救ひ應ぜんとする處に、偶郡事に羈縻るを以て、限を失する者なり、昨者に丞にすゝまんと、途に出るの處に、想はずも老賊、兵を中路につられて相ひ拒ぐ、幸にして、其の一將を斬りたりと云へども、尙まだ銳どにして、吾兵をさへんとするによつて、合戰して相爭ふ故、吾兵恐らくは一時にはかに勝をとる事あたはさらんか、若し明日、早く彼に討ち勝ちなば、此則ち萬幸ならん、然らば辰巳のとき、當に城下に到るべし、若し又賊に勝つ事能はずば、巳の時を過ぎて到得し、公ときに兵を收拾うて衙出で、中に夾みて是を攻めよ、同じく梓橦にかへり、以て漢東の兵を待つて、齊しく到り、再び來て共に逆賊を勦すべしとぞ書きたりける、陳恂此の書を看罷で、衆と計るに、衆士の曰く、今辛太守、兵を以て來り救ふは、吾等寔に死中に活を得るなり、既に賊兵のために阻てられ、戰ふに及ぶとならば、到るに以て難かるべし、はやく此方よりも殺出て相助けば、倘成功を獲ることも量るべからずと進めける、陳恂此の言によつて兵を點じ、錢粮を軍中に挾んで、備をとゝのへて城を出でんとす、次の日辰の刻に過れども、趙恂が兵更に城を圍まず、正東の上に方つて、征塵濛々としてまつしぐらに起あがる、是はいかにと見る內に、忽ち數騎

あつて奔りつき、城下に到り叫んで、辛太府兵を出し、前み來れるが、賊の爲に阻てられ、戰を合する處、幸にして殺敗り、已に爰に進み來るを、復び賊兵のために阻て住めらる、正に今闘半なり、丞に兵を發し、兩頭より是を擊たまへ、大なる勝を獲べしといふ、陳恂すなはち、城に上つて是を看れば、只見る梓橦路上に、塵埃起て日を蔽ひ、砲銃天に連りたり、陳恂、さてはと、城を下りて門を啓き、東を望み備を進めて、辛冉を助去らんとす、いまだ數里ならざるに、砲の聲おこり、兩邊の伏兵驚起して、陳恂を前後より圍みける、其のとき趙軍の中より、姜飛馬を勒し、當先にすゝんで、高く叫つて曰く、陳功曹、速に馬より下り、同じく放漢の軍を扶けて、殺戮を受くる事を免れよ、吾が等ふたゝび、川蜀の舊地を復せんとす、故に降り來るの者をば、重く用ひんとす、陳恂大に怒り、三軍を喝令して混れ戰ひ、圍を擁いて馳出でたり、姜發大に叫んで曰ふ、昨日陳摠、趙模をも一戰に能く擒にす、今の戰、陳恂を下さゞるは、是命を用ひざるなり、丞に追とめて、一の禍を斷つべし、命に違へる者あらば、大なる罰あらんと、かけまはりて下知すれば、是に於て趙軍の諸將、先を爭て赶け去る、かゝる處へ、よし幸に、辛冉が旗をさしつれて、すゝみ來る兩陣あり、陳恂は、辛冉が旗を見るより、うれしく高く叫んで、辛明府はやく吾を救うて、此の逆賊を退けよと曰ふに、旗の手の近くを見れば、眞の辛冉には非ずして、常俊、我遠が似せ旗なり、常俊當先に進んで、陳功曹、まことの辛明府を見知りたりや否や、急に下馬して縛につけ、陳恂是を聞くより、魂飛魄散じ、心胆倶に灰の如くになつて、鎗をひいてやうくに、常俊に刺きかゝる、常俊斧を揮るつて敵對すれば、我遠はまた鎗をとつて攻入り、三疋の馬戰、たゞ一團に作つて、追つ回しつ戰ふ程に、陳恂いつしか、身に二鎗の傷を受く、されども尙退ぞかずして働くを、許奕、阮邕、兩將背より赶け至る、陳恂是を見、圍を突いて走りける、趙將等、追ひ逃しては叶はじと、命を捨て赶け往く、又姜存義、傍より殺て至るを見るより、陳恂嘆じて、吾れこゝに生ける事なけん、これまでなりと思ひ切て、遂に趙軍に馳入り、力戰して討れしは、まことに勇將のありさまなり、姜飛は是に陳恂が首を取つて、それより馳せて、少城に至るに、少城の百姓等、拜し迎へて門を啓く、趙厥內に入り、悉く安撫し訖り、常俊を留守とし、兵士五千を籠おき、自らは衆兵を率ゐて成都に回り、衆將を封じ、官職を進めける、中にも姜發を以て、廣漢の太守とし、姜飛に西夷校尉を領せしむ、二人職を受けずして、趙厥を勸め、誓約の如く、劉氏の後を尋ねて是を立て、民望を收めよと云

へども、趙厥は詭の言を以て、是等を瞞しければ二人の心中悦びず、甚だ是を懊り、來り助けし事を悔ゆ、姜發の吟じて、嘆ぜし詩、

數年隱跡匿青城　被餌呑鉤悞致身
張良本爲韓仇出　何事奸人昧警心

此の後さらに計る事、在るべしとこそ聞えけれ、

趙王倫秉政篡位

辛の酉、永寧元年に、四川の趙厥は、孫秀がために怒を激せられ、つひに造反をなして、數郡を逐ね陷いれ、流賊李特と結んで、國敵をなすの旨、兩川の飛報、矢の如く疊々つて奏上す、時の朝權、このごろみな趙王と孫秀が爲に掌らるゝ時なれば、朝野みな目を側め、誰一人敢て言す者もなし、孫秀はもとより異志ある故、蜀川を救ふの事を思ひとせず、河内の太守劉頌は、趙王に亂を靖め玉へと云ふ事を勸めけれども、司馬倫、孫秀、同じ心なれば、かつて此の事を听き用ゐず、劉頌是に依て、かれ等が遂に社稷を危うせんことを知りしかば、乃ち惠帝に申し進めて、自ら萬机の政をすべ玉へ、天下を治むる事は、器を用ふるが如し、一たび傾くときは、以て正しうし難し、今世をかんがへ看るに、政臣下に出づ、法に於て理るべからずと云へども、惠帝是を用ふる事能はず、滿朝の臣、皆々趙王に阿るの輩なれば、敢て言を進むる事かなはず、獨劉頌のみ權威を畏れず、其の心なほ皇室にありけるが、擯でられて吏部侍郎の官になる、孫秀は今世すでに、人の己に逆ふ者なきを見、敢て蜀を收むるの議をば上らず、乃ち士猗、張林等と議を定め、先づ趙王に九錫を加へしめ、其の後に蜀を平げしめんと計る、張林遂に密に侍御史に諷じ、本を上りて申し請ひ、此旨を大臣、尚書省に下し、詳に擬せしむ、傅咸、劉頌、二人の者共、朝廷の議を拒き阻むで辨じける、昔し漢の天下、まさに亡びんとして、故に九錫を以て魏に賜ふ、魏また天下を亡さんとせしとき、九錫を以て我宣帝に賜ふ、此みな一時不に極るの用なり、以て世に通じ行ふべきの者に非るなり、昔し周勃、克く呂氏が泯しを定め、霍光、漢の宣帝を扶立て、非功莫大なりと雖ども、いまだ九錫の命ある事を聞かず、豈是太平の猶なる典、上世の成なる規ならん、宜しく是を詳にして思ふべし、張林是を聞き、大に怒り孤言して、今趙王再び造すの功あらば、汝が等豈敢て、妄りに錫命を、阻てんやと云ひけるが、喝令して是に中つるに、既に法を以てせんとするを、孫秀急に止めて曰く、今川蜀方に亂れたるにも、すべて大臣を誅戮するを以て名とせり、まして況や劉

頌、傅咸は、朝野の重き望あるものを、若し妄に是を殺さば、人みな恨を生じて我に合はず、讒の端發に起らんと云ふに、張林もさてぞ思ひ止りける、しかれども其の後に、條事に託け、劉頌、傅咸を、遂に外官に逐ひ出す、百官このありさまを見るより、何事につけても、たゞに最と稱するのみにして、一人も朝廷に、爭をなせる者はなし、孫秀發に奏言して、趙王の其の功、漢の周勃、陳平にも過ぎたれば、宜しく九錫の詔あるべしと申すに、惠帝是に逆ふこと叶はず、即ち旨あつて、司馬倫に、特に九錫の命をなし玉ふの議を、詔りあれば、司馬倫是を受けて曰く、特に吾のみ恩を受くべき事にあらず、孫秀も亦功ある者なれば、其の子孫會に帝の娘宮、河東公主を以て、婚を許させ玉へと奏するに、惠帝是をも許し玉ふ、趙王此の如き事を許るは、孫秀已れが爲に功あるを以て、其の德に報いんとの志なり、帝は爰に日を擇び玉うて、孫會を召され、入れて、駙馬の府に居らしむ、天子の御婿になる人は、必ず子駙馬都尉の官になる古實なりとかや、さて九錫と云ふことは、一には天子の御車、太輅、戎輅を玉ふなり、二には衣服とて、天子の召る、衮冕、赤舄のかざりを爰にたまふなり、三に樂縣とは、是は天子の音樂の具を連ぬるなり、四つには朱戶、五つには納陛、六つには虎賁、天子の騎馬二百人を玉ふなり、七つには鈇鉞を賜ひ、八つには弓矢を賜ふ、彤弓、彤矢、旅弓、旅矢の品あつて、凡て分あることどもなり、九つには秬鬯圭瓚の祭の具を賜ふなり、孫秀爰に又奏するやう、后妃既に罪せられて、宮中に后を缺く、この人なくて叶ふべからずとて、其の黨、尚書郎羊玄が女を入れ、帝の后となしたりける、孫秀が性き狡黠ばかりにして、心の原に士行の正しき所なく、みだりの小人なる故に、是に與して、事を謀るの者ども、最も邪佞是聞かれ、忠良はこれ棄られたり、さるによつて、相黨與するものども、すべて碎細の人のみにて、徒らに時に迎ひて、己が欲を逞しうし、勢を挾んで、私の利を爲んとて、猷を謨るの志し深遠の慮りは、且て以てある事なし、此の時、齊王司馬冏は、許昌にあつて、趙王の九錫の命あるを聞き、乃ち其の臣下たる、孫洵、董艾、葛旗、王義等を集めて曰く、趙王倫は、宣帝の庶子の枝れにて、司馬には疎き族なるに、今反つて、朝廷の大政を取るのみか、榮耀すでに九錫を授るゝに至れり、孤はまのあたり、當時帝の親しき弟たる身を以て、彼が爲におひ出され、外京に居かる、理を以て云ふならば、われこそ入つて朝廷を守護すべき身なるに、奈ぞ彼が勢の大なるに懼れ、迫れてあるべきや、吾心不平なり、是をせん事何れにありや、孫洵其の時班列たる中より、閃り出て曰く、まさに

是を取らんと欲するときは、必ずまづ是に與ふ、まさに是を斂はんとして、必ず先づ是を侈らずと云へり、今趙王の性つき庸しうして、孫秀が志し驕りたり、皆々富貴を速に成んと欲して、是を想ふ心なし、積む事已に久し、彼今位を簒ふの志あつて、未だ速に事をなさず、其の漸を深うせんとして、先づ九錫を加へらる、畢竟ひとり殿下の、帝に密邇たるを以て、特に是を以て、此方の怒るか怒らざるかを相試みると見えたり、殿下なんぞ早く人を差して、九錫を加へらるゝの美を、奉賀し玉はさる、美辭を以て、かの盛德を褒奬め、人民の仰望む處、宗室まさに安からんと云はゞ、孫秀乃ち碌々たる庸材、狡譎の心多しと云ふとも、大略を知らざるものなれば、殿下の推譽むるを一たび見ば、もはや他人に於ては、慢をなすの人あらずと思ひ侮りて、早晩か定めて、大位を簒ひ奪ふべし、其の一たび行ふを待見んに諸王、衆臣、自ら彼れを怒の心滿たん、那時殿下檄移を遠近につたへ、諸王並に、王家の舊勳ある人人を召集めて、其の謀逆無道をなせるの科をかぞへ、大に罪を問ふの師を興して、誅罰せば、一たび鼓をならして、孫秀を擒にし、一たび旗を向へて、趙王倫を除くべし、那時殿下謀主となつて、大權殿下に歸せずして、誰かあへて是に越えんや、何ぞ妄に　今かの勢ひ熄なるの中に於て、與にかれと較べ競ひ、仇をなさんやと云ふに、齊王乃ち、孫洵が異言を最と同じ、一封の賀書を作り、葛旗を使者とし、禮物を賚せ、京に入つて趙王の府に獻上す、趙王倫其書の意を看るに、皆己が威德を頌し、朝野心を傾け、人民望を屬す、周公の成王を輔けたると云ふとも、猶及ばざる所あり、九錫の榮亦、いまだ其の功を表はさず、何ぞ其の線を酬いんやと書きたり、趙王大に喜び、重く葛旗を賞し、齊府酬禮甚だあつく、其の下の將士に至るまで、官職を加へ增す事多して、其の歡心厚きを示す、かくて趙王は、孫秀に向つて私に云ふやう、孤が懼れし所の者は、只齊王一人にありけるのみ、今齊王此の如く推舉らる、此の後大事を計るに於て、さらに何をか憂へんや、孫秀も又曰ふ、齊王已に尊び畏るゝ上は、其の餘の諸王慮るに足らさるなり、今穩かに是をはからんに、妨げ礙はるものなからんとて、孫秀と内議を定め、暗かに吉日を擇び、遍く公卿大臣、文武の官員を集め、趙府に至つて會宴せよと觸れたりける、滿朝の大臣、諸官何の故と知る事なけれど、趙王の請あるに、誰か一人散て到らずと云ふ者なく、皆々入つて相見す、禮已に畢り、爵序て後ち、孫秀兵士將校を令し、戎裝に兵械をとり持せて、府門兩邊の廊下に住り、悉く武夫を列し、皆弓には弦を加へ、刀は鞘を拔出し、一樣に並居たり、諸官

の面々相覷て驚き怖れ色を失ふ、趙王其の時孫秀に命じて盞をとり、酒數邊巡つて後ち、趙王倫身を起し、衆公卿に謂て曰く、今日孤れ卿等を屈する事、別意あるに非ず、特に國家の大事、治からさる所あるが爲なり、王戎、滿奮、崔隨等、皆々首席に預り坐すると雖ども、皆一言をも發せず、惟樂廣が曰く、何たる國家の大事あるや、乞はくは旨諭を發せよ、衆と共に參議せん、趙王の曰く、天子は萬民の主たり、上位に居て、天下を令する人は、天下を克く總御むるの才有るべし、是寔に國家、治を致すの道なり、しかるに今惠帝昏庸の愚主にして、大事を負荷すること能はず、先帝の在位の日、しばしば和嶠、衛瓘、劉毅等と議りて、是を廢せんとし玉へども、皇孫、聰敏して在せるを以て、是を特に止み玉ふ、今皇孫已に死して、復望むべき事絶えたり、妬ましき妻の爲に、母を害せられ、餓死に致れども是を顧みず、子を毒して殺さるれども、且てはかる事なし、汝南王、衛瓘等の忠なるをも、枉げて殺したるを始め、此等皆、殿陛の間、耳目の前の事にして、直す事能はず、ましてや天下の事に於て、萬机を總べ、百姓を治むる事を得んや、樂廣が曰く、悍妻、惡なる子、法として治むべきなし、又聖上の賈后、諸人の爲に惑られて、令德を損ずるに到れる事、本心より出るにあらず、今大王の能ありて、以て其の逮ばさるを輔翼なし、天子其親ら庶事を理め玉ふに及ばされば、更に何の多事をか論ずるに及ばん、しかるに今臣等を召して、議する處は何の道によれりや、願は其詳かなる事を聞かん、趙王の曰く、先帝遺詔あり、異日太子司馬衷、若し昏黯にして、天下を治むる事能はずば、卿等まさに別に賢明なるを主と立て、以て社稷を安んぜよ、蒼生を悞事なかれとなりし、孤今先帝の遺命に遵つて、伊尹、霍光の故事を效し、惠帝を閑宮に安置きて、再び有德の者を選び、是を位に立てんとす、諸公卿、此の議に於て何如とか思へる、時に尚書令束晳、衛尉荀組、員外郎王堪、三人席を進み出て曰ふ、大王の見る事、まさに是あやまらんか、昔は太甲、不明にして典の禮を怠り棄つ、伊尹是を桐宮に放つて、自ら其過を悔いしむ、漢の昌邑王、位に登ること方に二十七日にして、過てる者二千餘條、故に霍光太廟に告げて是を廢せり、今主上昏懦なりと云へども、二君のごとき罪過なし、若し一旦是を廢せば、恐くは諸王の心中服せずして、兵を興し入朝したば、那時九廟を震驚し、禍ひ百官に及び、上は宮闈を恐れしめ、下は黎民を殘はん、深く不便なる處なり、乞はくは是を詳にし玉へかし、趙王言を聽いて色を作し、起て曰く、汝等以て惠帝の過なしと思へるや、母を弑し子を殺し、

叔を滅し弟を誅し、功臣を族戮す、世人の罪過なほ是より大なるものならんや、且へ天下は、乃ち吾司馬氏の天下なり、汝等尸祿の庸臣ども、上は君を匡し、國を救ふの能なく、下は亂を定め、民を安んずるの義なし、前に孤が家に於いて、賈午、賈章、賈謐等を誅するにあらずんば、ほとんど呂産、呂祿が轍を蹈まん、汝が輩、曾て毫忽も忠を効すの慮なし、徒叨りに爵祿をむさぼり、諂と佞とを以て、事とする者どもなるかなと大に怒る、衆官員どもは、此の如く趙王の色を變じ、怒を作せば、其門下の奸黨、又みな目を睜り及を露はし、直に荀組、束晳等の三人を視つめて、すはとも下知あらば、飛かゝらんとする形勢に慴れ、咸々閉口して、敢て言ふ者もなし、やうやうにして皆曰ふ、臣子として君父の過を指斥くる事を得ず、大王宜しく是を裁許し玉へと云ひながら、後退りに各散じ、まゆをあつめてぞ歸宿したりける、次日になれば、趙王司馬倫は、張泓、許超、士猗等に令し、兵を領じて朝廷の門々に列ぬれば、孫秀また張林、張衡の二人をして、殿上に列せしめ、親ら甲士三百人、劍を帶して宮にすゝむ、さて惠帝に請うて令を下し、文武百官を朝に列ぬ、一人なりとも到らざるものあらば、即ち首を斬らんの號令なれば、大臣等一人も殘らず朝堂に至り、都て班列次でに立ちたりける、趙王劍を按つて、群臣に謂て曰く、司馬衷、昏暗にして、大位にをるに堪へず、孤今先帝の遺旨を奉じ、昭に大廟に告げ、衷を以て太上皇とし、養老宮に安置するなりとて、効天冊詔と名付け、惠帝の不德をかぞへたて、孫秀是を高聲によみ訖れば、即ち侍衛將軍許超、士猗同じく惠帝を扶け殿を下し、其冕綬を解き、其冕服を易へ、北面に立てしむ、惠帝涙下る事雨の下るが如くなれば、群臣亦皆傷感せざる者もなし、趙王喝り令して武士に命じ、惠帝を取つて輦に上せ、羊后をあはせて、西宮に送り入れしめ、腹心の黨、張衡を以て侍衛となし、兵を率ゐて是を監らしむ、惟り尚書和郁、瑯琊王司馬睿、侍郎陸机、大に哭し、輦を扶けて送り去る、あはれなりし形勢なり、孫秀は乃ち宣言し、百官に謂て曰く、大寶一日も空位になすべからず、公卿等宜しく有德を擧げて、以て天位に繼しむべし、老黃門傅祇進み出で曰く、天下は一日も君なくて有るべからず、大王まさに昏庸を易へんと思し召すのはじめ、必ず豫め明睿を擇ばさらんや、豈に虛位其期に臨んで、擬議する事あらん、孫秀聞いて、大に怒つて曰く、此れ即ち國家の大事、あに豫め選ぶの議あらんや、傅祇嘆じて曰ふ、是をなさんと思はゞ、直になせかし、是を爲んとして、辭つくるに至る、聖人に謟の言なしと、云ひ去りて又辨ぜず、孫秀再び群臣に問ふ、衆臣聞いて、もとより司馬倫、孫秀等が意を知れば、一同にひとり太宰、趙王、是皇室の至親、德深うして人望重く、舉選衆を服す、群臣たれか僭を越えて、此の事を議せんや、兎に角天下の安かるべきの樣をなし玉へと云ふ、其時奸黨張林、殷渾、列を出て、若し德望多きを以て是を論ぜば、諸王たち多しと云へども、大王に過ぐる者有る事なしと云ひて、四方を見れども、群臣亦應じ辨ずる者なし、孫秀が曰く、諸公、大臣、既にあへて決斷せざるへは、我是を辨ずるより外なしと、是非なき貌し、事をつくりて、しからば先天位を選の中は、趙王をして攝の位に居らしめ、再びの議を待んと、云ひも終らざるに、張林、卞粹、二人趙王を扶け、殿に上らしむ、趙王佯り拒いで、林粹を叱つて、孤皇の叔たり、今九錫を受け、富貴望に滿つ、汝二人吾を陷るにあらざらんや、孫秀曰く、今天下いまだ令主あらず、恐らくは他の變を生ぜん、大王權りに攝に居る事をなし、以て朝野を安じ、衆の議するを待つて定奪をなし玉ひ、其の後遜り避け玉はん事、いまだ晩からずといへども、趙王辭して位に登らざる事再三に及ぶを、奸黨等前んで拜舞して、遂に位につかしむれば、衆臣も亦、孫秀が害を加へん事を畏れ、共に一同に拜賀をなせば、爰に趙王の位定り、各官に祿秩を賜ふ、楊珍、李儼は、永昌宮の侍御となし、惠帝の俸祿を執り掌どらしめ、趙王の召あるにあらざれば、二人ともに入朝する事をゆるさず、常に嚴く是を守る、又孫秀を太宰とし、總て百揆を治めしめ、尚書の事を祿せしむ、孫秀即ち、是より政の古きをかへ、予奪こゝに任せ、百官を轉し換ふる事、流るゝ水より易らかなり、是より災異たがひに見はれ、天星不順に、黃河の流れ決け、舟楫も通ぜず、彗星出でて天を竟り、大蝗千里に滿々たり、太史令夏政と云ふ臣、束晳に謂つて、天下是より亂れなんと云つて嗟嘆す、あるとき一つの雄雉飛び來り、朝門の中に入り、太極殿の東堦より正殿に上る、衛卒ども是を取らんとすれば、それより轉つて殿の西、鏡樓の下に至るとみしが、頃らくあつて是を求むれども、見えざりけり、又それより數日を越え、殿上に於て、一つの異しき鳥を得たり、趙王是を衆人に問はしむるに、人皆此鳥の名を知ものなし、この鳥を繫ぐ事、日を累ねても、竟に曉る事あたはず、或日忽然として、宮の西の閤より、小童一人走り出で、身には白衣を著たるか、此の鳥の前に進んで曰ふ、此の名は服劍鳥と云ふ、趙王其小兒の出來る處を詮索するに、又其何よりして、來ると云ふ事を知る者なし、趙王心中に驚き疑ひ、乃ち小兒と服劍鳥と、倶にこれを密室の艸に於て、きびしく鍛しを牢固し、人をして門外を守らしめ置き、

明旦開きて是を見れば、小兒も鳥も其行方なくなり、鎖はもとの如くなり、內に洩るべき穴隙もなかりしに、是は不思議の事どもと、眉をあつめぬ人もなし、後に是を思ひはかるに、晉帝つひに劉淵が爲、服せらるべき、前兆と見えたりけり、今の書に蠅蝠鳥と云ふものあるは、此より始まる名目なり、

齊王擬誅孫秀等

是に於て洛陽城にある齊王の與黨、ならびに姻家の家より、趙王已に惠帝を退け、位を簒ふの事を以て、早く許昌に報げたりければ、齊王司馬冏、其私の書を見るに、惠帝黜けられて後は、宮中に幽められ、さながら趙王の臣妾にことならずと云ふに至つて、双眼の涙泉の湧が如くなるが、踊躍つて大に罵り、不仁の老賊の翩翩たりや、汝本より匈族の支流、吾が武帝の業を簒ふ是をも忍ぶべくは、孰をか忍ぶべからざらんと、云ひもあへず、乃ち孫洵、葛艾、葛旗等と、共に議して曰く、今惠帝、何の大なる過がある、司馬倫故なうして是を廢するさへあるに、あまつさへ其位を竊み、我等の親王を見る事、物なきが如くなり、豈に吾が兄弟の中、悉くみな老賊が能に如く者更になからんや、葛艾聞いて曰く、此賊奴みな孫秀と謀るなり、我々先立つて已に知る、此の故にこそ大王を勸めて、彼れを離れしめて、屈して堪忍なし玉へと云ひしなり、今彼が事既に成れり、怒るとも亦用なし、今火速兵を募り、預め征討に構へ、及び賊倫が變謀を防ぐべきためには、先能言の使者をつかはし、檄を持せ、諸王に說き、順を以て逆を伐たば、乃ち齊の桓公、晉の文公の事功に同じからん、齊王冏の曰く、固より親王多き中にも、誰かともに事を謀るべき、鎭王ぞ、孫洵聞いて、河澗、成都、東海、瑯琊、みな同じく謀るべき者なりと云ふに、卽ち諸王を合せんために、書を修め、使を擇んで是をもたせ、趙王倫、孫秀が罪過をせめて、諸處に告げ報ぜしむ、使者先づ鄴城に至り、城都王に進見し、齊王の書を奉る、成都王司馬穎は、書を看、其來意を辨じ、卽刻長史盧志、參軍司馬和演、蔡克、王彥、鄭琰、衛將、石超、牽秀、董洪、趙讓、程收、李毅、勵公、師藩等と共に議をなす、今齊王の文書、此に到りて、趙王倫が、帝を廢して位を簒ふ、是に依て會同して兵を起し、共に叛逆を討つとなり、孤れ思ふに、此れ乃ち大なる不道の事、理に於て宜しく罪を問ふべきなり、意是に從はんと欲すれども、盧るに兵微にして、事をなす事能はさらんか、設使ひ從はずとも、坐に居ながら、是を視るの理なからん、鄉等高見若何ぞや、盧志が曰く、大王義に仗て、逆を討ずるが如きは、精勇の士必ず召さずして、自ら

至らん、但し官司に命じ、豪傑をまねき募り、榜の文を一たび出さば、悉く皆應ぜん、速に下縣に往いて、錢粮ひとしく備へ、義旗日を擧して、諸王畢く集らば、立處に能く是を拂はん、何の慮る事かあらんと云ふ、成都王大に悅び、乃ち分つて諸將を遣し、各屬縣に往しめ、諭すに忠義を以てし、兵を募り粮を集め、協へ助けて、叛を討たんとするに、旬日の間、兵士三萬餘人を得たり、ともに新鬼を計つて見れば、六萬の衆士あり、石超、牽秀等に命じ、日夕に教へ演べて、諸方の相圖を待居たり、此に齊王の第二の使、陝西に來り、河間王司馬顒の處に至れば、司馬顒も又其の書を見るより、長史李含、參軍房陽、屬部の大將、衙博、驍將張方、郅輔、主將張輔、席薳、刁默、呂朗、馬曜、郭偉等を集めて此議を尋ぬ、河間王の曰く、今、齊王の檄文あつて、孤等に會して、共に趙王を討ぜよとなり、しかしながら我思ふに、今已に趙王位を簒うて、人民是を畏るゝ上、京師兵廣して、錢粮儲積多く、其防嚴しくして、又いまだ討じ易からじ、況んや日前會あつて我に與へ、我を朝に入れて、共に政事を理むべし、卽ち孤を以て、趙王の太弟と爲さんとなり、是に依て今や兩難、一決しがたし、卿等何の高見かあるや、張方が曰く、既に趙王の、大王に、共に朝政を掌る事をゆるさは、今まさに此に

趣いて、兵を勒して相助け、齊王を退けたせはゝ、必ず大柄わが掌に屬せん、何ぞ又齊王に從つて、自ら阿衡の大任を失せんや、司馬顒の曰く、孤心實に兵を以て、齊王にも會し去る事を欲せず、前に洛陽に在りしとき、常に孤が、惠帝の派に非さるを以て、甚だ多く輕んじあなどられたりし、又惠帝に勸めて、關中は重き場所なれば、他の人と入かへよと云ひし、惠帝も是を聞き、用ひまく欲せしを、孤心力を盡して、賄を入れたる故にこそ、此の地に在る事をも得るなれ、しかれば卿が言ふところ是なれば、趙王に與せんかと云ふ、李含是を聞き、列を躍り出て曰く、大王の見是れ左れるなり、趙王の書意、王を許して太弟とせんと云へる、是は反を行はんとするの意ある故に、大王に偖を以て咯はしめ、討伐の意を阻てんと思ふのみ、今彼位を簒ひ、すでに司馬夸を立て太子となせり、焉ぞ大王を用ひて、太弟たらしめん、且又天下の親王、臣宰、みな〳〵趙王の逆、孫秀が奸を怒れり、爰に兵を會して、罪を問ふ、其の理已に公なり、大王の論ずる處、みなこれ私の意なり、豈に是れ私の意を以て、公の儀を廢つるの處あらん、張友進み出て曰く、淮南王莫大の功勞を以て、趙王の咊方をなすと雖ども、尙ほ謀つて是を殺せり、況や太王、いまだ嘗て德あらず、渠いづくんぞ輕しく、殿下を信ずべき、今已に兵を起

して、洛に向ふに意なくば、先づ兵を途に出し、以て諸王と同意たる事を見せ、緩々と進み玉へ、坐ながら衆王の成功をなす日を見て、後悔いを生ずるとも及ぶ事なけんとすゝむるにより、河間王其の言にしたがひ、張方を大將とし、呂朗刁默を左右とし、馬瞻、郭偉を後軍とし、兵士三萬を將ゐ出て、陝の東に屯を定め、兩邊の勝負を察しける。又齊王の第三使は、湘陰に至り、長沙王司馬義に見えて、文書を呈上る、司馬義、其來意を開き見、亦長史何勗、親軍將軍皇甫商、王瑚、宋洪、王矩、陳珍、上官已等を聚めて、其の事を計議して、區々成りけるが、終に皆々速に兵を起し、猶豫すべからざるの旨に定まれば、長沙王是を然りとし、乃ち下縣にふれて兵粮を集めしに、旬日ならずして相ひ調ふ、長沙王、亦人を遣し書をもたせ、遍く諸王を會し、期を定め、同じく洛陽に赴き、國の難を靖めんの趣きを通ずれば、齊王大に喜び、遂に日を擇んで先行し、潁陰、下邳に至りて、諸路の兵士を待ち得るに、親野公司馬歆、兵を引いて先到る、齊王大に悅びて曰ふ、初め秦を下すの例り、早く助の兵至る、是大事定めて成るべきの吉兆なりとて、乃ち人を遣し、迎へて營寨に入れ、たがひに相見の禮畢り、司馬歆が曰く、吾が職輕く地弱ながら、王徽の至るに依て、又些少の人馬を聚め、來て王の指揮にしたがひ、同じく逆賊の倫を伐つて、朝廷の亂を濟めん、共に惠帝を位に復し申さんとなり、齊王の曰く、賢弟の心、謂つ可し其の忠、日月を貫んものなりと、悅びて待つほどに、數日ならぬに、東海王司馬越、瑯琊王司馬睿、各々皆人馬を催び來り到れば、兵威大に振ひたり、爰に河間王司馬顒は、長沙王の約し、會するの書を見るのみならず、成都、東海、新野等の處々を探り得るに、皆々兵を發して、逆を討ずるの由を聞き、心中驚き悔い、急に李含等と評議して曰ふ、前日長史の良言を听ずして、大計を失ひたり、今聞く諸鎭みな兵を起し、逆を討ずるの軍に赴くと、長沙王、又書到つて促せり、倘事成るの後に、義旗反り指し、衆兵を以て、國難に赴かざるの罪を問れなば、何を以てか是に應へん、李含答へて、事猶いまだ晚からず、急に檄を馳せ兵を出せ、張方已に兵を率ゐて前に赴むく、其上關中路遠し、大王敢て慢に城を離れがたし、賊の黨甚だ廣き故、恐らくは留守を伺つて、肘腋の變を生ぜんかと、是に依て臣等、先前來らしむといはゞ、禍を轉じ、福たるべしと云ふに、河間王喜び、張方先到ると云ふとも、いまだ途に滯て、進むまじ、さらば彼が軍を早く進めて、機會に後るゝ事なれとて、席遽を使とし、河間王の文書を遣し、急に兵を引いて、齊王に會せしむ、かくて齊王は、成都王に使を遣し、約を定め、兵馬に將とし、三路より一齊に、軍を押出すとこそ聞えけれ、

通俗續三國志卷之十六

諸王兵討孫秀

河南地界の官府より、各王兵を起して攻入の由を報て、洛陽に告せば、趙王は齊王の諸軍、思はずも起來ると聞き、大に慌れ、急に孫秀、閻和等を召で入朝せしめて曰く、前に卿等朕に勸め、帝を廢して自立せしむ、今や坐いまた安からず、位なほ全たからざるに、諸鎭の藩王、みな〳〵兵を起し來て、罪を問ふ、事まさに如何すべき、孫秀が曰く、是また何の懼をかなさん、昔日戰國の蘇秦、合縱の法を立て、說きて五國の兵を連ね、以て秦關を侵さんとせしに、秦王兵を以て、是を逆へたれば、五國の兵皆敗れたり、然る所以をいかんと云ふに、其の大軍たりと云へども、將多くして衆心一ならざるが故を以てなり、今諸王兵を合せ、衆軍此に來るとも、一人に統るの大將なければ、猶ほ群犬の同じく吠るが如くならん、但し其の一を擊つほどならば、衆犬たとひ多しとも、皆走らでやあるべき、よし味方より大兵をいだし、路を分つて是を拒ぐべし、倘一路是に勝たば、各みな驚き疑つて、潰えて鎭に回るべし、往日董卓が、わづか一の臣宰の身にして、十八路の諸侯、倘ほ什一の功を成す事能はず、今日陛下大朝の天子として、此の烏合の兵や患へんやと、辯說あらせて說たりければ、趙王は是を聞き、憂を轉じて喜びとなし、卽ち前將軍閻和、左將軍蔡璞、右將軍張林、司馬雅を以て監督たらしむ、兵を領ずる事十萬、延壽關より、伊闕に出で、齊王司馬冏の、來れる路をさへぎり拒ぐ、又征虜將軍張泓、中堅將軍孫輔、積弩將軍李儼、徐健等、兵五萬を引いて堺坂を出で、長汝王司馬義を拒ぐ、又騎馬都尉孫會に命じ、士猗、許超、伏胤の諸上將、張衡、卞粹等と一同に、兵士八萬を總べ、黃橋を出で、以て成都王司馬穎を拒がしむ、又東平王司馬楙、次の子司馬徽、三の子司馬虔、持節となつて、三處の將士を監督す、又楊珍をして太廟に宣告せしめて、亂兵の事を祈る次で、方士胡沃と云ふ者を拜し、太平將軍になして、禍祐の事を禳せけるが、察に近侍の者を詐りて、仙人の形となし、昔日の仙人王子喬が書を作れりと稱し、趙王天に應ず、是によつて天の圖瑞を玉ふ、國祚長久ならんといはしめ、僞の符案を爲り、以て朝野の官民を愚弄せしめ、其心を蠱し、趙王

を扶け、まことゝせん事を欲しける、斯て齊王は、既に成都王等の皆、馬を起したるよし、探得たりければ、乃ち東海王、新野公と共に議して、兵を進むる處に、忽ち流星の如き飛馬報げ來る、京中より兵を分ち、三路より來りて、我を拒ぐ、共に三十餘萬と號す、今此の一路の主將は、司馬雅、見に陽翟源に兵を屯して、路道を阻て住め、我が兵士洛に近く事を、容すべからずと云ふ、大將葛旗これを聞て曰く、彼の言ふ所によらば、十萬の人馬に過ぐべからず、吾三鎭の兵を以て、是に對して、戰ひ餘の力あり、彼が軍爰に初め到らんとき、我丞に軍を催し、進前んで破るべし、齊王この議を好しとし、遂に將士を勵し、營寨を拔き拂つて起つ、潁陰七十里の地を過ぎ、陳勢を擺ひ開き、三たび鼓を通じ罷で、門旗の下より、齊王親ら出て話をなす、金鳳の盔を戴き、蟠龍の帶を束ね、彤杆、鐵鉞、日月の旗旛を起て、黃なる羅の傘蓋をかざさせ、紫錦の征袍、手に銀の簡を持ち、左に葛旗、右に董艾あり、其下の長史、名將、八員、衞毅、韓泰、郭鎭、路秀、劉眞、王義、張午、愈通等を次に依て擺立つ、兩翼上の備には、東海王、新野公、各々將佐を帶び、威風凜々、壯氣昂々たるありさまなり、時に齊王は、司馬雅等を指して曰ふ、今趙王昏く悖て、不道にして、賊臣孫秀が言を听き信じ、賢良を殺戮し、主を廢し政を亂る、汝が誰皆晉室の忠良なるに、何爲ぞ逆を助け、國に背けるや、趙の陣上より、閻和、司馬雅、騎を馳せ出て曰ふ、小將等、甲冑身に仗り、故に朝拜の禮をかく、望むらくは惟罪を恕したまへ、適聞く大王の言、固に至理あり、臣等是を知らざるに非ず、但孝惠皇帝、君となつて德を失へり、前に我が趙王と殿下三人、大義を奮擧げ、呂產が禍に克ち平け玉ふ、功德莫大なり、今乃ち劉頌、束晳が言を听いて、其の僻を創らんとす、故吾が趙王、惠帝の昏庸なるを嫌うて、暫使爰に太上皇と爲し、永昌宮に老を養はしむ、然れば大寶空位なるゆゑ、趙王攝に居て國事を預るに過ぎず、伊尹が任に居て以て、其の悔のあらんを待のみなり、簒弒の比にあらず、齊王聞いて曰く、夫れは太甲不明にして、伊尹是を桐宮に放つ、書果して是あり、未つねに倨然として、位に安じ居るの事を聞かず、倆乃ち何等の人なれば、敢て妄言して吾をあざむくや、且へ惠帝の、太子の皇孫なほ在り、何ぞ是れをば立てずして、己が子、司馬夸を立て太子となすや、汝諸賊奴、速に戈を反して、趙王倫を出し、孫秀を誅戮して、倆等が九族を夷さるゝ事を免かれよ、司馬雅聞いて、言ふ所の如きんば、是れ大王必ず趙王と抗對して、勝んと欲するや、臣恐らくは成敗の、未だ量るべからざらん事をと叫ぶ、

齊王聞いて大に怒り、誰かある、先つさきに馬を出して、此の賊を擒にせよ、逆を助くるの賊、免すべからずとあれば、其の言いまだ了らざるに、大將葛旗、聲に應じて馬駈せ出し、刀を横へ、陣前を過て殺て入る、趙の將、裴超刀を揮ひ出て敵對し、二人約して軍兵を退け、威を揚げ、大に戰ひ、一個は狠りて、天神下界に至るに似たれば、一個は其の惡地殺に似たり、四手の盤旋双刀讓る事なく、一連對上、三十餘合すれども、いまだ勝負は分たざりける、齊王は、裴超が亦勇なるの、壓へがたきを見るより、親ら旗を奪ひしたゝめ、眞前に乘を指揮き、諸將なんぞ力を協へて、一齊に進み並んで、此の賊を擒にせざる、手を袖にして其の獨戰を見る事やあると叫べば、衆將各々自ら奮勇して馬を出し、十員の上將、風の如くに殺て入れば、東海、新野も亦從て、兩翼をすゝめ衝きかゝる、萬馬齊しく走り、勢ひ山を倒すが如くなりければ、趙王の兵大に敗れ走り、自ら相踐み踏んで、尸は地に横はり、流血渠をなす、已に退く事四十餘里にして、漸く翟源の隘路を、要害にとつて屯をなし、寨を下して休みける、爰に人馬を點檢して見れば、一日の戰に折き去る事二萬餘人、傷を負ふ者一萬に及べば、閻和と司馬雅は、大に驚きて曰く、吾等兵を行るより以來、向ふ所屢克ち、一月の間に、羌夷を平け定めたるに、

今意はずも齊王の兵、此の如く猛勇ならんとは、縱に一たび手を交へ、即時に殺敗らるゝ事を被りたり、倘重ねて、關中の兵馬再び到らば、何を以て是に敵せん、蔡璜が曰く、衆王は皆帝の嫡流、親しさ我主にまされり、今我主ひとり尊位に居玉ふ故に、衆心のねたみ恨む事つよし、死力を致さんと願ふが、力の勢ひなり、司馬雅聞いて、諸君暫の志を休めよ、古より勝は敗の兆し、敗は勝をうるの机なり、今此の一陣を失ふと雖も、兵氣尚ほ盛なり、今齊兵にはかに倖さいはひにて、勝を得たる故、我が兵を定めて懦弱なりとし、其の志し必ず驕らん、しからば我等いまかれを慢怕れたりとして、必ず油斷に至るべし、ひそかに人を差し、成都、長沙の消息を探り、其の懈りを伺ひすまし、三路より遥に去て、敵の大寨を劫し、其の備なきを攻むるならば、必ず全き勝を得ん、閻和、是を聞いて大に喜んで、秦の章邯が項梁を破るの計なり、張林と與に仇を報ゆべしと相謀る、誰か知らん張林と云へる漢は、素より陣に臨み、大敵と相逢ひたる事もなく、惟に奸を以て附り、重職を受けたる斗なれば、一たび齊兵と戰つて敗をとり、遂に閻和等をすかし、ひそかに自ら洛陽に逃げ回り、趙王に報知らしむ、齊王、東海王等、兵強く將勇にして、十分の勢ひ敵しがたし、一陣にして他の爲に打破られ、味方已に、兵を破らる

る事、半に過て折き去り、退き走る事五十餘里なり、故に特に來つて救の兵を請ふと云ふ、趙王、孫秀、是れを聽き大に驚いて、連夜人を遣し、三路の監軍、王子司馬楙、馥、虔の三人を、京に歸らしめ、張泓等に勅して、埒坂の守を徹て、遥に陽翟に往て、司馬雅等を助けて、共に齊王を拒がせたり、齊王時に兩邊の手合の一戰に、大に勝を得たるによつて、暫く寨をとゝのへ、兵士を點檢するに、甚だ傷れ折くの事もなければ、心中大に喜び、次の日早朝より、趙兵の出さる事を探り得、乃ち宴を設け賀をなし、席上に於て齊王の曰ふ、今や賊倫、無狀なるにつき、忍に堪へずして義旗を擧ぐる處、諸兄弟の威力により、一戰に即ち惡胆を破る、大功の成るべき事、あらかじめ知りぬべしとある、東海王是を聞き、是皆王兄の威福に賴る、又孫長史の良謀をすゝむる故、旗指ときは必ず捷ちぬ、今より後、遠た指教を望んで、共に逆賊を破るべしと喜ぶ、孫洵聞いて曰く、今少しく勝を取ると雖ども、いまだ喜びをなすに足らず、臣が心中、尙憂あるのみ、東海王の曰く、長史の憂ふる所、いまさら何事ぞ、孫洵曰く、窃に聞く、勝者は敗の机、盈る者は虧るの次でと云へり、あに憶はんや、項燕が勝つ事を恃んで、王翦が奸に遭し、かゝる類の多き事を、今臣、諸殿下の兵を視るに、皆々初めて合ふの衆にして、大半はいまだ訓練を經ず、多くは統緒ところの無きをや、倘敵のために、聊かも算るゝ事をせば、各々自ら怖れを生じて、相顧るの心なかるべし、是れ大敗のもとゝならんか、是を以て臣に、宋義が憂あるのみと、言いまだ問を向へさるに、忽ち報じて、長沙王の兵到ると云ふ、齊王大に喜び、即ち皆々親ら寨を出て迎へらる、須臾の間に、長沙王の馬到り接へて相見畢り、引いて酒席に過り、共に寒暄の語を叙べ、齊王又交戰の事を說了る事一遍すれば、長沙王の曰く、我が兵昨に埒坂に到りて、賊將、張泓、孫輔に要路を阻住められ、次の日を待ちて、渠等と戰を決せんと、夜に至つて、細作を分ちて探り得る處に、趙王倫人を差し、張泓等を徵し歸さる、是れ何故ぞと言ふに、司馬雅等齊兵と陽翟に戰ひ、大に敗に及ぶ、往てこれを救ふべしとの事なりとか、是に依つて張泓等、夜を日に繼で爰に來るを、我亦赶け來つて、今大王に相見するなり、齊王の曰く、王弟明日を以て戰を進むべし、東海王の曰く、我等倉卒にして起り、兵士多くは新集なれば、いまだ行軍に慣はず、昨に孫長史の言を建てらる、此の一節を慮るが故、迚日曾て兵を進めて戰はず、王兄此に來れるを以て、我等始めて心を放ちぬると告ぐ、長沙王聞いて此の若くんば亦みだりに心を放つべからず、吾が兵と云へども、亦初めて募るの

士なり、孤等悉く孫長史に聞したがつて、共に敎へを承け、大事をなさんと云ふ、孫洵聞いて曰く、臣質に智識愚鄙しうして、建つる所なけれども、但し兵は律あるを貴ぶ、律あるときは、方に能く勝を致すべし、今三王此に在つて、成都王の許超が爲に、黃橋に拒ぎ阻てらるゝ事をなすを、探得るに、恐らくは奸賊のために、たま〳〵あやまつて、算を被むる事あるに於て、一鎭の兵の利を失ふを見ば、諸鎭の兵各々其の氣を沮んは治定なり、我等まさに速く進み、許超が軍を破るならば、成都の衆士、亦振ひ、事の成るべき事速なり、されば こゝに一主盟の人を立て、是を惣帥となし、惣兵の長とし、緩急によらず、將士皆其の指揮にしたがひ、違ひ忤ふ事を許さず、もし命を用ひざる者あらば、其の法にしたがつて斬戮し、有功の者には其の賞を任し、此の如くするならば、六軍整肅みて、號令嚴明に行なはるべし、此の兵を以て、向ふときは、戰ふとして尅ずと云ふ事なからんか、今何なりとも諸殿下、自ら一位を擧けて、是を盟主になし玉へ、如し眞に遵はず、服せざるの者あらば、臣請ふ先治めて、罔安の罪を正さんと云ふ、長沙、東海の二王、並びに新野公等、此の說を聞いて、道理ある事と思へば、皆一同に曰ふ、願はくは長史の高議に從はん、此の盟主たる事、必して齊王其の任に充れり、孫洵聞いて臣今此の議を達して、豈に我主是を爲すの理あらんや、長沙王の然あらずんば、齊王年長け、其上へ是首を倡ふの人たり、義に於て辭する所なし、更に長史を煩はして、一の明なる輔となし、兵卒を敎訓して進退せしめ玉へ、孫洵が曰く、既に大王推擧を蒙る上は、丞に事を行ふべし、今張泓、爰に至ると云ふ、かれは久戰の將たれば、麾るに詭計あるべきか、即ち兵馬に將として、分つて三の寨を作つて屯し、齊王中に居り、長沙王と新野公と左に居り、東海王と瑯琊王は、右に居り、毎に日夜に輪り巡つて、番々の兵士を備へ、賊兵一寨を侵し犯さば、兩寨ともに是を速に救はん事を要し、もし失悞の者あらば、即時に首を斬り、號令の到處此を照して行はば、賊兵自然に、我を犯す事を得ざらん、今日令出づ、今日ついで行ひ、時刻の信を失ふべからず、方に是れ兵を用ふるの道なりと云へば、齊王等大に喜び、即時に移を廻らして寨を下す、纔に安定なる時に、只見る河間王の大將、張方兵士を帶て來り到る、齊王喜び慰むる事已に畢り、一寨を命じ、先鋒都救應となす、張方は寨を中寨の側にとゝのへて居たりけるが、忽然として狂風驟に起り、旗竿を吹き得て、まさに倒れんとしたるを、張方自ら去つて扶け住め、乃ち入つて齊王に申して曰く、明日當に賊兵あつて聚り至らん、當に兵を整へて俟

候はん、孫洵聞て、此れ非なり、まさに今夜來つて寨を劫さんのみ、明日を待つべからずと、遂に衆將を喚で、各々分ち付す、葛旗は、兵士五千を引ぬて、寨の後の左側に伏せ、董艾は人數五千を引いて、寨の後の右側に伏せ、劉輿と張乍は、兵一萬をひきゐて、齊王を守りの爲、寨後正中の處に伏せ、衛毅、韓泰の二位の將軍は、精兵八千を領じて、寨前の左側の暗き處に伏せ、路秀、王義の二位の將軍は、是又精兵八千を帶して、寨の前の右側暗處に伏せ、郭鎭、俞通の二位の將軍は、吾と共に餘兵を將ゐて、中軍帳後に伏し、只趙兵の來つて、寨を劫の時に、吾が寨中に人なきとしらば、是備ありとさとつて、必然として退き出でん、那時、其の慌亂に乘じ、我輩の中に於て、號炮を放ち起さば、四方埋伏の兵、一齊に殺出でよ、必して全き勝あらんと下知をなす、又張方將軍は、本部の人馬を領じ、法の如く備へ、往來して救應じ、敵將の勇猛にして勝がたき者あらば、すみやかに助け去つて、是を併せて討たまへ、孫洵此の如くの調度、已に訖りければ、衆將命をうけて各々去る、再び使者を差し、左右の二寨にも、密に示合せたり、長沙東海の寨中、其の事を知りぬれば、惟齊王の寨中の砲响を听いて、即ち兵を出し救應ぜんと、大に灯火を張り、暗に二寨を襲はしむべからずと、警め用心したりける、齊王の寨中には、盡く人馬を留めず、止に殘灯一盞を內に止めて置たりける、さて趙王の將、司馬雅、閻和、蔡璜等は、潁陰の戰に、一陣を敗られて兵を退け、陽翟源に屯を止めたりしが、各々談じて曰く、長沙王の兵は、張泓に塁坂に阻てとゞめられ、司馬穎が兵は、孫會、許超、士猗、伏胤等が爲に、黃橋の地方に住め防がれ、倶に進み入る事あたはざるに、此の攻口のみ、一戰に於て負けをなす事、同類の笑を取らんことこそ口惜しけれ、しからば何とぞ、齊の寨を劫して、前度の恥をすゝがんとて、密に細作を遣して、齊王等の消息を待つて、いまだ事をはなさず、少らく其の懈をうかゞふ處に、趙軍の探馬告げ來て、張林先日洛陽に逃入つて、王上を驚すにより、塁坂より張泓將軍を召し返し、此の處の助のために到らしむるが、今晩著して爰に到ると曰ふ、司馬雅報を聞いて大に喜び、酒席を設け伺候ふ、頃くあつて、張泓、孫輔、李儼、徐健が兵馬ども、果して一同に至りける、司馬雅等一齊に寨を出て、迎接して內に入り、禮已に叙畢り、共に宴を張り、飲酒數巡り至る、時に張泓、齊王の兵勢いかんと問ふ、司馬雅答へて、齊將葛旗、亦甚だ勇にして、其の外王幾、董艾、東海王、瑯琊王の助をなす、我れ裴超と戰をはげみ、葛旗等を住むれども、いまだ必して勝をなしがたからんに、ましてや二王の兵、兩翼を張りて、競進むが故、兵士撐へ持つ事かなはず、爰を以て慌り敗ぶるゝ事をなす、是より我も彼の兵の銳なるを知る上、探使を遣して窺へば、歸り來りて、頃日長沙王の兵士の、至ると告ぐるゆゑ、是に小計の有りと雖も、いまだ是を行ふに及ばざるのみ、張泓曰く、若し朝中より徵るゝ事、一日の遲滯に及ばゞ、吾必して、長沙の兵をば破るべかりしもの、今この憂を殘すことこそ無念なれ、且らく來日を待ち、一計を尋思つて、其の兵を破るべしと云うて、其の日は暫く、人馬をぞ休めける、

趙將襲齊王

明日張泓は司馬雅に向ひ、今齊王の衆兵を會合して、內に張方、葛旗、王義、王瑚、皇甫商、皆勍敵の將あれば、明に戰つて力を爭ふばかりにては、中々以て卒爾には勝がたからん、此計の極妙あり、彼四十餘里を隔つれば、必ず我に用心をばなすべからず、黃昏の時候にこゝを打ち起ば、三更には敵陣に到りつくべし、其の時一時に殺入り、彼みな睡中の處を襲ば、勝たずと云ふ事あるべからずと、相議する事訖つて、遂に三軍枚を啣み、孫輔前に在り、司馬雅是に次ぐ、張泓後を押へ、遠く潁陰を望んで進む、孫輔が兵到り近かんとする時、左右の二寨は、各營みな〳〵柝を鳴らし火を點じ、丁斗の聲相聞ゆるに、惟齊王の中寨のみ、殘燈かすかに見えたりける、孫輔は敵寨の備あるを見るより、敢てみだりに前進せず、暫く軍馬を止めて、司馬雅、張泓が、倶に到るを待つけたり、程なく司馬雅、張泓の兩軍も至りける、孫輔兩將に向つて曰く、今他寨を見るに、他寨の柵は、嚴に緊しうして備を設く、何ぞ克く劫し得て、逃げ去らしむべけんや、司馬雅答へて曰く、世上難事なし、只心あるの人を怕る、既に來て此に至る程にして、焉ぞ進むに怯の理あらん、張泓曰く、古に云ふ、一人命を捨つれば、萬夫當る事なし、昔日吳の甘寧、百騎を以て曹操が四十萬の大兵を、劫したる事もあるに、何の進まざる事あらんやとて、乃ち孫輔に命じ、兵一萬を引いて左の寨の兵を截止むべき手あてとし、駱休に兵士一萬を與へ、右の寨の兵を止めしめ、駱始、蔡璜に兵二萬を授けて、接應ずるの兵と定めたり、張泓、司馬雅、閻和、裴超等、一齊に殺て入り、齊王の中軍の寨へ直に進むに、並びに一人一騎のあるを見ず、張泓衆士を叫んで曰く、机謀すでに泄れたり、必ず埋伏あるべきぞ、亂走をなす事なかれ、當に一路となつて殺出では、其の計に墮つべからずと、下知を加へ、剛く馬を轉さんとするに、營中の信砲天に連り、寨後の葛旗、董艾、兩路の

精兵殺て出づ、張泓と裴超と、急に敵し住むれば、前面にあたつて大に喊の聲をあげ、一員の勇將殺て出づ、乃ち許都の人氏、姓は王、名は義、字は子忠なり、司馬雅是を見るより慌忙しく鎗を提て接戰ふ、背後に伏たる、衞毅、韓泰、路秀の三將、又皆殺て出でたりける、趙將李儁も亦、來り抵つて相鬪ふ、路始、蔡璜、砲の响ぎ喊の震ふを听き得、急に兵を引いて殺り入つて接應をなす、寨後に扣へし孫洵は、郭鎭、愈通、劉眞、張午を指揮し、出て軍を助けたり、兩陣是に混じて、一團となりて攻戰ふ、喊の聲天地に震動して、おびたゞしきを、張方は听くよりも、衆將と共に河間の軍部を引具し、大に火炬を明し、兵を引いて殺かゝる、其の勢ひ熊虎の如く、其の威貔貅に似たりけり、趙將駱休是を見、張方に向つて、阻住めんとしたりけるを、張方大に怒り、馬を交ゆること二合にも及ばずして、張方が一刀を、左の手に砍中られ、鎗を棄て走ゆくを、席遠赶け、一鎗に刺死す、趙將孫輔は、左寨のおさへに居たりしが、是又長沙王がために、殺りやぶられ、中寨に走り集つて、張泓と一所に合する處に、張方又押し來り、刀を輪して砍てかゝる、孫輔慌忙しくして架止め、未だ十合ならさるに、孫輔力や怯かりけん、馬ひつかへし走らんとする處を、張方すかさず遏りすゝんで、大喝一聲すれば、頭は刀に隨つて、乍ち地にぞ落ちたりける、張方は勝に乘じて、趙軍の中に殺て入るに、彼が爲め砍死さるゝ兵人は、草芥を刈るが如くなれば、面に向ふ者もなく、盡く路を開きてよけにける、張方直に入つて、正に司馬雅が、王義と戰を交ふるに會ひたりける、張方馬を拍て、夾助けて司馬雅にかゝる、司馬雅は勢の猛きを見、馬を回して、走らんとせしが、王義が爲の一鎗に、腋下を剌あてられて死したりける、張泓は是を見るより、大に恐をなし、戰を棄て走りゆく、いまだ百步ならさるに、一將あつて去路を攔り住め、大に叫で曰く、賊奴走る事を休よ、將軍葛衆望爰に在り、張泓是を見て憤怒し、鎗を挺て接戰うて、いまだ勝負を分たさる處に、東海王の兵士、山の如くに備へ來るを見、張泓かなはじとや思ひけん、乃ち馬を飛して逃げて行く、齊王爰にも又勝を得るを見るより、自ら鼓を擂て兵を促がせば、諸王の兵士頭を分つて、追ひうちに打ちければ、殺死さるゝ者途に盈つ、張泓は天明に至るころ、やう〳〵に陽翟源に到つて、馬を駐めて殘兵共を計ふるに、わづか二萬に討なさる、是にては輕々しく戰ふとも、勝を得る事難かるべしとて、伊闕を拒ぎ守り、寨をかまへて保ちけり、齊王は衆を會し、計議をなして曰ふ、兵は神速を貴ぶ、今張泓退いて伊闕を保つ、其の勢ひ已に衰れり、速に兵を進め、此の險要を奪ひ取るときは、洛陽は其の右の臂を失ふが如くならん、若しそれ、遲々に及びなば、孫秀兵を添へ來つて守らせば、必然として取難からん事をと、長沙王も此の議に從ひ、衆を擧げて齊しく進むで攻立つれども、張泓敢へて戰をなさず、伊闕山に退き屯して、堅く守つて居たりける、徐健は又、兵五千を引分け、洛陽を望んでぞ逃げ回りける、

成都王戰孫會

爰に成都王司馬穎は、自ら鄴城を發し、滏河を渡り、黃橋に至る所に、忽ち細作歸つて、趙王より孫會を大將とし、許超、士猗が等をして、要害に遮ぎり、前進する事を容さずと報ければ、成都王是を聞き、しからば爰に至つて、戰を決すべしとの玉ふ、盧志は乃ち人數を調揆つて備をなし、先づ伴つて石超、牽秀等をして、敵寨を打つの形を見すれば、孫會は寨の如く、阻て戰んとして兵を引來る、成都王も又、此の二衆を率ゐ陣を排き、三たび鼓ち罷で後、親ら出たる形勢、頭上には九曲の黃羅傘蓋、兩邊に日月の旗旛、金爪黃鉞、豹尾、龍旌、頂に金鳳冠を戴き、蟒龍袍を穿ち、五花馬に跨り、手に八輪の簡を捧げ、左に長史盧志あれば、右に參軍丘統是を護す、其の外兩邊に列り乘つたる、十二員の官將、石超、牽秀、陳昭、程牧、蔡勉、郭勘、公子瀋、王彥、趙讓、董洪、李毅等、俱に各々雄威さかんに志義すぐれ、手々に鮮明なる器械を執り、金堅の甲冑を披き掛け、馬前にすゝみ立つ所に、只听く趙軍中の砲聲震起り、門旗大に開き、孫會衆將を帶領れて出たりける、頂上には縱多金冠を戴き、一領の飛魚綉せる襖を穿ち、左に大將、許超、伏胤、右りに大將、士猗、張衡あり、孫會すゝんで言て曰く、知らず大王何故に兵を擧て、帝闕を犯さんとはし玉ふぞ、司馬穎ときに馬鞭を以て、孫會を指て曰く、趙王昏憒が故、慢て汝等の奸人が言ふ事を听き、今日の禍を釀なし、諸鎭の親王に忿怒をいたさしめ、此の大亂を引出せり、今吾れ大兵百萬、良將千員、俱に此間に至つて罪を問ふ、汝等宜しく急々に降を投して、庶民の禍を緩らせよ、尙まだ頑なるを恃んで逆し抗ふとならば、一門を滅するの憂をなさん、孫會聞いて曰く、大王は萬金の軀、まさに華屋に安居し、恬かに榮耀をし玉はで、今なんぞや親ら甲冑を貫き、軍伍に臨み玉ふ、倘々挫き跌くの事あらば、身を保つの道を失せん、請は珍重を加へよ、成都王言を听き、大に怒つて曰く、黃口なる小賊、敢て此の悶言をなせりや、誰か先づ馬を出し、此の逆狗を捕にせよとあれば、大將公師鎭、承はり候と、刀を舞して出たりけり、孫

會味方に向つて曰く、成都の將勇なりと雖ども、兵士の隊整ふことなし、想ふに是新に募るの徒なるべし、將軍等但よく力を奮うて一戰せば、即ち皆縻き潰れて、立所に賊を擒にせんと、許超、士猗、是を聞いて、馬をならべて齊しく出でゝ、許超は公師鎭と刀を交ゆれば、士猗は又成都の將石超と戰ひける、四將軍前にあつて、各々英雄を逞しうし、刀鎗亂舞して、人馬交ひに相爭ふ、直に殺得ぬる勢に、塵沙滾々、天日漾々たり、各鬪上三十餘合すれども、並に上下のくらひなし、孫會唔に軍將を促し、助戰はしめて、成兵を衝敗れと云へば、伏胤下知に從つて、馬を跑てゝ突て陣内をおかし、許超が公師鎭と、正に惡く戰ふところへ、即ち傍より殺かゝる、公師鎭、急に忙しく刀を揮ひ、架へ隔てんとするを以ての故に、許超が一鎗を防ぎ得ず、あやまつて腭下をふかく刺れたれば、何かは以てためらふべき、兩脚空に騰り、倒に成つて馬より下に動と落ち、忽ち馬前に死したりけり、趙兵、許超が敵を得たるを見、一同に踴躍つて大に呼び、成都王を擒にせよとて搶き進む、石超は、伏胤、張衡が逼り至るを見るより、かなはじとや思ひけん、戰を棄て走ゆく、是に依て成兵悉く亂れ潰え、遂に敗退きけり、趙兵是に勇をなし、赶かけうつ事十餘里までに及びける、成都將の公師藩、王彥、牽秀等、力を極めて抵き住むるにより、許超も是より始めて兵を回しけり、成都王は一陣の敗るゝを見るより、即ち怯れて進前するの勢を失ひ、衆將とゝもに商議つて曰く、今趙王の衆兵、猛くして善く戰ひをなす、我が兵は新に集りて、いまだ經陣にならはず、敵を見るより便ち走り、縱に出て即ち敗れ去り、兵卒七八千を折き、殊に公師鎭が死せる事、甚だ是傷むべし、若かじ、且らく鄴城に回り、再び計議つて戰ひをなさん、卿等の意いかんぞや、盧志聞て、勝敗は兵家の常事、豈この小敗によつて、遽に見怯れ、自ら懦なき仕かたをなさんや、且へ彼の陣上を、臣是を觀て、已に審らかに辨ふるに、其の將惟に數騭あり、其の外多兵なりとて、何の用をかなさん、今我が戰將、かれが軍に三倍せり、衆て又孫會は孀子なり、豈是大將の材あらん、偶一戰の勝をなす事は、是僥倖を得たると云ふものぞ、必ずかれ少の勝を得たるを以て、軍事を忽せにして、遠謀を忘れぬべし、吾今正に、彼れが氣の驕れる時を待ち、計を以て是を破るべし、豈に軍を回して、以て約を諸王に失せん、是天下の爲に笑を取るの根本ならん、公師藩が曰く、兵者進の道あつて退く道なし、決して回るの評議なすべからず、吾れ願はくは前鋒に當つて、以て兄の仇を報いんと相望む、成都王二人が說を聞くと雖ども、其の疑ひなほはれず、豈

夜三日に至りて、評議まち〳〵なる所に、忽ち探子來て報て曰く、一枝の兵馬、北よりして來れり、大約萬人ばかりもあるらんと見る、成都王聞いて愕然き、急に盧士を呼んで兵を整へ、防の備をなさしむるに、彼の軍ほどなく至り、中にも衆將と覺しき者共、寨に近づくと盡く、皆馬より下つて、轅門に向つて候ひ恭參す、盧志其の來歷を尋ね訪ひ、帶て中軍に入つて、成都王相見さす、時に此の者泣て、成都王に訴へ曰ふ、吾は乃ち上黨の屯田郎石苞が養子、石桑、此の石勒は即ち石苞が實子なり、趙王孫秀等、無辜を謀りて、吾兄、石崇が家を沒籍し、其の害吾が父石苞に及ぶ、さるに依て其の仇み、共に天を戴さるの事に至れり、今聞く大王、義を起し民を救ひ、簒逆を除かんと欲し玉ふと、今此に會集し、害を被る、仇を報ぜん爲め、家の子弟を引て前來れり、兵の調を承り、願はくは前部にあたらん、倘收祿せらるゝ事を蒙らば、父兄弟侄の仇を報いん、たとへば此の身、陣前に亡ずとも、忠魂は亦、大王の德に感ぜん、成都王大に喜び、乃ち石勒に謂て曰く、孤備を觀るに、年弱冠なりと雖、志氣軒昂れり、まさに任用するに足れるか、備が兄、石桑又大將の材あり、這の十三人、亦皆好漢、日後、まさに進んで功をなすものならん、但恐らくは、備が士卒も少く聚る烏合の兵にて、いまだ訓練を經るの士にてあるまじければ、敵に臨んで前部となし難からん、汲桑聞いて曰く、大王心を放ち玉ひ、小卒を用ひ玉ひて、一隊に營らば、能く士卒を下知して、やはか軍机を悞る事は有るべからず、成都王、汲桑が言を听き、即ち軍政の官人に命じ、衣甲軍餉までを給しあたへ、本寨の側に營せしむ、かゝる處へ、陳眕も又粮米を轉輸して、來るについて、成都王再び孫會を敗るべき心は、漸々出來ける、

盧志石勒大敗孫會

成都王司馬穎は、盧志を召して帳に上せ、共に議をなして曰く、陳眕既に至り、石勒又兵を引て來り助く、此に於て孤意決せり、長史何の妙計あつて、趙兵をば破るべき、共に大功を成すの事をのべよとある、盧志承り、吾に一の計あり、但恐る將士の進むに怯からん、しかじ石勒を喚んで、此の事を計せ申すべし、かれ全く肯うて向前と云ふほどならば、必ず成功はなしつべしと云ふ、成都王大に喜び、乃ち石勒に謂て曰く、孤備を觀るに、年弱冠なりと雖、志氣軒昂れり、まさに任用するに足れるか、備が兄、石桑又大將の材あり、這の十三人、亦皆好漢、日後、まさに進んで功をなすものならん、但恐らくは、備が士卒も少く聚る烏合の兵に

兵五千を領せしめて、倘等が向導の爲に指そふべし、倘等密に小路より行いて、孫會が大寨の前に至り、備ある備なきを問はず、寨邊に殺り入りて、速に放火して燒つくせよ、我自ら大兵を引て、大道より接應せん、若し計の就る事を得ば、倘等を重用ふべし、汲桑、石勒、命を領して出で、卽ち士卒に下知して用意をなし、黃昏の時候を待ち居たり、時にもなれば、石超、和演等と、一齊に枚を啣で起たりける、盧志又、牽秀、王彥、陳眕、董洪の四將に、兵一萬を將ゐさせ、大路に從ひ、しづかに打つて、趙寨の火起らんを相圖にして、接應ぜよと令をなし、再び趙讓、郭勤、公師藩を喚んで、倘等は兵一萬を引いて、後陣に備へて進むべしと曰畢つて、我身はそれより成都王の前に行き、請うて一齊に營寨をも拔き去て、共に進んで大功をなさんと云へば、成都王聞いて、黑夜の中焉ぞ能く必ず勝たん、且らく先陣の回報るを待て、明日早く進むべしとあれば、盧志承はり、孫會は賓梁堅子、一たび兵の到るを見ば、倉卒驚懼れて搶にせらるゝ事を免れんと、寨を棄て逃れんは治定せり、大王親から陣に臨んで將士を勵さば、只此の一戰にして、洛陽に到るに足れり、豈に齊王の首功を奪取らさらんやと云へば、成都王其の議にしたがひ、遂に陳照、蔡旭、李毅、程牧の四人をして、盡く大兵を起し、運粮を押へさせ、亦黃橋を望んで進みけり、かくて孫會は、自ら成兵の一陣に勝ちたらば、道をはかつて、敢て進み擊つべき事なるに、更に別路の事をも思へず、只に此の處を守り得るを以て、徒に己が功ぞと思ひ、將士に令して、要道を拒ぎとゞめさせたる許の結構なり、每日午の下にもなれば、衆將とともに酒を飮み、深更に至つて退散す、軍士ども是を心に悅びず、亦相聚りて漫に飮む　伏胤は是を諫めんとて、言を進めて曰ふ、今主帥、此の重任に當りながら、兵を整へ敵を算ふる事をば思はず、兵士を縱にして、戲飮事を愼る條、最も是心得がたし、倘成都王、奇兵を以て吾不意に出るほどならば、駟馬あに彼の算を被らさらんや、孫會曰く、司馬穎が兵、一戰に大敗し、退去る事三十四里、吾を侵るゝ事虎の如し、彼何の能する事あらん、汝ち却つて盧り過せるの甚しきなり、伏胤が曰く、成都王の長史盧志と云へる漢は、洛中廿四友の一人にて、殊に他に英れたる者、聰敏多智なるが故、張茂先等も且其の謀を重じたりし、何爲ぞ無能ならん、孫會又曰く、昨者に陣上を見れば、其の兩邊に許多の將帥を列ねたれども、味方の將軍三四人其陣に入りて、將を擒き衆を破る、能者あらば、よく此の如くならんや、吾れ自ら待事あつて、彼を量らんとす、伏胤是を聞き、かくて退て、私かに士

猗に謂りて、王上、孫會を以て帥と爲し玉ふに、彼今帥となつて輕しく働り、自ら働つて良言を听ず、必ず成都王の算をかうむつて、破れをとるべし、某と左軍大人等、當に國事を以て重とす、須く兵を整て是を防ぐべし、恐くは敵、暗中に吾を劫し勞る事あらん、其の難に望んで、敵を禦がんと云へば、士猗きいて、公の言是なりとす、是に於て二人の者は、其の意得をしたりける、かくて二更にも至れば、各々寢ねんとする比、忽ち听けば、人馬とも行動の聲あるにより、士猗、急に起て看る、時に成兵至り近いて、砲銃天に連り、石超、和演、石勒、汲桑、四路を分つて一齊に殺入りぬ、惟伏胤、士猗のみ衆て期したる事なれば、本寨に在て守り戰ふ、其の餘の兵將共、人は甲をきるに及ばず、馬は鞍を置くに及ばず、あわて騷いで奔走す、成兵是に勢をなして、喊聲天に連れば、趙卒の哭聲地を動す、郭黑略、支屈六、劉徽、趙鹿の四將は、火を將て四所に放ち起れば、烟焰天を冲き、光り數十里を照す、王彥、牽秀等是を見るより、二路を分つて風の如く殺て入る、許超は和演に渡り合ひ、火光の中に有りて相ひ鬪ひしが、牽秀が大力を以て砍入を見るより、和演をすてゝ牽秀が來るを、鎗を以て抵住む、二人武を耀し威を揚げて、大に戰ふ事、三十餘合すれども、いまだ勝敗の分さるに、忽ち見る一員の猛將、步を踏み漢が如くに至り、一斧を以て、許超が乘たる馬足を砍斷つ、何を以てかためらふべき、馬より下に落つる處を、王彥、董洪、双び至つて、遂に生捕つて去りたりける、士猗は許超が落馬するを見るより、乘たる馬を拍いて逃去りぬ、趙讓、郭勤、公師藩の三將是を見て、去路を阻住めて遮れば、士猗聊か鬪ふ事、數合ばかりし　敵を料て過たじと馬頭を轉じ、中軍を望んで走り去り、伏胤と一所に合んと思ひ、行事いまだ二十步ならさるに、一員の小き將、手に大刀を持ち、忽然として出來り、聲を揚げ高く叫んで曰く、石勒是にあり、逆につくの賊奴、還て下馬せずして猶走らんとするや、士猗其年の幼なるを欺いて、鎗を挺げ刺かゝる、石勒聲を揚て喝り、神威を奮ひ起し、大刀を以て砍進む、猶ほ天上の華光風の如くに輪るに、士猗眼花を飛し、手慌しく鎗亂れて、石勒が一刀に、馬より下に砍り下さる、張曜僕、跳り下つて首級を伐り、身を翻して馬に上り、石勒と一同に、中軍に入去つて、孫會を捉らへ、父の仇に報いんとぞ勇みける、孫會、伏胤、是を見大に懼れ、魂は天外に飛び、魄又雲端に散じ、頭を抱へて命を逃る、やうやく寨上の路に出れば、張衡に出遇ひたり、遂にそれより一同して、寨の後を轉り、小徑の中を望んで、洛陽にこそ逃げ回りける、超兵ども主將の

行衛、何に往くとも知るものなければ、倶に各々京路を望んで奔走す、石勒はそれより本部の兵を驅て、大に喊をつくり、前路に進んで追赶けたり、成都王も既に到つて、衆兵の勇を奮ふを見るより、遂に令を傳へ、直に洛陽に入るべし、少も住る事を許さずと、相觸れらる、諸將は令を受くるより、後より疾進む、趙兵は滻水に至つて、是を渡らんとする所に、石勒が兵、奄ひ至るを見、遁て水中に押入れらるゝもの、幾等と云ふ算を知らず、滻水これがために流をとゞむ、成都王、連夜直に洛陽を扣いて、四門を把り住め、人を伊闕に遣し、齊王に報ずれば、齊王書を見て大に喜び、即ち諸王と共に寨を拔き除つて、倶に起ち、洛陽を望んで進發したまひける、

通俗續三國志卷之十七

諸王誅趙王孫秀

趙王倫は朝を設け、孫秀と評議して、こゝに兩路の兵馬、其の勝負いかゞあらんと安からざるに、忽ち徐健奔り到つて、孫輔、司馬雅、駱休の諸將、皆々河間王の部將、張方が爲に殺されたりと語る、趙王この說を听より大に吮き、面色死灰のごとく、半時ばかり言をも云はざりしが、やう〳〵口を開いて、徐健に問ふ、閻和、路始、張泓、今何の處にあるや、徐健承はり、張泓、路始二人は、走りて伊闕山中に入り、閻和は傷を被りて、保寨の中にて死したりと語る、趙王聞いて大に嗟いて曰く、始より事に從ふの羣將、連りに喪び、今幾人か殘れる、大事はこゝに去んぬ、大事はこゝに去んぬと、くりかへして嘆きやまざる所に、忽ち孫會、伏胤、張衡等奔り到つて地に伏し、痛哭して申し上けるは、始め成都王の兵、吾一陣に斬り破られ、敵の上將、公師藩を擊とるによつて、成兵懼れて退走る事三十餘里、吾を敢て仰望む事も能はざりしに想はずも上黨の石大夫が兒、石勒義子、石崇が殺されたる、其の仇を報ゆと稱し、石桑とゝもに起り來る、其の勇敵なく、許超、士猗同じく皆斬を被りたる故、大に味方の敗となつて回ると說けば、孫秀言を听いて大に驚き、面土色の如くになる、趙王も聞くより、兩淚潛然として下り、汗濕うて衣に透り、身戰うて少くも止さる所に、忽ち听けば砲銃天に轟く、是如何なる事と見る內に、士卒こゝに報來り、成都王の兵今此に到れり、これに依りて守門五城の兵馬、各々分付して緊しく閉守候と、宮廷に達しける、趙王是を聞いて、慌しく孫秀と、敵を退くるの計を議せんとす、時に伏胤進出て、こゝに今、

たゞ一路の兵到る、即ち精兵を點撰し、出城して殺退けん、他の二兵を退けなば、別王又皆畏縮つて寄來らじ、其の時各路に詔を下し、王を勤る兵を招き、若し到らば、又諸王を破るべし、早く城を圍むことを遽けて、軍民の膽の怯れを已めんと云ふ、趙王これを然りとし、詔令を出さんとすれば、敵の急なる飛報、迭に入つて、齊王、東海、長沙、瑯琊、新野の五兵皆到り、六門を分て圍む事、鐵桶の如くにして、水をも泄さずと云ふ、趙王聞いて前非を悔いて曰く、我れ執政たり、權、人主を砕き、何等の富貴かこれに越えん、卿等が榮顯も又、似ものなきに、何故に過て、我に帝を廢する事を勸め、今日の急難に至らしむるや、愛將皆沒す、誰か能く心を盡して力を宣べん、玆の城を圍まるゝ事、これを如何せん、是自ら悞るなり、孫秀が曰く、往し事すでに過てり、悔ゆとも亦及ぶ事なけん、但し當然の議を計つて、目下の危を解いて、再び道理をなすべし、宜しく三部の司馬をつかはし、兵民を集め點にて城に上せ、防ぎ守りなん、此の洛陽の皇城、堅厚にして牢固し、一時に焉ぞ能く我を攻めん、其の持し守るの日久しくは、敵の粮運決ありて、三軍自ら食乏しきに至らん、しからばあつまれる處の諸王の兵、計らずして心離れ、事異を生ぜん、那時に策を用て、これを謀らば安からん、伏胤が曰く、此の言恐らくは迂とぼし、彼の軍既に心を協へ、矢ひ約して此の大事を立つ、なんの食乏しきに至らんやとつぶやく、孫秀又智惠ありがほに、いや〳〵然はあらず、群雄同栖むときは、終日啄事を嫉さるの事なし、況や六路の王の衆多なる心、能く一に協ふべからず、其の少し罅隙あるを見るならば、一舌辯の士を遣し、說をなさしめ、河間王に通じ、許すに大位、重祿を以てせん、其の人素より齊王と睦じからざれども、今こゝに來れる者は、別王の功を幹るの後を恐るゝと、陛下皇太弟たらしめんと、許したまふばかりにて、曾て詔あつて、入朝せしめ玉はざるとの故を疑ひ、勉強て兵を進るのみ、河間王を解て一たび離しめば、餘王の心も又懈たらん、其の時に兵を縱て擊なん事、袁紹等が董卓を伐の謀なり、自ら懼れて風の如くに靡きなんと云へば、趙王言を聞いて喜びに轉り、乃ち三部の司馬を令し、百姓の丁壯なる者共を、城に上せて守護せしむ、日夜に輪轉つて、少くの休息なく、防守をなさしむるに、民人の嗟き怨むる聲、相接き喧しきばかりなり、諸王の兵の攻打事、すでに月餘に至れば、城中の騷動暫くも止む事なし、これに依て孫秀が軍兵に、給賞する事過て濫りなりしかば、庫中すでに積む事なく、粮食困極るに至りけり、孫秀諸將と評議して謀を設け、百官の家に令して、各々米麥を出

さしめ、これを以て軍の需に給さしめ、後日兵の退くを以て、價を取てつぐのふべしと籍帳をつくり、出せる所の財帛の數を書記さしむ、若しこれを肯ざる者あれば、軍士をして自ら倉廐に入去しめ、強てこれを出さしむ、是に於て軍士各皆機に乘し、民家の粮米は云ふに及ばず、雞犬に至るまで、悉く取り盡せり、これを以て百姓の餓死に至る者、洛中に多少と云ふ數をしらず、其の屍骸、路に滿々たり、百官の朝に在る者、咸恨をなし、齊王の方に出て奔らんと、時を窺ふ者のみなり、城中の左衞將軍王輿は、しきりに官民の怨みふかきを知りぬれば、密に中軍司馬の趙泉、右司馬の王催等に語りて曰ふ、我つく〳〵思ふに、六王の兵を合して此に至るは、趙王、孫秀が罪を來問ふまでなり、城中の百官萬民に於て、さらに預る事にあらず、しかるに彼れと同じく、困苦を受くる事是の如くなれば、一日を度る事、宛も一年を度るより絶えがたし、闘死饑餓、巷に滿るを見るにも、此の城の體、中々以て永くこらふべきとも思はれず、ましてや切に恐るゝ事は、齊王衆王の怒を干す事あらば、吉凶つひに計り難き所あり、二公の心中、如何んとか思へる、王催が曰く、今內粮餉に乏しく、外に救援くるの賴みなし、城まさに破れんとする事、此旦夕にあるのみ、若し衆兵、一たび城に入る事あらば、我が等倶に是死なんが、何ぞ孫秀と同例なる事を好まんや、惟に成す事無き故に、今日の困苦にかゝるのみ、豈これ本意なるべきやと云ふ、趙泉が曰く、是の若くんば尋で思ひはかり、禍を轉じて福となし、奸人と共に死し、不明の名を蒙むる事を免れん、王催聞て、今遍城みな怨み、人心叛事多けれども、もしや孫秀に聞き督されて、其の害を加へられんかと懼るゝが故、人々敢て其事を發せざるなり、若し一人の先を唱ふる者あらば、悉く左に袒ぎ、同心せずと云者なからん、今吾三部、既に兵馬を點檢すれば、當日りての權柄、半は吾にあるらくのみ、此の城なほ未だ破れざる內、陰そかに左右衞中の將軍と、一邊に門を啓いて、諸王の兵を導き入れ、孫秀が府中に殺入り、其の父子を擒にし、以て滿城の誅に死する者を救はん、此れぞ乃ち、禍を變じて福となすの時なり、吉凶たゞ此の一擧にあり、しかも悞るべからずと說く、王輿が曰く、公の言正に吾が意に合へり、此の城破るの日、玉石俱に焚れて、同じく混死すべきやと、三人の議定まれり、趙泉曰く、事に於いて、行ふべきに定めても、未だ衞士の意知りがたし、吾れまさに此の命を乘てものにして計らんと、軍士をこゝに集會して、利害を說くに、誰か一人背くべき、惟に將帥の命にしたがはんと應ずる聲、街に叫ぶ、さらば孫秀が府に至りて拿へよと、彼の所に至るところ、王輿、李儀、趙泉、王催等に相したがふ者共、數萬の多兵に至れり、かくて齊しく孫秀が府中に入りて、父子親族、奴僕の類、一人も殘らずこれを下し拿へ、其の餘の少しもさゝへ拒ぐべきものを、悉く斬り死し、其の後に趙泉、城門を排き、齊、成、軍を迎ふれば、諸王遞に朝中にすゝむで、たちまち趙王を擒へ、太子司馬夸を合せて縛りける、こゝに汲桑は獨り馳せて、駙馬の府中に入り、孫會を捉り出せば、石勒は衆兵を將ゐて、其外の者どもを、遍く尋ねもとめて、司馬楨、司馬虔を拿得れば、張方も又、司馬詡、司馬馥を擊得たり、盡く皆これ等を一所にあつめ、法を定むる役所にぞ押赴かしめたりける、孫秀は未だ刑戮に行はざる以前に、日頃の、惡む所や多かりけん、軍士共相集つて、こと〴〵く割ちしけり、汲桑は親自ら手を動して、活けながら孫會が心を割き、其の肝膽をとり出し、石崇一家を祭りける、成齊兩王の命あつて、逆黨の隨一たる、伏胤、孫弼、謝恢、殷渾、卞粹、張林、張衡、徐建、楊珍、胡沃、蔡璝、莫願、高越を捕へさするに、共に十三家、其の族、百七十三人、殘らず夷滅せられたり、こゝに李儀一家、族滅を免れけるは、父李儉、先に戰死し、我身又邪を改め正に歸したる故なりける、其の後齊王の、百官を率ゐて、惠帝を出迎へ、大位に復し榜をかゝげて

民を安じ、詔あつて、司馬倫を貶して庶人と爲し、金墉城に囚れたり、さて齊王は、諸王衆臣を率ゐて朝參し、譟動を起の罪を請ふ、惠帝これを慰め諭して曰く、卿等の罪に、何をか關らん、孫秀、趙王、妄に不道を爲ゆゑのみ、朕再び天日の光を見、位に復する事を得る事は、實に衆王の大功あるに依のみなりとて、乃ち齊王を封じて大司馬となし、九錫を贈られ、其の勳功を榮やかさる、其の上乘輿して入朝し、劍履なからに殿上する事を免さる、兼て相國の事を行ず、成都王を以て大將軍、都督中外の諸軍事、假黃鉞の官にすゝめ、かねて尙書の事を祿して、國政に參理したり、河間王は鎭にあるを以て、增封五千戶を賜る、張方が此の度の功を賞し、撫軍將軍になさる、其の下の副將も又將軍になされ、采段三百疋づゝを賞せらるれば、張方は士卒を率して鎭に回りぬ、長沙王を侍中太尉、東海王を中軍都尉になされ、京中の兵馬を督さしむ、新野公に爵をすゝめて王となし、瑯琊王に節鉞を加へ、戶口一千を增し、兵を領して鎭に回らしむ、成都王又石勒を奏し、有功を以て官職を授けられん事を執し申さるゝに、朝中の大臣、思へらく、石勒は上黨に居住して、胡人の俗に習ひたれば、恐くは其の性も亦はかりがたし、宜しく朝廷にあらしむべからずなんど、廷議いまだ決せず、成都王

は、ひとへに、石勒を擒げ擧んと思ふより、乃ち石勒等に令し、其の將兵を引いて、伊闕山に往き、張泓路始を收め拿へしむ、石勒命を領け、孫秀、司馬夸が頭を以て、すでに洛陽の攻敗れたる事を示す、されども張泓、路始が出でざりしを、汲桑十二將を率逼でこれを索り、其の壘門に至つて、直にこれを攻めければ、張泓已む事を得ずして、路始ともに出で拒ぐ、凡二戰ばかりして、路始が郭黑略に殺されたるを見、張泓は懼れて兵を引きつれ、出て逃るゝを、汲桑自ら赶け去り、終にこれを生擒りたり、成都王大に喜び、張泓を戮し擧ぬる功とて、石勒に成王の私の賞として、金千兩、綵段千疋たまはり、軍士萬人に各々布一疋、銀一兩をたまひ、尋ねで石崇が幼子、名は石樸を封して、衞尉の官になし、舊の居に還らしめ、本縣の原田千畝を賜り、石崇が祀を奉ぜしむ、石勒上書して恩を謝すれば、朝廷より勅あつて、石勒には上黨の衞守備の官を賜ひ、張泓が、今まで部する處の兵士一萬を加へ添へ、ならびに其の遺れる粮錢を、一に併せて石勒に與へられ、次で上黨に回らしむ、石勒かつて是を懌びされば、汲桑鑒めて曰く、吾れ等の意、もとより晉の朝にあらず、今石老爺の仇を報い得るを以て、これ亦好しとすべし、若こゝに永く居し、君が本分を他に勘破れば、反つて善からざる事なら

ん、且へ京中の沙汰に皆道ふ、齊萬年、劉淵反を作す事多年なるが、今や相共に和して罷めりと、正に宜をすてゝ、彼處に往去り、穽中の害をまぬかれん、何爲ぞ營々として、爰に滯留なすべきぞと、それより成都王に辭し別れ、北を望んで去りにける、齊王すでに石勒を遣りつかはし、又奏あつて、王輿、王儁、趙泉、李儀の四人、民命を救ふの功を賞し、各々諸國偏將軍に封じ、京衞にあつて、同じく兵馬を典どらしむ、斯くて淮南王に詔を加へ、其の繼を起て、趙王の府第を毀り、盡く黨を除つて、新を布く、世の中とはなりにける、

成都王辭職回鄴城

晉の惠帝既に諸親王の力を以て、司馬倫が賊みし位を奪復し、再び正位に回り玉ふと雖も、大小の國事は一に皆、齊王等の掌どる所なり、是に於て、齊、成、長沙、東海の四王、各掾屬の官吏を置く、大なる者は四千人、小なるは二千人に餘り、武士森列とあつまり、文官又備く員滿てり、新野公司馬歆は、すでに王號を加へられたるに依て、こゝに長史の官幷に司馬の官各々一人を置かんと求めらるゝに、成都王以爲く、それ武帝の時より、濫錢の制法には、原よりこれ無き屬官史は、重ねて添設くべからざるの、定めなりとて、これを領が

はず、司馬歆、心にこれを恠み惱つて、日頃を經しが、すでに鎭に還らんとするに當り、密に齊王冏に說きける、吾れこのほど、成都王の形勢を見るに、部衆太盛なるを以て、人皆目を側め、朝野心を傾けぬ、竊に思ふに、是等の事、大司馬を危うするに至らんか、但恐れあるは人心にして、料がたきは世情なり、一朝に變起らば、倉卒の間、何を以てか易く制せん、今將はやく、これを遠離せさるやといふ、齊王これを聞き、吾固より其の威の赫んなるを知れども、同じく國政に任ずる上は、渠まさに何をかせんと思へり、今汝の言を聞くにつけて、こゝに疑ひなきに非ず、まことに以て孤を、相愛せらるゝ情、肺腑に刻んで忘るべからずとて大に喜び、ねんごろに餞けし、內議を定めてぞ別れける、時に又長沙王朝中に在りて、齊王を見るに、獨り大政を擅つて、一人に權を取ることを、心中にこれを妬みて、はやく成都王に相結び、黨をたて身の寄りどころをなさんと思ひければ、私にこれもまた成都王に說きける、當時、齊王、ひとり政を專らにし、百官みな己を總べてこれに听く、今また葛旗、孫洵等が奸言に惑へること、さながら趙王の昔にかはる事なし、其の上齊王の心、尤も不正なる處あり、向日には趙王を助けて淮南王を殘ひ、重て恨を結んで趙王を滅す、其の實に親しむべからさる事、緊これ等を以て見るべし、

彼は是叔の子、今汝の兵の盛なるを見ば、心必ず悅ばじ、宜しく早く自らの計をなし、其の奸を謹防ぎ玉ひて、後の悔を貽す事なかれと云ふ、成都王は長沙王の一番の說話を聞き、胸臆を動し、乃ち點首ながら、こたへて、倘の言さもあるべしさもあるべしと、云ひをさめて相別れ、第宅に歸り、即時に長史盧志を召して、長沙王の說、如何と相談す、盧志聞いて、長沙王の言、果して妄ならし、臣固より兩雄ならび難き事を知ぬ前には大王戰勝、遥に先づ河を渡すの功を論ずるに二なし、然るに齊王首として、大謀を創め、當に以てこれを尙ぶ、縱ひ心に疑ひ忌ところありとても、一端は各宜しく自ら省くべきところあり、しかるに今內難始めて蹔りぬれば、又互の爭ひ無くんば非ず、是より禍の本となつて、民庶をしづむる事なからん、成都王の曰く、然るときは他人意あつて、孤をはからんとす、孤又此時何を以てこれに處せん、盧志が曰く、此れ何の難きことかあらん、但し此處を離れ開くにあり、此の如くするときは、齊王は我意に任せ、我は能く永く無事を保ち、齊王まさに自ら免がるゝこと無からん、何ぞかれと爭ひ較る事をなして、不測の禍を招かんや、大王こゝに言をつくり、鄴城の太妃娘々より、老疾あつて賴しげなき由告來れり是に依つて鄴城に回り、親ら母公を養ひ、疾に侍らんと願ひ求め、國事

を以て悉く齊王にこれを委ね、再三辭を陳ね、萬机を理むる事は、四海の望にまかせて、齊王これを主どり玉へとあらば、齊王は必ず大王の推載くの義を感じ、天下の士も亦皆いはん、大王の謙讓の德ありと、かくの如くならば、孰か大王の德を仰ぎ慕はざるものなからん、然して、齊王の虛重く、過の深きを覘ひ伺うて、天怒人怨むるの時至り、兵を以てこれを討たば、大功伐らずして自ら大王に歸すべし、且へ天道は後れて與するを以て昌ふ、昔し太公が武王を勸めて、紂が罪の深重なるを待て、而後に兵を興さしむ、此この謂なり、望むらくは大王臣が微言を听たまへ、後ち必ず効しあるべし、成都王是を聞いて大に喜び、正に意に行はんと欲する時、漢の劉淵が子、劉聰、晉に來て人質と成居けるが、成都王に愛せらるゝ身なりし故、忽ちこゝに來りて告ぐ、憶に聞く、齊王謀つて大王を黜くるの心ありと、事遲々に至らば、其害を免れ玉はざらんか、去るに依つて、早く來り告ぐといふ、成都王この言を告ぐるを以て、甚だ悅び、日頃の懇志淺からずと感じける、又曰く、齊王必して、大王と隙を生じて相爭はん、それに付ては臣が父、今左國城にあり、五部の兵もとより又、其用をなすべき者共なりと說けば、成都王益よりこれを知るゆゑ、遂にこの爲に表奏し、劉淵を以て左賢王とし、五部の總統となす、劉淵大に喜び、其の臣胡延攸をして入朝せしめ、報謝をのべ、兼て方物の品々を貢しけり、因つて劉聰が人質たるを請ひ求めて、部落に還らんやうをねがふ、成都王この請を未だ肯はざる所に、忽ち人あつて報て曰く、昨日齊王の召の由にて、何事ありとは知らねども、ひそかに東瀛公司馬騰、幽州の總官王浚をして、兵を發せんとすと語る、成都王疑ひ惑うて大に愛懼れて、衆の黨與の者共を召し、密に此の事を評議なせば、衆論紛紜として分れず、時に劉聰、幕下に在つて、窃に此の事を知れば、間に乘じて入りて說く、大王功高く威重きを以て、齊王忌憚るの心を懷きて、茲に積む事日あり、思ふに謀つて大王の權を奪はんとす、これを奪ふに遂げずんば、兵を以て凌がんとなり、故に今の召あつて、兵を起すの計ごとありと云ふ、成都王聞いて曰く、此の若きがこれ實ならば何を以つてこれに處せん、劉聰曰く、大王憂となす事なかれ、臣請ふ、遲つて五部の兵を收め、隙を伺つて動ぜん、若し果して謀あらば、大王の心を以て、臣當先に驅て彼を中途に邀へなば、二豎子、其首は日を指定めて、大王の麾下に懸んに、なにの懼れかあらんと說く、成都王は劉聰が誑けるを允と思ひ、密に劉聰、胡延攸に謂つて曰く、ともに左國城に還りて、兵を斂めよと免しやる、盧志この言を聞いて、劉聰が言まことに是なり、但し遠水を以て、近き火を滅ひがたく、百關しき、一の辭なるに如かず、されば丞に親を養ふを以て辭去りたまへ、斯乃ち萬全の策なりなんと、云もいまだ了らざるに、長沙王報しめて、適々聞く齊王、帝に大王の事を奏して曰く、成都王、功高く職輕し、これに依て太傅を加へんとす、これみな蔦旗等が謀て、兵權を奪はんとするの計なりと曰ふ、盧志聞いて、我が始より計るが如き、他の奪ふと奪はざると、權柄を他にゆづり、此を釋て鎭に歸るは、自ら我この害に與る事なきなり、なんの謀をか、この外に用ひんとすべき、成都王喜悅し、即ち盧志に命じて、表辭を造らしめ、鄴城に回らんと云ふの願をなす、次日表を上る文言、其慨の切なるを極め、歸り至つて其の母太妃を養はん事を求め、本書甚だ齊王の功德を稱げ、萬机こゝに總べ主どらしめん事を述ぶれば、齊王大に喜び、亦上表して、成都王を贊勸め、これに九錫を加へ、古郷に歸るの榮こなさしめ、親を養ふの後は、再入りて政を輔けよとの、命あらん事を奏す、惠帝亦この奏に准し、齊王に命じて宴を設けさせ、餞して成都王を送らしむ、成都王再び上表して、九錫、殊禮を辭退し、今度義を興せる功臣に、封を加へん事を請ひ、又河邸の米を運漕して、穎陰、陽翟の處々害を受けて、

飢に至れる民を救ひ、黃橋の戰に、亡び死せる士卒を祭り、ならびに公師鎭、俞通の二將に追贈せられ、其子孫を蔭ひ育み玉ふの事を望まる、是を以て遠近の軍民、皆々仰で成都王の德澤を思入るれば、齊王も甚だ敬を加へらる、是みな盧志が、愚を誑かし己れを驕らする之れ術にして、衆を沽ひ、衆を買ふの計なりけると、云ふ事なるを知らざりけり、

齊王冏專レ政

齊王は既に成都王の請に依て、義を興すの功臣を論じ、即ち心腹の附屬を以てこれに當つ、董艾を以て政の樞機を與どらしめ、萬事をこゝに判斷せしむ、葛旗、孫洵は參謀たり、王義、郭鎭等共に、縣公に封せらる、時の人これを名づけて、齊腹の五公と稱す、齊王冏、世にこの沙汰あるを聞知つて、人の議論を恐るゝ故、乃ち名なる時の士、劉暾を辟して、軍咨祭酒となし、曹樞を記室とし、張翰、孫惠を掾屬とし、頗榮、王豹を主簿とし、何勗を中領軍となし、荀晞を任じて、齊地の舊鎭を掌どらしめ、即ち齊府參軍、遠州の刺史の職とし出て齊地を守しめたり、弟荀昨は臨朐の令となつて、同じく出て守りたり、又王催を持節とし宣旨をもたせ、藥酒に幷せて金墉城に至らしめ、趙王司馬倫に死を賜ふ、王催か

しに至つて、命を宣べ旨を諭せば、司馬倫大に哭して曰く、吾何の心あつてこれを念はんや、以て今日を致す事は、孫秀我を悞てり、孫秀吾を悞てりと、道ふこと數たび、徘徊する事再四すれども、眼前一の親むべき人もなければ、たゞ涕淚のみ雨の如し、かくて時刻も移れば、王催事の遲しとせむる故、せんかたなく酒を執て大息し、王催に謂て曰く、吾細人の爲め悞まられ、この背逆の罪に陷る、なんの顏あつて下黃泉まで祖宗に見えん、吾死するの後、巾帕を將て吾面を遮り蓋へ、先靈をして吾形を覩せしむる事なかれと言訖り、忽ち酒を飮で死したりける、王催、卽ち其屍を殘めて朝に回り、旨を報じける、斯て齊王は、既に成都王を斃け、趙王を殺すの後は、獨り朝政を專らにして、五公を用ひたりけるほどに、彼の五人の輩の威權ある事、朝野これを憚り懼れずと云者なし、此の後亦如何なる珍異か出來なんと、そゝめきけるが、程なくさま〴〵の災異あり、先河間の界上に、一獸にして頭に四の角を生じ、身の高さ八尺、頭の赤き事火の如くなり、人これが名を識ものなし、嘶へ鳴事三日あつて、めぐつて關中に入る事又三日、其の後は往方しらず成りにけり、又廬江の何旭と云ふもの〻家に、忽ち聞けば、地下に豚の吠る聲あり、听さだめてこれを推して、土を穿ちてこれを見れば、一つの母豚、色青白にして甚だ瘦せたるあり、是を取出すと、其のまゝ走りて草中に入り、遍く覓れども見えざりしが、俄に草中より、小豚兩個走り出づ、一雄、一雌、雌なる者は七日にして死し、雄なる者は會々粥糜を吃ふゆゑ、極めて長じ安くして、數月にしては善く野獸を噛むにいたる、一日何旭客を待て宴するに方り、其豚走り至つて、席間にかけり、卽ち椅子に登り坐す、衆皆驚き怪んでこれを逐かくれども、彼豚吻を鼓して、人の迎をも事ともせず、何旭これを見て大に喝れば、卽時に走り出て行方しらず跡を失ふ、又齊王一日事あつて、襄城に駕を回らし玉ふに其界のほとりに、忽ち一小兒あらはれ、道の中に立ちたり、衆是を見れば、體髮俱に白し、何なる者と問ふに、自ら言つて、八歲々々と呼ぶ事數聲にして、倏然として影も見えず失にけり、齊王大に訝り、吾眼昏きにあらず、何爲ぞ此怪異ある、不祥なる事あらさるべきやと嘆息して、前進すれば、忽ち小兒の站ちたる處に、一箋に書きたる詩ありける、

三八年來見太平　再過一八二致紛更
五八之中南共北　八王取次自相尋

齊王はこの詩を見るより、心中甚だ驚疑をなし、悶々として朝に廻る、近侍又報して、昨に洛陽城中、東北にあたつて、廣さ一里ばかりの地陷り、穴の中より二の豚出でたり、一は白く一は蒼し、人これを捕へんとしつれば、蒼き者は、天を冲て去り、白き者は起て飛事あたはず、人の爲に獲へられし故、東海王に獻ずと語る、齊王人を使して、取り看んとせしに、回り報して、何れの處に飛去りけん、忽ちに見えずとこそ云ひたりける、かゝる怪異の事、其頃は、こゝかしこにて、毎日の沙汰に談じけり、

左國城劉淵接漢

劉聰は胡延攸と共に、洛陽の地を離るゝ事を得つれば大に悅び、もしや齊王の追ひ回らしむる事のあらんかと、夜を連けて遁れ去るほどに、程なく左國城に至り、父に對面したりければ、劉淵悅び常ならず、宴飮事畢りて、談すでに晉朝の政事に及び、事務の善惡兵將の强弱如何と問はる、劉聰答へて、晉國の惠帝、昏愚凡庸の質なるゆゑ、親王自ら互に相戰す、これに依て洛都の府庫全く虛しく、將兵皆憊れたり、この時節にあたつて、虓將一員、提兵萬人あるならば、正に以て河洛の地には、橫行をなしつべしと說く、諸葛宣于これを聞いて、京邑いかに空しと雖ども、藩鎭の王尙盛なれば、未だにはかには犯しがたし、まさに吾が西地より漸を以て進むべし、今彼國いまだ變あらず、危亡の隙を伺ふなれば、其の利しばらく、これを俟にありと云ふ、劉聰又曰く、晉の變甚し、軍師の知らさる所なり、洛陽宮中に鬼哭して、徹夜に至り、金墉城內の殺聲曉に及ぶ、黃河水涸れて底を見、銅駝夜走つて城を出で、太白星晝に當つて天を經、中台星めぐりて南極の分野に出づ、其の外大小の怪異、あげて數ふべからず、此れ皆晉のまさに脫せんとするの前兆たり、今吾父王、地方數千里を有ち、雄兵二十餘萬あるのみか、諸の故舊、文武の士、あへて漢氏を念ふ、相共に力を戮せてはからば、何の大事をか成さらん、仇を報ひ業を復せん事、正に此時にあり、豈に再び歲月の至るを待たんやと勸める、是に於て、一班の將佐、盡く踴躍出で、相ひ贊美して、王子の言これ是なり、何の日を待つべきぞや、若し歲月を經るならば、若き者は延ぶといふとも、吾等は皆まさに老に入らん、兎角一日も早く思ひ立ちたまへと云へば、張賓、諸葛宣于、胡延晏、王彌等、是を聞いて、さらば急に打立つべし、然し今兵を發せんと欲せば、先づ漢號を建立し、其名位を正し、號令を天下に傳へて然るべしと云ふに、衆人皆これに從ふ故、卽ち張賓入つて劉淵を勸め、先大位に卽かしめ、然して後師を出だんとすゝむ、劉淵聞いて曰く、孟孫が言、是れ我を愛するの意なりと雖ども、但今いまだ、中國半歩の地にだも入らずして、妄に自ら尊大

ならんとせば、豈二人の笑を惹くにあらざらんや、張賓が曰く、晉國大に亂れ、怪妖變異迭に見ゆ、川蜀寇興り、諸王自ら賊し、天下此の憂にかゝる、此の時漢號を立つるに非んば、人心歸する所なからん、劉淵又曰く、事忙はしきに非ず、昔周文天下を三分して、其の二つを有つだに、猶ほ殷に服事せり、故に世その德を稱す、吾今漢の裔として、縱に胡地を持つ身の、即ち是を都とせんや、胡延晏進出て、今古時を異にし、王朔業同じからずと云ひて、衆將の正議、いまだ了らざるに、劉理の子、もとの西平王劉義と云へる者、關山、關河の二人を引具し、共に母妻を携へて、奔來りて案内を啓す、劉淵相見て大に喜び、今此には、如何して來り玉ふと問ふ、劉義答へて曰く、吾關山、關河の二人を尊ぬる所に、或者告て曰く、關氏の者共は、上邽より難を逃れて後、今梓橦の李豐が所にありと、吾是を聞いて、李豐が庄に尋行き、關家の者共に尋逢ひ、暫く彼處に居たりしが、聞けば大王左國城にありと、故今來て拜す、大王聞かずや、此頃李特が反をなして梓橦により、趙廞反して成都に據る、これによりて川中も大に亂れたり、それに就いて吾祖父、不幸にして此年を越えて、東に馳せ、西に奔り、落ぶれとなりて半百に過ぎたり、日月流るゝが如くなるに、功業を復せずして、之の如きは如何んぞやと云ひて、淚を下す事やまず、衆皆是を聞いて、猶憤り進んで曰く、皇孫の言、これ至理あり、劉元海、今再び位を建たまはずして、恢復いつの時をか待たんと云ふ、關山も亦云く、晉人の形勢を見聞するに、諸王相屠戮し、賢良の將士誅滅せらる、禍敗まさに時至れり、宜しく衆論に從ひ、機會を失ふ事なかれとすゝむ、諸葛宣子、復び衆將と共に、一齊して上り、劉淵を勸むれども、劉淵なほ堅く辭して肯はず、此に右賢王劉宣は、劉聰が、國に回る事を聞き、相訪ひ、劉聰に相見の禮畢りて後、劉宣は、諸葛、關、張、黃、趙、王、李、楊、廖、胡延等の諸將に謂て曰く、我が漢亡ぶるの後は、地に尺寸の居るべき無く、王侯くだりて編戸に同じ、今吾衰ふと雖も衆なほ數萬に減ぜず、いかんぞ手を欵めて、役を人に受け、奄ち百年を過さんや、今元海、英武郡を超え、手姿狀貌大に先主に類たり、劉玄明も亦天日の表し、龍鳳の姿なるは、天まことに吾漢業の興る事を欲せずんば、なんぞ虛しく此人を生ぜん、況や諸公、皆卓犖の才、棟梁の器なり、今司馬氏、骨肉相殘ひ、庶藏空之しくして、邊方の賊反し、所々に據まふ、吾漢家の基業を復すべき事、此の時ならずして何をか期せん、正に挫き過つべからず、吾吉日を擇み、此に劉元海を立て、君とし、尊號をすゝめん、何の餘議にか渡らんと云へば、衆將大に慶賀し、此の事老大王に非ずんば、能く大王の心を奪うて、事を定むる事なけんと勇みすゝむ、劉宣、即ち人々に當日の役を分付け、壇を築き壘を建て、次日に至りて、劉宣は自ら、諸葛、張、關、黃、趙の等と、左賢王劉淵を扶け、壇に登らしむ、劉淵こゝに於て、再び四び謙讓して、位を遜つて劉宣をすゝむ、劉宣が曰く、殿下は乃ち先帝の正しき裔、漢朝の親しき派れ、老胡焉ぞ敢てこれに當らん、劉聰が曰く、此の若んば劉義は乃ち吾皇兄の太子の嫡子なれば、以てこれを建べし、劉義が曰く、吾父存へたりとも、左賢王の如く、仇を報ゆるの事能はざらん、又北地王の如く、身を亡して節を盡すに似ず、功名兩ながら媿しめたるは、寔に先帝の罪人たり、今不肖の任、敢て亂に當らんやと辭して、各偏に劉淵をすゝめあぐる、劉淵今は謙るとも衆容すまじと思ひて登壇し、拜して天地を祭り、それより陞座して禮を受け、詔して、五部の官屬を署し統を垂る、此に於て攝漢天王と稱し、年號を元熙元年と建てたり、大歲甲子の年なりける、大に境内に赦を行ひ、皇父後帝安樂公劉禪を追尊して、孝懷皇帝とし、漢高帝以下、二祖五宗の神主を立て祀をなし、其妻胡延氏を以て皇后となす、此胡延氏、本性はこれ魏氏にして、胡延安が妹なり、こゝに百官を置き、劉宣を以て左丞相とし、諸葛宣子を右丞相、劉義を司徒、劉累を司空、これは劉豹が子なればなり、劉歆を大尉とす、即ち劉宣が弟なり、劉膺を侍中とす、前舊部帥なり、劉宏を司寇とす、後舊部帥なり、劉伯根、關防を左右の大司馬となし、劉璽、王彌を開國冠軍大將軍となし、關讖、張賓を、平難龍驤將軍、黃臣、胡延晏を輔漢大將軍、護衛保駕使、趙染、胡延攸を車騎大將軍とす、楊龍、王桂を標騎大將軍とし、張敬、廖全を驍騎大將軍とし、趙槩、黃命、王如、關河を建威將軍とし、孔萇、桃豹、夔安、曹巍を建武將軍とし、支雄、刁膺、喬晞、桃虎を、楊威將軍とし、趙藩、李璫、樊榮、馬寧を振武將軍とし、胡延顯、湖人侯を、振威將軍とし、劉欽、王邇を、楊武將軍とし、關山、湖密、楊興寶を、護軍都尉とし、張賓を軍師謀主とし、崔游、游光遠を、御史大夫とし、劉聰を以て太子とし、大將軍の事を兼て總督とし、尚書の事を錄せしめ、晉王に封ず、劉和を以て中書の事を兼しめ、齊萬年を追諡して、關西公となし、廟を立てこれを祀る、其の餘羌胡の諸將、悉く封して、游擊將軍となし、劉豹を左國城の王となす、此の如く漢王大に百官を定め、太師丞相府を置き、大司馬以上七位より皆な上公祿綬を受け、遠遊冠を帶し、分て諸將をして十二營とし、兵一萬二千を配

し、各左右の司隷校尉を置き、戶口二十萬を領ず、同史以下二十餘人を置きたり、乃ち會して吉日を議し擇び、師を興さんとす、劉淵、衆將に謂つて曰く、孤今左國城に於て、一紀十二歲の年月を延れば、且喜しきは兵精しく、粮多き事を、晉朝の諸王自ら亂れ、邊防をなすに暇なからん、正に宜しく大に恥を雪ぐの師を興し、衆の兄弟と共に、本國に還る事をせん、是定襄より入て、涇陽に至り進まんといへば、張賓曰く、涇陽は路秦州に連つて、前きに吾兵のために破られ、城ついで空虛となるによつて、それより羌胡の難あるにより、今毎に羌胡をふせぐを以て患とすれば、盡く重兵を以てこれを守れり、盧るにそれ未だ拔易からじ、今定襄よりして進み、晉陽、平陽を取り、其の不意に出るには如さらんか、定襄は吾れと境を連ねて、素より相防がず、若し兵卒を以て進まば、手を垂れてこれを得んと說く、衆將尤と同ずれば、即ち太子劉聰、字は玄明を以て、平晉太元帥とし、張賓を謀主とし、王彌、劉靈を以て、左右の先鋒たらしめ、關防、胡延攸を、拆衝將軍とし、趙染、胡延晏、左軍を領し、黃臣、張實、中軍を領し、張敬、關謹、右軍を領したり、其の外に廖全、楊龍、救應使となし、王如、李桂、後軍を領し、趙槩、胡延顥、樊榮を、粮料使たらしめ、楊與賓は護軍たり、大兵こゝに十五萬を將ゐ、浩々滔々として、定襄の地を望んで軍を進む、定襄の守將衛鮮は、漢兵の此の如く、俄に至るべしとは察せず、素より隄防をもなさゞれば、大軍の境に入るを見るに及んで、やうやく城を守るに至るゆゑ、漢兵已に亂れ擊つに、城隍守り堅からず、一に湧て打入れば、衛鮮、急に忙しく防ぎ戰ふと云へ共、終に王彌が手にかゝりて、只一合ばかりの內に、馬下に斬て落されければ、其の餘の軍士、盡く降を乞うて出たりけり、因て劉聰、百姓を按撫しをはり、人をして左國城に往かしめ、軍の捷を報じ、衆將軍の手合よしと悅んで、それより兩路を分ち、介休、泫氏を望んで進み攻め、大原を取て、蒲子に入らんと議したりけり、

通俗續三國志卷之十八

漢主劉淵移二蒲子一

蒲子の守將米豹は、已に漢兵の急に襲ひ來ると聞ゆれば、府に告申るにも及ばず、連りに慌しく、兵卒の數を點し見て、此の兵にては、よも通す事を許すべからずとて、隘口に把住め、境內に入り立てじとこそ待居たれ、かゝる處へ漢兵山を撕し、

野を塞いで攻來る、米豹是を見て、待儲けたることなれば、其の身は高馬に打騎て、手に大なる斧を揮げ、大道に出張し、高聲に叫んで、漢將に謂て曰ふ、大朝すでに儞に左國城を賜ひ、成都王汝を表するに、左賢王とす、天恩此の如く薄からざるに、今故なうして兵を興し、反を造すは、自ら滅亡を取らんとするか、漢陣の折衝將軍關防言を聽くより大に怒り、言をも云はず、刀を舞して、直に米豹を取りて相闘ふ、米豹も亦、斧を揮りてかゝりしが、それより二人馬を跑せて惡戰す、但見る、刀雪片を翻し、斧は風花を捲いて闘上すでに三十餘合すれば、米豹漸々力おとろへ、敵をとさむる事かなはず、終に關防が一刀に、馬より下に斬墜さる、衆卒是を見て大に驚き、悉く潰えて走りける、關防それより兵を驅つて、城下に至つて見れば、先だつて王彌が手にて、城池を打破り、大漢の旗を堅起したり、斯て張賓、劉聰、城に入りて民を安じ、其の城の體を見るに、隍堞、高厚堅固にして、內に大なる第宅の、宮室の如くなるあり、是昔日、丁建陽が築きたるところなり、其山深く、湖に近き固めの屬縣なれば、錢粮を皆々爰に聚め置きたり、劉聰大に喜び、漢主を爰に迎へ請うて、自ら鎭守なさしめんと、人を差して申しける、漢主劉淵此の由を聞いて、乃ち游光遠と劉義とに命じて、左國城に監守たらしめ、崔瀆、湖文盛を以て、定襄の守にすゑ置き、我身は諸葛宣于等と、遂に蒲子に至りける、劉聰を始め、諸將殘らず出迎へ、城中に入らしめける、漢主は城の形を見、此の城最も都たるべき處なれば、孤且らく權に以て居るべしとて、遂に命じて修め葺き、不足の處を增補ふ、其の後劉聰に令し、先づ介休縣をとりて、太原を攻めよとある、それより衆將、次第次第に進發す、晉の細作、此事急に告知らす、介休の守將、賈渾は、極めて多智にして、謀深く、陣法をも明めたる者なれば、漢兵已に界を犯すと報ぐるを听けども、少しも驚く氣色なく、もとより縣の要害は、諳じ知りたり、我身は親ら兵士一萬を引具し、城を出で漢兵を迎へ阻てんと、行く事いまだ十里もせざるに、兩軍途に相遇ひ、陣脚をはやく結住めて、戰を交へんとす、賈渾時に馬かけ出し間て曰ふ、前者には梁王、汝が劉漢の奇たるを憫れみ、悉く滅すに及ばじとて、地を賜ひ號を賜ふ、恩優まことに大なる、今乃叛をなして兵を興す、是何の道理かある、劉靈答へて、此世界原これ我漢家の天下なるを、晉の司馬氏、過なきに簒賊むことをなせり、今是を恢復さんと欲す、何の恩優と云ふ事あらん、我は乃ち大漢の先鋒劉靈なり、兵を領して爰に至り、汝等を招き諭して、早く故地に還し、生靈を害する事なからしむ、後面の大兵五十萬、

良將千員、期を刻んで皆到らん、火速に降を投し、方に軀命を保つ事をせよ、何ぞ暫く我兵を阻つとも、其の益あるまじ、只志を變じ、大に和する事を得て以て、眞主に抗事をやめよや、賈渾听いて大に怒り、即ち三股の鋼の叉を挺げ、漢陣に殺り過る、劉靈吼り住め、矛を拽りて接り戰ふ、一個倒に竪る獅の眉、雄める威糾々たれば、一個は瞬く圓き虎の眼、怒れる氣吽々たり、二人惡戰上四十條合に至れども、いまだ勝敗を分たざるに、忽ち听く、介休城下鉋銃の聲天に連なる、是如何なる事と思ふ所に、小軍報て道ふ、漢の左先鋒王彌、城池を攻打事甚だ急なりと、賈渾は正敵劉靈を、いまだ住め得さるに、又此の說を听て、心慌しく手亂れて、劉靈が一鋒を架そこなひ、遂に馬下に刺落さるれば、喬晞馬より飛で下り、乃ち首をぞ取りたりける、賈渾が兵士は、此形勢を見るより、悉く降を乞うて、漢軍に加はりける、爰に胡騎驍將喬晞は、賈渾が首を取りもたせ、東門に轉りて、守兵に叫び諭し、大將已に討れたりと云へば、門兵ども惧れをなして、城門をひらくに、喬晞は各門の、攻手の諸將にも示し約せず、先づ直に入り、賈渾が衙衙に至り進む、此に賈渾が妻の宗氏あり、其妾の妍美しき事云ふばかりなければ、喬晞是を見て、忽ち心、恍惚とし戯れける、宗氏素性貞烈なるものなれども、偶執へらるれば脫くべきやうもなく、密語を以て喬晞を紿きたるに、喬晞是に意ゆるして、把たる手を縱しければ、宗氏急に趨りて胡床によりて立ち、喬晞を指して罵つて曰ふ、汝は乃ち胡狗羌奴、敢へて此無禮をなし、大晉の忠臣の命婦を、欺き凌がんやとて、胡床を取つて是を擊ち、大に罵てやまさるに、喬晞は其の己を辱しめたる事を怒つて、劒を拔いて進前より、宗氏をとらへ、其の口を秡て死し、其まゝ賈渾が一家の男女、大小盡く是を斬殺しけり、劉靈、關防は、西門を陷れ、縣の衙に入るに及んで、榜を出し民を安んじ、殺を止掠め廢ふることを禁じたりけるに、軍士ども、喬晞が事を以て報しらしむ、劉靈、關防大に怒つて曰ふ、國を立つるは人心を以て本とせり、今初めて、介休を下せるに、妄に殺戮を行ひ、何を以てか衆を感ぜしめん、まさに喬晞を斬つて、後人の戒にせんとす、衆將勸めて、強敵前に在り、未だ上將を斬るべからず、且らく元帥謀主に告して、別に其のしたかあるべしといへば、關防乃ち命じて、喬晞をめし込め、元帥を待居たり、時を移さず劉玄明、張孟孫の大兵共に到りける、乃ち飛騎を差して、此の旨を元帥に報ずれば、劉元明報を聞いて大に怒つて、喬晞、裨將として、未だ寸功をも建てず、初めて晉地に入り、妄に守臣の家を殺せる、此の如くは何を以てか

人心を收めん、既に先鋒、軍師等、赦すに死さるを以てする上には、今更刑するに及ばず、速に蒲城に回るべし、軍に在る事を許さず、恐らくは前の愆を踏行はゞ、以て天の怒を干さんと曰るにより、喬晞は蒲子に歸つて漢主に見え、首を叩いて罪を謝す、漢主の曰く、汝ち殘忍の事をなす、天道をして知る事あらば、其の後へに望事あらんか、喬晞、慚愧して已む事なく、頓首して退きけり、漢主淵は、諸葛修之に謂らく、今兵士山右に出で、連に數箇處を下し、なほ席の如く捲て諸城を攻む、料るに必ず成る事あらんか、丞相多能なり、今閑を得て此に在り、城中に於て、宮殿を造るの盛となつて、是を下知せよ、壯なるを以て州郡に覩せしめ、其威をなさん、宣子が曰く、陛下然も龍の如くに飛び、鳳の如くに起り、奄に大命を受け玉ふべし、しかるに、晉を遺れて是殄ずして、此の處に久しく居せんとし玉はゞ、何ぞ中原を恢復し、大業を纘成す事を得玉はん、況やこの處、側居の邊鄙なれば、都となすに宜しからずとゝに宮室を創めん事は、徒に錢粮を費のみなり、臣是を度るに、五年に過ぎずして、必ず洛陽に打ち克たん、的に暫く待玉へ、又行宮を建つきべき事は、平陽を奪取るを待て、乃ち可なり、臣平陽の地勢を見るに、正旺の處にして、時々紅紫の氣あつて起り、且へ山を襟にし、河を帶に

し、乃ち晉の要地にして、陶唐の舊郡たり、ことに吾炎劉は、火德を以て、神堯に繼で王たり、陛下願ふに、上は乾象にあたり、下は神祥に叶ひ玉へり、今晉、此の地を以て重く武備を設けさるは、寔に天より是をして、漢氏に資くと云ふものか、劉元海は、修之が此の如くの講和を聞て、心腑に明かに徹る事を得れば、遂に造作の詔をば罷られける、其の後使を介休に遣し、令を催し兵を進め、晉陽、平陽の二郡を攻めさしむ、劉聰、介休にあつて、檄を得、即ち兵馬を分つて直に進むで、平陽に赴きけり、平陽の守將は、干禁が孫干明、字は昭遠と云ふ者なり、性き聰くして智有と云へども、志し懦き者なりける、惟り副將何庸のみ、驍勇倫に絕れたり、干明は既に漢兵の來りて、郡を犯すと云ふを聞き、即ち何庸と共に戰守るの策を商議るに、何庸が曰く、古へより道ふ、水來れば土掩ひ、兵來れば將敵すと、亟に兵を整へ出て拒ぎ、城に臨んで百姓を鼓駭す事なかれとすゝむ、干明是に從ひ、乃ち金甲を披掛け、刀を掉ひ、何庸と同しく、兵士一萬を領して城を出づ、七里ばかりにもなるらんと思ふとき、干明命じて、陳勢を排き下し、漢兵を待かけゝる、漢兵も敵の陣を運るを見、即ち陣を布きなし、三たび鼓を鳴したり、こゝに晉將何庸、明盔、明甲を著し、手に鐵槊を持ち、勇を恃で直に陣前に

出て、高聲に叫んで曰く、汝等既に漢臣と稱す、然らば當に大禮を知るべし、先日我が大朝、なんぢが涇陽の罪を免し玉ふ、其の活命の恩を報答する事をば思はずして、敢て反を行ひ、逆を造し、內地を犯し、憲法を干せるや、張賓答へて曰く、向者の涇陽の和は、僞知らずや我が威を養ひ、以て兵を練んがための計なり、今我大兵五十萬、良將三千員、粮山の如くに積み、戰馬雲の如くなり、定めて吾漢軍の大業を取ぬべき事は、僞等も知んぬべし、若し時變を知らば、速に降を投して、封侯の位を失はされ、少らくも抗ひ違はゞ、枉げて性命を失せん、何庸听やんで大に怒り、馬を拍て槊を舞し、遥に張賓を相手に取てかゝれるを、關方見るより、手に大刀を揮り、馬を飛せて驟に至れば、何庸も槊を揮つて抵ぎ住む、二人一來一往して、刀揮ひ槊架へ、戰ふ事已に二三十餘合すれども、いまだ勝敗を分たざるに、干明は何庸が關防と戰へどもなほ勝つ事の克はざるを見て、刀を輪して赶け出で、關防を打たんと云ふ、關謹又是を見、大に怒り、刀を引いて横さまより截つて出て、干明が背後より望んで追ひかゝり、一刀に干明が首を斬つて、馬より下に打落す、何庸、干明が殺さるゝを見るより、心中慌惧れ、馬を拍つて走りゆく、關防尾に接いて赶去り、大喝一聲するに、何庸も急に頭を回らし、戰はんとしたりしを、關防手に刀を起すと見えしが、何庸が首ベ頂をかけて、兩段となつて、これも爰にて砍死されてぞ失せにける、

漢劉淵平陽建都、

漢の劉淵、元熙元年、晉の太原を攻めて、干明、何庸の守將等を、漢の將の關氏兄弟、たゞ一陣の戰合に斬殺されしかば、其手の鬭兵、忽ち主なうして、四方に散じ奔潰ゆ、張賓は爰に先鋒の王彌を使として、掟を報げて蒲子に至らしめ、漢主を迎へ請うて、平陽に上らしむ、即日、王彌蒲子に至つて、此の議を伸れば、漢主大に喜び、楊龍、李通、桃彪等を留めて、蒲子を守らせ、喬晞を以て輔とし、劉和を以て主となす、其外諸の大臣將佐と共に打つれて、平陽に赴きけり、劉聰此の由を聞き、衆を率ゐ、十里の外に相ひ迎ふ、漢主は則ち城に入り、將士に賞を分ち、是を慰勞して曰く、今卿等が、一戰して直に平陽を取る、中興爰に望む事あるの機已になれり、王彌、劉靈等の諸將曰く、今いまだ以て可からず、此の時勝に乘じて、急に晉陽を下すときは、太行以西の地は、皆我土たらんと云ふ、右丞相諸葛宜于が曰く、然ばあら子、兵は是神速を貴ぶと雖ども、亦宜しく漸を以て進む

べし、庶くは猖の失なきやうに計玉へ、兵法に、疾き事あるの甚しき者は、必ず上將軍を厥くと云へり、張賓聞いて曰く、晉陽も又取るべき事、安きにありと雖ども、但恐くは 吾等連りに巨郡を奪ふならば、晉朝必ず大に兵馬を興し來つて、爰に爭ひ取らんとせん、然らば臣と右相修之とは事を議し、軍に臨むにあるべし、此の如きときは、少らくも暇なうして、陛下を輔助くる事なるまし、殊に陛下の左右の才乏しければ、輔翼くるの人なし、是に依ては、張掖の地方に人を差し、陳元達、王伏都、崔瑋を請うて爰に至らしめ、相ともに是等と、謀をなすならば、大事はまさに成んぬべし、此の三子は皆、高き謀の遠き見識ある者どもにて、王佐の才あり、誠にいにしへ漢の高祖の蕭何、曹參が列なる者なりと說く、漢主是に從ひ、遂にしばらく兵議を寢められ、張賓に命じて、一封の書を調へ、趙濬、廖全に着け、金珠、幣禮を贅せ、三人の者を聘へしむ、宣于が曰く、吾も進め擧べき者あり、漢主の曰く、如何なる者ぞ、宣于が曰く、酒泉の徐光、程遐の二人なり、此の者共運を翊け大才の量あれば、吾まさに作書して、同じく請ひ來らしめ、以て政治を資けしむるときは、臣等が駑鈍の才を軍旅に展る事を得、內外に其の人ある事を見て、方に國の大體を成すべしと云へば、劉淵大に喜び、馬寧、劉欽の二人を使とす、兩路の親將ども、書を領じて平陽を去りたりける、趙濬、廖全の二人は、遥に張掖の地に至りつき、先づ王伏都に見えて、漢主の意を演べ、張賓が書を與ふるに、王伏都は召に應じてければ、それより二人は、陳元達が家に至りける、をり節陳元達は、樓鳳岡には非ずして、家に在て崔瑋、許遐とともに、堂に上つて閑談をなし、世務を論じて居たりしが、趙濬、廖全が走り進を見て、上座に延て禮を敘べ、其來歷を問ふときに、趙濬尊顏に別れてより、茲後十有餘年の間は、左國城に居住したりし事を談じ、今晉朝內亂の時に乘じて、漢主兵を出し、已に定襄より始めて太原に至り、屬縣三十餘處を收めて、今や平陽に居せり、是によつて漢主の命を奉じ、張賓が書を持來て、公を相ひ請ひ、共に漢室を扶けん事を願ふ處なり、萬惟郤くる事なかれと云つて、乃ち幣禮の物を送上し、張賓が書を呈す、陳元達書を見て點首き、趙濬、廖全の二人に謂て曰く、二兄すでに僕とともに相處する事年あり、あに我が心を知らざるや、僕今傲僻なるにならつて、人と逢迎するに倦びれたり、已に又年六旬に近ければ、百事倶に廢りて、往日の心思にあらず、孟孫は智機明哲の士、かならず僕愚が漢主の悃を煩はしうするを、固辭するの意を諒とし、山人が旨に忤の罪を恕せよ、僕をして草

葬に終らしめば、恩榮まことに全からんと云ふ、麋全が曰く、漢主本、張軍師と共に、親ら來て、先生を請はんとせられしかども、新に平陽を得るのみぎりなれば、恐くは中州の人心、いまだ全く心附せさらんかと思ふが故に、敢て居を離れず、望むらくは惟に仁術を施して、萬民の苦をのぞき、早く渭水の師を起して、孟津の勤しをすゝめ玉はゞ、天下萬民の甚幸ならん、公何を以てか、伯玉が年に過ぎずして、尚父の志におくるゝやと、二人再四に求め請へども、陳元達固く辭するに力を極れば、趙攄、麋全、いまさら強ゐべきやうなく、首を轉して平陽にこそかへりける、崔瑋、許遐の二人は、陳元達が巽り拒で、出でざるの意を知られば、陳元達にむかひ、如何なる事にや、今劉左賢が漢業を興せる、旺氣適に盛なるが、既に此の如きまで懇なる請ひを受ながら、往きたまはざると問ふ、陳元達笑つて、是何の言ぞや、吾久しく元海が、委度の人にこえすぐれ、宇宙を羅するの志ある事を知れり、其の下の諸臣も亦みな、天下を開き創るの才ある者どもなれば、大事必ずならん事は目の前なり、今若し一使の書に憑つて至らんは、惟に利名を欲する者の偶にして、身を輕く就く事を悦ぶの類ぞと、衆口の笑を取るのみならず、身輕きときは言聞れず、なんの經濟の功をかなさん、爰を以て古の賢人、禮あつく、人主の心、誠ならされば、其の徴に應ぜざる事、身を高うせんとには非ず、道を重うするが所以なり、久しからずして見よや、重ねて詔命あるべし、然して後、二位と一同に刱に應じ、運に符はん事、亦美ならずやと云へども、許遐、崔瑋の二人は、以て然るべしともせさりしに、いまだ一月を過ずして、漢主果して張賓を使とし、老人を迎ふる安車を、駟の馬にひかせ、同じく隨者を迎ふる帛書を持せ、羽旌行列をとゝのへて、遥に陳元達が家に至りて相聘す、陳元達爰に於て命を拜し、許遐、崔瑋と一同に召に赴き、三家の家屬を收め、玉伏都が庄に至り相合し、平陽を望んで進む、既に郡の界に入らんとせし時、張賓は騎使を飛せ、先だつて城中に報じたりければ、漢主は張賓と共に、衆の將士を率ゐて、兵の隊を備へ、二十里の外まで迎へ接して、漢主も爰に輦より下り立て待たまふ、陳元達等是を見るより、乃ち又車より下りて步行、遥かに漢主を拜し、俯伏して曰ふ、山野の愚夫、天門を叩くべき事を失つて、伏て車の徴を褻るところ、又辱く御憐顧を得るの事、其の罪萬々なる處なり、漢主親ら扶起し、其の手を取つて曰く、孤知る、長宏の夙り、管仲、樂毅が才ある事を、仁聲遠く洽し、禮に於ては、自ら殺を捧げて、來迎ふべき事なれども、軍務の遑遽しきを、如何ともし難き故を以て、南陽の訪を失

する事あり、伏して希ふ、是を諒としてん事をとあるに、陳元達もふかく謙謝の意を盡す、それより漢主は、陳元達と車を並て行き、同じく府第に入り、賓客の禮を以て、宴を設けて慇懃の寵を盡さる、席も半に、漢主は陳元達に問ひて曰く、今孤が意攻て晉陽を取り、是を以て都とせんと思へり、或人孤にすゝめて、都を爰に建てよと云ふ者あり、長宏は此の兩地の間に於て、優劣いづれにありと思へるにや、陳元達對へて、晉陽は晉國に應ずるの陽運あり、平陽は晉を平治するの陽運なり、主公まさに晉を平らぐる陽に當るべし、晉陽にあたるべからず、即ち此の郡に都して、宜しかるべきかとぞ、說きたりける、

韓檄建金龍城

漢主は已に、陳元達が議するに任せて、乃ち卜つて日を擇み、宮室を造らしむ、一切の具完く備はりたれど、其の城垣の攻易んを嫌ひ、乃ち命して、舊城を毀ち、已に大に營造る事を擧むと云へども、要害を第一と構ふるゆゑ、とかくに其の繩張り、漢主の意に叶はずして、三月餘に至るまで、いまだ一つの石をだに立つる事をも得ざりける、漢主是に意をなやまし、即ち榜を下し、各門に掲げ掛け、良工を召し募り、能くこの城を築かん者には、即ち其賞として、五城の兵馬の官を、授けんとぞ觸れられける、時に一人の工に、韓檄と名付くる者、召に應じて出でたりけり、抑々此韓檄がいはれ、如何なる者と尋ぬるに、もとより其の身姓氏なし、養母の名は韓媼と云へり、年五十に至つて媼婦たりしが、家を繼ぐべき子もなく、其の身甚だ貧にして、朝夕の炊煙をも立てかねたる境界なりし、あるとき外圃に往て野菜をとる、芹菜の中よりして、一つの巨なる卵を拾ひ得たり、なにの卵とも知れされど、其の色美しかりける故、能もの拾ひたりとて、媼は家に持かへり、取つてこれを懐のうちに置けば、時これ夏月なりと雖ども、極めてこの卵清涼なるに、扇を用ふる意をわする、韓媼甚だよろこんで、常に是を懐中して、紡績の務をなす、已に懐き溫むる事、一月あまりになりける時、忽ちこの慾解け開けて、中より一の嬰兒出でたり、韓媼もとより子もなければ、大に喜び、いさゝかあやしむ意なく、是を養育したりしが、餘物はさらに食せず、常に粥糜を餌ひたりける、年月を經るまゝに、其性はなはだ聰慧て、已に今年四になりけるが、尋常の十六七歳には見えしたり、此の子卵なりける時、檄椿の傍よりひろいたればとて、母の姓をかたどり、韓檄とは名づけたり、已に漢主より良工を募り求むるの觸を聞き、韓檄は母にむかひて、吾久しく撫育の恩を

蒙りたれども、兒なにを以てか報ずべきのやうなし、今新主、重賞をすてゝ、良工を求め募らるゝときけり、吾まさに召に赴き、請うて百金をもとめ、母に酬ひ申すべし、吾に隨つて同じくかしこに往玉へと云ふに、韓母はもとより、此兒の異人なる事を知るうへは、少も疑ふ意なし、韓槪はそれより榜をかゝげて、漢主に入つて相見えけり、漢主是を見て曰く、汝は是一童子、焉ぞ能く此の大城をなし得べき、何方の人なるぞ、韓槪が曰く、我は即ち郡の人なり、韓媼と云ふ者の子にして、其の名を韓槪と稱せり、われ官と爲り、又重き賞ある事を願はず、只百金の賜を得て、以て老母に供すれば、その餘年を養ふに足れりと云ふ、漢主其の相形言辭の異あるを見るより、其の言を允とし、韓槪をして、諸の工匠の監となし、其事を造しむるに、韓槪是を見、此の如く工匠の多き事を欲せず、臣先づ往いて、石灰を以て盡成し、規矩を定めて、其の後に隨て灰の上を照し、以て磚を加へて是を築かば、立どころになるべしと云ふにぞ、漢主喜悦し玉ひける、韓槪はそれより、其の母に語りて曰ふ、吾今詔を奉けて、この城を築くなり、老母吾が言により、石灰を取つて吾背後より、是を畫きたまへと云へば、韓媼即ち應諾ひぬ、韓槪そのとき欠伸して、地上に伏せば、遂に變じて一條の大蛇となり、前にすゝんで優游とのたばひゆく、不測なりし事どもなり韓媼は是にも恐れず、即ち石灰を以て意を付け、密々に蛇の屈曲せる、跡をたがへず撒去れば、工匠また後より是を定めて作るに、未だ數月成ずして、此の城成就したりける、要害を試むれば、きはめて堅固なる繩ばりゆゑに、漢主は是を喜ぶと云へども、其妖怪たるを嫌へりける、即ち韓媼に賞するに、金百兩を以てし、其蛇を將て、山穴の中に投つるに、尾を露はす事尺餘ばかり外に見えけるが、次第に水湧き出でたるを、使回りて漢主に報す、漢主も是を異しとし、再び觀を趣がして、其の處に往き看れば、只見る大小の水波湧出で、遂に其の蛇は水中に溺れ、其の地一つの池となる、乃ち其の名を金龍池とたまひ、城を金龍城となづけたり、衆の武將文臣賀を上り、百蠻咸く相助く、故に金龍の兆ありと云へば、劉淵も是を喜び、大に宴會を排いて酒をすゝめ、百官と與に慶賀ある、次で席間の衆臣に問ふに、天下を治むるの道を以てすれば、陳元達が對に、臣聞く 臣を師とする者は王なり、師に友たる者は覇たり、乞ばくは陛下擴く大度を開き、群議を訪採り、是を斷るに叨決を以てし、其の善を擇んで是に從ひ玉へ、臣等其の才愚なるを以て願ふに補ふべきの事なくも臣等をして、其忠悃を盡さしめ玉はば、以て少しく政治を資くべしと云ふ、許遐、崔瑋等も非に

すゝんで、古を譬喩へて曰く、漢の高帝の諫に從ふこと、流るるが如なるを以て、能く天下を一にす、又世宗は汲黯が奏を用ひて、漢道を隆くし玉ふ、若し人主淫亂のことを、しばらくも蹈むときは、天神自然に劾を默すなり、此理を善く知り玉ふときは、一統の機勞せずして明かなりと演說すれば、漢主此の二人が言をも感じ、又は陳元達が志を高しとして、以て宰相となし玉はんと思し召せど、いまだ其の新に參りたるを以て、言を出し玉はず、此旨を宣于、孟孫、知りてければ、乃ち此議をなし、爰に奏請して、劉宣を左賢王大單于、五部の大惣戎となし、左國城に鎭守たらしめんと、劉義、游光遠に代らしめて、二人をば平陽にかへらしむ、爰に於て陳元達は國政に參り、理むべき旨をさだめ、崔瑋、許遐を以て、咨議太夫とし、王伏都を行軍都尉にすゝめらる、爰に劉欽、馬寧の二人は、徐光を聘せんと、酒泉郡に急きけるが、程なく其の家に至りて聞くに、已に其跡をかくして、知れる者一人もなければ、郡中に於て、相訪ひ求むる事數日すれども、聞くところ更になし、或は市中にあつて詰り問ひ、庄畔に入て尋ね聞けども、徐光に似たる人ありとも聞れば、如何はせんと思ふ處に、一人の樵夫柴擔を下して、樹陰に憩めるあり、馬寧乃ち其側に盤桓ひ、閑にかれに問て曰く、吾に一の故友あり、其の名を徐光と云へり、原は此處にありけるが、今其往ところを知らず、汝等若し知れる事ありや、其の事を敎へなば、重く償に禮をなすべし、樵夫が曰く、我日頃泥洞、山中に入りて柴をとるが、一の先生とうち見え、長髯秀たる目、身長八尺ばかりなる、すさまじき人の、那の裡にあつて讀書す、故郷を問へば酒泉の者なりと語らる、然し何の名と云ふ事を知らずと云ふ、馬寧此の由を聞き、是疑ひなき其の人なるべし、汝相引いて導せよ、重く賞すべしと云ひて、此漢を先に立て、一同に山に入り、直に草庵の前に至りつけば、馬より下りて往すゝむ、徐光は庵前に、人の言語の喧しきは、何の者ぞと外に出て是を見れば、乃ち是馬寧なり、互に愀笑つて、共に內に入り、各々遠別再會の情を盡し畢れば、劉欽は漢主の命を奉じて、薄禮の贐物ありとすゝめ、併せて丞相修之が書啓を與ふ、是則ち先生を相迎へて、平陽にともなひ、萬民を共に救ひ玉へとの事なり、徐光此の書を見て曰く、僕此の意ある事久し、但恐くは駑馬の步み、騏驥千里の行に並び難しと思ひて今日を經る處に、將軍の覩を枉げらるゝ事を勞すれば、敢て敬して從ふべしと大に喜び、遂に酒をすゝめて相たのしみ、時刻移れば二人の者、急を進めて促すゆゑ、則ち程遐をも喚び迎へ、一同に平陽を望んで進み行く、未だ日あらずして、平

陽の城下に到れば、漢主は此の由を聞て、慌しく宣于張賓、胡延攸等に令し、城を出て遠く接し、漢は自ら外門に候ては、二人一同に入りて、朝謁をなし畢る漢主は先づ始には賓禮を以て相見し、繼で資政太夫の官を授け、其の日の禮は畢りける、次の日になれば、劉聰入て兵を進むるの事を請ふ、漢主大に群臣を新殿に集めて、此議をはかる、時に太夫徐光、言を建て曰く、天下を兼ね併せんと欲せば、必ず幽燕の地より起りて、西北の英雄を收めとりそれより轉つて、齊魯を掠め、其食に據り、さて汝州より洛に討て入らば、晉の君臣は、盡く擒にして、一統の勢成るべしと議す、漢主聞いて大に喜び、卽ち日を擇び、兵を起さんと促しける、

劉靈鉅鹿戰

晉の永興元年は、漢の元熙元年なり、此歲の八月に、漢主は已に太子劉聰に命じ、摠兵の元帥とし、張賓を謀主として、軍兵を出さんとす、是に於て各々元帥の府に至つて、兵を點じ將をあつむ、時に衆の將、軍師張賓に問ひて曰く、今詔命あつて、幽冀を討しむとかや、まさに先づ何れの郡よりか取るべきと思ひ玉ふ、張賓聞いて、昔し范叔いへる事あり、遠く交つて近く攻め、尺に戰つて丈を得と、是を思へば先づ鉅鹿を攻むるにあり、其郡平陽に連り接き、山に依り險に憑る、乃ち冀北形勝の要にして、まさに四方の衝にあたる、太行の雄にして、西北に峙ち、漳水索て東南に流る、若し此郡を得るならば、幽薊の一帶は、慮るに足らず、但し爰に一件あり、昨に細作を以て探り得るに、其守將許戎は、乃ち許褚が孫なり、寔に晉朝の名將にして、尋常の比にあらず、されば今兵を出すの次で、當に方略を定め、以て萬全を圖りて、必ず先力棟、老成、智勇足り備はれる者を揀撰んで、是が前部となし、先鋒の印を掛けさせ、諸軍の首領となして、山に逢ては路を開き、水に遇うては橋を渡して進むときは、鋒を衝て敵を破り、退くときは陣を結びて兵を束ね、機に臨み變に應じて、軍務しばらくも懈らずんば、方に克く敵將許戎を待べしと云ふ、中軍元帥劉玄明の曰く、諸將の勇畧才略を知る者は、軍師に如くもの誰かあらんや、一へに軍師の意に任せて行へ、自然に悞る事なかるべし、なんの議ると云ふ事かあらん、張賓承り、吾れ皇上の委任を帷幄に蒙るによりて、謀を運し進退を決し、機務を參らんとするに至つては、最も其勞に當るべしと雖ども、今若し妄りに先鋒を擧げなば、衆心いまだ服ふべからず、諸將爰にあり、宜しく當に自ら鷹めあげよ、肯つて命を用ふるときは戰ひ克たずと云ふ事なけんと云へば、黃臣、趙染、

胡延晏、胡延攸の輩、聞いて曰く、既に皆々武夫たり、到る處まさに、犬馬の力を竭すべし、若し委ね用ひらるゝ事をせば、誰も勞を辭すべからず、今軍師、元帥、我等いまだ妄に借えしめじとならば、此度の先鋒は、劉子通、關繼雄、張仲孫の中に於て除せられんに、わが等豈に敢て願ひ求めんや、議まさに定め玉へと云ふ、言も未だ畢らざるに、班部たる中より、閃り出る一人あり、聲を揚げ大に叫んで曰く、分にあたる嫡庶の職任、あに親疎を限らん、晉家の天下を取て、漢國の江山を復へさんと欲するならば、某不才なりと雖とも、已に先だつて、皇上の賜委ぬる事を蒙れば、今鉅鹿を取の議に於ても、仍りに當先する事を願ひ、少しく尺寸の功をも建て、以て二帝の洪恩を報じ、定襄、平陽の勤を補はんと云ふ、衆將是を見れば、乃ち魏爲侯王平が子の王彌なり、太子劉聰、張賓ともに大に喜んで曰く、此任還是王飛豹以て當つべし、眞の忠勇國の爲たる義士たりとて、遂に先鋒の牌印を將て、舊のごとく王彌に佩しめ、兵士三萬を選んで、其の向前に先づ發すべしと定まれば、王彌拜謝し、印を執て立つ處へ、忽ちにみる劉靈前んで出來り、大に叫びて曰く、好々留れ備ちわが先鋒の印を、何にしに奪へるぞ、早く先鋒を我に還せ、衆將皆、われを擧ぐるに、備ち何ぞ妄りに來れる、豈にわれ他人に劣らんや、王彌聞いて曰く、劉子通あやまれり、古よりの前鋒を見ずや、皆是れ他姓の人を以て做せり、軍中に戲言なし、既に元帥軍師の、我に掛けしむる先鋒の印を、汝來りて囮て奪つて、軍政を亂る、豈に是を禮と云ふべきや、劉靈重ねて、備は是捨り去る人、われは是衆の推すところ、今や論ずる事なうして、牌印を且らく放ち、元帥の前に於て、共に一つの闘を取れ、闘とり得たらん者こそ、前鋒の印をば掛くべけれ、方に是公道ならんと云へば、王彌が曰く、軍令已に出る上、豈に變改をなすべき、備既に望みあらば、何ぞ先だつて是を請はざる、且へ衆將の擧るを以て論とせば、關繼雄、張仲孫は、何を以て爭はざる、是は備が無理なる處ぞと、二人の辯論かつて止まず、互に印を奪はんと要む、張賓叫んで、二將まさに此の如きの行ひは何事ぞや、兵にあたつては、自ら和を以て貴しとす、然るを今、反つて爭ひ怒るは何の謂ぞや、二人ともに力を効さんとならば、尤も意よく、倶に當先たるべきなり、左國城にて漢主の原の例に從ひ、舊に依て分れて、二先鋒とし、兩路より進發せよ、吾誤つて一人に佩しめたり、然し功を用ふる除にあつて、人なきをこそ恨むべきに、かく多きこそ悦ばしけれと、再び印を劉靈に分付し、扨二人に向つて、王飛豹は左に居よ、子通兄右たれ、たとひ兵をば分つと云ふとも、一軍の

同じきが如くせよ、若し敵兵に遇ふならば、務めて心を互に乘り、力を協へて早く大功を幹つべし、爭ひ妬むことをなし、敵のために拗かれ、軍を悞り國を悞るべからず、若し悞る事あらば、重き法に置くべしとぞ警めける。又關繼雄は、左副先鋒となれ、胡延仲達は是に次で、五將の兵士三萬を引いて、左の路より進め、わが弟張寶は、右の副先鋒たれ、胡延伯寧は、是に次ぐに五將の兵士三萬を引いて、右の路より進めと、各々手分定まれば、日を撰んで鉅鹿郡へぞ進發したりける。爰に鉅鹿の守將許戎字は應婁は、譙郡の許仲康が長孫なり、極めて勇力人に過れ、能五石の弓を開き、二丈の長鎗、重さ六十斤なるを得ものとす、最も騎射に精しく敏くして、先祖の風あり、故に晉朝よりも命ぜられ、北邊の要郡には鎭守たりけり、まさに漢兵界を犯すのよしを探り得、乃ち僚佐の者共をあつめて商議るに、文官知府事の劉喬が曰く、吾聞く、漢兵甚だこれ雄にして盛なり、一戰にして平陽をとり收めて、今又爰に來ると云ふ、與に戰を交えがたし、且く濟を深うし、壘を高して、固く城地を守り、其兵の鋒銳なるを老し、急に人をして行文をつたへて、常山郡に往しめ、各郡を會合し、協ひ助けて賊を敗らん、又夜を連で書本を具へ、洛陽に上せて救を求めん、若し常山の典公が兵來るとき、內外より是を攻むるならば、方に那のあだは破るべし、許戎聞いて、尤も此議宜しとて、丞に使命を發し、卽時に方々へ往しめ、又一方には兵を點じ、民を撰び、敎訓して兵をならはし、一偏に城を守るの外はなし、かゝる處に、漢の前鋒王彌が兵、界に至り、先づ細作をつかはし、城中の消息を探り窺しむ、卽ち細作回りて、鉅鹿の惣兵許戎は、勇あれども謀なし、太守劉喬、謀あれども勇なし、今や常山郡の惣兵、典升が方へ使をやりて、會合せん事を議す、此の典升と云ふ者は、乃ち梁王の麾下の大將にて、亦甚だ勇氣ありと報ぐ、王彌說を听くより、卽ち其人を中軍に使はして、敵軍の形を報げ知らしめ、其商議を定めて、其後進むべしと、暫く爰に軍を止めて、後陣の消息を待居たり、時に許戎が行文、すでに常山郡に著く、守將典升、字は子高、是は典滿が子にして、典韋が孫なり、仕進して晉の折衝將軍となり、梁王に隨つて、齊萬年を征し、典升ひとり汴梁を守り、威名ある者なり、梁王是によつて、薦めて今常山に守たらしめ、燕冀の保障に備へしむ、世に知られし勇功の者なりけり、然る處に、鉅鹿より到來の書あり、如何なる事と啓き見るに、卽ち援の兵を乞ふの趣きなれば、卽時に衆を會して曰く、今鉅鹿、胡寇の爲に侵さると云へり、救はでは叶ふべきや、若し鉅鹿守りを失するほどならば、必して此處に

至らん、急に趨くには如くべからず、今二郡力を合せて、以て漢兵を拒ぎなば、など破らで有べきぞ、如しそれにても退かずんば、再び朝中に往て、軍馬を請ひ來り添へ、自然に賊は破るべしといへば、衆皆此議に同じける、さらば人を使し、太守程朽を請はんと使を立るに、程朽卽刻に至りける、卽ち衙中に至らしめ、其副將張牛に分付して曰ふ、汝が祖父、張文遠は名將にして、威三國に震へり、其の子孫たるを思ひて、今重任を汝に托す、中に於て意を用ひて、凡の事は程明府と商り議つて行ひ、吾に代て緊しく城地を守るなら、悞はあるべからずとて、遂に精兵五千を將ゐて、往て許戎に會せんと打立ちけるが、先細作をして書を持せ、遥に鉅鹿に到りて、兵を以て援くる事を知らしむ、許戎は自ら城上に在つて、工を督し、城廓を修理して、居たりし處に、士卒一人城下に至り叫んで曰く、我は乃ち常山の摠兵、典爺が使者なり、書あつて此に來らしむと云ふ、許戎是を聞いて大に喜び、兵士に命じて門を開かせ、使者に對して書を受け、口上を聞くに、同じく來つて援をなすの間、共に兵を出して賊を退くべきの由なれば、許戎甚だ是を悅こび、卽ち守兵五千を劉喬に分つて、城地を保守せしめ、自ら兵士萬人に將として、城を出で寨をかまへて、漢兵に備へたり、漢の元帥劉聰は、後軍を將ゐて至り、前鋒の寨中に於て、王彌等に相見す、王彌が曰く、昨日敵の體を探り見るに、晉人守備、甚だ嚴にして、其の上常山郡の典升が援の兵來り到ると云へり、是を以て、いまだ曾て兵を進めず、軍師既に爰に到らば、相議をなし、吾と劉子通と、共に、典升、許戎を拒ぎ住め、關繼雄等は兵を率ゐて城を攻しめば、自然是を下すべし、鉅鹿城一たび破れば、許戎、典升も亦擒に成しつべしと云ふ、張寶が曰く、此の謀亦妙なり、但し兵分る時は、其の勢散ぜん、三面に敵を受けなば、救ひ應ずるに暇あらじ、恐らくは差ひ悞る事あらんか、吾是を慮るに、これ大いなる幸なり、若し許戎、城を緊しく守りて出でず、使を朝に入れて大兵を請ひ、此に來さば、恐くは吾が成功をなし難からんに、今典升がため、城外に出るこそ屈竟なれ、しかるに於ては、吾必ず敵を破る計あれ、明日兵に將として、許戎と戰を交ゆる事一陣ならば、便ち端的を知らん、諸の將官、心を用ひ力を協へて、以て大功を成さんと要すべし、且つ又、許戎、尋常の將に非ず、但よく此の人を除き得べし、晉軍自然に膽を破らん、劉聰、言を听て大に喜び、卽ち衆を集めて令を听しめ、各々攻手を分付して曰ふ、來日出戰の期に至らば、各宜しく勇を奮ひ、向前に進んで、正副の官を論ず

る事なく、許戌等を擒にし、盡く斬るべし、此の人を得たらん者は、封功第一ならん、軍士肯うて向前ん者には、重賞を加へ隱ん、退き後るゝ者あらば、軍法を以て是を治さんと令あれば、衆皆應諾したりける、次の日劉聰、親ら兵を率ゐて進玉ひける、許戌この趣を聞知つて、亦是も兵を引いて寨を出で、兩邊陳勢を開き、三通の皷やんで、許應婁は馬跑け出す其形勢は、生得身の長一丈にあまり、腰の大さ數圍なり、巨なる眼捲める鬚、額は縣けたる皷のごとし、漢將を指して聲を揚げ、大に叫で、汝等胡寇の叛奴ども、平羌の大將譙郡の虎侯の世胄、許婁將軍を心得たりや、今我大晉の恩威美をなす、何ぞ乃ち無知にして妄り來り、相犯し頓けんとするぞ、涇陽の死を救ふをば忘れたりや、好々降を納れて退ぞき還らば、今も重き科をば免すべしと、道ひも未だ了らざるに、砲聲大に震つて、漢陣の旗開け、主帥劉玄明、身に金甲を著し、頭に金盔を戴り、蟠花、絢彩の纓綬あり、旌幢寶蓋に擁かれ、大宛の龍駒に乘り、金鏡の箭、飛魚の袋を掛け、虎筋の弦、彤節の弓をとる、軍師大將張孟孫と並び立ち、左右の列將、兩位の前鋒、王飛豹が雄威糾々たれば、劉子通が銳氣昂々たり、關繼雄は刀偃月を横ふれば、張仲孫は矛長虹を挺げたり、其の外兩邊の黄巨、趙染、齊々踏々たれば、背

後の胡延兄弟、堂々凜々たり、劉聰は許戌が言を听くより、即ち馬鞭を以て是を指て罵しり曰ふ、魍魎畜生、昔日我が漢家の天下、汝ち三代の賊奴、曹瞞に阿附て簒奪を行ひ、今は又魏に背いて晉に事ふ、此等の不忠不義の徒ら、狗彘にも如かざるところにして、尚あへて吾前に於て、自ら大朝の臣子と稱すること、豈に是を羞ずや、今我穢軀を恢復さんため、兵を興して此に至る、正に宜しく士を獻じ降を入れて、以て前の罪を贖へ、何ぞ乃ち大兵を拒き拉ける事をなして、自ら滅亡をとらんとするや、許戌が曰く、無義の胡狗、今我皇晉帝尊居一統、四海八紘、賓伏せずと云ふ處なければ、我輩の愁ひには、近世兵を用ふる處無うして、英雄を展べ顯すことなきを悔むに、今汝が造反ゆゑ、正に我が久しく餓ゑたる、刀鎗を俺しむべし、張賓聞いて曰く、勝敗は、今まさに立ちどころに見ゆべし、誇口なんの益をかなす、且らく自ら馬を出し、一戰して以て雌雄を別つべし、許戌が曰く、汝既に敢て戰はんとすや、能く闘ふ者を選び出し來れ、相助くる事を許さず、暗に算る事を許さず、一馬一騎、兩ながら互ひに相持せん、若し人あつて助戰はんは、即ち是、算の輸たらん、劉玄明は、許戌が言を听き、即ち笑つて、儞ち今、我が兵の多く將の廣きを見て、心中に懼れ怯るゝが故に、この論を設くるか、我れ

高祖の度ありて、素より弱を欺かず、詭譎を施さず、汝ちが言ふ所によりて、自ら一個の弱きをえらんで對戰せしめん、我が自家の指揮によらば、儞敵する事よも能はじと云へば、許戌大に怒り、再び言を開かんとする處に、劉靈はや馬を躍し、直前にすゝんで、高く叫んで曰く、兩軍戰を搆ふるに、多の說話を用ふる、是儞ちが本意、ひとへに典升が救ひの兵の來るをまつて戰はんと、要めて此の如く言辭をつひやすや、懼怕をなさで速に來れ、許戌聞いて曰く、汝ち名は何と云ふ者なれば、此の如く大膽なるや、劉靈答へて曰く、漢の右軍、劉子通と云ひもあへず、長き矛を挺げて、許戌が當面を望んで刺かゝる、許戌は是を喝り住め、契約して三軍を退け、只二人一往一來して、各々英勇を施しける、其鎗の閃ふ所は、猶ほ龍の巨浪を爭ふがごとく、馬を跑つる處は、虎の平岡に閙ふがごとく、一連に鏖戰ふ事、五六十合すれども、勝敗をいまだ分かたず、兩下の精神愈倍し、勇力愈加りけり、軍士ども是を見て、各の勇氣を增し、憤つて大聲あげて叫んだり、許戌が曰く、劉子通、劉子通、儞が命須臾にあり、尚ほ馬より下りずんば、更に何の時をか待たん、劉靈が曰く、許戌、許戌、我儞を殺すは何の難しとせざれども、決して儞を活ながら拿へんと思ふなり、方に儞を拿ふる我が手段を見よとて、又戰ふこと

四五十合すれども、半點疎かに漏手のあやまりなく、相爭ふ處に、忽然として北の角の上に、塵埃漠河に接き、沙漠天に昏くして、一路の精兵、風の如く後へより殺て至る、張賓是を見て、衆將に謂て曰く、前面の旗旛、烟々たるは、是常山典升が兵の至れるなり、誰か敢て此賊を退けん、王彌說を听くより、我典升を截るべしと、馬を躍して赶け去り、直ちに典升に截りかゝる、典升慌しく械を揮て接し住め、戰上三十餘合すれば、天色まさに晡の時ばかりなり、關防、張賓の二人も、今まで耐るに忍へがたしとて、一齊に陣中に殺つて入る、かゝる處に、漢軍の運やよかりけん、勃然に狂風、北の方より吹起ち、天昏く地黑く、眼目さらに開くに難し、晉兵爰に於て、殺死さるゝもの其數をしらず、漢兵は風上に在りけるゆゑ、是を逐討んとせしかども、餘りにはげしき風なれば、遂に皆金を鳴し、兵を收めけり、さて劉聰人馬を點檢して見玉ふに、兵士を折き去る事、三千有餘に及べり、其の上將官李珪を折きたるにぞ、關防、王彌が痛哭已さるは、これ古人を哀しむが故なりける、劉玄明は、李珪が傷らるゝ事を哀しみ、即ち人をして、其の屍を尋ね得て、是が葬をなす、かくて諸將を帳に坐せて、許戌を討取るべきの、評議をぞなしたりける、

通俗續三國志卷之十九

漢兵再戰許戎

劉聰已に諸將を會して曰く、人皆許戎が英勇なる事を云へり、果して其の名の虛しく傳はらざる事を、眞に將門の世奇なるかな、我が衆士多しと云ふとも、中々以て及ぶべからずと嗟歎ある、時に王彌、劉靈、言を同うして曰く、殿下何ぞ他人の志氣を長じて、自己の威風を減し玉ふぞ、此等の匹夫、何ぞ稱するに足らんや、我二人日を表して、是を擒にし、以て手段を見せ申さん、張賓が曰く、先鋒しばらく、慥しく暴かるべからず、遠くかれを見よ、我此の人の體を考ふるに、勇餘りあつて智慧たらず、然れば力を以て擒にすべきにあらず、若し一人を以て一人に對して、是に勝つ事を取らんとせば、恐らくは他を取り難からん、須く一つの計を用ひ下して、以て是を破るべし、且へ兵法に云ふ、上士は謀を用ひ、其の次は兵を用ひ、其の次は城を攻むと云へり、若しよく謀を用ひて、此の人を牢籠めば、鉅鹿は自然に下しつべしとて、即ち夔安、曹嶷、楊興、賓の三人を喚んで、分付して曰く、儞等兵士五千に將として、上流の要路に於て埋伏せよ、只許戎が兵の、一たび過るを見ば、便ち伏を發して、彼が歸らん路をとゞめよ、辰の牌になるならば、那所に到れ、慢ちあるべからずと云ふ、又胡延晏、胡延攸、王如、黃命の四人に付して、兵士八千を引ゐ、儉に北の路に出て、辰の時、彼に至り、典升が兵を阻住めよと相約す、又關防、黃臣、馬寧、李璜を喚び、儞四人は、明早に兵士四千を帶びて、許戎が寨の外、五里に往き埋伏せよ、只炮の响きを聞くならば、一齊に晉寨に向つて殺入り、火を放つて燒あげよ、又張賓、趙染、張敬、趙染四人に囑して曰く、儞が等、兵士四千を將ゐて、明日分れて、上下の流れ兩頭に往來し、救ひ應ずる事をなせと、一々に分附すれば、衆將は計を領うて、大帥の帳を下りける、其の中にて王彌、劉靈を留めて曰く、二先鋒は兵士一萬を引いて、前み去つて挑み戰へ、其の內にも飛豹は、兵三千を分けて、僻處に伏せ、子通は兵七千を分けて、引き戰ふ事をせよ、如し彼れ出ざる事あらば、逕にさつて寨を打て、是を激せよ、如し許戎兵を引いて出でなば、鬪ふ事半に至つて佯り敗れて走るべし、彼すでに意よく赶け來る程なれば、吾計に中る者なり、又王飛豹は、許戎が出て戰ふを見ば、號の砲を放ち起し、關、黃等の伏兵に知らすべし、關、黃、鐵砲を聞く程ならば、兵を引いて出づべし、其の時一齊に殺て、晉寨を衝き、火を放つて燒たゝべし、其の放火の烟の起るを見ば、許戎定めて燒亡を回り救はんとすべし、其の時に劉子通、後より掩ひされ、王飛豹は前面にあつて截住めよ、此の如くなすならば、かれを爰にて擒にすべし、如し又彼赶け來らずんば、是備へに法あるなり、かまへて砲を放つべからず、好し再び別の計を行ふべし、反つて敵に算らるゝ事を免れよと云へば、兩將尤と領諾ひけり、爰に許戎、典升は、兵を收めて城に皈り二人評議をなし、分つて二處に陣營をかまへたり、第二日に至りて、劉喬は、漢兵の曾て出て戰はざるを探り得て、恐らくは其の計あらん事を察してければ、午の後に至つて、自ら逕に許戎が營に到りて相見ゆ、許戎が曰く、大人城に在りて賊を防ぐ、何故にか光降せらる、劉喬が曰く、賊兵公と相拒いで爰に在り、必ず未だ敢て、城をば攻むべからず、われ特に來りて賀をなせり、以て兵勢を見るのみ、許戎が曰ぐ、昨日小しの勝、なんぞ賀するに足らん、明日出戰つて、劉子通を斬了り、劉聰を擒にするを待て、敢て功をば言さん、劉喬が曰く、下官爰に至る、還つて別議あり、いかんと云ふに、漢兵今日なに故なれば、來て戰をば索めざるぞ、思ふに其れ必ず詭計あらんか、故に來て相議するなり、許戎が曰く、昨日陣上にて、我等二人が勇猛なるを見たる故、かれら今日、畏れて出でざると覺えたり、大人試み看て、吾れ小將、來日一戰をなし、若し敵將を斬らずんば、男子たるに非ずとせよ、劉喬聞いて、將軍且く自ら從容にせよ、古に云ふ、戰を貪るものは、敗を取るの兆なりと、我聞く賊中の張賓と云ふ者は、智謀多く足れりとかや、定めて暗算をなすならん、將軍若し、與に再び戰ひなば、必ず先擒酌して、事を行ひ玉ひ、其の愴惶遽に走るがごときは、乃ち是詐れるなり、虛實眞僞を問ふ事なく、一切に是を赶かけ去る事なかれ、誤つて其の計に墮ちん事をと云ふ、許戎が曰く、然らば吾當に敎を領けん、但賊兵亦廣し、一時怱ぞ他を退くる事を得ん、劉喬が曰く、善く戰ふは善く守るに如かず、兵法に云ふ、先づ戰地に處して、敵を待つ者は逸し、後れて戰地に處して、敵に赴く者は勞す、善く守を爲す所以の者は、敵その攻る處を知らずと云へり、此去つて常山に往く中に、一條の大河あり、河上只一條の橋あり、但恐らくは賊兵を此の處に見ば、勝つ事能はじ、其ゆゑいかんと云へば、典子高、今や此處にあるを以て、敵暗にさつて常山を侵し襲ひ、吾をして是れを救ふに遑あらさらしめん、今將軍はやく一つの營をとつて、橋邊の要道を守りとめて、寨を攻るときは、兩郡共に救ふべし、郡を攻むるときは、兩寨より共に救ふべし、兩頭相顧みて戰ふときは、萬に一つも失なからん、此ぞ犄角の勢ひ、鼎

つべし、其の放火の烟の起るを見ば、許戎定めて燒亡を回り救はんとすべし、其の時に劉子通、後より掩ひされ、王飛豹は前面にあつて截住めよ、此の如くなすならば、かれを爰にて擒にすべし、如し又彼赶け來らずんば、是備へに法あるなり、かまへて砲を放つべからず、好し再び別の計を行ふべし、反つて敵に算らるゝ事を免れよと云へば、兩將尤と領諾ひけり、爰に許戎、典升は、兵を收めて城に皈り二人評議をなし、分つて二處に陣營をかまへたり、第二日に至りて、劉喬は、漢兵の曾て出て戰はざるを探り得て、恐らくは其の計あらん事を察してければ、午の後に至つて、自ら逕に許戎が營に到りて相見ゆ、許戎が曰く、大人城に在りて賊を防ぐ、何故にか光降せらる、劉喬が曰く、賊兵公と相拒いで爰に在り、必ず未だ敢て、城をば攻むべからず、われ特に來りて賀をなせり、以て兵勢を見るのみ、許戎が曰ぐ、昨日小しの勝、なんぞ賀するに足らん、明日出戰つて、劉子通を斬了り、劉聰を擒にするを待て、敢て功をば言さん、劉喬が曰く、下官爰に至る、還つて別議あり、いかんと云ふに、漢兵今日なに故なれば、來て戰をば索めざるぞ、思ふに其れ必ず詭計あらんか、故に來て相議するなり、許戎が曰く、昨日陣上にて、我等二人が勇猛なるを見たる故、かれら今日、畏れて出でざると覺えたり、大人試み看て、吾れ小將、來日一戰をなし、若し敵將を斬らずんば、男子たるに非ずとせよ、劉喬聞いて、將軍且く自ら從容にせよ、古に云ふ、戰を貪るものは、敗を取るの兆なりと、我聞く賊中の張賓と云ふ者は、智謀多く足れりとかや、定めて暗算をなすならん、將軍若し、與に再び戰ひなば、必ず先擒酌して、事を行ひ玉ひ、其の愴惶遽に走るがごときは、乃ち是詐れるなり、虛實眞僞を問ふ事なく、一切に是を赶かけ去る事なかれ、誤つて其の計に墮ちん事をと云ふ、許戎が曰く、然らば吾當に敎を領けん、但賊兵亦廣し、一時怱ぞ他を退くる事を得ん、劉喬が曰く、善く戰ふは善く守るに如かず、兵法に云ふ、先づ戰地に處して、敵を待つ者は逸し、後れて戰地に處して、敵に赴く者は勞す、善く守を爲す所以の者は、敵その攻る處を知らずと云へり、此去つて常山に往く中に、一條の大河あり、河上只一條の橋あり、但恐らくは賊兵を此の處に見ば、勝つ事能はじ、其ゆゑいかんと云へば、典子高、今や此處にあるを以て、敵暗にさつて常山を侵し襲ひ、吾をして是れを救ふに遑あらさらしめん、今將軍はやく一つの營をとつて、橋邊の要道を守りとめて、寨を攻るときは、兩郡共に救ふべし、郡を攻むるときは、兩寨より共に救ふべし、兩頭相顧みて戰ふときは、萬に一つも失なからん、此ぞ犄角の勢ひ、鼎

足の形なるべし、賊兵廣しと云ふとも、亦我をいかんともしがたし、其のうちに外郡の救ひの兵、或は中朝の兵を發して、至らば、那時自ら彼を破るに易けん、許戎聞了つて、公の計ごと極めて善しと云ひて、此の議に從へば、劉喬大に悅んで、夜に乘じ歸城したりける、次の日になれば、漢將劉靈、兵を引いて搦み戰へども、許戎さらに寨を出でず、劉靈乃ち寨を扣きて通り近づけども、許戎は是計ありと知りぬれば、急には出でず、備を定め將兵を引いて、寨を出て、陣を列ねて守りける、劉靈是を見て、馬を勒し高く叫んで、昨は日晩るゝに因つて、貴て汝を捉へず、今備と、この強弱を決せん、敢へて吾れと戰ふまじきや否や、許戎が曰く、吾れ大朝の官將たり、豈に草寇を懼れんや、劉靈が曰く、尚敢へて誇口するか、昨日典升が、備を救ふに非ずんば、已に銷頭の鬼となさんに、典升が救ひし故、今日まで命を延せしと云へば、許戎大に怒り、鎗を引いて便ち刺して陣を過ぐ、劉靈やがて架へ住め、兩將それより武勇を施し、各々威風を逞しうす、二馬交ひに馳せて相讓らざるは、羊を爭ふ雙猛虎の如く、二人の鎗を並べ刺す事は、食を競ふ兩虬蛇のごとくなり、戰ふこと二四十合にもならんと見るとき、劉靈虛しく一鎗を架はづし、佯り驚く體をなし、許戎を誘いて逃走る、許戎是計と知りぬれば、軍を住めて赶かけず、副將等進みて、賊漢の中、此の人是れ魁首たり、今日戰ひ敗れて走る、正に此の賊を赶かけ擒にすべし、此の賊だにも除くならば、漢兵必ず退きなん、許戎が曰ふ、備等知らざるところあり、劉子通、昨日吾と戰ふ事、百合に餘れるは、何等の英勇ぞや、しかるに今日、わづか數十合にして、豈に敗れ走るの理あらん、此れ乃ち敵を誘むくの計なり、吾この故に赶はずと云ひて、即ち軍を住めたり、劉靈は許戎がとゞまつて赶はざるを見るより、早く計の成らざるを知りぬれば、午の後に至るをまち、兵を收めて寨にかへり、復び轉戰せざりける、衆の伏兵も、砲聲の起らざれば、亦各兵を回しける、劉聰は寨に回り、張賓と議しけるやう、今日許戎吾兵を追ざる、想ふに是何人か、軍机をば泄漏しつらんと云ふ、張賓が曰く、此語さにあらず、彼の劉喬と云ふものありて、謀畫をすすむるなり、吾また彼が覺る事あらんと思ふが故に、砲を亂りに放たさしめず、兵妄りに發せざるなり、劉玄明、此の言を聞いて曰く、然も此の如くなるときは、吾かれを能する事ならん、將に許戎が勇あり、謀るに劉喬が智あり、外に典升が助あらば、たとひ一年勾攻るとも、鉅鹿をとる事能はず、何ぞ克く大事をなさんや、張賓が曰く、何の憂へ慮る事か須ふべき、吾自ら計あり、今許戎兵を屯して、河橋を守り住むるものは、蓋ふらくは、吾が兵掩つて常山を取るかと慮るがゆゑなり、今まさに計を以て、彼が計につくべし、明日流れの下の頭に於て、木筏數百搭起て、下の面に鐵の索を用ひ連ね、上の面には、板を鋪て土を填み、以て兵馬を通ずべし、游泅になれたる、水棟の達者を募り、是を拽いて河を上り去り、夜に乘じて軍馬を渡し過ぎ、地をえらんで埋伏を齊しく整へ、然して後大に聲勢を張り、人數を出し佯り襲ひて、常山を攻むるの意を示さば、許戎かならず橋を撤て兵を遣り、常山を救ふべし、吾其あとをつけ入つて、精兵をすゝめ、遥に彼が寨を放火し、燒起て攻る者ならば、許戎吾が詭計ある事を疑ひ、鉅鹿を攻めんことを懼れ、定めて又鉅鹿にかへり救はん事を思ふべし、那とき橋梁は、我衆の爲に奪はれ、其渡り場あるまじ、もし敵將河に沿がつて、渡りを覓めば、吾猛將を以て阻てゝ是と戰はしめ、又常山の道なる伏兵を起して、去路を把り斷ては、許戎勇をはげむと云ふとも、兩頭に路を沒し、自ら擒となるべきなり、劉玄明是を听き、心中に大喜し、即ち張賓に命じ、其の布置をなさしめたり、かくて張賓は、黃命、胡延晏を召んで曰く、備二人は、兵士三千を帶し、下流に往て、竹木をきり、筏筏につくれ、又黃臣、王如、楊興寶、李璜の四將は、偸に下流を過ぎ、五千の兵を以て前み往き、常山の要路を

囲て住めよ、關防、關謹の二將は、引兵五千にて、上流の淺き處の要路を斷て、張寶、張敬は、兵五千を領して、下流の筏筏の渡頭を把住めよ、又王彌、胡延攸、胡延顥等は、兵士五千に將として、典升が兵士を住むべし、劉璽、趙染、趙榮は、劉玄明に從へ、我身も一所にあつて、兵二萬を領じ河を過ぎ、常山の大道に列ねて、許戎を拒ぐべし、關山、趙落、馬寧、曹雄等は、兵五千を將ゐて、橋邊の伏にをるべし、晉兵橋を過さり遠ざからば、即ち出て佔け住めよ、襄安、孔萇、桃豹、廖全の四員將は、鉅鹿城中の救の兵をおさへ斷つべし、湖文盛、友雄、樊榮は、兵五千を引いて、關山等と合して、共に晉寨を攻め、放火して是を燒け、務めて烟多く焰の盛ならん事をなせ、關河と王伏都は、兵二千を引ゐ、河邊に往來して、許戎をして、走り脫する事なからしめよと、一々に分付すれば、衆將其の計を受け、潛に兵をくり出し、地形を定めて行き向ひける、

關防鉅河擒許戎

斯て王彌、劉靈の二先鋒を始として、各々分ち付するに隨つて行向ふ、劉子通、關繼雄等は、許戎を擒にせずんば置じと憤れば、王飛豹、關繼遠は、必ず典升を獲へんと勇みける、

此の二人をだに除くならば、鉅鹿は破るべし、常山も又取りつべしとて、貧夜がた筏をつらねて河を渡る、劉玄明は、乃ち大に火炬を張り、聲を揚て常山を攻打と云ふらん、行軍をすすむれば、晋より路に伏したる細作ども、飛く許戊が橋邊の寨中に到り報げける、許戊聞いて曰く、劉長史が、我に教へて、兵を以て此橋を守らせたるは、正に此ためのみ、狡き賊共、典子高の此に在るを知るゆゑ、常山の無主なるを欺むかんとや、此妄想より起れり、吾爰に在つて救はさる事有るべきやとて、即ち副將曹英を喚んで分付して曰ふ、此去て常山に、一つの要路あり、地の名は石山の倒馬坂といへり、其の路甚だ險うして、止に一人一騎を通ず、備兵士二千を帶ひて、儉に小路を過ぎ、星夜に前み去て、賊兵を把とゞめよ、さてまた早く人を遣し、常山の程太守に催しやり、兵を發して助け守れといへ、定めて漢賊ども備が住めると見るならば、必ずかれ衆を恃で、山を爬き嶺を越え、早め過去らん事を思ふべし、我が兵あとより至るのうへは、何の怕もなき事なれば、必ず走る事なかれ、曹英計を領して、飛が如く間道より去りたりける、已に險口に至るに及んで、伏埋せんとするに、早くも先て、漢兵の爲にとり住めらる、王如、楊興賀等の四將、截出で、曹英が二千人を併せて、谷中にとりこめ困しむれば、一人も脫て、出でなんやうもなく、進退爰に極つたり、是をば知らず、許戊は、典升にも知らせやり、曹英が倒馬坂に、至りつかんとする程を計つて、後より急に赶かけ、砲銃天に震かし、以て漢兵を嚇さんと走りける、已に天明に至るころ、行程五十餘里ばかりにして、漢兵の陣を平川の地に、列ぬるに逢ひたりけり、許戊心に思ふやう、我が兵を前に伏せたれば、此即ち前後より、敵を阻つるの計を得たりと、獨り唉を含みつゝ、遥に進んで向前がけ、高聲に叫んで曰ふ、賊弟子、今いづれの處に逃れ往んと欲するや、許戊將軍、特に來つて備を擒ふ、劉玄明大に笑ひて、備昨ふ、劉喬が詭り猾ふを听き、便ち小計を誘說く、是に依て、備を賺しえざりし、今日は如何して、我が軍の計には中られたる、早く下馬して降らずんば、何人の來り救ふあらんや、許戊言を听き、大に怒り、逃亡の賊子、昔日朝に仕つて、己が職、積荷將軍の恩を受け、父又左賢王に封ぜらるゝの德を憶はず、かへつて兵を領し、國を亂る、天地も備をゆるさず、己れ逆奴を拿住めて、屍を碎く事萬段なりとも、其の罪を正し難し、尙大將の前に於て、誇口するやとて、遂に鎗を挺げ馬を躍らし、漢の陣前にすゝむ、右先鋒劉靈是を見て、矛を挺げ搶出れば、劉聰大に呼で、此賊、言を出して不遜なり、吾が親ら他を擒にし、以て麾麾の罪を正すべし、備は待と云ひすてゝ、手に大刀を揮て殺り出づ、其勢ひ爰に當るべからず、許戊力を奮ひ、戰を接へ、いまだ二十合ならざるに、劉靈傍より攻入つて戰ひける、されども許戊が力、二將に敵して、勇氣たゆまぬ働なり、五部の番將五六員、太子親自戰ふを見より、亦みな馬を跑かせて、許戊を中におつとり込む許戊是を見て、勢の當がたしとや思けん、其副將どもを叫んで曰ふ、吾奸賊のために騙れたり、那裡是常山を襲ひて、返て鉅鹿を圖べし、急に宜しく回て、鉅橋を拒げ、兩ながら悞りを致す事を免れよと、兵を揮つて一齊に、南に向殺轉ぐる、張寶此形勢を見て、旗を揮ひ、大に叫んで曰く、此の如くならば、走り脫する事を得べきぞ、まのあたり許戊を遁したる者あらば、卽ち軍法を以て按すべし、又能く擒にし斬らんものは、封侯重賞云ふべからずと下知し、行事五里計りならざるに、一聲の砲を响かせ、趙染、趙堅が伏兵、爰に殺出づる、許戊は是に目もかけず、只路を奪はんとするばかりにて走り、前に直りて衝き突けども、趙染に截り住められて、脫することを得ず、背後には劉靈、馬を飛して亦至る、許戊是をも顧みず、何卒して陣を擪き、遥に走らんとするに、漢兵は又後より、掩ひかゝつて、走らせじと殺りとぢむれば、屬兵過半、漢將のために折かれたり、其の隙に許戊は、漸く北のび、後を顧みるに、今は後面の追手の兵も少けれども、心よく退くに當つて、前面に烟煙、天を沖ておびたゞし、是は支雄、麼全等、既に大寨を劫し、放火して燒盡せるなり、許戊この煙火を見るより、心慌はしく、疾に馳回り救はんと、馬を驅て行きけるが、已に河邊も近からんと思ふ處に、漢の一大將、粉き臉、長き鬚ある男、手には偃月大刀を揮り、從に上手て殺り下す、許戊是と戰ひを接へ、いまだ五合にも及ばざるとき、下方より、喊の聲又起り、兩員の漢將、飛が如くにして殺てかゝる、狀貌いづれも同じかつかうなるは、關河、王伏郡が出るなり、許戊は、肯て戰を好まねば、是を打捨て、遥に走り、漸く一里計にもならんとする時、向ふを見れば、漢の將、關山、麼全等、兵に將とし、一帶に岸の口を擺つて、さながら城の壍なんどの如くに、陣を張る、許戊、是を見、とても此の處、衝殺とも叶ふべからずと、思ひければ、即ち下流に隨つて、渡を尋ねて河を過んとし、引かへして、走りしが、雜筏を見るより、是屈竟の渡りこさんなれと、既に奪ひ取つて、乘らんとせし處に、一員の漢將、豹の頭、環眼、巨なる口、龍の鬚ある男、手に蛇矛を把り、聲は雷の震ふが如く、大に吼へて殺出す、許戊大に驚いて、急に抵住め、いまだ三四合にも及ばざるころ、又一將烟れる臉、

虎の項、紅の珠眼、一領の長鬚、手に丈八の長鎗をとり、勢ひ熊虎も物ならず、大に叫び、許賊子、々々々、今走りて何の處に往かんとする、燕人、老張、此に在て儞を拿ると云ふ、許戎、二人の雄狀を看るに、是勍敵なる事を知ぬれば、遂に戰を棄て、又奔り往き、流にさか上つて去りけるが、又中路に至つて、關河、王伏都、相守りて動かされば、許戎も今はせん方なく、かなたこなたと、河を巡りて徘徊する處に、忽ち見る、曹英が滿身血に汚れ、殘兵數十人に打なされ、走り至つて高く叫はり、小將令を奉じ、倒馬坂を守る處に、想はずも賊の爲に、先陰口を占められ、我を以て圍住むる故、命を棄て衝走り、漸く我身は脫しけれども、兵みな盡るに至れり、今我大路上を見るに、軍馬の來る事甚だ緊し、急に河を渡り、城中に走り到りて、又道理をなし玉へと云ふ、許戎聞いて、橋上已に敵の爲に據られ、下流また重兵ありて、筏を守り住む、我れ上流の、淺き處に往て、河を過えんとす、儞も急に來つて、同じく去るべしと云て、曹英と共に馳上り、一同に奔りつゝ、峽岸の口に至り、まさに水を渡らんと欲すれば、峽後の一將、紅の袍、綠の幘、紫面劍眉なるが、手に青龍力を提げ、兵士を喝り令して、是を射とめよと云ひ、自らも馬を驟て赶け出れば、曹英は、馬を急に河中に下して、渡らんとせしが、

岸の頭に立ちならんで、射る矢雨の如くなれば、遂に射死されたるぞ無慙なれ、許戎は、峽の後を遶り轉つて、上の方を望んで再び奔る處に、忽ち見る、一員の大將、濃の眉、鳳の目、面粉傅に、頬は硃を塗るが如くにして、五柳の髭鬚ある男、手に偃月大刀を提げ、身に堆雲の戰襖を穿ち、外面には金鎧甲を被り、渾紅の馬に跨り、聲を厲げ、高く叫んで曰く、許戎匹夫、儞今那の裡を往逃れんと欲するや、關繼雄爰に在つて待つ事ひさし、速く馬より下りて、禮を以て相對せよ、倘にする事を免さんぞ、過つて軀命を亡し、一世の威名を、挫き盡す事をなすべからず、許戎言を听いて大に怒り、儞敢へて輕々しく我を覷るや、吾久しく戰ふと雖ども、猶よく關が曾を斬るに易けんとて、復々精神を抖擻て、馬の頭を衝進むれば、關防は刀を提て喝り住む、二人が刀鎗の奮擊する音、各雄威を逞しくして、戰上三十餘口に至れども、亦勝敗も無かりけり、許戎されども河を渡り、城に歸らんとの意あれば、敢て戰を戀はず、關防を棄て、遂に馬を拍て、河を巡り走らんとす、關防これを見て、許戎比興なり、なんぞ止つて勝負を定めざると取り住む、關謹此の體を見るより、後に隨つて赶け、大喚して曰く、許戎以て擒にすべし、衆士宜しく努力めよ〳〵と、行く事いまだ二里ならざるに、關山、關河も橋道より殺か

かる、又王伏都が、救應ずるの兵も、下流より赶け來る、許戎是を見て嗟嘆し、吾憶はずも、詭計の爲に中られたりとつぶやいて、それよりは河をも望ます、還つて常山路に往き去りける、行く事數里ならざるに、劉靈、趙染、王如、楊興寶、趙槩、李瓚は、元帥劉璯と共に、兵を回らして來り到る、其喊つくる聲、天に震ひ、漸くに近付きける、許戎是を見て、敵する事克はじと思ひければ、復た上流を衝き、他處に往んと妄りに走りける、關防是を看、兵を連ねて路口を遮り出て、阻て住め、從容に呼んで曰く、許應婁、儞もとより智勇の將なるが、今に至つて何ぞ、時勢を知らざる事の甚だしきや、吾祖父、專らに仁義を以て、交を豪傑に結びたりしに、今吾れとても僥倖ひ、誦を以て人を待つものに非ず、儞ち戈を倒して、同じく漢業を復し、封侯の位を失はされ、如し迷をとらば、必ず及ばざるの悔あらん、許戎聞いて、答へもせず走り去らんとする處に、忽ち下流より、塵埃日を蔽ひ、常山道よりは、旌幟天に遮り、喊の聲漸く近づけば、許戎今は進退道なきを知つて、一向に前進み、陣を撞て脫走らんとす、關防是を見て、脫さじと逐かけ、さゝへ住めて二十合ばかり戰ひしが、許戎力怯なく、鎗を以て關防が刀を架はづし、馬を拍つて走らんと要むるを、關防手を反し、一刀を以て許戎が肩窩を、したゝかに中てたれは、許戎はたまらず、身を仰ぎて倒れんとす、關防即ち狼腰を、くるりとひねつて、輕く猿臂をさし伸べ、許戎が衣の領上を、一把みにつかんで、乘たる馬の鞍に曳つけたるに、許戎が人長けければ、雙脚地について、留まらんとするを、關防連りに忙はしく、許戎が頭を把り、手を以て是れを引さけんとす、許戎は仰面にひきつらるれば、是れを爭ひ挫くべきやうもなし、關防も是を拿るに住むる事能はざる處へ、關謹大刀をふつて、晋兵を破り散す、晋兵是に驚き潰え、近きによる事をえずして散亂す、かゝる處へ、漢兵共に進前あつまり、遂に許戎を縛りて引起て、漢の中軍さして、をめき叫んでかへりける、

王彌擒二典升一

漢の元帥劉聰は、劉靈等を率ゐて、許戎が跟をおひかけ、鉅鹿の河邊に轉いたれば、關防兄弟の者共、いつしか、許戎を生捕り縛つて、元帥の馬前に引立る、劉聰大に喜び、卽ち衆將に下知し、勝を承けたる勢に依り、就て鉅鹿を圍んとす、張賓が曰く、今已に晩れたり、亦計を爲しがたし、且へ城には劉喬在り、威を以つて嚇すべき者に非ず、又恐くは典升が、此の破を聞くならば、定めて城に入り、共に守り楯を巡らし、各郡の人數を招きあつめ、兵士を合せ拒ぐべし、然らば反つてよ

からさる事あらん、今しばらく軍營をとりて此にあり、橋頭を守ること舊の如くせん、如何となれば、典升、我兵の橋を守り、寨を燒たりとばかり知り、今日の敗を知らず、いまだ許戎が軍の、我軍に圍れ、討死したるも知らねば、偏に常山に到りたると意得、定めて夜に入らば河を渡り、許戎に接應せんと進み來るべし、其の來らぬ內に、我兵馬を先立て、埋伏させ、彼が來るを伺候せん、若し典升一たび河を渡るほどならば、必然として、吾が套の內に、入らんは治定なり、再び典升を除いて、其の後方に城を圍むべし、劉聰聞いて、尤もと同心あれば、舊に依りて諸將に令し、流の上下、常山路頭を併せて、猛く是を守住む、又人を遣し、王彌に下知して、橋を過て戰圍に備へしめたり、爰に典升は、寨を鉅鹿城のほとりに列ね、許戎と共に犄角して、守城を相助けんと約したる處に、許戎が使來つて、漢兵大筏を以て河を渡り、常山を襲はんとす、故に曹英を令して遣し、次で自も兵を率ゐて赴去の由を告ぐ、典升言を听て大に驚き、即時に兵を點じ、寨を出して、行く事いまだ五里ばかりもせざるに、王彌、胡延攸、兵を引いて、囮て住むるに合ひたりけり、典升是を見て大に怒り、三たび戰へども、中々以て過ぎがたきに、忽ち鉅鹿河邊に、烟焰大に起るを見、細作をして行き探すれば、回り報して、是漢兵の寨營を燒却するなり、已に橋邊をも取りきり、上流下流、皆勁兵あつて守り防ぐと云ふ、典升思ふに、心やすくは進む事能はさるべしと、乃ち兵をおさめて寨に回り、副軍等と評議して曰く、今漢兵、鉅鹿を攻めんと料ども、能はさるを以ての故に、吾が爰にあるをうかゝつて、常山を襲へるにより、許應婁の、既に去り玉ふ、吾れこそ疾く往くべき事なるに、後れけるこそ是非なけれ、兎にかく日の間は、他のために、囮て住められて叶ふべからず、此黒夜に至つて、ひそかに鉅河を渡り過て、明日に至らば、遲くと好し、兵を進め去らんとあれば、衆十皆應諾す、さらば、各々裝束せよと、半夜に身を起て、鷄鳴のころ河邊に至り、上流の淺き處の水を渡り、四更以後、盡く皆岸に登り、それより行列を整へ、行く事やうやく十里ばかりにもや、ならんと思ふとき、一聲の砲の响きのさこゆるよと、耳を聳て悋しみ思ふ處に、漢將劉靈、胡延攸、殺て出で大に叫び、賊奴典升、吾軍師の料る所に出でず、今更走らんと要むる事を休めよ、先鋒劉子通此にあり、典升は既に劉靈に攪き住められ、進まんとすれども能はず、乃ち勇を奮つて向前がけ、戰を交へたり、時にいまだ天色澆々たるに、二人の勇をふるへるさま、天を翻し地を攪り 狠戰へる事二十餘合に及べば、東方漸く明なり、かゝる處へ、胡延攸、手に青銅の太刀を舞し、砍て陣中に入り來り、軍人を殺死す事、其幾許と云ふかずを知らず、典升是を見て、此の勢ひに畏をなし、戰を棄て、路を奪つて走りける處に、一群の軍士、草中に集居る、典升是を見て、問て曰く、爾は是何人なれば、いまだ早夜に、此には集り居るや、軍人共聞いて、我々は許摠兵爺の軍兵なるが、爰に至つて、殺傷を被り、草間にかくれ居れり、あはれ將軍、吾等が命を饒したすけ玉はらん事をと云ふ、典升重ねて問ひける、我は常山の典將軍なるが、常山の圍覺束なくて、救應するなり、許將軍と、賊兵との勝敗いかんぞ、いま將軍は那の處に在るぞや、軍人共答へて曰く、漢兵共の常山に至ると云ひしは、詭計にて、許將軍は此の處に於いて、一の長壍ある漢將の爲に、活ながら擒にせられ去らる、望むらくは將軍、我々五三人の一命を救ひ玉はらん事をと、嘆く、典升きゝもあへず、大に驚き、衆兵と曰ふ、若し果して言の如くならば、吾も亦計に中られたりと覺えたり、されば是を如何議らば、良策ならん、衆士の曰く、漢兵、常山をば犯さずと云へるからは、我等此に乘して、遥に常山に回り、我自ら、我が地を守るにしかず、又た何をか疑ひ玉はん、典升が曰く、此の言理あり〳〵と、遂に軍人を救ひ助くるにも及ばず、常山を望んで進みける、典升意に思へらく、前路更に兵の畏るゝ事有るべからずと、徑路に狗ひ大道に望んで、悠々たる路上を直に去る、行事五七里にも至らざるに、忽ち砲銃の聲あつて、烟高く响き、天を沖て起りたるに、四員の漢將、胡延晏、黄臣、趙染趙傑等殺て出づ、胡延晏が曰く、末將何人ぞ、常山の典子高に非さるや、速く馬より下つて、共に富貴を圖れ、許戎が如くなつて、擒の相伴する事なかれ、典升聞いて曰く、許將軍は悞て、詭計に中られたり、吾を何ものぞと思ひあなどれば、此亂言をなしぬるぞ、胡延晏是を聞き、汝も又人なるべし、未曾て能く飛ばし、今吾が此の路の大兵十萬人、倒馬坂に至るまでに、伏兵を設く事共に五處なり、たとひ翅のあるものにても、亦脫しがたからん、典升笑つて曰く、吾は是誰むくべきの人に非ず、偏ち十萬の兵ありと云へり、たとひ二十萬の人數に、伏兵十處にありとても、我何ぞ曾て懼れんやと、言罷んで鎗を引さ汗進まんとしたりしが、思ふに陣の突く事は難からんと察すれば、よし〳〵前面に兵なきこそ幸なれ、いかさまにも走り去つて、脫すべしとかけ出すを、胡延晏のがさじと撞きとゞめ、二人各奇能を働き、惡戰ふ事三十餘合に至れども、いまだ勝敗を分たさる處に、忽ち見る、一將、方面、長頭、河目、海口なるが、六刀を揮つて砍て至るは、乃ち漢將黄臣なり、典升は一人にて、兩方へ頭を分つて、架け隔て、闘ふと云へども、力已に勝さりけり、か

かる處へ又趙染切つてかゝる、典升是を見て、兵多して、とても脱れがたき事を知りぬれば、頓て戰ひを棄て馬を回し、河邊を望んで走り、蓧寨に轉りて、回らんと思ひけるが、いまだ河邊に至るに及ばざるに、忽ちに一員將、紫面、長鬚、勢ひ熊虎の如く、手に青龍の大刀を取り、横に路を截つて待かけたり、典升此の將を見て、疑ふらくは是、許戊を擒にしたる將なるか、鬚の長きは覺束なしと思ひつゝ、敢へて浪に戰はず、聊か闘事數合ばかり會釋ひ、便ち走りて赶け出せしが、橋上には兵ある事をさとれば、直に上流を回り、行く事一里もせざるに、又二將、手に大刀を提げ、其顔これも前將に似たるは、こゝはなるかな、關謹が從弟の關河、字は繼遠なりけり、典升向前で、衝戰事數合もせざるに、背後にありける長鬚の將關謹も、又爰に追ひ到る、典升こは叶はじと、馬を飛し、跑てゝ避け逃れけり、兩人の將、如何思ひけん、跟より追かけもせざれば、まさに上流に至らんと、峽の岸口に趨りける、かゝる處へ、一將又出向ふ、長鬚赤顔、手に偃月大刀を提げ、馬を立て道に當り、聲を厲にして叫で曰ふ、來れる將は是許戊を擒にしたる、關繼雄將軍なるが、備ち我を見知りたりや、典升聞いて曰く、吾れ本より許戊が類にあらず、備ち胡言をなす事を休めよと、鎗を挺げかゝり、衝突て走らんとす、關防喝し住め、刀を舞して接戰す、此勢ひに、典升心終に懼を生じ、惟に逃げ走らんとかけ脱ゆくを、關防是を見て、力に足ずとや思ひけん、逐事を止めにける、典升はそれより、多の圍みを斬りぬけ、兵を點じて見るに、つきまとひたる軍士副將も、處々にて多く擊取れ、斯彼に、晉軍の哭聲、地に動じておびたゝし、典升それよりは、赶け來る敵もなければ、やう〳〵に息を休め、軍兵共を招き集め、衆に向つて泣て曰く、吾儕らを妄りに戰て相棄るに非ず、回つて本郡を救はんと思ふが故なり、然るに今此の如く、賊兵の爲め圍れたれば四路八方ともに意やすく、脱すべきやうなきに至る、されども吾一人輕身にして、衝突て出でん事は安かるべけれども、汝等を爰にみだりに棄て、我一人命を逃れんとにはあらず、何とぞ吾れもし脱して、本郡にだに歸りなば、汝等をも必して、こゝには殺すまじと語れば、軍兵ども泣て曰く、願はくは死を以て爰を守るべし、將軍は早く小路を覓めて身を逃れ、再び計較をなし玉へとて、衆士みな前行く、縱に前路をとつて、一里ばかりも行つらんと思へば、大に賊兵起り、一員の猛將、巨體の長鬚が、手に大刀を持ち、兵士を一字に擺き立て、令を傳へ分付して、若し此の陣中を典升に衝て透らゝ者あらば、首を斬てすつべしと、あらゝかに號令すれば、衆皆聲を齊しうして、あつと答ふ、其の喚き地軸に

ひゞいて震動す、典升是を聞て慾狼るれば、軍士ども心膽を爰に落しけり、されども典升勇氣をはげまし、漢軍の左なる、小隊の下を撞破つて出んとしけるが、思ひの外に其の陣堅く破れざる處に、只見る一員の武將、手に大鎚を揮て、其狀ち靈官冥鬼のごとくなるが、典升が馬頭に近付きて喝曰ふ、汝等曾て吾を知るや、獨歩して孟覬を退け、李肇を追ひ、晉軍十萬の大兵をまくりつけたる、楊興寶ありと云ふ事をと、歩を踏で飛が如く、亂打して陣を過ぐ、晉兵共此の鎚に少しもあたれる程の者、忽ち死せずと云ふことなく、紛々として、地に倒る、典升是を見て、馬を傷らん事を恐れ、敢て是に敵對せず、引兵して右に轉じて走らんとすれば、正に王彌にはたと遇ふ、典升去るべき路の無を見るに、此男を斬まくつて走らばやと思ひ、鎗を挺て力戰す、王彌は爰に勇奮し打刀、恰かも風を捲くが如し、典升は其の勢の猛なるを察するより、力を盡し戰を抵せども、王彌少もひるまず、實是はこれ、漢兵の第一等の將帥たればなり、典升彌々劇んでつきける鎗、空しく王彌が腋に入るを、又つかんとす、王彌是を見、あやうく急に身を轉して閃りとはづせば、典升は鎗をとつて、連に撲て王彌が懐に衝入る、王彌刀を以て、鎗にからめて、一とゞめ扯むるに、兩馬は一所に合したり、時に王彌すかさず典升をとらへて、横さまに乘たる馬の鞍の前に挽き過し、たにの手間なく生ながら擒にして、陣中にかけ回へし、足しばれと令すれば、軍士どもやがて是に綁をかけ、一齊に行去て、中軍に合しけり、劉玄明大喜んで、二將苦に吾が軍を拒ぐ、今軍師の奇計を用つて、皆收獲せらるゝこそ快けれ、此勢に乘じ、鉅鹿を取り、再び常山を攻むべし、其の勢破竹の如くならんと云つて、遂に令を下し、倶に鉅鹿城の本に至る、城中の太守劉喬は、正に人を差し、二寨の消息を探らするに、忽ち敗軍の士卒回り至つて、漢賊、誑すの術を以て、虚しく常將軍を襲ひ、兵を引て大寨を燒つくし、其後許將軍も、漢の勇將關防がために、活きながら擒にせられたりと告ぐ、劉喬は軍士說處の首尾の危談を聞き驚り、不意も毛骨倶に悚しく、膽を撫で大息つき、早く人を差し、典升に示さんとすれば、忽ち細作報じて曰ふ、典將軍、軍を出し、許摠の兵を助けんとして、漢將に阻へとゞめられ、兵を退け寨にかへれりと、云ひもいまだ終らざるに、又細作回り報じて、典升已に昨夜に入つて、河を過ぎけりと曰ふ、劉喬大に驚きて曰く、典公は定めて、許應斐があやまり有るを知らずして此を去り、恐はまた彼奸計に墮なんか、賊兵若し勝たば、即ち來りて此の城を攻むべしと、衆議いまだ散ぜざるに、探子、馬を飛せ報じて、典將軍河を過ぎ、漢兵八面の埋

伏にあひ、漢將王彌がために擒にせらる。是に依つて漢兵急に
攻に來らんと道ふ、劉喬聞いて兵に命じ、緊しく城門を閉ぢ、
百姓共をことゞく城に登せて、木石を擲つの役にそなふ、
衆の將士の曰ふ、今許、典の二惣兵、倶に賊の手に沒したり、
此の處又將帥の敵すべきなし、朝中又救兵の來助もなし、眼
前此城の守るに難き處、顯明なり、是れ吾等の不忠なるに依
つて云ふにあらず、先づ此の時は避遁れずんば、何時をか待た
ん、漢の多勢來りて、攻を圍み套むほどならば、人々すべて賊
手に死せん、能く城地を保ち、全からんやと勸むれば、劉喬も
其の議に從ひ、庫中の寶物を收拾して衆を帶び、親信の人に
令し、許戎が家の眷族と、自らの妻子を、併せ纏つて夜に入
り、南門を開き、奔つて洛陽に往去りけり、次の日劉聰が惣
兵到り着くに、百姓ども主なければ、乃ち城を開き香花を備
へ、漢兵を迎へ接して內に入る、劉玄明大に喜び、軍士に令
を下し、百姓を侵し擾る事を許さず、榜を出して安じ慰むるに
より、雞犬までも驚く事なければ、民皆懽悅をなしたりける、劉
玄明は大將を差し、許戎、典升をはじめ、擒獲共を將ゐさせ、
戰捷の冊籍を、平陽城に報じける、

通俗續三國志卷之二十

漢兵攻入常山郡

漢兵共は、鉅鹿を拔くの勢に乘じ、常山郡をとらんと、それよ
り直に常山に馳向ふ、常山の探子共、飛報じて、典升が擒に
なりたるを始として、戰の勝敗を告ぐれば、守將程朽大に驚
き、二將擒にせられなば、鉅鹿も必して敗れつらん、然らば不
日にして、兵將の此に至り集らんは治定せりとて、急に守副
帥張牛を請て評議し、戰守の策いづれに在りと問ふ、張牛が
曰く、賊兵若し鉅鹿を破らば、定めて常山に來寇すべし、此
の常山郡は、右に大行を連ね、左は瀛海に接いて、山を表に
し河を帶びたり、まさに燕趙の要に當つて、乃ち北郡の險阻
なれば、決して失ふべからざる處なり、府尊は乃ち程仲德名は
程昱の孫にして、代々智謀の家なり、今に臨むの高見、以て
如何とかする、程朽が曰く、將軍の大才下の問を蒙り、別に
他の計のなすべきなし、併ら某が愚見に依らば、一面に兵民を
點じ、磚石を運せ此城を守護せ、且へ垣墻深塹、共に完く
備へ築き、人をして檄を馳せ、荀晞が救援を求めて、以て此
地を保ち固むべし、張牛聞いて、此の議を宜しとし、從て連夜

に人を馳せ、荀晞が方へ知らせける、荀晞は檄書を見るより
大に驚き、常山は吾が隣郡にして、冀北の屏障なれば、是を
救はでやあるべき、乃ち其の屬下の團練使、屯操大將軍、樂
房に、兵士五千を領せしめ、先づ常山に往て救應せしめ、命
じて界の上に營を張り、以て聲勢を盛にす、漢の元帥劉聰は、
自ら鉅鹿を發して、既に常山に入らんとす、探馬回り報じて
曰ふ、兗州の刺史荀晞、一大將をして、兵士を帶し來つて、
常山を救はしむ、今東界上に屯をとゞむと、張賓說を听き、
衆に問うて曰く、誰人か肯て東路に往去り、裏兵を囘て止め
て、常山に與る事無からしむべきや、然らば我等好く去つて、
城を圍むべきと云ふに、馬上より兩人聲を齊しうして應へ、願
くは往かんと云ふ大將あり、衆人是を見れば、乃ち是右先鋒
劉靈、右軍都尉楊興寶なり、劉玄明大に喜びて曰く、二將
肯つて一同に兵を帶び、前往いて其強弱を見るべし、而後に、
以て進んで戰鬪せよ、慥つて事を失すべからず、二人命を領
じ、輕兵五千を帶び、東を望んで遥に樂房が寨營の前に至
り、其間近く備をとる、樂房は其己を輕ずるの體を見、即ち
副將胡禎と、人馬をひきゐて寨を出で陣を佈く、劉靈も又陣
勢を排し開き、三たび鼓を通し罷む、時に樂房馬かけ出し、
漢將を指て曰く、傭等已に、平陽鉅鹿を奪ひ、反つて大朝を
亂らんとす、罪惡まことに重極たり、又常山を侵し寇せんとす
るや、是自ら分上をしらざるなり、今我朝中、齊王、成都、長
沙、東海の諸親王、已に皆大に軍兵を會せしめ、不日にして
此に到り玉ひて、汝等を討伐ある、早く退き去て、なほ故の土
を保つの計をなすべし、劉靈聞いて曰く、傭は是何人ぞ、敢て
此の處に來り、言語辯舌を以て、吾が大軍を退けんと思へる
や、樂房が曰く、吾は乃ち三世の將家、樂進が嫡孫、樂綝が
子、樂房是なり、劉靈が曰く、既に是れ是の如しと聞けば、亦
乃ち先世の讎の種子、今來りて我を尋ぬるは、是祖父の宿
憤を償ふのみか、よし〳〵馬より速く下りて罪を謝し、我が手
を動ずる事を免かれよ、樂房言を听いて大に怒り、乃ち刀を
揮て、漢の陣を衝て過ぐ、劉靈は長矛を挺げ接住めて、二人
互に武威をはげみ、大に英氣を展て、惡鬪こと三十餘合にい
たれど、いまだ勝負は分さりけり、時に晉の副將胡禎は、劉
靈が善く戰を見て、鉾をとつて傍より攻めて、劉靈にかゝりけ
る、楊興寶是を見るより大に怒り、手に鐵鎚を舞し、飛歩し
て出でたる形勢は、驟なる事奔電の如く、迅きことは霹雷の
如くにして、風のやうに、捲て打入る、此の勢に晉の軍士、交
横、亂倒して逃げ散れば、やがて樂房が馬の後まで逼り近づ
きける、樂房是に慴れをなし、馬に鞭打て避る、楊興寶なほと

どまらず、後に隨つて赶け去り、大に喝して、きたなし走るを休めよと云ふ、樂房是をも聞かず顔して走りける、漸く北延ぬと思ひて、頭を回して看れば、遥にほく胡頽が劉靈と戰ひ、劉靈が爲に馬より下に斬て落さるゝを、あつと云うて嘆ずる聲も了らざるに、楊興寶已に追て及びける、樂房慌忙しく、刀を擧て砍り合ひけるが、いまだ五合にも至らざるに、楊興寶が一鎚、樂房が馬の後跨にどうと中れば、馬人共に倒れたり、楊興寶、間もあらせず、重てふりあげ撲つ鎚に、樂房が頂門、血けむりたつて、但一鎚に打死されたり、兵士共大將二人討るれば、今は戰ふべきやうなく、皆々山東に還り去る、劉靈、楊興寶の二人は、敵將二人の首をきつて、遥に常山の城下に、到りける、爰に常山の守將、張牛、程柝は、日夜に嚴しく守をなす、漢兵は又雲梯を設け、弓弩を射上げて、息もあらせず攻ると雖ども、張牛、程柝が親ら守禦をなし、方略をつくせば、漢兵反つて爰に斃死さるゝ者、其算しらぬばかりなり、已に十餘日まで怠りなく攻ると云へど、並に寸功を見る事なければ、劉玄明は諸將と議すらく、常山の城地最も堅く、守禦又能きゆゑ、兵士旬日を歷て勞すと雖ども、いたづらに兵を頓て、攻取事克はず、かゝる折に晉朝、たま〳〵重臣を差し、兵を提げて來り救はゞ、又雍州と異なる事なからん、前功悉く棄れんことの口惜さよ、汝等何の奇計あつてか、宜しく速に是をなさん、一計を早く進むる者は、功を論じて第一にあるべしと道ふ、張賓が曰ふ、兵は神速なるを貴ぶ、遲き時は變あつて生ぜん、來日衆の兵將一半を分け、東南の角上に於て、大に聲勢を張り、力を用ひて攻打つ體をなして、晉兵を誘き、吾砲架を十餘處に造り、黄昏の時候に至り、軍士各嚢沙を要め、來ねたる草を持ちて、一齊に城下に推至り、襄陽の大砲を架起して、城の梁を打壞り、然して後に、沙嚢束草を以て推くゝ起て、騰り湧いて上らんとき、強弓、硬弩にて、防守の兵を射退けば、一に城に登つて、彼兵を破らん事、此に在りと說きけるを、劉聰深く其議を然りとし、張賓に命じ器具を調製して、重ねて城を攻めぼすべき、其の支度をこそなしにける、

漢兵奪二取常山一

斯て張賓は、攻具も出來ければ、軍士を分付して、一半は秦に在て不虞の求に伺候し、一半は東南に進んで城を攻む、程柝、張牛は、漢兵の皆な東南の角に從つて、力を盡し攻め打を見、盡く城中の精卒を率ゐて、東南の二門に往き、城にかゝつて戰ひ守り、西北上には只百姓ばらを集め、器械を執りて守らするのみなりけり、兩軍城上城下と相爭ふに、石矢を以て發擊すれば、寄手の方に死傷する兵士ども、甚だ多く出來たる、かくて日晩を待つ處に、程なく今日も暮に至りて、物色もはや見えざるとき、張賓は軍士どもに命じ、砲を以て車に駕し、推て城下に付き、襄陽の子母砲とて、大なる石火矢を、十四五處にしかけ、一齊に放動すれば、天崩れ地裂るかと、おびたゞしき形勢、其の聲は數十里に響き亘りける、程柝、是を聞くより、弓箭の手五百人を揃びて、城に上て來り見れば、すでに西門の方、數箇處、堞壘の壞れたる處あるに、漢軍の兵卒、蜂蟻の如く、集り就て草を堆うし、沙囊を重疊み、城にかゝつて攻入らんとす、程柝乃ち將士に命じ、雨の如くに射て下し、又百姓共に命じては、命を捨て礮石を拋打す、是に依て堆草の上に立る兵卒も、立に中々穩やかならず、おし落さるゝ事數度に及び、漢兵の跌傷るゝ者、數百に餘れど、斃るゝ者を乘越え、死せる人を楯にかづいて攻入り、少しも退ぞくべき體はなし、程柝は漢兵の勢さかんなるを見、斯ては攻壞らるべう覺ゆれば、早く人を遣し、張牛に報しらしむ、張牛即ち軍士を分付して曰く、此の處、城垣牢固なり、賊心を察するにも、又其の心此の處に在らず、明に是我を牽引て、あざむくなれば、爾等よく吾が爲に、是を守るべしと言訖り、兵五百をわけて飛が如く、北門に赶來る、漢兵猶對し

て相攻め擊つ、張牛は衆兵に命じ、力を盡し一面に射立つれば、漢兵共攻めあぐんで悉く退去る、張賓士卒の傷を受くる者多きを見、遂に收めて寨に入れば、其日の軍は止みにけり、城には張牛、程公の賊兵を射追けられ、此の城を保護られたる事、莫大の功なりと感ずれば、程柝が曰く、いまだ是を功とするに足らず、賊智く退くと云へども、是晩に及びて天の黑きが爲なり、彼れ已に城壘數處、打壞られたるを見るに依て、明日又劉聰必然として大に至らん、然るときは最も是に敵し難からん、宜しく一の計策を思量して、彼の一陣を破らずんば、方に再び守り防ぐに難からん、張牛が曰く、府尊の言甚だよし、今城まさに壞れに及び、良謀を用ふるに非ずんば、安ぞ能く、寡きを以て衆に敵せん、吾に一計ありと雖ども、吾二人今已に時刻しばらくも此の處離れがたし、それに付いては、吾が姪の張廉才、牙將劉雄二人に命じて、此の計をなすべし、渠二人に兵士二千を領せさせ、今幸、敵兵の退くに及んで、偸に城を出し、城河の上流をふさぎとゞめ、若し明日劉聰が、親ら來りて城を攻るのとき、砲を放つて號令にして、水流を決り放ち、其の一度に湧いて至るを待ち、水勢淘き其の時、河に沿うて殺轉らせ、我々は又內より殺て出で、劉聰を擒にすべしと說く、程柝聞いて、此の計大妙大

妙、速に是を行ふべし、張牛乃ち二將を喚で、水を閘の計を分付く、其より二人は空に乘じて城を出て、上流に至り、河口を塞ぎ住むれば、暫時の程に水高き事、一丈餘に至る、二人大に喜びて、相圖の砲を待居たり、張寶は兵を收めて營に入るの後、劉璁が曰く、今此の一計すでに甚だ意の如くなりしを、賊奴一番の弓箭に、我軍を射退られ、兵士をやぶる事數百に至る、まことに大功すでに成るに亜として、克はざるはこれ惜むべき事なるかな〳〵、來日心を齊しうし、力をかなへ定めて、此の城をせめ破るべし、再び事を悞るべからず、吾まさに親ら臨んで、敵に城垣を修補はすべからずとあれば、張寶承はり、又件々の器械をとゝのへ、明日早天より、關防、黃臣、張寶の三人に命じ、兵を城外に屯して、城内よりの衝戰をなすべき用心にそなへ、其の餘の將士は、皆元帥劉璁に隨つて、城下に至りて攻め打ちたり、張牛、程柝是を見て、親ら城頭に上りて防守をなす、劉璁は自ら軍士を下知して、鍬鑺を以て、堀穿ち城を破る、時すでに午に近からんとす、張牛已に時刻よしとや思ひけん、號砲を放ち起つれば、張廉、劉雄二人は、號令の砲响を聞得て、忽ち閘げる流を切て、放ち、水を決れば、河にしたがつて兩岸にあふれ、水深き事四五尺に至る、まして河中の平高なる事、一丈餘に水あがつて、勢さながら海潮の出るが如くなり、張廉、劉雄の二將は、又此の勢に乘じ、河に沿つて殺下る、其の汹聲雷の如くにして、一へに萬馬の奔騰するが如く、大水湧て至り來る、渓兵共大に驚き、亂竄れて脚を立る事を得ず、河中に溺るゝ者共は、屍漂うて疊々たり、劉璁、張寶、皆陷入つて、濠の中に、押入れらる、已に背上を沒して、浮きぬ沈みぬ流れたり、張廉、劉雄、かさより掩下れば、城中よりは、張牛、程柝、程灼の三人殺て出づ、漢將皆驚き奔りて、互に相顧みることを得ず、程灼は一人の金盔、金甲を著たる者、水中に有つて、岸を覓めて上るを見て、是れ劉璁なりと察すれば、遂に馬を飛せて赶去る、張寶大に叫で曰く、賊あり暗に元帥を算る、誰かよく主を救はん、程灼もまさに到らんとすれども、水深うして近前する事奈ともし難ければ、遂に弓を取り、箭を抜き出し、是を一矢の勝負にせんと思うて、いまだ矢をも、弦に加へて發たざる處に、一員の虎將飛歩つて向前り、背後より大に喝つて曰く、賊子、無禮なる事をなすや、未だ倆楊將軍爰に在りと云ふ事を知らずやと云ふに驚き、程灼後を回り見れば、楊奥寶が其ありさま、馬にも乘らず下衣まで俱に濕れたれば、是匹夫の軍卒ぞと看侮つて、弓をば按し住め、箭を挺げ、便ち楊奥寶を刺んとす、晋兵又背より、賊の聲甚急なるに、程

灼彌々力を奮つて狼り戰ふ、其の合數を知らず、楊奥寶大に怒つて、一鎚を振擧げて、程灼が馬の頭に擊中るとて、あまりに強く氣勢をはれば、其の勢につれられ、二人共に水中に、なんの手もなく撞き入りたり、楊奥寶は岸に向つて上り去らんとすれども、已に水勢に推し出さるゝ事一丈ばかりに及ぶ、程灼は又馬斃れ甲重ければ、遂に沈溺れて死だりける、楊奥寶は漸に、岸の口に住つたりしが、大聲あげて軍士を喝り、など元帥をば扶け救はざるぞとのゝしるに、衆士みな水に下りつかりて、是を救はんとすれども、水勢甚急にして、淹ひ流さるゝ者數人に至れど、遂に劉玄明をば、ひとり助得て岸に上る、張牛是を見て、馬を飛し赶來り、漢將の李璫と相戰うて、しばらく爭ふ處に、又軍士ども、張寶をも救ひ得て、岸に登ると雖ども、水に久しくおぼれたる故、馬皆いまだ曾て起つ事かなはず、張牛是を見、李璫をば打すて來つて、劉璁を擒にせんと競ひかゝる、楊奥寶是を拒ぎ住めて、張牛と戰ひけるが、あやまつて水の漏れくる坎の中へ、一脚をつまづき入る、張牛すかさず刺くやりを、楊奥寶が手腕に受けとめ、速くも鎚を提げ走りける、是張牛が吾を赶かくるうちに、劉璁、張寶の二人を傷る事をば、免れしめんと思ふにぞありける、されども張牛いさゝか是には目もかけずして、遥に劉璁、張寶の二人を望んで、刀を揮て步戰をなす、張寶是を見て、劉璁を討せじと、劒を抜いてかゝりける、二將の戰ひ已に危く見えたりけり、王彌是を看、馬を飛して來り、張寶を救はんとするを、晋將劉雄、拒き住めて戰へども、劉雄が力足らず、既に走らんとしたりける、張廉是れを見てかけ來り、力を協へて王彌を抵住む、王彌は劉璁の危を看、是を救はんと心は猛く勇めども、二人の者に隔てられ、救ふべきやうなかりし處へ、關謹は城を遶りて至り來り、張牛が劉璁に逼り鬪ふを見るより、王彌が相爭ふをば顧みず、直前にすゝみ至り、高聲に大喚して曰く、無禮を得ることなかれ、關將軍爰に在り、張牛其の人を見るに、紫面長鬚なるが、手に青龍の大刀を持ち、威は猛虎の如くなるは、料るに定めて尋常の漢にはあらじと思へば、廼ち劉璁、張寶の二人を打捨て、此の猛將を迎へ戰ひける、いまだ其れ十合にも及ばざるに、張牛が力、漸々に衰へければ、馬を打て走行く、張寶高く叫んで曰ふ、此の人を除き得ば、常山方に能く下し得ん、關謹听得て、遂に緊しく追かける、劉璁は張牛が來り迫りたる事の怒りにたへず、心中の憤り猶をさまらざるに、王彌が二人の敵と爭ふを見るより、神威を奮起し、號び吼えて遥り進み、劉雄を馬より下に斬て落せば、賊は地上にこけ落ちたり、張廉是にも退かざるを、王彌目

を張り叱つて曰く、魍魎匹夫、いまだ知らずや、許戊尚ほ此の王飛豹を懼れたり、典升を捻にする事、孩提兒を抱くが如くなりし、おのれ何まで生動する事をなさしめんと、猛喝一聲し、馬を夾へて迫り入る、張廉は王彌を執んとすれども、手を展ぶる事能はず、王彌は輕く虎臂をさし伸べ、張廉を生ながら擒にして、馬をけたてゝ右手に提げ、是縛へよと、漢兵の中を拋いだせば、衆人をりかさなつて、起しも立てず細をかけ、ひつ立て元帥の陣に送りけり、衆將ども程なく一所に集り、咸すゝめて劉玄明に、先づ案に入り、衣を更め玉へといへば、劉聰の曰く、吾懼るゝ處は、張牛、程朽の二賊、あへて城を出でさりし時なり、しかるに今、彼れ此の水を決るの計を恃んで、我に勝たんと欲し、皆々出て外にありしゆゑ、思ひの外に安く、三將までを斬りたり、殘る處は張牛一人なれば、各々力を調へ、かれをとり住め、殘兵の城に入らさらんやうに、城門を取住めよと云ひもはてさるに、惣軍令に從つて、一齊に押寄する、爰に關謹は、張牛を目がけて追ひかけゝる、張牛は關謹を免れんと、北門の外を轉りて、西を指て走れるを、關謹なほも是を捨てず、城を周り回ること一匝すれど、張牛城に入るべき所なうして、是を奈んともする事能はず、今は馬を立てしづめて、再び關謹と戰ひけるが、終に五合はかりに及んで、關謹大に喝すること、一聲して、手の起る處を見れば、張牛が頂きは、分れて兩半となつて劈開かるゝにぞ、何ぞしばしも滯まるべき、馬より下に墜と落つ、左右にありし四員の副將も是に驚き、四方に奔りて散じたり、關謹は此の勢に乘じて赶け進む、奔る者共城の缺ある所より、皆々內にくゞりて入るを見、關謹も亦馬を馳て上らんとす、副將共是を見て、內に入つて叶はじと、集つて突止むる處を、關謹忽ち副將を、二人まで殺て倒せば、其の餘は皆々退去る、關謹今は心よしと、既に城に登り入らんとするを、上より兵民ども、礌石や刀鎗にて、關謹を城に登せじと防げば、關謹は亦矢石を冒し、手にあたるを嫌ひなく、草芥なんどを刈るが如くに斬はらへば、兵民の類盡く、今は叶はじとて奔り散ず、されども副將六員、城の畔を擺ひて、城に登るの路をさゝへて入れざれば、其の下は猶以て入りがたし、關謹は是を見、大に吼えて衝かゝり、其の陣に殺入り、一刀に一個づゝ、連りに刀を五度あぐれば、五人の將忽ちに、馬より落ちて十個となる、此の形勢を見るより、晋兵ども忽ちおそれ、披き靡いて奔り潰ゆ、漢の諸軍は關謹が常山城に、ひとり殺り進で、已に乘取ると云ふ事をば未だしらず、門々より責入らんと、しきりに是を攻打つたり、關謹は西門に至りて見るに、皆是大木を植て、道をさへぎり

て通ぜねば、遂に復北門に殺り轉り、門の關鎖を砍り開き、漢兵共を放ち進めて、終に城を乘取りけり、爰に王彌は、東門の寄手に在て攻闘ひけるが、いつしか見れば漢兵共、城中に入ると知られ、城上に漢の旗を竪起たり、小軍報て曰く、我兵已に城に入る、然しながら此內、皆是れ大木寨がり、路する處なし、はやく北門に往て進み玉へと云ふ、王彌悔いて曰ふ、吾れ先鋒たりながら、株を守り此の地にあり、兎を逃す腹立さよ、大功返つて、他將の爲に致されたりと憤りて、遂に兵を引具し、北に轉じて進みける、かゝる處に程朽が、逃れて洛に往かんとするに行遇うたり、王彌是を見、卽ち馬を躍せて截住む、程朽も亦刀を舞し、抵きて敵對せしが、十合にも及ばずして、程朽いつしか、手慌しく刀亂れて、王彌がために步々逼り進まる、是に敵すれども住らず、生きながら擒へられて、王彌が馬鞍に、横さまに引付けらる、王彌自ら喜んで曰ふ、吾れ先に元帥を救ふこと能はずと雖ども、先づ城を打破り、劉雄を斬り、張廉を捉め、程朽を擒にしたり、是以て功としつべしとて、それより卽時、城內に押入り、直に府第に入りたりける、劉聰大に喜び、吾此の二賊の爲に、許多の憂慮をなし、許多の軍馬を壞りをはる、若しこの漢を走り去らしめば、打死したる忠義の士の、魂靈を憤らしめんを、先鋒今能く生きながら、程朽を擒にするの功、尙ぶべし〳〵とある、王彌曰く、臣張牛が殿下に來り併べるを、我馳せて至り救はんと思ひしに、張廉等が足手の、障へとなるを除ふとて、袴を救ふの刻にそむく、何の功とか誇らんと云へば、劉聰重ねて、薪を去るときは釜自ら沸かずとこそ聞け、儞の功は吾れ自ら是を知るとの玉ふ、王彌大に喜んで、謹んで謝したりけり、張賓乃ち榜を出し、安民の法を合し、守將の家の眷屬等を、一緊に侵し擾るべからずと、ふれたりける、是に因て軍士、妄に一錢をも取るものなく、城中安堵をなす事故の如く、百姓大に悅び、心を傾けて、漢の垠たらんと願へり、劉聰軍政を命じ、人馬を計點すれば、前後の城攻め、射られきずつき、並に水のために淹沒する者、共に八千餘人の亡失に及びける、中にも樊榮、湖文盛の二將を、折き了るに依りて、衆將皆々淚を垂れて、傷感する事やまざりけり、劉聰遂に命じて、程朽、張廉を將ね、血を灑て、以て諸の亡ぶる諸士を祭る、張賓等樊榮、湖文盛、二人の屍首を尋ねとり、祭奠り畢つて乃ち人を差し、常山郡縣の圖籍までとり持せ、平陽都に上せて、今度の捷を報げたりける、其の後衆將をして、常山の脇縣を巡討じたるに、風を望んで歸し隨ふ者、其の半には過たりける、其の來り附ざる者は、兵の到るを見ては、地を棄て逃

れさる、一郡盡く平らげり、漢主報を得て大に悅び、一人をして賞物を賚せ、常山に至りて、六軍の將士をぞ犒勞ひける、

漢劉聰計兗城

劉聰は賞を受け、復び衆將を集めて、ともに議して曰く、今度此の郡を得たるは、幽州、冀州の右臂を、已に斬るが如し、早く是より兵を進め、勢に乘じて、兼ねて幽冀の地を併せ、つとめて西北の英雄を賚つて、然後に以て天下に橫行すべし、張賓が曰く、いまだ燕冀の地は、早速には計り難からん、且へ山右、尙未だ全き事を得ず、其の地遠限にして得たりとも、守りがたからん、又摠官王浚と云へるは、極めて深智ある者にて、將猛く兵强し、未だ中々取りやすからず、古に云ふ、遠き時は交り、近きときは攻めん、いま兗州の府、山左に隷くと云へども、此の地と界を連ねたり、其の地東は琅琊にめぐり、西は鉅鹿に控きつゞき、北は厥圓に走り、南は互鄕につゞき、近きは徐泗に通じ、遠きは江淮の國中に距つて、まことに東北の咽喉、西南の屛障なり、宜しく先づ是を取收むべし、鉅鹿、常山、兗州三大郡は、鼎の峙つが如くなり、此の地をとり得つれば、方に東北の地も覬覦ふべく、河洛の地もまた望みつべし、廖全が曰ふ、吾れ北部に至つてより、西北の國々を越過ぎて、故舊を尋訪うの時、到る處の郡縣にては、必ず刺史太守の、賢否いかんと詢ふに、皆云ふ、仁德を以て稱せらるゝものは、劉琨、劉弘、陶侃なり、勇略を以て稱せらるゝ者は、王浚、張軌、荀晞なり、此の人等、談猷深遠にして、智識老練たり、されば此の者共が勇は、英布、彭越に希く、謀は張良、陳平に次ぐべし、今兗州に守たる者は、其の一人の荀晞なり、これは齊王司馬冏が參軍たり、故に冏其の大將の才あるを知つて、特に舊鎭の地を委ね托せり、是れ齊王冏が洛に入つて、趙王倫を滅して後、朝に在つて晉政を執るが故、此の如く行ふとは見えたり、然れば別に他郡を取ては如何、張賓が曰く、完卿の言甚だ善し、但し恐らくは地を越えて征せんには、兵士共跋涉の勢につかれ、又守と衞を相顧みるに、聯續しがたからん、且へ兵は序あるを貴ぶ、假令ば簞の物を食ふが如し、それ簞は一葉を食盡しては、又一葉を食うて進む、兵もまたその如し、此の間一片を殘こさしむる事なかるべし、其の時麾全、手を打つて曰く、軍師の高見嗚なる略、吾等の及ぶ所に非ず、然し我に一件あり、荀晞昨に樂房を、遣し來りて常山を救へり、其の本郡自然に嚴かに備へたり、其の上今晉の朝權みな、是れ齊王司馬冏が掌どる所、山東は是れ齊の地、荀晞是れ齊の臣たり、若し一たび、兗州を攻むるなら、彼必ず救をこはん、しかるときは大兵此に來りなん、此の處を能く相度りて後ち、軍を出し玉へと云ふ、張賓聞いて曰く、此の見極めてよし、吾れまさに人を遣し、敵の消息を探り听き、其隙あらば進むべくして進み、一鼓して是を下すべし、其不意に出でなば、必ず是を得ん、如し隙なうして進みがたくは、當に先づ別郡をも取りつべしとて、乃ち常山の城地の壞ある處々を、修め完く固くして後、晉朝の爭奪ふべきたよりを防ぎ、又伶利むまれの者を選んで遣し、袞州のやうを窺はせける、爰に晉の兗州の刺史荀晞は、常山より程朽が行文あるを見れば、救を求むるの書なり、荀晞是に依りて、屯操大將軍樂房を差し、軍を東界に駐めて、是れを聲援をなさしめ、次の日卽ち兵を集めて、自ら僞漢を征せんと云折から、忽ち緊急の文書飛ぶが如くに至る、荀晞卽ち折開いて是を視れば、乃ち鄴城の成都王、下す所の狀なり、其の中に言ふ、青州督護の胡文鄕と云ふ者、州兵と亂を作し、其の處の刺史華軼を殺死し、府庫の錢粮を刼し去りぬ、州の丞官王珉は、世族田芳が家に逃れたり、田芳、義によりて、計つて湖文鄕を殺しければ、文鄕が弟、湖文相、勇を恃み廣固山に逃れて、田芳が家を刼し燒く、是によつて州中大に亂れたり、はやく兵に將として討服へつべし、百姓を害せしむる事なかれとあり、荀晞是を看畢り、乃ち弟の荀陲と評議して曰く、今成都王の文書あり、然しながら湖文相は、州を亂ると云へども、扵癬の小疾、いまだ大病たらず、還て是漢の兵を退くるを以て上とすと云ふ、其の議いまだ畢らさるに、齊王の行文ありて又是を是す、聞いて見れば、荀晞を以て青州の刺史とし、荀暉を兗州の刺史とす、荀晞以爲へらく、兄弟二人ながら、兩州に刺史となり、次の弟荀昨をも又、臨朐太守たる事、心中大に喜び、遂に常山を救ふ心は止みにける、時に弟荀暉に謂つて曰く、漢兵此の回、必ず常山をば得るならん、然らば樂房が兵も回るべし、其の時僞是と共に、固く此の城を守るべし、又王賜に謂て曰く、僞は彼等二人を輔げよ、我は兵を帶びて前去り、廣固の地を平定めて、一月の期を過ぎずしてかへるべし、若し漢兵其の中に來つて、此の城を犯さずば、先づ臨朐に往て、渠の兵を將來りて、共に其の衆賊を拒げ、若し急あらば飛使を差して、我に報しらしめよ、我れ自ら來つて拔ひなん、王賜聞いて、今賊兵界に臨む、我が兵の他に去るを知らば、必ず來つて犯すべし、將軍若し爰を去り玉はゞ、此の城守り難からん、青州の自兵亂を作す、猶是勦へやすからん、三將軍吾と共にすゝみ去つて、是を收め玉へと云ふ、荀暉も王賜が言こそ是なれと同じける、荀晞聞いて曰く、然ん

ばあらず、吾しばゝ〳〵青州を謀る事多年なれども、いまだ其の便を得ざりき、天いま是を賜ふなり、今日の机自ら棄つべからず、我もしさらずんば、朝中別に一將を遣し、往て廣固を征せしむべし、然あれば我が功業兩ながら空しくならん、我は寔に兗城をば貪らずして、青州を貪るなり、汝懼怕事なうして、たゞ謹しみ守るべし、急に報げ知らしむる事有らば、吾自ら赶來りて、接應ぜんと言訖り、兵三千に將として、青州に往去りける、漢の細作探得て、此の由を詳に回り報ける、張賓は前後兩三使の口を、審に問ひ聞くに、皆是れ一般の言語なれば、心中大に喜び、乃ち劉聰を請じて兵馬を點じ集め、進んで兗州を取らんと勇みける、かくて張賓は即ち王彌、劉靈の二人に調合せ、各一萬の兵を引いて、兩路より先發す、自らは諸將と後陣たり、張賓乃ち令を下し、旗を掩ひ皷をやめ、直に袞州の界上百里に至りける、時に漸く苟晬はじめてこれを知り、急に衆を集めて是を評議す、王賜が曰く、我れ等其の必ず來り侵さん事を知れり、且喜すらくは城垣を繕ひをさめ、萬の器具はれる事を、但し一軍と一民と、一にして心を用ひて緊しく守り、書を修め人をして、大爺の方へ告やり、出て戰ふ事なうして防ぐならば、漢の兵我を如何ともする事なけん、苟晬是に從ひ、令をつたへ城を閉て緊しく守り、安りに

勤ずる事を免さずして、守り防ぎける、張賓が兵は城下に至れども、出て戰はねば食方なく、日をぞ暮しける、時に、張賓、王賜が謀を探り得、心中に思ひけるは、この處に日を久しうせば、苟晬が兵かへりて事むづかしきに至らんと、即ち軍將に命じ、地方の人を竟め訊口をとらへ、城中の動靜を聞知らんとて求めさするに、時を移さず一人を獲へ來る、張賓其の者の體を見るに、身に乾ける粮をつけ、腰に錢を纏へり、さまゝに詰り問へば、言語たがひて分明ならず、張賓いよ〳〵怪み細に搜るに、又衣たる衣の領より、書の一封をさがし得たり、即ち開きて是を看れば、苟晬が方より、苟晬が處へ送れる書なり、其の文に、青州定まると定まらざるとも、亦とかくに兗城を保ち玉へ、兄前に言ふ、寧、兗州は無かるべくとも、青州無くんばあるべからずと、此の決斷至て不可なりと云ふ語あり、張賓是をうちみて、笑ひ、顏に徐れば、劉聰是の體を見て曰く、軍帥書を見て喜色あり、是何の事なるや、張賓曰く、苟晬は無謀の漢なり、たゞに門をとぢて出でずば、兗州城堅うして、一時に是を攻むるとも克たに、若し攻むるほどならば、必ず多くの百姓を傷らん事をと、是によつて心甚だ惘れむ處に、偶此書を得て、又に血ぬらずして下さん事を、是を以て喜ぶなりと、乃ち劉聰の耳に付けて密にかたる、劉聰言を聞いて

大に喜び、次の日乃ち大に兵威を張り、伴りて城を攻むるの狀をなし、一連いて此の如くする事三日に至る、苟晬城に上つて、敵の軍容を觀るに、王、劉、閼、張の諸將、城下に在つて往來し、翔翔る其の形勢、尋常ならぬは、猛將の多きことよと思ふにつけ、心中大に懼れける、張賓は陣寨に在つて、敵城をはかる、時刻は今よりと、乃ち假の書を寫し、其の字を汙濱げ、字蹟封印の正しく見えざるやうにし、一精細れて能く言ふ軍士を令して、密に是を瀕めさせける、軍士東路より遶出で、兗州城の下に至り、門に向つて大に叫ぶ、守軍是を見て、繩を放つて是を引上げ、苟晬が軍中に至らしむ、其の人告げて曰く、小人は是れ大老爺の差す所なり、乃ち密書爰にありと、膚につけたる書を取つて呈上る、苟晬封を拆いて是を看る、其の書に曰く、

吾自綏兗州、以爲唾手平賊、止帶二千人馬、賊子探吾兵少、復糾亡命、構親黨、衾夜入城、刺殺州丞、竊據反、與吾抗對、昨合臨朐、弟昨之兵、攻之未克、今頓堅城之下、進退不易、探知樂房、胡禎、皆被漢兵所斃、常山已陷、不日將至兗州、聞得漢兵十分勇猛、與升、許戍、俱爲所擒、程杅、張牛、悉遭所斬篡、弦樂房敗沒、兗州兵少、弟雖有能、無吾在鎭

恐亦難守、不若且將部曲、襆送錢粮、來此青州、共破湖文相、庶免兩頭皆失、若得一枭湖賊、平定廣固、待吾入朝奏請大兵、再行恢復未爲晩也、吾非不欲賢弟昆勉効職、以杜群議、抑爲事有權宜固設不得已之言耳、其自裁之、

苟晬まさに、漢の兵勢の盛にして、敵し難からん事を恐れ、戰ふともよしなく、守らんもまた得べからずと思へる折ふし、一たび兄の書を見るより、即ち衆を召んで評議して曰ふ、今大將軍書あつて、我に敎へて兵を將ゐ、前んで湖文相を收めよと、我まさに此の城を立退きて、賊の爲に算らるゝ事なからんと思へり、吾等爰にありとて、大將軍來らずんば、終にこゝを守るに難からん、別紙從事の王賜聞いて曰く、大將となつて一たび外に出るより、君命をも受けざる所なり、將軍今や、君命を奉じて城を守る、理に於て是を論ぜば、心を盡し力を勵して、敵を退くる一事より外なし、然るを一紙の書面を、みだりに信じ、即時に大郡を棄さらんとは、是不忠の事か、且へ大將軍詔を奉じて、一の小賊を討ずる、城裡城外の人民、必ず簞食、壺漿を以て、王師を迎へん、豈に同じく是を防いで、孤賊を主とするの理あらん、且へ此の地兩ながら、其の相密邇に回り救ふこと能はずと云つて、反りて將軍をして、此の

大なる基業を棄てされとの議あらんや、是を以て見るときは、其れ恐らくは詐僞あらんか、荀暉是を聞いて、狐疑つて決せず、下屬の軍士に問ひける、下屬の軍士は、皆漢兵の强盛なるを懼るゝ志より、偏に逃れ去らん事を思へば、相集つて王賜を譖めて曰く、荀大爺の書に、何の詭詐かあるべき、ことに一郡の弱兵を以て、三十萬の强漢の兵と對をなさんと思へるや、吾等此の力量なし、明日請ふらくは、王別駕城を出で、當先して賊を退くるの一戰あつて、以て其の强弱を如何と試み玉へ、若しよく彼れに勝を得ば、是大爺の言も听くにたらず、當に力を協へて、別駕の下知にしたがつて、相與に守らんと、口々に喚びける、荀暉も亦衆士の言を聞いて、王賜に向ひ、別駕此の事如何と問ふ、王賜思ひけるは、みだりに言を爲さば、衆士の惡を生じて、身のため惡からんと、敢て返答もせざりけり、荀暉又衆士に向ひ、さて各々は何とか計れる、其の時下屬の佐官口をそろへ、荀大爺爰に坐さば、大爺の下知に任せ從ひ申さん、今は府尊の爰に主となり玉へば、兎にも角にも府尊の指揮にまかせん、府尊住つて城を守り玉はば、衆人も亦住まつて守らん、府尊爰を立退き玉はゞ、衆人も亦共に行きなん、もし又府尊の心疑つて決し玉はで、別駕に委任せられば、吾等焉んぞ、其れにも背き從ふまじきと、云ふには非ずと曰ふ、時に府判の官周旬、惟進出て曰く、王公の論もとより、正理の大義にして、是れ金玉の言たりと雖ども、しかしながら今衆人の心、書の爲めに惑はされて、皆々懈り志たゝされば、吾れ思ふに城を守りたりとも、はか〴〵しき事よもあらじ、兎角は惟に、衆人の意に任するより外あるまじ、荀暉聞いて、正に去らんと思ふの惜に決しけれども、王賜がこゝに察せんも恥しければ、とかくは、衆人に任せんと、再び衆人に問ふ、衆人一同に論じて、已に常山、鉅鹿の二郡、軍民を殘害せらる、何ぞ止に數萬と云ふにとゞまらん、諸將の功名、又安んか殘れるや、荀大爺此の所を思量し玉ふにより、漢兵の敵し難きを察して、權りに其の鋒を避け玉ひ、大兵の來らん事を請うて、復び軍功を勵まし玉へ、是一時民を愛し、軍を惜の意なるに、若し還つて爰に迷を執り、滿城敵のために、盡く魚肉の如く屠ちされんには、何の空しき名のためぞ、權りに青州に往き去り、大爺に見え、共に亂兵を破らん事、又何ぞ爰に、疑ひのあるべき事とすゝむれば、荀暉は安く此の議に從ひ、錢粮を收め拾ひ、其の府庫の寶をあつめ、軍民を率ゐ、車輿を押へ奉行して、夜るひそかに東門を開き、城をすてて走り去る、漢の巡軍、此の由を探得て、中軍に馳せて報げたりけり、漢の諸將共、これを追かけせめて、粮錢を奪はんと

罵しるを、張賓聞いて是をとゞめ、彼れ今吾に賺されて去るを以て、味方の德分數十萬の粮草を省きたり、かればかりは、他に宥し與へよかしと云ふに、衆將みな最と點首いて是に從ふ、次の日速に、兵士を備へて城下に臨む、百姓ども遂に香花をとつて迎へて、城に入れたりければ、劉玄明大に喜び、令を下して秋毫ほども、百姓を擾り掠むる事を許さねば、兗州の城裡、市肆の様かはらず、鷄犬も驚く事なければ、老幼男女、盡く悦んで、父母に逢ひたる如くなりけり、

通俗續三國志卷之二十一

曹嶷陵安與徐玖舒戰

かくて漢元帥劉玄明は、兗州城を拔たる捷書をもたせ、一將軍を差して、平陽郡に上せ、功を報ずれば、漢主劉淵大に喜悦あり、乃ち曹嶷、陵安の兩將を召して、汝二人は、鉅鹿に許戊を解てよりこゝに至る、それよりして徐將どもは、すでに二郡を下し、又兵を徐所に進めんとすと聞く、汝等もさぞ羨ましく思ふべし、今點兵二萬を、二卿に與ふるの條、早く去つて汲郡を取つて、晉兵の勢を分くべしと命あれば、曹嶷等、總兵の任を受け、大恩を感じ、遂に汲郡に赴けり、漢主はまた人を使はし、兗州に至らしめ、軍を犒ひ、ついで進み取るべきの旨を命せらる、劉玄明は漢主の命を受けて、乃ち衆將を聚め、評議を述べて曰ふ、今や主上、すでに曹嶷を差して、汲郡を攻めさせらるゝとか、我等も亦當に兵を起して、以て晉軍の勢ひを分たん、しからば荀晞が初めて青州に至るに乘じて、これを討つべし、其ゆゑ如何となれば、渠はじめて青州に至りて、民心未だ附さるところへ、俄に大軍を以てこれに臨まば、勢ひ必ず支へ難からん、若し青州を破るほどならば、山の東西は盡く我が有となりなん、いまだ天下を一統せずといふとも、此の如くはまさに大事を望むべし、張賓が曰く、いまだ輕忽く思ひたまふべからず、青州此の地、十二山河の固あり、古より三齊と號せり、殊に荀晞、叛兵を收めんと、兗の精兵を集めて臨めり、且へ吾兵の、兗州を破れる事を知りぬれば、定めて兵を練り、謀をかまへて、兗州をまた取り復さんとこそ思ひ議すらめ、況や我又かしこに至つて、かれを攻んに、大凡には働くまじ、彼れ老賊なもとより晉朝の智將、善く戰ひ善く謀るの將にして、殊には險を守つて待つならば、恐くは其の算るところに遭ひなんかなんどと、正議まち〳〵なる處へ、忽ち報ぐ、曹嶷が兵汲郡に至り、守將徐玖舒に遇ひて、軍戰す

ると雖ども、中々以て勝つ事能はず、兩家今持し守りて、かしこにありと、抑この徐玖舒と云へる者は、乃ち河東邑陽の人、徐晃といへる者の孫なり、萬夫不當の勇にして、乃ち陸地の舟を推す、又幕下に謀士あり、郭戎、字は鎭靖と云ふ、これ乃ち郭淮が孫なり、甚だ智謀の將なるゆゑ、曹嶷も全く苦み惱むと聞えたり、劉玄明、說を聞き徴て張賓に問ふ、張賓答へて、曹嶷すでに對手に逢ひ、誤つて挫跌のことあらば、山後一帶の地は、又みな騷動に至るべし、はやく將を撰んで此の處を嚴しく守らせ、自ら全部の兵を領じ、往き助けて共に汲郡をとる時は、幽州、冀州の西南界上の諸郡は、これ悉く我が有とならんも、豈善らずやと說く、劉聰これに從ひ、張敬、馬寧、刀膺をとゞめて、鉅鹿を守らせ、關山、李璫、王伏都を令して、常山に籠め置き、趙堅、廖全、支雄の三將を殘して、兗州の堅めたらしむ、張賓が曰く、兗州はこれ要害の地、諸郡を防ぐ堤なれば、苟晞が來り爭ふのとき、守り薄くしては叶ひ難しといふにより、關機遠、黃錫卿に、兵一萬をそへ、左右二總兵として、これを守らしむ、劉聰其の議にしたがひ、防守の所々よく戒しめて、我が身は大兵を率ゐ領じ、各將を撥つて齊しく汲郡を望んで急ぎける、さても曹嶷は汲郡に到りて後、徐玖舒、郭戎の二將が、智勇のすぐれたる事を聞知りければ、亦これを輕しとせず、心をせめて謹愼をなし、與に戰闘を合せける、いまだ勝負を分たざる處に、徐玖舒は郭戎と與に計議をなし、曹嶷を破らんと巧めるとき、探馬報げて漢帥劉聰兗州より、親ら大兵を領し、來つて曹嶷を助けんため、不日にこゝに到着すと云ふ、徐玖舒、是の由を聞き、郭戎に向ひ嗟嘆して曰く、曹嶷すでに、二萬の兵を以て來るだに、數戰すれども尙ほ勝つ事かなはず、又聞く劉聰前來ると云ふなれば、必ず謀勇の士多かるべし、誠に虎に翼を添へたりとは、この事を言ふなるらん、さもあれ何の計を設けてか、以てこれをば禦ぐべき、郭戎が曰く、其の大兵の未だ到らざるに先立て、一つの計をなし、曹嶷を擒にし去るならば、劉聰全く此地を正しく視る事能はじ、何の懼るゝに足る事あらんや、徐玖舒が曰く、何の趣きをなしてか、曹嶷をば擒づべきぞ、郭戎が曰く、此處の背山の內、一地名あり、喚で陷虎山と云へり、四方の圍み峙ちて、峭れる壁の如くなり、其の內只に一小路あり、これ洛陽まで通じたり、明日將軍これと出て戰をなし玉ふに、宜しく詐つて敗るゝまねし、背山を望んで走りながらに城中の將軍緊しく城池を守るべし、我れ今此の小路より遥に洛陽に回り、大兵を請うて二十日に過ぎざるうちに、此の賊を破るべしと宜へ、曹嶷この言を聞くならば、君

を追つて洛に入るべからじと、心をつくして赶け、徐事に心をうつすべからず、其の時我精兵、陷虎山の兩頭口に伏せ、其の谷に入るを待ち、砲を放ちて以て號令とし、伏兵ともに截出して、曹嶷をとりこめ伐んに、たとへば翼ある者と云ふとも、のがれ出づる事難からん、ましてや曹嶷を擒にせんこと、こゝに於て困死すべしと云ふ、徐玖舒大悅して、乃ち副將張郃が孫張驚を、兵五千に將として、東頭の谷口に埋伏せしめ、張貽に、兵五千を授けて、東頭の大道に伏して、賊の救兵を截斷しめ、郭戎は、兵二千を引いて、西頭の谷口に伏さしめ、我兵一たび出づるを待ちて、砲聲の起りなば、便ち伏を發すべしと、示し合せけるに、各々人兵を領し、計ごとを承けて、かしこに去りける、次の日になれば、徐玖舒兵を引率し、澁の寨を扣いて搦み戰ふ、褒安是を見て、出て徐玖舒が兵を要へんとすれば、曹嶷が曰く、爾ぢは住て寨柵を守るべし、桃子威は精兵二千を引いて接應となし、我が去て此の賊を擒にするを待て、褒安聞いて曰く、凡そ上に事ある者は、謹愼を要めて進退すべし、造次にすべからず、曹嶷が曰く、我れ自ら曉得たりと言て、即ち自ら兵一萬を引いて寨を出で、兩邊陣勢を排き開きて、鼓を擂し一陣に馬かけ出して曰く、爾ぢ前日の戰敗にも猶こり懼れずや、徐玖舒が曰ふ、何ぞ曾て爾が勝てるを見ん、此の如くの妄なる事を道ふや、もし本より爾が勝つべきの理あらば、今日箇の高低を分たんと云へば、曹嶷大に怒り、刀を輪して晉の陣を殺過るに、徐玖舒も刀を舞して敵を拒ぐ、二人昂々赶々として、盤旋馳騁せ、狠に鬪ふ事三十餘合に至れども、勝敗を分たず、徐玖舒は曹嶷が疑なきを料りしかば、わざと戰の怯き體にもてなし、能き時分ぞと馬頭を轉じ、東を望んで走りける、曹嶷は徐玖舒が負を賣ふとは知らず、のがさじと赶けたり、漸く陷虎山にも至り近付きぬと思ふとき、徐玖舒は軍士を叫んで、此の賊甚だ凶しく猛し、汝等速に城に回りて、郭參軍に說與せよ、我は是より洛陽に回りて、援ひを求むるぞと、郭戎が教の如く喚はりて、谷中に奔入り、曹嶷は是計なりとは夢にもしらず、其の言を聞くよりも、つゞいて谷中に赶け入れば、晉軍四方に奔散じ、徐玖舒は獨馬單身にて逃げ行きける、曹嶷は飛ぶが如くに馬を跑たてゝ、洛陽に入れじと續きけり、すでに陰中に至りて見るに、左右の山岸、壁の峭だちたるが如し、此にて徐玖舒が後かげを、已に見失ふ、こは意得がたしと思うて、急に馬轡を住め、身を回して返らんとするとき、砲銃の聲天を冲き、あらけなく响けば、郭戎、伏兵を下知して截て出て、馬をすこし高き處に乘あげ、叫んで曰ふ、澁將言を听け、今こゝに去る路

なし、速に下馬して、擒にせらるゝ事を免れよ、聞く汝ぢも亦、曹魏の宗派に係れりとや、何故に胡漢の中に身を陷せる、早く降つて英名を失ふ事なかれ、曹嶷きいて、汝等賊奴、魏に背いて晉に仕へ、敢て言辭を以て我に說くや、我れ恨むらくは立どころに、司馬氏の子孫を、三族の刑に罪せざる事をと云つて、兵を揮ひて衝去らんとすれども、石矢飛がごとく上より落つるによつて、前進事かなはざれば、衆兵を引て、東頭を望んで走り去る、此は又張嶷がために、谷口を把り住められ、箭の至る事飛蝗のごとくなる故、脫れ走る事を得ず、衆兵曹嶷に向つて曰ふ、兩頭俱に此の如く、把住められるれば、出ると云ふ事叶ふべからず、且らく人馬を空處に屯めて、以て火攻を防ぐべし、少くあらば、など救ひの兵の到らざる事あらんや、若し來らば喊を發すべし、其の喊の起るを听かば、我等殺出で、內より應じ、外に合つて、守の兵を敗るべし、曹嶷衆の言を聞いて、此の議に同じ、遂に陣を堅固に定めたり、曾より谷の中に入らざりし漢兵共、奔回つて此の事を襲安に告ぐれば、襲安大に驚き、即時に兵を揃へて救はんとす、桃虎聞いて、これ不可なり、恐らくは郭戎が詭計を以て、我が營を襲はゞ、其の粮草を燒るべし、豈にこれ危き事ならずや、將軍且らく營寨を守れ、我れ馳て、太子の軍中に往て救を求め、大兵一たび至らば、即ち圍は解けぬべしと云ふ、襲安これを信ずれば、桃虎は馬を飛して、只一夜の、いまだ明けざる間に、劉聰の軍に往き遇ひたり、桃虎は遥に劉聰の馬前に至り、告るに圍の急なるを以てすれば　劉元帥大に驚き、曹嶷陣に臨んで困に遇ひ、兵士粮なし、今すでに一日一夜なりとや、宜しく往て救ふべし、なほ恐くは運からんかと、乃ち桃虎に命じ、路引せよと、直に襲安が寨中に至りける、襲安大に喜び、寨を出て遠く迎へ、一同して營に入る、かくて曹嶷を救ふの事を議る、張賓が曰く、徐玖舒、まさに徐晃が勇あり、郭戎又郭淮が智あり、若し兵を以て先づ曹嶷を救はんとせば、還てこれ曹嶷を死地に處するなり、必ず迫られて禍に遭ふときは、可惜一人の良將を損じ了らん、今まづ王先鋒を遣し、徐玖舒が寨を劫さば、以て其の心を分たん、再び一軍を差し、城に近きの所にそなへしめ、遠く聲勢を張りて見せんに、かれ必ず防守の事を議して、曹嶷をとるに暇あるまじ、然らば曹嶷自ら免るゝ事を得べきなりと計る、劉玄明の曰く、郭戎は祖に勝るの奸なり、恐らくは來りて寨を救はずして先づ曹嶷を斃して後、固く城地を守らんときは、此の計豈にあやまらずや、且へ曹嶷等、父王の遣すところ、若し失する所あらば、是れ我等の罪なり、張賓聞いて曰く、既に是れ殿下過て思ひ玉ふ慮りなり、且先づ徐玖舒を破つて、以て曹嶷を救ひ、再び他の議を行はんとて、乃ち黃臣、趙染を喚で、分付して曰く、爾二人精兵、二千を帶びて、是の如くなすべしと、謀計を書せる帖を授く、又胡延攸、趙潘に、兵二千を囑して、是にも又書を授く、併しながら、晉兵曹嶷を攻めずんば、計をなすことなかれ、若し曹嶷が人馬の行動するを見ば、即ち當に砲を放つて、殺り出せと云ふに、四將計を領うて去りたりける、又王彌を喚んで、爾昆仲二人は、兵三千を引て、遥に徐玖舒が寨をうて、若し其の來り救ふ事あらば、務めて勝を取らん事を要めよ、若し其の來り救はずんば、其の粮米の車を刼して、これを運行すべし、其のかならず來り救ふべきを待ち、奇兵を用つてこれに勝つべし、此の事先鋒の身上に打まかす、但し戎裝等まで贏弱の形を示して、彼れに汝を欺かしめよ、好し奇功を立るにあり、王彌計を領うて曰く、徐玖舒もとより、其の驍將たる事を、吾これを知る、今我が手に遇ば、是れよき對頭なり、我に巧なる技飛鎚あり、能く百步を擊つ、しかれども一向に未だ曾て展用ひず、今若明に此の賊を斬る事能はずは、暗中亦まさに、彼を擊つべしと抗言すれば、劉聰大に喜び、慰めてこれを遣る、再び、劉靈、關防二人を召して、爾等は兵二萬を引て、汲郡堺上に屯し、虛しく聲勢を張大にし、城兵を驚かせよ、若し城中の兵出て救はゞ、防ぐべきの模樣をなすべしとあるに、各々皆命を領け、明日は徐玖舒を共に破るべき事を約しさる、かくて徐玖舒もまた、漢兵の來り救ふと聞えしかば、乃ち其の侄、徐良臣を、西谷に往しめ、郭戎が代となす、郭戎は又代を受て、早く寨に回り、徐玖舒に來り見えける、徐玖舒が曰く、曹嶷いますでに困められて、兩日一夜なれば、最早いかなりとも、人馬ともに飢うべし、以て先かれを破りて可ならんか、今救の兵も到るとこそいへ、先づ曹嶷を斃さずして、倘救ひに逢ふならば、前功狂けて費ゆるならし、さるに依て、吾れ此の黑夜に乘じて、柴草を持ち去り、砲銃の火具を以て、谷中を射、其の兵馬を燒くべし、縱ひ死するに至らずとも、我兵兩頭より攻入らば、必ず曹嶷をば擒にしつべし、郭戎きいて、此の如くなる事を須ひず、かくのごとくなる事を須ひず、兵法に云へらく、全卒仕を爲し、殘卒暴をなす、我れ兵粮あり、彼れ軍食なし、谷口を守り住めば、伐たずして自然に餓死せん、何ぞ籠鷄、枯肉に心を用ひ、力を用ひんや、公の爲す所によらば、未だ必して、士馬を折き傷らざるのみならず、且へ黑夜の吉凶計り難し、もし又白日にこれを行はゞ、彼れ又必ず救の道あらん、たゞ兵を嚴にして伺候ひ、彼れ來て谷口を攻めば、則ち谷口を救ひ、

又城を圍まば城を救ふ時は、他をも怕れず自らも破れざるなり、徐玖舒曰く、公の言理あり、我いま兵を帶び去て張駘を助け以て漢兵の救兵を阻て、且へ谷口を防ぎ攻むべし、公は又一軍を引いて、近城に至りて巡り看よ、以て城を攻むるの防ぎたるべし、此に於て各みな寨を出て、弱兵を留めて、粮草を守らしむ、纔に去つていまだ久しからざる中に、細作の飛馬報て、西北の角上、一枝の漢兵あり、其の兵の形を見るに、甚だこれ雄壯ならず、かれ等が言ふ所をきけば、我が寨中を劫し、粮草をとらんと要む、急に救をなしたまへと云ふ、徐玖舒笑つて曰く、此れ飢ゑたる鬼、食を奪ふの計、思ふに我を賺さんとするのみ、寨中、見に些少の粮、なんぞ意に介ばさむに足らん、他すなはち捨去らば、曹疑も亦飢死せんことを見んと云ふ、張駘曰く、此事不可なり、若し他に粮を取りさられ、寨をやかれば、我が軍心まさに固かるまじ、たとひ空營なりとも、亦即ち根本たれば、救ふことを爲さらんや、徐玖舒聞いて、汝が言是なり、早くこれを救へとて、兵五千を授けたり、張駘命を領うて、逕に老營を救護らんと行ける路にて、王彌に過へば、則ち風の如くに赶け、これを喝し止めて曰く、汝ち斬れん事を願へるの駭者、此等はこれ何のしかたぞ、儞さもあれ、大膽もの、徐、張の二將軍、名將世家たる事を知らざるや、王彌は、わざと王如をして出で戰はしめ、自ら門旗の下に立かくれて、事の體を見居たりしに、二將の戰法いまだ十合も盡さざる內より、張駘が勁敵に非ざることを、察し知りければ、馬を策つて直に張駘が傍に逼り、大喝一聲して、輕く猿臂をさし舒べ、やがて張駘を引捉へ、馬かけ出したりけるを、晉兵共此の勢に恐懼れて、皆こゝかしこと逃散りぬ、王彌はそれより、張駘を綑起て、晉營に打入り、粮車を驅たて推し出し、張駘をとつて、車上に綁へつけ、押して蒼山に去らんとし、以て徐玖舒を誘きける、晉兵の敗卒ども、急に回つて徐玖舒に告て曰く、漢兵張駘を擒にし、今一路より後に隨て押し廻り、蒼山に往て曹疑を救ふと見えたり、徐玖舒是を聞いて、何と那個、黃眉、綠眼なる、驍安と名乘る漢にあらずや、兵士の曰く、いや非なり、これ何人たる事を知らねども、出で戰ふ者を見るに、甚だ雄耀なるに非ず、たゞ口の中に言しを、近く聞けば、意鹿を得るに在て、却つて犬に慣り中つと、徐玖舒言を聞き、大に怒つて、甚等の賊子ぞ、敢て此の大胆なると云ひもあへず、卽ち刀を綽り馬に上つて、逕に小路を望んで走り去り、粮車を奪はんと欲し、忽ち王彌が陣に逐付き、其の兵の形を見れば、隊伍參差にし、蕩漾うて行きけり、其の中にも王如は刀を横へ、先きに在つて、徐玖舒が、

軍の來るを、退き避んともせされば、徐舒玖は、其の己を輕ずる形あるに怒り、馬を拍て赶け進んで立向ふ、王如も又刀を引いて、接戰する事二十合ばかりして、車をもつて推し轉らし、馬を回し走りゆく、徐玖舒すかさず追かくれば、王如はただに車の後を望んで、丞に逃れける、徐玖舒は張駘が、綁られて車の上にあるを見、大に怒つて、風捲、電轉ずるが如く馳せて、漢軍の中に衝き、まさに半も過ぎんと思ふとき、王如は馬を立回し、叫んで曰ふ、汝ちこの者を來り奪はんとならば、我が手中なる、這の把れる刀に、贏得て後の事にせよ、徐玖舒聞いて、大に打笑ひ、儞走らんとして路なければ、是非なく返つて強口するや、待て吾れ先づ儞が首を斬をはつて、然る後ち粮を取りかへさんに遲からずと、刀を揮つて進み、王如と接へ戰ぶ事、未だ數合に及ばざる比、王彌は後より、思の外に跑出で、にはかに逼り近づき、喝聲して徐玖舒に打つてかゝる、徐玖舒、急に頭を回らせば、早くも王彌がふり擧たる鐵鎚、背上に落かゝると看ゆるまもなく、徐玖舒は馬より下に打ち倒さる、王如是を見るより、刀を提げ、前に向つてにつこと笑ひ、あつぱれ人を殺すの祖宗たる、王飛豹將軍と、いはさるべきやと褒賞し、遂に首級を取つたりける、恰れむべし久戰千軍の猛將も、化して南陵の飄魂となりぬることやと、語り傳へて惜しみけり、

張孟孫計取汲郡

漢軍の先鋒王彌は、徐玖舒が易くはかるべきの將に、非らざる事を察し知ければ、彼の齊亭侯が、顏良を刺すの術にならつて、さしもの猛將を、一鎚の下に打くだく、ましてや張駘までを生ながら擒にし、粮車と共に押して大寨に至りければ、劉玄明これを見て、大いなる喜にいたり、將軍の此大功を建つる事、他日の高名、竹帛の上に垂るゝとも、あつぱれ韓信、彭越が下にはあるべからずと褒めたまひ、乃ち張駘をば遠にこれを斬て、軍中に號令させける、さて曹疑を救ふの議を如何と張賓に問たまふ、張賓答へて曰く、すでに黃趙、胡延の諸將を差し、兩路に徑を覓め、密に往て救ひ護すれば、必ず失悞なかるべし、今當に兵を發して、汲郡を攻むべし、さて一枝の人馬を命じ去つて、郭戎が蒼山の小寨を攻めしめ、大兵を以つて城を圍むと、わざと言を揚げて、敵城へ聞ゆるやうに云ひのゝしり、徐玖舒と張駘が首を以て、城兵を招き嚇させば、郭戎これを見るほどにては、必ず城に回りて、一家の眷族を救ふの心あるべし、其時吾兵を以つて、路口城門をとり住て、待つほどならば、彼れ天を沖の術ありとも、亦必らず逃れがた

かるべし、豈に曹嶷を攻むるに暇あらんやと云へば、劉馗大に喜んで曰ふ、事宜しく遲かるべからず、谷中の兵まさに饑極らん、張賓乃ち、關謹、張實、胡延晏、王如、四人に分付して仇を報い恨を散ぜん、何ぞこれを棄去る事をせん、古に云へる事あり、功は成難うして敗るゝに易し、機は得がたうして失ふに易し、今成にいたるの功をすてゝ、此機會を失せんは、亦計の、善なる者に非さるなり、郭戎が曰く、將軍の言固に理にありとす、吾また成功の毀なきやうを知ると雖ども、今いかんせん、徐府總すでに死して、城中の無主なる事、吾が弟、郭胡が城中に在りと雖へども、守り防ぐ才に非ず、將軍等の家の眷屬も、悉く城中にあり、今軍民すでに膽を失ふ、倘々一城池守りを失ふときは、但に二功の無きのみに非ず、累ひ吾等の族屬にあり、漢の兵こゝに至つて、曹嶷を救はさる所以の者は、彼即ち、輕きを棄て重きを圖るの計なり、我は是、末を貪り本を忘るゝの計たり、縱ひこゝろの儘に、曹嶷を捨得たりとも、一將佐には過ぎさるのみ、しかしながら、必ず彼が脫する事を惜しまば、將軍は徐良臣と共に、谷口をせめ玉ひ、下官に兵士半を分ち與へて、城池を回り救はしめよ、押付軍粮を催し來つて、將軍に應ずべし、是又急務なりと云ふ、張驚は郭戎が言の、理あるを思ひ、乃ち兵を分ち與へ、我身は又谷口に復り到りぬ、郭戎、衆士五千を率ゐ、回りて汲郡を救はんと、行事いまだ數里ならさるに、一員の漢

將、手に大刀を持ち、勢ひ猛虎の如く、狀天神に似たる男、要路を擁住めて來たりむかふを見れば、旗の上に、漢の左先鋒王彌と書したり、郭戎思ふに、必これ驍將ならんと、遥に自ら鎗を挺て陣を揖く、王彌すなはち截住め、戰上十餘合すれば、郭戎其力の抵き敵しがたき事をさとつて、速本陣に逃れ入り、頭盔をかへて、まぎれ逃れ回つて、城垣を保たんと思ひ量りける、王彌は、正に赶かけ去らんとしたりけれが、忽ちみれば、蒼山の地面にあつて、烟焰天を沖く、料るにこれ晉兵の、曹嶷を燒くにこそと驚き、即時に馬頭を轉し、風の發するよりも速に、兵士をすゝめて、蒼山さして殺向ひ、端適に曹嶷を救ひ得んとこそ採みたりける、剛ひて谷口に至りて見れば、果して張驚が曹嶷を攻めて、仇を報いんと欲したるに黃臣、趙染は、西谷の埋伏より起り、胡延攸、趙藩は、東口より殺出でたれば、張驚、徐良臣の二人、思もよらず、埋伏の敵勢に出合ひ、兵を引いて混戰ふの最中なり、張驚は思ふに、此まぎれに曹嶷が攻め出で、脫れんことを恐るれば、密に軍人を使し、兩頭の谷口より放火して、其の道を燒斷んと、兩の谷口へ二三百人の人步に負せ、かれたる柴草を取もたせて遣りたりける、曹嶷は谷の間にて、喊聲の震响くを聞き、是救兵の來り闘ふなりと聞知れば、衆士を激し殺て出づ、放てる烟焰、す

でに草澁に燃えあがり、はや數百步に迫りて、俱に悉く通紅となれば、曹嶷思ふに、恐らくは此火、谷內に近づくほどにては、遂に燒却せらるべしと、即ち衆兵に下知して曰く、今この火、樹木に及びなば、逃れ出るの方なく、擧くこれ死灰と成るべし、察するに我が救の兵來り、晉兵と外に在つて相戰ふならん、吾自ら當に先がけて、山を傳ひて山頂に至るべし、しからば定めて、事なきに至らんと語れば、衆人尤と同じ、各それより絕崖の藤羅に懸り、垂れたる樹木を攀つて、陸なせそと、密にのぼり逃れける、縱の間に軍人倶に、難なく山に上り得たれば、火もまた谷に滿々たり、曹嶷は昔黑莽坂の强盜たるとき、皆是步戰に慣ひたる故、遂に刀を提げ杖とし、步さゝへて山を下る、こゝに晉軍の副將、吳明、吳明の兄弟は、兵士五百を引て、此の半山の、險處を拒いで居たりければ、曹嶷が軍隊のここに逃れて出たるを見、あつばれ射とめて功をなさんと、左右の射手をすゝめ、すでに弓に矢をはげ、鎗を挺げて突きかゝらんとするとき、漢の前鋒王彌、兵を引て赶至り、正に曹嶷が横さまにふく嵐、烟煙はげしき際に立ち、進退路なきありまさを見、これはと怒り、無言ずして、牙齒を切り、廼ち衝いて、晉の守兵を殺りみだす、吳明は軍士に下知し、走せ散りて火を放たしむ、王彌恐らくは曹嶷が傷に遭ん事を思つ

て、親ら敵の射る矢を冐して進む、呉朗是を見て、鎗を提げて王彌をこゝに拒ぎ住む、何の對手にかなるべき、只一合に王彌が刀を架へあやまり、兩段となつて馬より下つれば、馬は駭き、曹嶷が軍隊にかけ込みたり、呉明驚き、魂魄飛で頭を抱へて逃れ去る、曹嶷はこれに依つて、多難一時に散じ、山頭を下り得るのみか、幸の集まる兆しには、呉朗が乘たる馬までを拾ひ得たりける、王彌はなほ殺り轉るに、曹嶷は一たん衆を引て、先營寨にかへらんと、路上に打出でたりけるを、呉明は張駕と一つに合ひ、飛馬を雙べて赶け至る、曹嶷これに怒りをなし、此小賊、吾が力の乏をはかつて、欺くと覺えたり、還てまさに戰ふべしとて、殘兵を令すれば、皆々足を立定めて待ちかけたるに、忽ち見る一將の、手に大刀を提げ、呉明等が後に隨つて、飛が如くに逐つけたるは、漢の將軍黄臣なり、張駕は其の馬の急なるを見、身を回して抵き住む、呉明は只道ふ、曹嶷が谷中に、三日在れば定めて、力疲れ氣脱して、思ふに與しやすからんと、戟を持て搶すゝみ、曹嶷を望んで刺んとす、曹嶷は刀を將て架へ住る事、五合にも及ばざるに、呉明を把て、安くも馬下に砍り落し、猶も進んで晉陣の中に殺入り來て、黄臣を助く、張駕は曹嶷が英勇なるを知りぬれば、一將こそ二將まで、手に餘る合戰、かなはじと思ひつゝ、戰を

棄て、馬を跑てゝ逃たりける、黄臣は恐くは此の漢を逃さんかと、急に大刀を按め、弓に箭を搭り張駕が背心を指定めて、滿發りて一矢を射る、颼聲の响く處、張駕は弦に應じて落馬すれば、晉兵共擁來つて救ひ護るを、黄臣、曹嶷の二人、大刀を把て砍り立るに、さながら瓜を砍り、菜を切るがごとくなり、晉卒是に驚いて、盡く四散に潰え奔りける、其間に乘じて、遂に張駕を捨にして、衆士を集めて軍を回さんとする所へ、先に當つて胡延攸、馬上に、人を横着へて至れるは、是れ何人と見るに、一方の敵將、徐良臣にてありけるなり、これより衆將一所になり、兵を收めて漢の大寨に回りけり、劉元帥大に喜び、遂に王彌を催し、勝に乘じて汲郡城に兵士を進めらる、張賓が曰く、一郡の城に於て、已に六員の將官を誅すれば、城中かならず空しからん、只疾に軍をすゝめて、郭戎を城内に入らざらしめば其の地を取るに易かるべし、はやく是を制しとゞめよと下知すれば、王彌、胡延攸、黄臣、趙染、疾に趨て汲郡に攻寄せたり、各々郭戎を遏むるを以て、今日の戰の第一の功に思ふこそ、狩りに赴く列卒の、得者を爭ふが如くなり、未だ知らず、其の鹿、何人の手に落ちんことを、郭戎は王彌と戰ひ敗れて後は、盔を易へ、暗に遁れて、偏に走り、城に入らんとのみ思ひける、漢將共は又、何と

ぞこれを獲へんと、遍く尋ね求むれども、更に其跟を見ず、關防等をはじめ、皆々城下に集り至りて、これを伺ふ所に、忽ち小軍一個、潜に城下に至り、門上の人を叫で、城に入らんとす、いまだ門鎖を開くに及ばざる内、關防は目早く意を屬けて、これを見るに、其衣袍卒伍の甲とも見えざれば、乃ち馳去つて大に叫び、郭戎賊子、倆ち走りて那裏に往かんとす、これ許戎を擒にしたる、關蕩寇將軍なるが、倆、我を心得たりや否やと曰ふ、郭戎これを見、只道ふ、果してこれ漢將、心得たりとて頭をさゝへて、城を遶りて走り去り、西門の下に至り、高く叫んで曰ふ、我これ郭參謀ぞ、城池を守らんとしてこゝに來る、快よく門を開けと、連に叫ぶこと四五聲すれば、弟の郭胡、自ら來りて是兄なりと見るより、急に軍士に令し、門を開かしむ、軍士ども令を得て、即ち城を下りて啓かんとするに、想はず漢將張賓、楊興寶、胡延攸、關防、一齊に奄に至りける、關防は郭戎を見知りたれば、馬を拍ち刀を輪して赶け去る、郭戎、復城を遶りて走り去る、晉軍は漢將共の、すでに門下に到るとは知らず、半城門を開いて、參謀老爺、はやく此に進んで城に入り、悞を致す事を免れよと叫ぶ、胡延攸、楊興寶、二人喚んで内に入らんとすれば、晉兵急に門を閉ぢたるを、楊興寶步飛つて搶き進み、一鎚に推きたれば、軍兵、みな跌き倒る、是に於て漢兵共、湧が如くに込み入りけり、城中の者共あわて譟いで、自ら相踐踏んで、死する者、相ひ繼りておびたゞし、郭胡は正に一城頭より來り看れば、兄にはあらで、漢兵すでに内に滿つ、これにては叶はじと、自ら西の門より城を出て、家の眷屬、女子、老弱は、こと〳〵く、これを縛ふに及ばず、皆打棄て走りたり、關防は一に郭戎を逃さじと追かけて、南門を巡つて追つきける、郭戎こゝぞ極と思ひ定め、身を翻へし戰を抵しけり、關防はしきりに逼り、猛喝一聲して、偃月の大刀を、おがみ打に頭上より、一下にきり落したりければ、郭戎が頂より、肩につらねて兩篇に別れたり、郭胡はひそかに、この形勢を見るより、千慮、萬慮、魂は天外に飛び、魄は空中に散じて、頭を垂れ涙を含みて走り行く、關謹は、兄の、敵將を斬るを見、自ら無功なるを、傀ち思ひける處に、遙に看れば、一人十餘人の從者を引いて、南を望んで去る者あり、定めて是は、郭胡が落行くなるべしと察すれば、關謹うれしく、獨り唉して、單刀疋馬に、轡を縱して赶け去る、郭胡は行くことすでに三四里も隔たれば、もはや敵兵の追かくるも非じと、暫らく韁繩を住め、城中の烟焔の、天を冲て起て見ゆれば、其の子や、從人も、共に泣きながらこれを見る、郭胡つくゞと打ながめ、只今ぞ城中の者共の死し盡くすらん、吾家

の眷屬も、殘り無く賊中に陷らん、これ如何なることぞ、これいかなることぞと、暫く嘆じて立つところへ、忽ち後面より、一員の大將、風の如く迅く至る、生得たる蠶の眉、紫の面に、三の牙、長鬚ある男、手に青龍の大刀を持ち、威は熊虎の如く、これを望るさへ畏ろしき猛將なり、郭胡等これを一目合するより、驚き喚いて命を逃れんとす、關謹疾進み高く叫んで、逆賊何に往んとする、好々、馬を住めて、吾怒を發するを免れよといへども、郭胡は再び後をも顧みず、頻に馬に策つといへども、たゞ一所に躍るがごとし、關謹やがて追付、背後より猛喝一聲して、手の起る處、郭胡が首にあたるかと見えて、ひらめく刀の光と共に、頭は馬下に轉びけり、それより諸將兵を收むれば、張寶は火を救ひ殺を止めける、是に於て汲郡は悉く平ぎけり、

通俗續三國志卷之二十二

漢軍攻邯鄲

爰に元帥劉玄明は、張寶と議をなして曰く、今我が兵威已に震ふ、須く當に此破竹の勢に乘じて、席のごとく中原を捲いて、大事を成さんとす、再び何の郡よりか進まん、張寶が曰く、邯鄲の郡界は、常山、汲郡の中に於て、先づ取るべきの地なり、併ながら、刺史龐德と云ふ者あり、乃ち是龐會が子にして、龐德が孫なり、されば生ける牛角を拔くの力あつて、百歩に楊を穿つの藝あり、其弟龐鷁が勇、又兄に亞の能あり、輕く千斤の石を起し、常に百斤の鉾を遣らす、趙人是等を畏れ、稱して邯鄲の二虎と名づく、恐くは一時に勝がたからんことを、若し此を釋て、他郡を取らんとせば、かれ等各處に會して、互に相救應ぜん、彼兄弟、是が外援となるほどならば、越に功を建てがたからん、如かじ逕に邯鄲に至りて、先二人を破りて後は、其餘は皆慮るに足らざらん、こゝに一件あり、我が諸將の內、肯うて能く命を用ふるあらば、方めて彼に勝事を待べしと、云ひもいまだ終らざるに、劉靈向前に高叫んで曰く、昨汲郡を取るに、何の寸功をも我獨り建立す、這回吾願はくは前部となつて、以て龐鷹を擒にせん、張寶が曰く、子通兄、よく此任に充たる事を得ば、是棋の敵手に逢ふなり、王彌、亦上言して曰ふ、先鋒獨り專にすべからず、彼兄弟あり、還是務の如く、將軍と兩路を分ちて進まん、倘我ともに相援けば、必勝を保たん、若し能く成功あらば、將軍に歸せん、劉靈聞いて、功は分ち奪ふべからず、我すでに承るの事、是を得んとは、何ぞ此理あらんやと云ふ、王彌が曰ふ、但し國家の爲に力を出すに、豈に勞苦を爭つて、報賞を圖るべき張寶が曰く、飛豹の言甚これ理り至極なり、曾て將を斬り、旗を奪ふ事をせずとも、焉ぞ功なしと定めん、張寶聞いて、吾弟の言是理あり、今しからば劉子通は、左路の先發、王飛豹は右路の先發、吾弟は摠後軍の救應たれ、黃郎卿、楊國珍は、左右の督護たれ、吾等と共に大軍を領して、互に心を用ふべし、慢を生ずべからずと云へば、衆將分を得て、次に依て進みゆく、晉の屬縣より、飛馬を以て邯鄲に報れば、龐鷹報書を見、僚佐を集會して、評議して曰く、今や漢兵境に臨む、戰ふと守ると何を以て先とせん、衆官の曰く、聞知るところ、漢の兵將甚だ猖獗したゝ是堅く守り、一人を渤海郡に遣し、救を求むべし、又一人は朝廷に入れて、連りに六郡の害に逢へる事を訴れて、請うて大兵を發し、同じく來りて征伐せしめば、此の劇寇を破らんと論じける、謀士、參軍張翮が曰く、何の議論を用ふるに及ばず、吾爰に一計あり、是を以て漢兵に敵すべし、若し賊兵を城に臨ましむる程ならば、守るも亦美らず、朝中の救兵も、是一時には倚怙みがたし、龐鷹聞いて曰く、しからば計安んか出るや、張翮が曰く、此の處紫石山の側に、一の地名あり、叫で馬服山と做す、險隘

寇に守るべし、漢兵必ず是より來らん、別に他路なければなり、然れば一將をして、兵士五千を相そへ、柵を立て守らせば、漢兵たとひ能く飛ぶとも、爰をば越え過る事を得さらん、兵法に曰く、先づ高きに據れる者は勝つと、正に李左車が井陘の路によつて、韓信、張耳を扼るの術なり、將軍望んで是を採れと、龐鷹言を聽て大に喜び、さらば參謀と吾弟は、城中にあつて守護せよ、吾は自ら彼の處に到りて、是を拒ぐべしとて、兵士五千を率ゐて、逕に馬服山に至り、寨柵を立起て要險を把り住め、漢兵の到るを待居たり、かくて漢の先鋒の將、劉靈、王彌、兩路より先部に當り進んで、邯鄲を襲はんとし、まさに紫山に、近からんとする處に、細作の者回り報ぐ、馬服山を去るに、只一條の大路あり、此の外にはすべて斜の徑、樵の路の由るべきもなしと、云ふによつて、二將はこれより一行に合して、軍を進めて押行けり、漸く馬服山に着かゝり、早その間遠からずと思ふ處に、前軍より又報けるは、山の頂上を望むに、旌旗、樹間に擺列れり、すでに晉軍の來つて、此の險を扼ると見えたりと云ふ、王彌聞いて、然らば味方も、且らく軍馬をとゞめて、まさに張師、孟孫の到るを待ち、評議をなして行くべし、劉靈聞いて、吾れ前鋒たり、水に遇はゞ、橋をわたし、山に逢はゞ、路を開くの勤めたり、既に兵の阻あら

ば、當に是を破るべしと、乃ち部衆に令し、銃砲火箭の類を按排し、親自ら兵を領し、往て其の寨を攻めんと、銃砲齊しく起して、喊聲大に震ひ、力を盡して打上る處に、忽ち听く、寨中金鼓の響き、天に喧しく、柵門を開いて、一員の猛將、殺奔りて山より下る、其生得、身長く面濶くして、目は烈なる炬の如く、鬚は鋼の針に似たり、一の大刀を把り、一疋の紅き鬃ある烈馬に騎て、聲を揚て大に罵り、反國の羌奴、關の西、成紀に龐凌霄將軍ありとは知らずや、何故敢て吾境を犯すらん、好々馬より下りて降を投せ、尚ほ軀命を保たん、稍くもし遲延らば、屍を碎く事、萬段ならん、劉靈聞いて、罵つて曰く、海口狂奴、汝許戎、典升、徐玖舒、張牛、いかんの者ぞ、吾が名を聞ても、首を縮めて遠く遁れん事を、敢て大膽なるや、まことに虎の鬚を撩るなり、龐鷹言を听いて大に怒り、即ち刀を舞し、衝殺つて陣を過ぐ、劉靈亦、蛇矛を擧げて刺かゝる、二人約して兵馬をしりぞけ、威を揚げ、狼に鬪へる形勢、塵砂を攪つては漢河に接き、白日光を失ひ、二人が交々爭ふは、雙龍の巨海を翻し、兩虎の平山に鬪しき如く、一連戰上、五六十合すれども、勝敗は分たず、軍士みな暗暗とし、何れが勝たんと心を惱まし、聲を助く、正に是棋の敵手に逢うて、相讓る事無きが如くなれば、二人左右に分れて、暫く息をつきけるが、又かけ寄て鬪上三十餘合す、龐鷹心に、劉靈が亦是れ勁敵なる事を思へば、一時には明に勝つ事能はじと、乃ち心に一計を生じ、一箇の破綻を賈り、むなしく一刀を架へはづし、馬を轉じ東を望んで、佯り輸けて逃走る、劉靈は是龐鷹が詐なる事を戞らず、後よりして赶け去る、時に龐鷹、頭を回し偸覩れば、劉靈が馬急にかけ來て、身の備をなさゞるを、心中暗に喜んで、こゝに大刀を按め、馬の轡をかいたつて、鞍の間に住め、ひそかに弓を取り箭を拔き、猿臂を伸べて筋弦を曳滿て、心の的を照し定め、一箇の箭を射て發つ、劉靈、弦の响を听得るより、身子を將て伏倒せば、其の箭、盔の纓に中るは、危かりし事なりける、劉靈怒り罵て曰く、狼心狗子、明かに戰ふ事能はずして、暗箭を射出す、豈是れ男子たらんや、吾れ必ず是を報いんと、忿恨し又赶く、龐鷹は劉靈か退かざるを見るより、乃ち連りに兩枝の箭を拔き、思ふに此者大凡にては射てとられじ、連珠貫射の術を以てすべしと、計を定め、復び雕弓を扯つて、又是れ一箭を射來す、劉靈、又急に身をすかし、一手に其の箭をとれば、間もあらせず眼もいまだ瞚らさゞるに、又一箭を面前に射來す、已に目に中るに幾かりければ、劉靈連に首を偏て、忙しく一口に咬住るは、奇世はやわざと見えたりける、龐鷹是を見大に驚き、此の賊此の如くに精利なるや、三箭みな看破せられたり、何ぞ能く彼に勝得んと思ひ、兵を回して寨に上りける、劉靈も又察するに、是を逐なば、其の再び射られんは治定なり、時遂に悞りなきにもあらじと、是も本陣に入らんと馬を回しける、龐鷹、此形勢を見て、又引回し、馬に策ち追かけ來り、劉靈が背後より、力を盡して是を射る、劉靈は弦の响を、听得るより、鞍に伏して丞に走りける、龐鷹は劉靈が箭に中つて走ると意得つれば、馬を飛して疾に追かける、劉靈も龐鷹が意を察するゆゑ、わざと走りて、彼を誘かんと馳せけるが、紫山の峽口の轉れる處に至つて、馬をとゞめ、是を伺ふ、龐鷹は我を計とは知らず、愼をも加へずして、只に勇のみをはげんで、輕々しく進むゆゑ、劉靈が伺ふに、曾て心の付されば、おほへず馬前を擔き過ぎ、俄に劉靈が立てるを見、急に轡を轉じて、是に敵せんとするを、はやくも劉靈一蛇矛を以て、左の腿に刺き中てたれど、甲の厚を著たるゆゑ、其傷は輕かりける、もとより落馬もせざりければ、身を轉じて走りたり、劉靈矛を起し、再び是を刺んとするに、龐鷹すでに隔る事其の間十餘步計なり、劉靈大に怒り、跡をしたうて追かけゝる、龐鷹は漸く山上に走り、寨に入つて柵を閉をはれば、劉靈も半山まで至り上りける、龐鷹是を見て、士卒に下知し、上より木石を滾りに下す、さしもの劉靈上る事を得ず、怒をおさへて馬を回し、山の底に歸りける、かゝる處へ、王彌前來りて接應す、劉靈が曰く、飛豹今少く早かりせば、此の賊を擒にすべかりし者をとて、其より一同に兵を收め、寨柵を定めて軍を止めたりけり、次の日早く張賓が軍も亦到り、元帥の大兵も俱に至れば、劉靈等元帥の寨に至つて、今日相戰の事を談じて、龐鷹が武藝、果して高く勝れたる事を稱す、張賓が曰く、吾すでに二龐兄弟の實を探り得るに、亦これ許、典、張、程が儕なれば、尤も爲易きにあり、惟參軍張翮のみ、甚だ謀略多きものなれば、まさに是をば計を以て取べきなり、元帥劉聰が曰く、今此の如きは、邯鄲を下すべき事、何に於てかせん、張賓が曰く、吾已に一策を下すに、此の處豈に陰平の險に似べけんや、險阻とは云ひながら、越えばこゆべき路も有るべし、明日劉子通、兵に將とし、趙文翰と馬服山の下に營寨をかまへて、龐鷹を拒ぎとゞめよ、今日劉靈が銳に中るが故、近きが間には未だ出て戰はじ、王飛豹は此隙に、步兵一千を領し、紫山より西の方なる、峽間の低き處を鑿開き、一道をつけよ、楊興實、龔安、曹嶷、三將の、步戰になれて善き軍、道をこえ過ぎ、直に邯鄲の境に至りて、大いて旗幟を張り、言ふらして邯鄲を攻打と唱ふるならば、定めて張翮來り請うて、龐鷹を城に回

らしめ、評議せよとすゝむるならん、龐德一たび此の山を下るほどならば、我が兵を以て、馬服關を攻め過る事やすく、平路を得てすゝむべし、其時關河、進み出て曰く、此の賊まさに城に回り入る事を免さず、道にてとゞめん事も、遅よかるまじきか、それに付いては、吾願はくは、馬を牽て、紫山を越え、諸將と同じく、路の上に寨を列ね、龐德が還るを住め置き、大兵の到るとき、前後より討て彼を獲つべし、張賓聞いて、倆の言甚だ吾が意に合へり、吾れ王飛豹をして、去りて山を擊り、道を開かしむるも、正に此れが爲の事なり、継遠あへて行け、尤も妙なり〳〵と賞すれば、即ち兵士一將に、五千づゝを與へて過さらしむ、重て通じ行の途とならば、大軍をも亦、是より廻すべき爲なりける、王彌、關河、楊興、賓等、兵を督して開き堀る、峻しき石をば擊りて去り、平なる處をばもとより動ぜず、已に三日にして道なれば、二人は山上に、登りつく事をば得たりけり、さてそれよりあなたに、向つて見てあれば、思の外に安らかなる、下り坂の平路なり、二人乃ち喜び曰ふ、此の處にだに至り得れば、もはや車馬を通ずるとても難き事なし、とて、遂に山を下り軍兵に命じ、力を竭して營塞を修理し、はやく張賓が方へ告けやりける、張賓聞いて大に喜び、此の如くんば、龐德を擒にするとの安らかなれとて、黄臣、胡延頴に分付して、倆二人は兵五千を引て山を越え、馬服山下を離るゝ事十里にして、中路の左側に、埋伏せよ、又關防と蕃將麻哈二人、兵を引いて同じく去り、路の右に埋伏たれ、さて又胡延晏、胡延攸は、兵五千を帶びて、儻に擊道を過ぎ去り、馬服山の下にかくれ、我等が關を攻めんとき、砲の响を相圖にして、倆が裏裡面の方より殺上らば、山頂の關は奪ひつべし、乘將みな計を領じて去る、それより過ぎて、第五日にあたるの時、龐德已に關門をば固得たり、人を遣し、城中の便をも聞ぬべきと思ふとき、忽ち細作の者、關門に上りて道ふ、漢賊ども何の間になしつらん、岐峽の澗の岩石を、擊ち通じて道をつけ、それより遥に人數を廻し、城を攻むるがゆゑに因て、さてこそ此關門をば、將軍と共に爭はずと云ふ、龐德聞いて大に驚き、此賊何ぞ、詭計の深き事爰に至るや、好し今は兵をゝさめ城に回りて、漢軍を防ぐべき事を、又恐らくは、事の實ならざるに、此の險難の地を棄んも如何なれと、しばらく思案にわたる處へ、流星のごとき飛馬、忽ち關上に來り告げ、即ち文書を呈むる、龐德封を開いて見れば、弟の龐鵠が手跡にまぎれなし、言ふ賊兵已に、詭道より境に入り來る、其軍容甚盛にして、次で城を圍む事きびしゝ、只恐らくは賊將謀り多うして、計りやすからざる事を、兄高山に拒ぎ守り玉

はゞ、兩頭より敵兵の、守り住む事を得玉はんに、粮草の継さるのみならず、事また危かるべし、如かず、はやく兵を回し、共に城を守り拒がんには、龐德、看畢りて、副將等と與に曰ふ、漢賊以て内に入るなれば、此の山に、據り守りても亦益なし、旌旛を山の頂樹木の間に挿んで、此をすてゝ城に回るべしとて、其の夜の四更ばかりに人數を收め、總に十餘人を山の頂に留め、關を守せてぞ去りたりける、劉靈、早朝に來て關を攻るに、關上寂にして、人喧なく、喊聲も合せず、矢石も下らされば、乃ち衆を呼んで曰く、龐德さめて、此處をば去りたるに疑ひなし、汝ぢ等が中一人、疾大寨に報げよ、吾は早く山に上つて殺入り、此の賊を追ひかけなんと、大に砲銃を鳴して進めば、胡延晏、兄弟は、内より又殺上りて見れども、關を守るの軍士も見えねば、虚しくとさせる關鎖を砍斷つて、劉靈と共に、兵を合せて山を下り、共に追て前進ゆく、張賓は劉靈が告げを聞くより、張賓、趙染、王如を命じ、去つて衆將を助け、しきりに龐德を追かけ走つて邯鄲に入らしむべからずと下知すれば、張賓等風の旋るが如く、火の燃ゆるが如くに、馬服山を去つて、龐德を赶かけたり、龐德は自ら關を打棄て、郡に回るの忙しく、箭の急なるに似、水の下れるよりも猶はやく、路の間に止らじと行をなす、いまだ十里も過ざる

將兵相列なること、城壁の如く相似たり、龐麼が曰く、吾賊奴に賺されたりと、乃ち奮勇して、東方に殺投つて、幸に走り去り、今は心やすしと思ひたれば、又關防が住つて、原の所にありけるを見、こは叶はじと引反し、麥地の中より傳ひ行く處に、又蕃の將麻哈は、此の形勢を見つけ、降魔の鐵杵を提げ、馬を飛して阻て拒ぐ、龐麼心中大に怒り、勇を奮ひ刀を揮て砍上げたり、麻哈抵住め、一往二來、三十餘合すると見えし、阻て當れども、つひに住めえず、龐麼が一刀に馬より下に砍落さる、龐麼は麻哈が首をも取らず、直に去らんと走りけり、爰に關防は恐くは麻哈が、龐麼を逃すべしと思ひしかば、兵を帶びて前路をとゞめて居たりしが、此の有樣を見るより、刀を橫へ從容道を遮りて曰く、賊將走る事を休めよ、汝麼と云ふ名は有りながら、翼の無きを如何がせん、たとひ凌霄と字するとも、霄を凌事はよも能はじ、たゞ速に馬より下つて、宜しく義に從ふべし、然らば汝が罪をゆるさん、龐麼聞いて、吾れ汝が浪の言を用ひず、然し汝が旗を視るに、已に知りぬ、是關羽が後たるを、關羽曾て襄城にありしとき、兩次びまで、我が祖の令明がために、既に擒となるべき處を、干禁が功を妬むにより、阻てられて相迫らさりしを、關羽、令明に敵する事能はざるゆゑ、猾りに詭計を以て水を決り、暗に七軍を淹し、吾祖の命を害せり、正に汝を掠へ、此仇を報いん、何の無禮なる事を得るや、俚本事あらば、快く出馬し來れ、關防言を聞き、大に怒つて、中に偃月大刀を輪起し、陣を掠めて進んだり、龐麼もすでに精神を奮ひ、大に半生の武藝を展べ、刀を擧て接へ戰ふ、二人は互に抗びを捉りて、兩馬を跑踏せて鬪ふ事三十餘合なれども、かつて分毫の疎失を見さる處に、忽然として喊聲天に連り、劉靈人數を帶びて殺て至る、龐麼是に驚きて、又戰をすてゝ走り去れども、關防は曾て逐はず、暫くは軍を止めけり、

關繼雄斬龐麼

張嶷は已に大軍を引て、四面八方より旌旗を密しく佈き、龐麼を把り圍んで、垓心の下に困しましむれば、龐麼も又、千法に脫れん事を求むれども、網釜にかゝれる魚の如く、遂には漁者の手に頰腴をさらさん事を思ひ、かくては叶はじと、密に小軍を陣中より脫れしめ、邯鄲に至つて救を求めしむるに、小軍士あやまつて、漢兵の爲に捉へられたるを、漢軍より送つて、張嶷が陣につかはしける、張嶷は一目の間に、是龐麼が救を求むるの使なることを知りぬれば、自軍の巡軍の者を、目せして己が意をさとらせ、返つて虛腹立て巡軍を叱り、偃

を、龐麼も刀を以て、常に是を架ふるとはすれど、やゝともすれば開きあはせず見えたりける、龐麼とても叶はじとや思ひけん、戰を棄て、左に循うて突き去りける、こゝに又一員の步將、踏步しをなして躍り出て、手に大なる斧をとり、妄に進んで大に喚び、汝曾て聞知つたりや、汲郡を取たる、夔將軍ありと云ふ事を、今先鋒と爰にあつて、儞を待つ事それ久し、よもや免して走らしはせじ、早く下馬して、縛につけ龐麼これを見、よも大體にては、脫れがたしと知りぬれば、それよりは、落荒して、たゞに左の側なる、小路の方へ逃れさりたり、王彌等は、いかが思ひけん、馬を止めて赶はさりける、龐麼以て無事なりとし、心を放べ穩に行く事、いまだ五里には及ばざるに、猛く一聲の砲を打出す响きあるに、龐麼再膽を飛して、馬を正す處を、一員の大將、鐵騎五千ばかりを、一字に擺ひ開き、旗の上に金字の一聯を飄し出ゞるを見れば、武安扶漢勤、雄機立劉勳と書し、中間に、一大なる關字を縷にす、龐麼是を見、一驚を又吃しをはり、已に脫れ得る事能はじと、心を墜しける、關防時に聲を勵して曰く、儞が父、龐會が、昔日川蜀に入り、吾伯關平が家を、平らげ殺したる事を悟たりや、關將軍いま爰に在りて、儞を憶ふこと多時し、龐麼は關防が威風の凜々として、容貌の堂々たるが、手に又大刀を執れるを見、いかさまにも勍敵なめりと思ひ、合戰にも及ばず、たゞに逃るを勝ぞと覺え、馬を驟せて、右の側なる田畝を横に、跡をも見ずして走りける、穢に小徑を離るゝと思へば、一聲の砲嚴しく韻いて、閃き出る、五千ばかりの軍あり、旗上は前將に同じく、金字一對の章を聯ぬ、寫し見れば、五虎名臣裔、三朝老將孫と、中にも首たる一將、手に刀を持ち、路口を把留めて、馬を横さまに立跑せて、龐麼を待居たり、龐麼もとより、戰ふ心はなけれど、爰をも何とぞ衝き脫せんと、刀を輪してかかるを、關謹やかて接住め、二人の雙刀、並びにきり、兩馬交交馳す、戰ひ未だ十餘合にも及ばざるに、忽ち又、一枝の人馬殺出す、首將は、生得、胭臉、虎の項、額は獅子の如く、一領の長鬚、手に一丈八尺の長鎗をとり、聲は巨雷の如し、喝し來て、賊奴走る事を休めよ、龐麼聞いて、慌忙く頭を擡げて看れば、旗の上に、燕邛熊虎將、蜀漢帝皇親と大に書し、中間に、張涿州の三字あり、是前の張飛が後なるべしと思ひて、是をも敢て迎へ戰はず、空處を望んで走りゆけば、張實も如何思ひけん、是も又赶けされば、龐麼はそれより、南路に狗ひて走りける、かゝる處に、遥に旗旛を飄動すを見れば、露し出す、大字の十箇あり、讀て見るに、胡延、原姓魏、附蜀再興羌とあり、其の下に兩員の大將、雄威まさに赫々にして、

我が後軍の者たるを見知らで、是を拿ふる事、甚しき仕かたなり、早くかれが、細をとけと云ひ付け、さて又彼者に對し、儞ち此箭を以て、晋將と見ば射てとゞめよ、一箇に重賞を與ふべきぞと、わさと漢軍のしるしとして、通路に障なかるべき爲に、大將の一枝の矢を、そらしらぬふりして與へ、晋の小軍をば放ちける、小軍は是より漢陣中を過るに、若もとがむる者あれば、張賓が取らせたる、矢を以て印とするに、たれ尤むる者もなければ、直に邯鄲の城下に至る時、いまだ未の刻には早かりける、漢將、趙染、曹疑等は城を攻め、晩哺に及ぶが故、兵士を引擧げ、寨營に歸る比なれば、潛にかくれて其の處を過ぎ、城下に至つて馬服山より、書至ると喚はりける、龐德きゝつけ、早く是を內に入れよと命ずれば、乃ち城に縋つて是を引上げ、其の說を聞くに、龐大爺馬服山の下にて、賊軍大兵、埋伏をなし、八面より圍むが故、垓心の下にて、已に龐大爺の危難、須臾を爭ふ、是に依て急に來つて救應せよとの事、書面も使の口上も、共に火速の事にあるを、龐德は以て備に問より、眼涙、泉流の如く、心頭火起つて、忽ち衆士に令し、人數をそろへ、張翮が方へ使をはせ、參軍を煩して、城を緊しく守りてん事を頼む、吾は正に城を出で、救をなすと云はしむれば、張翮慌てゝ至り、龐德を諫めて曰ふ、事は三思せん事を要めて、後悔せしむる事なし、今將軍その實否をも探り極めずして、倉卒に重圍を犯さんとす、兄の難を救ふの理、固に宜しく當れりと雖も、但し恐らくは、賊の詭計多ければ、又兵馬を以て將軍を圍みとゞめなんに、那時進退救ふ事能はじ、豈に兩ながら、其困を受るに非ずや、且へ大將軍龐大爺は、萬夫不當の勇ある故、一陣の能是を憚かす處にあらさらん、然し連夜で、渤海に人を往かしめ救を求め、其の兵の至るを待ち、三面より攻擊ば、全く保ちて失なからんか、龐德が曰く、勢ひ急なる事、眉を燃すに同じ、何の暇あつて西江に水を汲んや、若し參謀の言ふ所の如くんば、是吾が兄をして、賊人の手に喪ふ事を、甘ふと云ふ者なり、理に於て可ならんや、義に於て然らんや、若し爰に於ては、吾小卒と云ふとも、亦救ふべし、況や手足の危きをや、是れ手足の危を受くるを棄て救ずんば、豈に男子と云ふべきやと、遂に張翮が諫に從はず、鎖甲の軍兵五千を引き、吊橋を放ち下し、邯鄲を出さりて、龐德を救はんと欲しける、既に張賓は、晋軍の使の者をば、虛しらぬ體にて放ちやりて後ち、卽ち令を傳へて、關謹、關河、王如、胡延顯の四將を呼び來して曰く、適に我れ、晋の小軍に意を假して、放ちやりしは、其の報を通ぜしめ、龐德が來り救ふを待ち、一網にして二の虎を斃さんためなり、それ

に付いては、汝四人二つに分れ、二將は路に於て誘き戰へ、以て其の力を疲さん、二將は又要路に伏して、若し其の轉て脫けんとき、截り住めて城に入らしむべからずと下知を加ふれば、四人は計を領じて去りける、又人を邯鄲の漢の、寨の內に遣し、曹疑、趙染に報け知らしめて、龐德若し出救を見ば、汝等を圍むべからず、まさに兵を勒し、向轉りて以て、賊人の歸路をとゞめて、放ずべからず、若し再び龐德を走せて、城に入らしむる者ならば、是儞等が罪なりと云ひやり、又夔安を發して、引兵を相そへ、共に助けて、龐德を圖らしむかくて龐德は自ら城を離れて、疾に紫山を望んで、進む事いまだ二十里ならさるに、已に是天明の時候に至る、それより轉つて、平坡をすぎんとするに、遙に見れば軍を備ふる行列の大勢、道に當つて見えたるを、龐德は是を見ながら事共せず、遂に衝殺つて進み行き、人を剌死事其の數を知らず、軍人共是に恐れて、紛々としてにはかに亂れたつ、關謹は、我軍中の塵の起るを見るより、馬を拍て赶來り、大に叫で、無能の小輩、何ぞ軍卒と相競ふや、此くのごとくなるを以て、など揚威とは云ふべきぞ、大將關穉武爰に有り、敢て逆戰つて、我と勝敗を決せずやと、青龍刀を、輪起して、面たり劈ずゝむ、龐德も又鎗を挺げ敵し住めて、それより二人は、各武勇を施し、大に雄威をあらせて、刺鎗の過ぐる處は、さながら烏龍の洞を出るが如く、刀の轉じて光りをなすは、好是白虎の樹によるにさも似たり、約戰ふこと四十餘合なれども、兩樣いさゝか高下はなかりける、されども、龐德は一心に、兄を救はん事を要むれば、更に戰を懈はず、馬を勒して一條の血路を衝て走り行き、直に紫山の大道を望み、殺去る處に、偶見る一個の小軍の倒れて、草裡にあるあり、此の者龐德を見るより、うれしけに、其まま起あがり、忙しく叫ぶ、二爺是命を救ひ玉へと、龐德卽ち是に問ふ、大爺何れの處にありや、小軍答へて、前に見えて、稠密しく軍の取圍んぞる處ぞと云ふ、龐德きいて、今は備をも助けんずるぞ、吾馬の後につき來れ、かまへておくればしすなと、云ふ間も遲く、西北を望んで殺り去りける、行事五里ばかりにして、敵の一將擡出でたり、手に剛鐵の鞭を持ち、馬を跑立て大に喝して曰く、漢大將胡延季淳、爰に在りとは知らずや、汝ち何の處に走往んとするぞと、胡延顯に辭をかけられ、龐德亦鎗を挺て相敵す、聊か鬪ふ事數合にして、戰を棄て陣を奪ひて、直に漢の圍に赴き、遂には其中に突入つて、縱橫に殺り立つる、漢の軍兵、此の勢ひに辟易し、亂れ倒れて陣中に路を造す事數丈なれば、龐德それよりは、中々手にたつ者もなくして、漢軍を透り過ぎ、高く叫んで曰ふ、晋軍何に

在るや、吾は乃ち邯鄲の龐左軍なり、大將軍に報ずべし、道はいづれぞ知らしめよ、我今兵を領じて來り、爰に救ひ應ずるぞ、力を協へ一同に重なる圍を出で、城に回りて保護すべしと、小軍是を聞きつけ、早く報げて中軍に傳ふれば、龐德は言を听いて大に喜び、衆士を引き、南を望んで殺り出し、聚つて一處となり、兄弟二人の乘れる馬、轡相挨て威を奮ひ、敵軍を衝き破り、まさに圍を離れんとす、かゝる處に、忽ち見る一員の將、横に截りて前に至り、聲は巨雷の如くなるが、大に晉將を喝りて曰く、燕人張仲孫、爰に來れり、二賊はまさに何に往んとする、龐鵠怒つて引戰せんとすれば、張實すでに面前に至つて衝く、龐鵠も又鎗を挺て、二人の戰上三十餘合に及ぶ、龐德是を見て、並衝て、弟が戰を助けんとす、張實は龐德が救を見て、忿りを發し、勇を奮うて二將をとつて、相戰は、凄しかりける勇悍なり、張實が勇みて刺やり、忽ち龐德が腿に中れば、血ながれて靴に滿てり、龐德是をもの數ともせず、鬪益々つとめたり、張實も極めて鬪を勵しける、此兩人が勝敗如何と見る處に、忽然として喊聲大に震ひ、一員の猛將、風の如くに赶至る、是乃ち漢の左先鋒王彌なり、龐德は其の將の近くを見るより、由なしとや思ひけん、弟を呼んで路を奪ひ、城に回れと驅いだし、遂に漢軍の手下を

衝きて遁れさる、龐德は前に在り、龐鵠は後に馳せ行事二里ばかり、草のしげれる坡の上を、轉り奪りて馳せけるに、關防思ひもよらぬ處より、前頭にあらはれ出て、大に喝り住めて曰く、龐德豎子、先には何ぞ妄言し、今に至りて逃んとするぞと衝かゝる、龐德是を聞き、我なんの畏れ有つて、倆ち が如き兒輩に逃ぐべきぞと、已に刀を揮うて向へば、兩陣爰に暫く止りける、龐鵠は、前に進める味方の旌旗、路に欄へらるゝを見るより、さては兄の鬪ふぞと赶かけ至り、雙戰せんため、馬を馳せんとする處へ、後の方より、張實追ついて、爰に人あり何くへ往んとする事ぞ、勝敗いまだ知れざるに、きたなし回せと喚ばりける、龐鵠は張實に言をかけられ、行過がたくや思ひけん、馬を立て齒を切しばり、張實が來るを待たりける、すでに、龐德は關防と鎗を合せ、変へて三四六七合に及んで、又是を棄去んとすれども、關防は古藤の樹をからむがごとく、暫くも生息させじと、爰に取つてすき間なく、鬪ふ故、龐德も馳するに隙なく、大に怒れる目の睜み、圓き事楚玉を照らし激雷の山を崩すが如くなる聲にて、叱咤して曰く、胡に附る賊子、敢て吾に迫れるや、吾思ふに、冤ある家と冤ある家と、今こゝに相對す、互に今日勝敗を定むべし、我是彼を亡すか、彼又我に報いんか、治定は須臾にあるべしとて、それよりは走るべ

き念をとゞめ、平生の勇力を盡し、惡く鬪ふ事、三十餘合、前後を混して相爭ふ、四下の旗、日月を遮り、喊聲乾坤をも動じつべし、かゝる所に漢兵、見るが內に相重なり合すれば、晉兵はなほ惡らく相戰ふ、龐德が腿上の鎗傷、怒によつて再び血をはしらせ、傷又痛甚だしければ、心神こゝに惱亂するとき、關防が打太刀、大喝一聲して、身邊に近づくを、隔て開にあやまり、哀れや龐德は、忽ち關防が爲、馬下に砍て落されたり、さしも手だれ飛藝の名將なりと云へども、關防が偃月の剛刀を以て、力にまかせ截たれば、一聲の餘音もたえ、刀を飡ひ乃を飲むの、魂鬼とはなりたるなり、

關謹截龐鵠

龐鵠は張實に喚はられ、暫く馬を立つれば、早速漢兵共追付けり、中にも張實は、亟に走り前みて交戰す、されども龐鵠は、只に兄を救ふの意ばかりにして、張實と戰ひをなすの念ひなければ、十合斗して、戰をすてゝ走り脫け、いまだ龐德が陣にも至りつかざるに、敗兵ども來つて、大聲は只今漢將關防がために斬られて、首を取られ玉ふと云ふ、龐鵠は言を聞いて、悲と恐と交集りたるが、此の時仇を復すべき折にあらずと、亂の中に乘じ、敵中を刺き敗り、血路を殺り開き、遥に邯鄲城

中を望で走りける、行くこと漸く五六里にも成らんかと思ふ時、只聞く砲の响の、天に冲るばかりして、忽ち兩枝の精兵截り出でたるは、漢將關河王如なり、龐鵠特に勇をたのんで陣を突くに、關河が大刀のため、砍り住められて、過ぎ得る事あたはざれば、右の側に狗つて衝きさる、爰をば王如、拒ぎ阻てゝ、出づることを容さず、龐鵠怒つて大に吼え、命をすてゝ王如に渡し逢ひ、五合ばかりの間に、鎗を以て王如が足を傷け、遂には其の場を脫さつたり、もはや城を離るゝ事十里ばかりなれば、嬉しく馬を馳ゆく處に、一枝の雄兵、道路を把住めける、是何者ぞと見てあれば、旗上に金にて、當陽標偉績、漢水著雄名と書したるは、乃ち常山の趙左軍なり、龐鵠是を見るに、是れ邯鄲を攻打の、大將たることを知りぬれば、敢て陣を衝くべからずと、縱に道を轉りて行くに、又見る關謹が、手に大刀を持ち、高聲に叫んで曰く、龐將軍速に馬より下つて、家の眷屬を保ち全うせよ、如しかく云ふに從はずは、悔ゆとも恐くは及ぶことなけん、關某爰にあり、汝を待つ事久しかりつ、先には汝に脫けさられたり、這回は決して相ひ免さじ、龐鵠今は早力疲れ心怯うして、料るに敵しがたからん事を思へば、兎角に走り去らんと欲するを、關謹が馬すでに赶け至り、近づく故、龐鵠もせんかたなく、鎗を引いて力を竭

し死戰をなす、戰ひ五合もせざる處に、漢の先鋒の大將劉靈は、馬を躍して高く叫び、繼武しばらく吾が到るをまて、今かれを活ながら擒にせんぞ、われに一の功を讓れ、汝が兄繼雄、已に龐鷹を斬りつれば、これをば他門に得させよと云ふ、龐鷂言を听くより心慌しく、急に鎗を用ひて、關謹が刀を架へ開き、身を轉じて走りゆく、關謹大に喝し赶け去る、龐鷂馬を轉じて走れども、遂に關謹追付て、手に大刀を起して、背後より斬りつくると齊く、馬より下へ落れば、關謹つゞいて、首打落し取りたりける、哀れなるかな、龐氏兄弟、關家の兄弟に、仇を報い終られたる事よと、皆人是を嘆じける、

通俗續三國志卷之二十三

劉元帥下邯鄲

劉玄明軍師張賓は、衆〳〵の兵將に命じて、龐鷹を紫山の中路に於て、これを圍ませたるに、龐鷂が來り救ふの事を聞き、張賓すでに城を圍める諸將に下知して、同じく救ひの應をなさしむと雖も、未だ勝敗の趣をさへ計られねば、もとより二龐の既に討れたる事を知らずして、劉聰、張賓ともに、これを覺束なく思ふの處に、忽ち見る一將の、馬を飛せて漢軍の營に入り、直に轅門に至り、馬より下り、刀を挿はさみ、手に龐鷹が頭をとり、上り前んで呈獻す、これ乃ち左副先鋒關防なり、劉玄明大に喜んで、其の戰の由を問ひ終り、軍政司主簿の官に命じ、署して邯鄲第一の功を取る、かゝる處に忽ちきく、鈴鑾の响く處に、馬を飛せて轅門に入る者あり、肩に青龍刀を横たへ、手に紅に汚れたる首級を提げ、馬より下つて遥に中軍に入り來る、これ右翼將軍關謹なり、即ち首級をもつて、獻上して曰く、尊主帥と軍師將の令を承り、龐鷂を擒に仕るといへども、小將無能なる故を以て、活ながら麾下に致す事あたはず、漸くに罪を免るのみなり、劉聰、張賓が曰く、繼武不世の功をたて、奸凶の首をとる、當に上賞を受くべし、何の罪と云ふ事かあらんとて、關謹を命じ、邯鄲をとる第二の功に署されたり、關防、關謹は、王彌、劉靈が殊に慚る色あるを見て、乃ち言を誂りて曰く、功先後にあらず、事輕重あり、今こゝに兵を進めたるは、皆二先鋒、馬服關を破り、紫山峽の道を通じ、衆將心力を協へて圍み止めたる故にこそ、此の二賊を梟きる事を得たるのみ、あに某兄弟敢て妄りに、頭たる功を奪はんや、王彌、劉靈の二人は、此の言に慚ぢ、且つ悦び、將軍兄弟、奇功を建つるを以て、此の如くの謙退、孟

之反も多くは、及ばざる處なりと云つて、互に相和し、謙讓の道あるを、劉玄明喜んで、各に先づ十疋の綵段を賜つて、功を論ずる事は、邯鄲を下すの後を以て、定むべしとあれば、張賓は命じて宴席を設けさせ、慶賀を述て勞の勤を慰めける、かくて張賓、衆を聚めて評議しけるやう、すでに二龐首を授けたる後は、張翮一人のみなり、然しながら彼すでに膽を喪ふべし、各宜しく力を致し、心を用ひて可なり、時に王彌、劉靈、言を同じうして曰く、明日吾等、門を分つて攻うたん、察するに城中の兵士、粮米も多かるまじ、廣く取つてこれを破るべしとて、明日の早天に、衆の兵將三萬を領し、六門を分つて攻打に、反つて矢石を被る事多して、兵士の擊傷らるゝもの甚だしく、幾と云ふ數をしらず、一寸の功なうして晩に至れば、空しく兵士を回しける、さて陣案にあつて、皆々評して、張翮が守り禦の方を知れりと語るに、劉玄明曰く、固に此人此の如く多能なる事を、何を以てか、斯に功を成す事を得ん、張賓が曰く、明日まさに自ら往て城塹を觀、然して後に計を用ひ、龐賓に因て其の尅つべきの方をはかるべしとて、第二日にあたつて、張賓は、衆將と同じく邯鄲城下に至り、遍く郭外を廻りて、其城垣の堅固、雉堞の完く整へるを看過し、營中に回り至りて、議して曰く、此の城力を以て攻むべき者に非ず、趙國の都を建るのところ、其の地高うして緣るべからず、堅して發すべからず、先朝の李信、蒙驁、みな〳〵攻むる事あたはざりし所なれば、等閑の比にあらず、まさに奇計を以て計るべし、劉玄明の曰く、此の如くは計まさに安んか出でんや、張賓が曰く、臨機應變、時にしたがひて其の勢を看る、いまだ易く言ふべき者にあらず、但し味方の兵士を以て、毎に二時づゝを主どり、分つて六班となして、晝夜に怠りなく、廻りて輪のごとく、城にのぞんで虚しく聲勢を張り、假りに攻擊の樣をなして、明黑ともに相繼でこれを務めさせ、或は雲梯數十を竪てまうけ、以て其の兵民を賺し、かれ等が油斷なきやうに防ぎ守らせ、しばらくの休息をもなさしめず、此の如くする事十日ばかりに及びなば、城中の兵衆勞れ苦しんで、自ら懈り來り、又我れ此の城をはか〳〵しく攻め得さるは、無能なる故と侮つて、防ぎ守るの意疎なるべし、那時に至らば、吾自ら彼を下すの策あるべしと說く、劉玄明、其の言を善と稱して、乃ち諸將を喚び帳に上らせ、各攻手を分付し、王彌、王如は、子丑の時をうけとり、劉靈、桃虎は、寅卯の二時にあたり、關防、關謹は、辰巳の二時、張賓、關河は、午未に値ひ、胡延晏、胡延收は、申酉の時をつとめ、黃臣、趙染は、戌亥の二時を番として、半刻の間もなく、二六時中の行事とせり、

四方の門に對し向ひて、四個所の大寨を立てたり、又よく、歩戰の闘になれたる、楊奭資、襲安、曹嶷、桃豹の四將を大將として、掘手四百人を領べさせ、百人づゝを四門に分ちくばり、彼の大寨の內より、敵方へ見えざるやうにし、地の下を開き通して、敵城までの、地道を掘付けさす、又精壯なる歩の兵、二千人を撰み出し、門を分つて、諸の軍事の働きをなさしめ、少しにても漏し過つ事なかれ、功ならば重賞を與ふべし、違へる者は法を以て誅すべしと、堅く戒むれば、衆將計を領うて出でたりける、それより門ごとに、雲梯十乘、砲の架四つ、宛をしかけ、車四乘を輪と巡行させて、時更を戒め廻らせける、さて間もなくわざと敵を驚かさんため、砲銃を虛はなしに放てば、城には敵の寄來りて攻るぞや、破られて叶はじと、磚石を投打下して、密しく防ぎ寄るを見ては、やがて漢兵は退きけり、晉兵ども敵の退くをみて、少く休息せんとすれば、漢軍また城下に進み一攻せむ、攻手は大勢、時を分つて勢少なく、城中には人數、少く守るに隙なし、一連に相攻打て、對持する事、七日七夜に至りける、此の如くすれば、晉兵ども悉く勞れ倦み、行にも坐するにも盡く打眠りたり、城兵多く半はこれ民の內にて、壯なる者をすぐりて、城に上せたれば、素より職役のあるにもなく、身に奉祿を受けねば、義を勵む志もあらずして、すべて大に退屈し、白晝に偃仰ぎて睡につく、張翮自らこれを鞭ちて、勤めざる事を罪すれども、百姓共これを肯はずしてつぶやきけるは、朝廷の蒞き式に、民家はつねに錢粮を輸いれて、以て軍兵を養ひ、軍兵はまた地を保つて、百姓を衛る、今賊寇城に臨んで、軍兵これを退くる事あたはずとて、還つて吾等無用の民を打撲くや、張翮が曰く、汝等今城に上つて、磚石を拋つの役あり、しかるに陣に上り敵に對せず、何ぞ官將に違ひ忤ふ事をするや、敢て言を出さんとする者は、嚴しくこれ罪に治すべしと怒るを、衆の官將どもの曰ふ、今漢兵強く盛に、しかも更り迭にして攻むるを、味方は晝夜面をかへず、同じ人にて苦しみ勞すれば、我が衆人悉く疲れ倦むに至るが故を以て、困睡を致せるなり、しかるを罪しこれを撲かば、此方の理なきに似たり、百姓實に罪あらず、茲によつて思へば、惟に救を北海に求めて、權りに一時の急を援ひ、再び洛陽に往しめて、大兵を請ひ來し、此の賊を破りてこそ、參軍の功はなりぬべき、若し還つて此に死を以て守らば、必定してさいへがたけん、恐らくは事を悞るに至らんか、張翮聞いて、昔日齊の田單困んで、即墨の一城を守る事、一歲有餘なるさへ、猶ほ畏懼の事なく、後には遂に、燕の兵を敗つて大に打勝ち、忽ち齊の七十餘城をば、とり戻したりしに、今

縱に圍まるゝ事、十日にだも及ばざるに、はや許多の言を論ぜんやと、猛威を以て軍將を勵まし、復た小しの物を分ちあたへ、かれらを慰め諭して、兵民をなだめけり、然れども、衆の副將ども寄集りて、張參軍が偏に、己れが見を執り用ひ、肯て援を他に求めざるは、此の城の堅固なるを賴むに心ある故なり、若し漢兵ども、地道なんどを掘り、暗に城に至りなば、立どころに陷いれられん、豈一個の孤城の、援なきを以て、目にあまる強兵を防がん事は、心得がたしとつぶやきけり、斯て十日ばかりも過ぎける時、張賓は城を守るの兵共の漸々怠惰に及んで、嘆き、恨むるの事を探り知れば、自ら四門の寨の中にゆき向ひて、事を司どる諸將に下知し、鍬鋤の數をまし、人歩の新なるを入替〳〵、息をもあらせず掘らせけるほどに、四處の地道全く出來たりと、回り報たりければ、張賓乃ち四將に命じ、兵を引ねて、潛に地道の內を透りて城に入らしむ、但大砲一たび响くを相圖にして、即時に中より湧出でよ、城兵驚き、儞等を拒ぐを見ば、我また大兵を率ゐて、壞ある處より、押して城に登るべし、然らば張翮いかに防ぎ守る事を得たりとも、自ら支ふる事あたふべからずと云へば、衆將は令を聞き、乃ち門々に、大なる雲梯を竪て、大砲を架し上げ、十餘萬の大兵、悉く城下に集り、數十里の間を週し、環る珠の如く圍んで、喊の聲を發すれば、地に震つておびたゞし、晉兵ともこれを聞き、震き慄れずと云ふ事なし、張翮が曰く、弟張融は東北の二門に往てこれを防ぐべし、我は西南の二門に往て、守るべし、城兵の壯なる者は、守戰し、弱き者は磚を搬び瓦を運べ、石は拾うて城にあげよ、今日彼が一陣をだに退けなば、再び來りて攻むべからず、しからば、五日の內には、救ひの兵到りて追ひ拂はんぞ、しばらく心を盡すべしとて、兵を下知して城に上らせ、守り防がしむ、漢兵は母子の大砲を以て、一齊のつるべ打に點じ起せば、城の堞、城の門に向つて去る聲、恰も天の崩るゝに似て、百里の地土震動す、張翮は乃ち躬自ら巡り廻つて看るところに、城壘の壞らるゝ、其やぶれの所には人をつけ置き、令して謹み守つて、こゝ離るゝ事なかれと、早く壞れを調點はすれば、曹嶷は兵數百を引いて、思ひもよらざる東門の地道の中より湧出したり、張融おどろき、急に去つて囮て止むれば、又北門の內より楊奭資、これも地道の中より起つて殺出で、曹嶷と相合ひて攻入つたり、こゝに曹嶷と張翮と相戰へば、楊奭資は大鎚を揮つて、風の如くに打て至る、長融心慌しく、すでに走らんとしたりけるが、曹嶷が一刀を、左の腿に砍り中られ、身を翻して馬より落つ、軍士どもかけ集り、頓て捉へて亂に刺して殺しけり、晉兵どもと

れを見、あわてゝ張翮に告げたりける、張翮急ぎ城を下り來て、曹楊の二將を擊ち退くれば、又襲安、桃豹の二將、地道より湧出で、直に殺つて西門に至る、襲安、手に大なる斧を揮り、奮勇して亂り砍れば、死する者百餘人に至りける、晉兵ども此の勢に敵する事を得ず、悉く潰散ずれば、襲安は城門の關鎖を切り落す、張翮これを見て大に怒り、桃豹、襲安を相手に取つて、荒れたる城門の基の內にして、力をはげまし相爭ひかゝる處へ、小軍來つて、東門より漢兵混れ入り、味方の兵の殺死さるゝ者、既に半に過ぎたりと報ぐ、張翮聞いて憤り滿發つて、是非にこれを殺り退けんとて、無二無三に、討ちければ、襲安、桃豹も、これが爲に漸く門を押出されれば、又西門の外より黃臣、趙染、兵を領じて突き入りたるに、張翮も今は、事すでに壞に及びぬと知りたれば、城を遠つて走らんとする時、はや東門の間より、漢兵の進み內るを見て、いよいよ叶はじと思ひさとり、遂に敵兵の亂に乘じ、自家の眷屬、其の小弱なるをば打棄て、身を輕うして逃げさりける、張賓は、北門の方より、轉つて城に入らんとするに、敵の一將兵士百人餘りを帶領し、東を望んで走れり、正にこれ張翮に疑ひなきを悟りぬれば、城には入らず、馬に策うつて、張翮を追ひ去る、張翮は四五里ばかりも、落來りぬらんと思ひけるとき、後より、恐しげなる大將、其の身はたけ高き馬に乘り、手に長き鎗をとつて、威のあらき事熊虎の如くなるが、遁さじと赶けたり、張翮これを顧み看て、由なしと思ひければ、連りに馬に策うつて、後をも見せずして行き去つたり、張賓大に喝して謂ふ、賊子亂りに走ることを休めよ、張將軍特に汝を捉へんとて來れるぞ、倘今すでに城破れて、逃るは如何なる事ぞ、家の眷屬、みな內にあり、豈にすてゝ、これを失ふべき、早く馬より下りて降をなすべし、吾主仁德、遠く惠を播せり、惟よく汝に貸して、汝を殺さじ、休し得て自ら悞しめ、張翮が曰く、吾は乃ち大國の命臣、城地を保ち守る事あたはず、理まさに朝に回りて兵を起し、地を取復して賊を滅すべし、胡りの言をなす事をやめよと、乃ち踉をも顧みずして走り去る、張賓怒りて曰く、我好言を以て倘にすゝむ、倘反つて逆くを見る、よし〳〵雲に騰り、翼を生ずるの才ありとも、此の老張が手を脫する事を得べけんやとて、馬に策つて逼り進む、張翮が曰く、賊胡進退を知らず、かへつて混りを爲すにやとて、雙刀を舞し、馬を回して合戰ふ、思ふに渠が心に威勢を以て、張賓をおどして、これを退けんとしけるに、張賓は張翮を、元來ものとも思はねば、鎗をとつて橫さまに、張翮が甲の透間につき入りたり、張翮これをとゞめ得ず、馬を放つて逃げ去りけり、張賓、いかでゆるすべき、再び跡より追ひかけゝる、未だ百餘步にもすぎさるに、背後よりすでに鎗をつきあつる程にもなりければ、張翮大に驚き、身を轉して再び命を盡し、力を竭して相戰ふ事、未だ十合にもならざる間に、雙刀俱に打落さるれば、又かけ出して、走りける、張賓怒つて、口には似ずと、馬かけ寄せて張翮が頸をひつとらへ、生捕にして、我乘たる馬鞍の前輪にひつつけて馳せたりける、かゝる所に、忽ち見る、趙染は、黃鵠が子、龐洪を追ひかけ來りける、龐洪は命を期に走りけるが、天命や盡たりけん、意はずも張賓が馬の鼻さきへ乘りかけゝる、張賓は生捕を提げながら、大に喝りける、其聲の喚き雷の震ふが如くなるを、龐洪これを吃つて大に驚き、馬ひきかへし、側の小路より走らんとす、趙染さき立て、橫さまに截とゞめ、活ながら引き捉へ、馬より下へ引おとし、これも小腋にかいはさんで、張賓と共に、馬の頭をならべて城に入る、劉聰、張賓等は、令を出し、前々のごとく、殺戮をとゞめて榜を出し、民戶をなで安んじける、かゝる處へ、張、趙の二將は、張翮と龐洪とを捉へて、手々に提さげ至りたるは、あつぱれ勇英の大將やと、衆將士卒も諸ともに、皆々これをぞ褒めたりける、

劉聰議攻瀛州郡

漢の元帥太子劉聰は、邯鄲を攻め、百姓を安撫し畢り、圖籍を持せ、ならびに張翮、龐洪の生捕を相添へ、將に命じて平陽に上げ功を報ず、それより大に酒席を排いて、諸將を宴賀し、三軍に賞を行ひけり、其の後張賓等と議して曰く、今邯鄲西北の地、什に九つは望にかなひ、還つて瀛州の一郡のみ、西北の域に係り、吾が都尉の鄉にかゝれり、これを取らずんば有るべからず、其の故如何となれば、其の地武恒の北に居り、乃ち九河の會り、五壘の鄉にあつて、東は滄海に瀕く、西は太行に蹈き、南は滹沱に枕み、北は高河を佩びたり、地勢廣く濶うして、寔に南北の勝れたる地と云ひ、四戰をうけたる要害の場なり、此れもつて龍をつき、據をほつて幽冀を斷ち、河洛を防ぐべきの場所なれば、早く人數をつかはしてこれを取るべし、もし晉兵の來たり、こゝに力を協へて守るならば、動搖し難かるべきぞと云ふ、張賓が曰く、吾れ細作をつかはして、その審なる事を探らしむるに、此の郡佗處の比にあらず、其の太守、郭京は、乃ち郭嘉が後にして、極めて詭計多能なるゆへ、精しく兵を用ゆ、其の上また其の守將、大捴兵の呂苟と云ふ者あり、これ卽ち呂虔が孫子にて、副將李矯は是れ李興が孫なり、此二人は、皆孟賁、賈育が勇あつて、人つれに懼れをなし、彭越、奠噲にも劣らじとこそ稱すなれ、其の外參

軍に遇具と云ふ者あり、よく雙鎗を使ひなす、これ乃ち馮紀が後なり、文武の才兼ね備り、計謀深遠なる者ときく、又二人の副軍都護、一個の名は曹勒、一個の名は楊留と云へり、其曹勒は、專ら步戰になれたり、されば敵馬のこれに逢ふもの、奔りてかけ出さずと云ふ事なし、又楊留は、虎を降すの勇威あり、されば虎豹これを見るときは、敢て威を張る事を得ずとかや、此の數人は、もとより將家の子供なれば、他の郡將の類にあらず、遠つて別の圖ごとを爲すべし、これ輕しく忽にすべからず、劉璋聞て曰く、孟孫、僊ちは識高く量廣し、素より怯き事を見ず、前に數郡の謀ごと、劉喬を始めて二魁を斃すまでの工夫、尙ほ事とする心もなかりしに、今に至りて、何ぞ此の數人を畏るゝや、張賓答へて曰く、我れこれ怯きにあらず、夫兵法に己を知り彼を知るは、百たび戰つて百たび勝と云へり、此郡を取らんとせば、少き可なる事を欲し玉ふな、若し其成功を得る事能はずんば、恐らくは世人の笑語を貽さん、劉靈、王彌、言を揃へて曰く、吾れ大漠の兵を以て、自ら左國より起り、攻めて兌ずと云ふ事なく、戰つて負くると云ふ事なきに、何ぞ呂苔一人を懼れんや、まして李矯が類ひ、何の事をかなしてん、張賓が曰く、汝の言これ非なり、只恐らくは諸將の、吾軍の屢勝をたのんで、志驕り、事にのぞんで忽せにせん事を、故にこゝに猶豫するのみ、兩將重れて曰ふ、軍師慮りを休めよ、某二人願はくは前部となつて、先づ二堅子を擒にして以て進めん、若し功を成さる事あらば願はくは返つて先鋒の印を還し納めて、永く步卒となつて、其罪を償はん、劉聰これを聞いて大に喜び、卽ち諸將に命じて、其の部を分付けて曰く、瀛州は卽ち吾北境の要處、取らさる事を得ず、吾れみだりに此戰をなすにあらず、汝等諸將封侯を取らんと欲せば、只此の時にあるべし、古に云ふ、虎穴を探らずんば、虎の兒を得る事あたはじと、各心を等うし、力を協へ、共に不世の勳を建てよと令あれば、皆々應諾して退出す、劉聰は卽ち、精れる兵二萬を點じ、劉靈、王彌に屬して先鋒となし、關防、黃臣を左軍將軍とし、張賓、關謹を、右軍將軍とし、趙染、關河を、前軍とし、王如、胡延穎を、後將軍とす、楊興賓、婆妥を護軍となし、胡延晏、胡延攸を、都救應とし、曹嶷、桃豹をして邯鄲を守らしめ、すでに大兵を發せんとするとき、漢主の命として、楊龍、麥全の二人、粮米を調へて至れば、劉聰是を大に喜こぶをりふし、又忽ち報ぐ、黃命と關山は、荷晞が兗州に復らさるを見て、兗州はさらに、心元なき事なければとて、今こゝに部する處の兵士二萬をひきゐ來り、一方の手あてを承らんと云ふ、張賓聞いて大に悅び、今此の數將を添

得たらんに、などか勝では候ふべき、此の郡は必然として、下す事を得べしと云つて、遂に關山、楊龍に命じ、粮栅に監と定め、大兵十五萬を發し、旌旗日に蔽ひ、弋戟霜を排き、浩々湯々として、兩路を分ち、逕に瀛州に進發す、すでに郡の界上に至らんとするとき、瀛州の飛馬、本郡の太守郭京が處に至つて、此の事を報げいる、郭京大に驚き、乃ち總兵士師呂苔を請じ、ともに議して、其謀を定めける、時に李矯が曰く、胡賊無知にして、敢て我が境を犯せるや、さもあれ片甲も生て回す事なかるべし、其の時馮具、すゝみ出て曰く、我聞知る、漢の兵將には驍勇多し、輕しく事を計るべからず、議計して以て敵すべし、郭京が曰く、馮具の言しかり、今漢兵新に旺ずるの勢を以て、屢勝の威をしく、其の銳いまだ當りやすからず、下官こゝに於て議し計るに、まづ總兵大人は、みづから軍馬をひきゐて、前んで恒河の渡口を塞ぎ、寨柵を起て、其の渡る事を容すべからず、再び一軍を分つて、盤古灣の隘き口を塞がしむるならば、假令如何ほど漢兵多くとも、此處を飛過る事あたはじ、然らば我瀛州の安き事、泰山の如くならん、呂苔、言を聞いて大に喜び、即ち曹勒、楊留に命じ、兵一萬を率ゐ去つて、盤古灣を守らし、我身は馮具と同じく、遠精兵二萬を撰んで、恒河の渡口に前み、敬んで鎭め守る、又李矯が弟、呂苓と郭京を以て、城にとゞめてこれを守護せしむ、それより呂苔は、すでに崖の口に至り、人數を佈きくばつて、各々完く備へたれば、河中に於ては隻の舡をも、來往する事を免さず、ましてや渡の舡なんど云ふものは、悉くこれを取あつめ、呂苔が陣の前、北の岸に拘へ鎖いで置きたりける、すでに漢軍の前鋒劉靈、王彌の二將、河岸に至るときは、はや船一艘ものこさゞれば、渡すべきやう無りける、漢將ども馬を扣へて、河の向ひを見渡せば、夥しき有樣かな、河に沿つて柵の木を連ね、さながら城の要害のごとし、內の方には、刀鎗、旌旗をひつし上ならべ、甲冑の光り日に輝き、弓手は弓に矢をはげ、大砲を處々に幾等ともなく架し續けたるは、あつばれ其體飛禽と云ふとも、容に此の河を超すべきやうはなかりける、劉王の二先鋒、この有さまを見るより、みだりに過ぎ渡すべきやうもなければ、暫くこゝに陣を屯せよとて、人馬を休め、大軍を押し來るをこそ待居たれ、かくて人を差し、中軍へこの趣を告げたりける、次の日に到つて、關、張、左右の二軍もつゞいて到りけるに、王彌議して曰く、此の河を渡らんとしても、船なければ大栰を造りて、兵を渡さんとするに、此の處また山なければ、樹木を取るべきやうなし、村里に馳せて、林を斬り屋を毀たんとすれども、閭窮民の聚りなれば、これを忍んで、さながら斬り

劍ぐべきやうもなし、如何せんと問ふ、關防、張實これを聞き、且く後軍の到を待つてはかり給へ、いまだ遲きにあらずと云ひけり、かくて日すでに晡の時ばかりに至りて、劉璋等の諸將、總軍みな至り、こゝに營寨を下して陣どりける、王、劉の二先鋒入つて見え、椗の事を議して、此の事如何あらんと云ふ、張實が曰く、既に船の渡すべき無んは、必ず浮筏を造つて河を過ぐべし、關防答へて曰く、先に王飛豹、此の意ありといへども、但ある所の樹は、民屋四壁にたてる處の、柳桑梨柿槐梅の類にして、土地窮民の生業なり、又房屋の柱、棟、枯輕うして、料るに最も得易しといへども、これまた心の忍びさる處なり、故に軍師の來るを待てり、張實聞いて曰く、この小節を惜んでは、長く築名を成す事能はじ、今王道を行ふの時に非ず、地を爭つて以て戰ひ、人を殺して野に盈つるに、何の暇あつてか、これを痛むべき、事急迫に在り、亦まさにこれをなすべし、王、劉の二人命をうけ、次の日になりければ、楊興寶、襲安の兩將と共に、兵二千をひきゐて、村園の林に入つて、樹木どもを斬り運せ、上流に至り、水はゞの廣き所を見たて、大椗千餘を造り成す、其やう、椗の下面には、民屋を放つて、柱梁等の燥乾れたるものを並べて、これを沈せさらんとす、さて上の方には、新に取つて濕へる物を組したゝむ、此の如くこしらへなして、一切全く備りければ、推してこれを水流に入れ、流について下る、渡口の川幅、狹き處に至つて、蹄とゞめたれば、川幅一ぱいになつて、ひつしと兩岸に着きたりける、漢兵ども夜にまぎれ、索を以てこれを引きつけ、何ほど牽連れても動かさるやうに拵へたりければ、さながら平地のごとくなり、其の間絡繹なる事、二三里につゞきたり、其の上には、楊興寶、襲安、二人の步將、弓箭の手をそろへて、此椗を、敵より斬て流されざる用心に、守り備へければ、劉靈はまた軍兵に命じて、葦草を舖くばり、其上に砂を蓋ひしかせ、馬戰を通ずべき便をもとむ、次の日、呂苔はこれを看るより、大に驚いて、恒河の渡頭水急なれば、定めて賊は、盤古灣よりぞ渡らんずらんと思ひ、水を渡る事ばかりをこそ、專ら思ひよりたるに、是はまた思ひの外なる謀かな、只恐らくは賊中に亡命者多くして、身をすつる事を厭はざる故、此の如くの不敵なる事を工むなれば、寔にこれは、與に敵しがたき者共かな、吾當に親ら往いて、これを禦ぐべしとて、馮具を留めて恒河を守らせ、自ら兵士萬人に將として、往て曹、楊を助け、共に盤古灣の上なる、渡口をこそ守りける、其の地に至つて形勢を觀看て、兵にこれを分付けて曰く、河狹うして、渡るに安かるべきやうながら、岸高くして上りがたき所なり、敵來つて渡りをなすと云ふとも、安に矢を發すべからず、若人來つて渡をとらば、其の岸に逼り近づき、すでにあがるを待て、一齊に石を飛してこれを擊て、かまへてはやるべからずと下知すれば、晉將ども筏を取らんともせず、亂れ慌てず、しづまり極めてこれを守る、漢の元帥劉玄明、自ら河邊にあつて觀看し、衆將に令して曰く、吾瀛州の兵馬を知るに、心膽すでに怯れたり、味方の者共、力を用ひ向前で攻むるならば、岸に登るには、何の滯りもあるべからずと下知あれば、張實、いや〳〵此の說、恐くは非なるべし、此は是敵兵の逸を以て、吾勞を待つならん、其計、十馬を傷らず、弓箭を折かさるの意なり、必ず爭ひて渡をなさば、愼んで矢石を防ぐべし、呂苔、郭京は、共に能將なりと云ふ、王彌、劉靈、この由を聞いて曰く、これ何の妨をかなさん、吾れ親ら、當先してこれを破るべしと云ひもあへず、座席を立て心を掩の短甲を披きかけ、手に大刀を持し、持牌手五百人を、向先に立て、良弓の手五百、長鎗の手、五百人、楊興寶、襲安を兩翼とし、李璜、湖宓等、一齊に椗をわたつて進みゆく、劉靈、王彌は前に進んで、まさに岸に近かんと欲する時、忽ち听く一聲の砲の响きに應じて、箭の飛ぶ事、蝗の如くに至るといへども、王、劉等、堅甲を全く掛け滿つれば、矢石の到るを事ともせず、一番の弓箭、一通り射過るを、少く控へて是

を待つ、其射もすでにしづまれば、又逼りて岸に近づき、岸の上を見あぐれば、晉軍の中に、一步將の鐵甲ひたる兵、五千人ばかりを左右に列ね、恒河に沿つて下知をなし、流に臨んで石を下す事、さながら雨點のごとくなり、王、劉、楊、襲の四將、さしもの勇者なりといへども、岸高き事二三丈なれば、これを躍れども上られず、正に狼に鬪をなすうちに、湖宓すでに、一個の石に打すゑられ、鼻梁を碎き、眉心をかけて壞らるれば、身を仰いで倒れしが、遂に命ならずして死たりけり、王、劉の二將も、これには少し氣を沮んで、少く退後き、愁息ふことを爲しにける、呂苔親ら向前にすゝみ、砲銃の手、百餘人を帶ゐ、一齊に放ちたつれば、漢兵こもく、縱橫に亂倒れて、これを退くるに及ばず、中にも李璜は、左の掌を擘れて、再び陣頭に臨む事克はず、王、劉の二先鋒も大に懼れ、西岸に退き回りて守り住め、暫く樣を窺ひけり、

張實計燒晉木柵

かくて李璜が、其傷み輕からざれば、本軍に送りつかはし、醫治せしめ、告るに敵の防ぎ堅固なる事を以てすれば、主帥劉璋、大に驚いて曰く、晉兵此の如く利害にかゝる、焉ぞ能く河を過得さつて、盤古灣を奪ひ得る事をせん、此處に勝去ら

ずんば、瀛州郡をば、終に取るべからず、何の面顔あつて、父王には見ゆる事をせん、明日吾當に死を胥して、自ら進む事をなさんとて、遂に砲手二百人、大勢の中よりすぐり出してこれを用ひ、還りて敵を討しめんとす、張賓聞いて此の如く造次にこれを計るべからず、古に曰く、天の時は地の利にしかずと、吾れ晉兵をはかるに、數萬には過ぐべからず、これを以て如何して、我が大兵に勝つ事を得んや、只これ地の形勝れたるを得たるを以て、かれに敵し難きに似たり、砲銃まことに用ふべきなり、さりながら、こゝに一件の慮りあり、敵陣の要を見るに、惟木柵を以て、堅固をなす、これを引破らずして、敵兵と闘はんは、枉て力を費すのみ、且へ我河の下に居て、敵にかさよりうたれなば、恐らくは過つて、士卒を傷る事多からんか、吾去つて仔細を看るまで待せたまへ、其の後一決して、計を用ひ、これを破るとも、いまだ遅からずと云ひて、即ち王彌、劉靈、夔安、楊興資等が處に行つて曰く、舊のごとく備の中に、弓弩の手を多うして、鉾楯をこゝに守り定めよ、必ず進み戰ふべからずと、細に檢分する事半日にして、乃ち寨中に回り、密に桃虎に令し、軍士五百人を引ゐしめて、柴五百擔を取せ、流の上の僻かげなる處につみ置かせ、再び五百擔を取り來らば、營寨に至りて、これを用ふべきところを問へと云ふ、又慶

忝黄命に令して、容を旅客のごとく出たゝせ、はるか流の上に至る事、百餘里の外にして、空船數十艘を覓めて、貨物の荷を詐つて掩へつましむ、其間五六日も過ぐる内は、關を留めて出だざらしむるに、劉靈等心を焦し、何事ぞこゝに功戰を留めて、空しく日を昏すらんともだえ、乃ち張賓が寨に行き、戰はん事を請ひ求めける、張賓が曰く、子通いまだ知らざる所あり、我昨に敵の構ふる柵の開を見るに、皆是樹木を以て造れる處なり、人馬刀鎗、中々以て卒に、これを動し破るべからず、況や今この冬の際にあたつて、伐る所のものなれば、皆是槁かれたる樹木なるゆゑ、火を以て燒に易かるべし、これに依て、われ黄命、慶忝の二人に付いてなす事あり、彼等が船の至るを待て下知すべしとて、乃ち砲手三百人を分け、劉靈に隨はしめ、筏の上にあつて伺ひ候はしめ、吾が計の成待て、柵を燒を待て、しからば呂苔等、必死になつて、岸に上る事を容さじ、其の時一齊に岸を望でこれを擊たてば、其砲の勢に乘じて、先鋒等を始めて、衆兵も共に岸に登る事を得べしと云へば、諸將みな〳〵踴躍つて、掌を皷き稱讃して、軍師の神算、まことに諸葛武侯の下に在ずと云ふ、劉靈乃ち命を受け、退き出て、河邊の小寨の中に往き去りぬ、二日ばかりも過ざる中に、黄命、慶忝等は、小船ども二十四五艘と、大

船一艘とを、償ひ得來り、上流なる柴を推置く所に、これを著け置きたりと報げたりけり、張賓聞て大に喜び、船一艘ごとに、價の錢を倍し付け、船長に囑して曰く、此船今番、必して壞れん者なり、爾等我に替りて、此の一功を幹るならば、其賞なんぞ輕かるべき、必ず思惟すべからずと相約し、悉く上流の柴草を船に滿載せて、東の岸にあひ至れ、敵の軍箭、やぶる事あたはじ、艙を放つて押下せ、一更の後敵陣の柵に至るべし、只恐らくは其の中流に於て、敵の火箭を以て來り射ん事を、しかしながら吾料るに、敵軍の計此に至るべき事に非ず、一たび岸下に至り着くならば、爾等即ち、身を抽出て大船を伺つて、飛上り、走り轉れ、吾自ら兵あつて、其計を行ふべし、只西風の起る事有るを看ば、これ吾意に叶へるなりと云ひけるが、其の日に至つて、天甚だ陰晦かりけるに、劉聰が曰く、今此の西北の風あつて來るべし、時ならずして得べき者ぞ、丞に兵を催し、速に進べむし、張賓承はり、即ち麾全、黄命、關山、楊龍を命じ、先上流に往しめ、柴草を促し裝へ、張賓、關防に命じ、車二十兩を督し、草葦を裝へ載せ、灌ぐに麻油、硫黄、焰硝を以てし、其の夜もすでに一更の以後に及んで、黄命等は一齊に推將ち去る、其跟より火箭、火炮を整へて、これを燒立つべきため、各々砲手を向前にすゝめ、

これに次ぐに箭手を以てす、今夜東岸に先登せん者を、第一に署さるべしと定む、再び黄、趙、胡延の諸人を喚び、各々倶に盤古溝に到らしむ、王、劉、楊、夔を催し、關防、張賓と、一同に事を行はしめ、又關河、胡延顯に命じ、兵三萬を將ゐ、恒河の大柵を攻打しめ、これを以て呂苔が心を分たしむ、張賓自ら河邊に至り、晉兵どもの體を窺ふに、炬大明に燒たてて、岸に沿つて巡守らしむる事、甚だ嚴しく戒め、油斷の意は見えざりける、こゝに於て先づ王彌、劉靈二人は兵を將ゐ、筏の上に列つて、伴り渡の狀をなす、晉將楊留、曹勒等は、皆崖の口にあつまつて曰く、賊兵この頃十餘日、曾て以て出でざる、今日晩に乘りて來れる、思ふに死力を盡して夜渡らんの事なるべしとて、人を飛して呂苔にこれを報げ知しむ、呂苔是を聞いて、即時に自ら至りてこれを觀る處に、忽ち又小軍來りて、恒河の上渡攻擊る、恐らくは馮參軍一人にて、敵し難らんよしを報ぐ、呂苔聞き畢つて、小軍に向つて、衆將官、意を用ひて謹み守れ、吾逐付行くべしと云へば、小軍は歸りける、夫より呂苔は自ら去りて、敵の虚實を看て來らんと、此を打棄て、遂に精兵二千を帶びて、馮具を助けんと、恒河をさして行去りけり、其の後盤古渡頭を攻討つ、漢將ども、晉の人數の一處に來りて防ぐを見るに、もとより渠等を

誘き進むべき爲なれば、大に喊を作りて、氣勢はなせども、又住つてかゝりもせず、曹勒是を見て、高聲に大叫して曰く、汝等鼠賊、ゆるなうして邯鄲を奪へども、我兵を發して罪を問はざるは、汝が大なる幸にあらずや、然るを何ぞ、乃ち妄なる思をなして、吾境を侵せる、好々退き去りて、大兵の來り討伐せん事を免れよ、劉靈聞いて曰く、豈たゞ邯鄲一郡のみならん、山西、山東、河右、三分にし、吾すでに二分を得たり、尚敢て大言するや、但爾が一城未だ攻拔ざるまでなり、只旬月の中に在つて、洛陽までに至らん、曹勒きいて、狂口鞑奴、あへてこの無禮なるや、今此盤古の渡頭は、古より此に在りて、神仙といへども、越渡る事のかなはざる難津なり、若し汝等小寇を心にいれて、威を逞しうせば、吾これ人に非るなり、されば閑すくるあまり、こゝに來れるぞやと嘲ける、かゝつし時に、忽ち西北の風起り、岸上を吹みだせば、晉兵ども眼花に目を閉ぢ、あたりも見えざるをりふし、黃命、慶全は、柴船を驅り出し、東岸木柵の傍にこぎよせたれば、關防、張賁は、柴車を推し去り、藥物をそろへ、火箭、火鎗千萬の數を以て、かの柴船へ射出し衝入るは、さながら流星の如くなり、晉將どもこれを見て、慌て譟いでこれを要へ救はんとするに、又恐る、漢兵共の岸上に、搶のぼらん事をと思量すれば、いたづらに兩端を持して、妄に動搖するばかりなり、されども副將、王虎、呂元に命じ、弓箭の手を將ひて前み、岸にのぞんでこれを、阻て射とゞむるに、須臾の間に柴草の中より、硝黃の氣噴き起り、烟の上る事數丈の高きに燃えあがりて、造りつけたる木柵に烟つきければ、其光の照す事、數十里の雲に映じて、おびたゞしき形勢なり、呂苔はときに恒河上の寨中に在つて、馮具と共に議論するは、漢兵ども爰にいかほど、岸上に臨みかゝつて、氣をはげまし、勢聲をなすとも、船栰なければ、此の水を渡る事は叶ふべからず、これ等はみな虛しく勢のみを張て、此方を勞かさんためなり、由なき處にあらんより、行いて盤古灘の賊を退けんと、二人ともに馬に上り、寨を出でんとするに當りて、只見る滿天の火、通じて一片の紅となる、呂苔が曰く、これは賊人の詭計を以て、吾が木柵を燒くと見えたり、速にこれを救ふべしとて、馮具と共に、馬に乘つて、飛が如くに先發す、時まさに二更にも、すでに過なんとす、かゝる處に、王彌、劉靈等、岸上の晉兵、亂れ竄るゝを見るより、乃ち砲手に下知して、一齊に擊かけしむる、其の聲一片に天にひゞき、山谷に答へて、地みな震動に及びけり、岸の上に立てる處の晉兵共は、砲のために打立てられ、交々横縱をわかず亂れ散り、自ら相踏みふんで死する者ども、あげて記すに暇なし、岸上の木柵今

は火光、照耀して、たゞ白日に異ならず、こゝに王彌等、分明に敵陣を見さだめ、乃ち箭手を叫んで、これを當先にすゝめ、自らは楊興寶、劉靈と共に箭の手の跟に立つて搶のぼる、又楊留、曹勒は、河邊に逼り相戰ふがゆゑ、漢將ども、一步も岸に上りすゝんで、勝を取るべきやうぞなき、然る處に忽ち見る一員の大將、身は一丈計の烏の馬にのり、手に丈八の鎗を持ち、勢は熊虎の如く、さながら天降殺神惡鬼のごとくなるが、晉軍の背後よりきり出づれば、晉軍共堵くもたへず、四方に散して奔り潰ゆ、殺したる屍ね、枕籍て、暫時のほどに積あげたり、誰か知らんこれ漢將の楊興寶と云ふ事を、晉の大將楊留は、これを見るより、迚に忙しく身を回して、敵對して打退く、王彌、劉靈等も遂に皆、平涯に上り衝くを、晉將、王虎、呂元、河を沿りて殺下す、又漢將慶全は、短刀をとつて東岸に殺り上る、王虎、これを慶全なりとは知らず、丞に是儞は何人ぞと問へば、慶全は答もせで、つきかゝつて近く前み、刀を以て王虎を、たゞ一打に擊て、馬より下に斬り落し、やがて其の鎗を奪ひ、其の身は輕く馬に飛びのる、呂元は後より、王虎が地下に死するを見、やうあしゝとや思ひけん、やがて馬を跑たて、遥に衝て岸の口に過ぎけるが、正に王彌と曹勒と戰をあはせ、水火を出して鬪ふを見、呂元脇より銅鈀を舞し

て打つて入る、王彌は是をことゝもせず、二の將を敵にとつて相鬪ひ、少しも退かず、かゝる所へ、劉靈とんで赶かけ至り、只一鎗に呂元を刺死し、やがてこれも呂元が乘りし馬を奪ひ、打上りてかけめぐる、曹勒はこの勢に膽をとられ、足ばやに本陣に逃げ入りたり、王彌は劉靈に向ひ、儞と共に殺みだして、岸の邊に到り、衆將の接應をなすべし、吾は呂苔を到りやぶらん、儞は曹勒を走らしむべからずと告ぐ、劉靈きいて心得たりとて、乃ち馬を回し、曹勒が陣後に出でたるを、猶追ひ去らんと走りける、其傍に張賁は、楊留、朱倫の二人を相手に取り、まつしぐらになつて戰ふを、劉靈見るより、先づこれを助けんと進みけり、楊留は張賁が勇猛なるを察すれば、敢てみだりに進まず、位をとる處へ、曹勒も陣中より又搶すゝむ、張賁は曹勒が、馬に乘らぬを欺き、力を盡して一鎗を刺き出す、曹勒はすでに鎗の到るを見、平地より躍起つ事、一丈餘りするに、張賁も出せる鎗を、收め取らんとする間もなく、曹勒が一刀に鎗の桿を中よりすつかと砍り斷る、楊留は、張賁が鎗の折るゝを見るより、馬を跑たてゝ赶かけすゝんで、これを一鎗に刺かんとす、張賁はまた、鎗の柄をとりのべて、來る鎗を打拂ひ、すでに危き所なるを、慶全は上のかたより殺り下り、喝聲して、賊奴何ぞ無禮なると、云ひも果さず、一鎗を楊留が

咽喉に刺入るれば、まつさかさまに馬より落て死んだりけり、張實やがて、楊留が鎗馬ともに奪とつて、縦に馬上に跨る處に、馮具は手に鋼叉を舞し、赶かけ來り叫びける、賊奴よくも敢て、吾が寨を燒きたるぞ、好々下馬せよ、倆を赦して殺さし、張實怒つて、小畜生、汝ち乃ち無名の下將、あへて張爺と抗ひ戰はんとするや、速に拜し降りて、吾が鎗を汚す事を免れよとて、雙鎗を兩の臂にかい夾んで殺り進みけるが、其勇を愼み守り、踈失あらじと威風をあらせて、敵と五合ばかり戰ひける中に、一鎗を馮具が胸に刺透す、何ぞ以てためらふべき、馮具忽ち地に倒れて死にたりける、曹勒は呂苔に會し、力を合せんと戰を乘て走りけるが、直に楊龍が馬をかけらせて到るに遇ひたり、曹勒慌しく刀を揮り砍入りて、與にこれと戰ふ事十合ばかりに及んで、楊龍がために、背心の甲の上より砍りあてられたれども、甲よければ傷は少もなけれど、たゞ大力に打倒されて、楊龍が身邊に觸あたるを、楊龍やがて曹勒が、衣の領に手をかけ、乘つたる馬の背に引上げ、活ながら捉へ、流の下へ馳せたりけり、呂苔は親らの前面を乘過る漢將の、馬上に横さまに一人を着けたるを看、疾く追ひさつて奪はんとするとき、喊の聲山岳を搖し、關防、黄臣、趙染、劉靈、王彌、胡延晏、數十員の漢將ども、皆々岸を衝て登り來り、縦橫に混れ戰ふ、呂苔はこゝに味方の五將、すでに戰ひ死するの告を聞き、勢ひの敵しがたき事を知りぬれば、今は敢て迎へ戰ふの心もなく、馬を勒し、直に路をとつて、瀛州に走り回りけり、

通俗續三國志卷之二十四

漢兵拔瀛州城

漢の諸將共すでに東岸にあがり畢りて、呂苔が行方を追尋ぬるといへども、呂苔はいつしか、落失せたれば、それより諸大軍みな〳〵怒り猛く、奮殺して晉兵共を砍たつる事、ひとへに瓜を剝り菜を切るに一般なり、但見る路の上には、城をさして逃げ回るの兵馬、ひきもきらず、これを察するに、呂苔も定めて此の中にこそ紛れめと、漢將共跟つけて、これを追去る、呂苔はすでに城に入り、門を閉て、緊しく守りたり、漢將共爰に至つて、十重二十重に圍み止めて、一滴の水をも漏さず、かくて人をして、劉元帥に此の事を告たりける、劉聰もすでに、盤古澤を過ぎ得て、心中甚だ悦ぶことをなし、衆を集めて賀しける處に、先鋒の諸將、すでに瀛州に至れりと報じ、元帥軍師を請うて、速に評議せんと欲する由を申す、劉聰、張賓すでに此報を聞くより、寨をも下さず、齊しく瀛州を望んで進發す、かくて城下に至り、營寨を下し安ふれば、衆將も入つて相見し、各功勤を報告たりける、劉聰これを命じて冊に記し、其賞を定め畢る、かくて次の日、漢將ども各々門を分つて攻打つと雖ども、呂苔、郭京、李矯等が、兵を嚴にして、守禦に逢て、十日餘を了ふるまで、寄手尺寸の功を立つる事なく、虚らに矢石にうたれて、死する者七千人、傷く者三千餘人と記したり、劉聰これを見、心中大に憂ひ懼れ、張賓とこれを議す、今我が兵士、堅城の下に頽れ、呂苔、郭京が多能なるを以て、雉堞甚だ固く、兵士の傷損日々に盛なれば、この後進退計つきたり、如何して此城を下し得る事あるべきや、張賓聞いて、吾亦これを慮るべし、昨日すでに、親ら城を透りて看過るに、只東の角の上にあつて、城垣新に葺め、灰石いまだ堅からず、以てこれを攻打つべし、今弱兵を將ゐて、緊しく西南の方を攻擊たば、晉將必然として兵を率ゐて、嚴く守らん、しからば東北の角は、きはめて軍兵少なかるべし、吾れ其の時却て精兵猛將をひきゐ、各々草一束を持せ、只西南角上の砲の震ひ、喊の聲聞しきの時、一齊に奮ひ起し、勁箭を以て、守兵を射退けしめん、よく歩戰する味方を撰んで、先づ城に上せ、衆將跟よりこれに繼いて、城門を砍り開き、大軍一齊に攻入りなば、自然に破れずと云ふ事なからんと云ふ、衆將は計を受けて去り、遂に西南の角に往いて、假に聲勢を張り、力を竭し、大に喊つくり、日の晩を俟ち、愈攻むる事急なりける、呂苔はこの由をみるより、李矯、郭京を催して、倶に西南の角に往いて、拒ぎ守るべしと云ふ、郭京聞いて、彼の處は公と李將軍、二人にて守防に足ぬべし、吾今敵の意を勘ふるに、西南の角には在らず、但東北の角を慮ると覺えたり、宜しくかしこを謹んで防ぐべし、われは東北に往來し、敵來て、味方の備なきとして、攻むべき處を防ぎなんと云へば、呂苔聞いて、公の言、甚だ善し、但し二門を見るに、今急なるは爰にあり、東北はもとより、何の動靜なし、吾おもふに、兩人は西南を守り戰ひ、一人はあなたこなたと、往來して相助け保ちなば、何の失かあるべきぞ、あに先づ緩處を守つて、急なる處を捨つるの理あらんやと云ふに、郭京もまた、呂苔が言に隨つて、西南の角へ、兵を引いてぞ向ひける、まさに此の夜も二更ならんとするに、西南の二門には、黄臣、王如等の諸將軍、兵に命じ大に喊つくり、皷うつて、砲を嚴しく打ちかくる、呂苔、郭京等力を竭し、こゝを破られては叶はじと、走り巡つて下知をなす、こゝに東北の角に向ひたる、寄手の大將、王

彌、劉靈の等は、西の門の方に當つて、砲の響の急なるを聞くより、乃ち軍兵に命じて、束たる草を將はこばせ、城について積あげたれば、倏ちに其高さ、一丈あまりに積起たり、張寶は大砲を架し起し、一齊に放たしむ、其の聲空中に鳴わたつて、天崩、地裂るかと思はれておびたゞし、城梁の、これに壞るゝ者、凡十餘處にあまりたり、王彌、劉靈、楊興寶、襲安等、臂に防牌を挽き、手には利刀を拔つれて、箭手を先にすゝめ、草の堆を踏み越えて城に上る、此處の守の兵、もとより些少なりけるに、大砲に打たてられ、悉く引退く、剛ひて縋に防ぎあらそふものも、又射箭雨點の如くなれば、遂に是に射しらまかされ、各々伏倒れて矢を避る、楊興寶、襲安、王彌、劉靈の四將は、この勢によつて、安く城垣を攀のぼる、呂苔は東門に當つて、砲の聲の大に震ふを聞くよりも、卽ち郭京に向ひ、果して賊兵のために賺されたり、公は此間に在つて防れよ、吾二人は東に往て救ふべしとて、飛が如くに疾至る、北門の守將李嬉は、王彌が短刀を持て、兵士共を赶け殺るを見るより、雙刀を舞し、馬を拍て大喝して劈頭ら予砍てかゝる、王彌はあまり急なる故、防牌を取つて、うち合せ戰ひける、爰に漢兵どもは、すでに城を拔かんと、晉兵どもを殺り立つるに、晉兵どもゝ、こゝ破られてかなはじと、下りさまに砍り倒して、漢兵を多く殺つて墜す、此の勢に恐をなし、少し引色に成りければ、劉靈、襲安、楊興寶の三將は、味方の兵に力をそへ、救ひ助けて殺り轉るにぞ、味方の武者いろ直りける、かゝる處に、忽ち大に、喊の聲、耳に震ふは、呂苔みづから兵を率ゐて救ふなり、劉靈頭を搔げて、王彌と李嬉と、死をいたして狼に戰ふを見るより、これは如何にと慌しく赶け去つて、これを救ふ、李嬉は二將を對手にとつて、少しも怯るゝ心なし、かゝつし處へ、一員の虎將、手に大鎚を舞して、打つて馬前に至りける、李嬉これをも刀を揮つて砍り除ひ、事とも思へる氣色なし、猛將其とき、汝ち步戰を懼れずや、われはこれ步戰萬軍、一人の楊國珍なりと名乘て、持たる鎚を打墜げ、李嬉が乘つたる馬の前足に中てたりけるに、李嬉電光の如く、閃りと飛下り、馬を乘て逃れける、王彌はこれを逃したることよと忿恨し、跡を慕つて赶け去る、李嬉は身を回して、抵り住めて又戰ひしが、王彌が爲に雙刀を打落され、遂に生ながら擒となるは、無念なりしことどもなり、小將呂合これを見、あまりに本意なく思ひければ、背後につゝいて赶け去り、これを取り奪はんと、搶かくる其槍すでに王彌が身に及ぶを、王彌はかくともしらず、李嬉をさしはさんでかけたるは、實に危く見えたりける、襲安は忽ち擒き至り、この由を見るより、大喝一聲して、斧を起るところ、呂合も又襲安がために、命をそさづけをはりけり、又呂苔と楊興寶と、戰ひいまだ五合ばかりなるころ、襲安、劉靈も、共に一所に、きりあつまつて、呂苔を攻む、呂苔これを事ぞとも思はぬ意に振舞ひけるが、倏に城門の下に於て、大に喊の聲あつて、競ひおとりたるは、關防、張寶等の大兵なり、二將も已に此の時と勇進めば、呂苔今は事早壞れたりと察しつれば、是非なくこゝを逃れさつて、城を下り、己れが家第に入つて、眷屬小弱までを引纏ひ、弟呂蒙に命じ、これを保護させ、吾身は自ら當先がけ、北門に往いて逃れ去る、こゝに黃臣兄弟は、西門に在つてこれを見るより、馬を飛せて、追ひ去り、はやく黃臣は、呂苔が、家眷を截り住む、呂蒙は銷を挺げ衝き走りて、殺ぬけんとしたるに、あへなくも黃臣と、只一合の夢の間や、馬下の春蒙いたづらに、路上の露と消えにける、黃臣は遂に、呂苔が家眷を驅り立て、又城下に至りける、郭京はすでに、城の持ちがたきを見、これも城より下り立て遁れ行く、呂苔は又、もはや城外まで逃出て、心慌しく性みだれ、己れが家眷の、敵の爲に奪はれたる事をも知らず、しばらく爰に馬を立て、後の方を望み見て、奈と呂蒙を、待ち曾する體なるに、忽ち見れば一將の、飛が如くに赶け至り、高聲に大喚し、呂苔々々、走ることをやめよ、黃將軍儞が家眷を生捕たれど、これを止々と、陷いるゝに忍びず、汝をして呼かへし、一同にまどはせんために、吾をして爰に至らしむと云ふ、呂苔、頭を擾げて猛と看るに、其生得すさまじき、方面大耳、顏は血を噴ぐが如く、五柳の長き鬚劍の眉、獅子の鼻なるが、手に大刀を起したてゝ、漸々と進前す、呂苔は彼につゝける騎もなく、たゞ一騎なるを跃いて、身を回してこれを罵る、汝ち既に吾妻子を陷いれたるとな、今この胡賊を生ながら捉へて、仇を報ゆるに非ざるときは、吾これ何ぞ大丈夫といはれんやと、二人それより刀を揮て接り戰ひ、各雄威を逞しうしたりける、但みる雙刀、雪片を翻へし、兩馬蛟龍を鬪はしむる、惡戰上三十餘合、いまだ勝敗を分ざりける、呂苔もとより勇威なりと雖ども、恐くは再び追の兵の來らんかと、心もとなく思ふが故、つひに刀を架し隔て、南を望んで走りける、黃命これを何くまでもと、尾について赶け走り、まさなし返せ、など我を捉へて、家眷の仇をば報いぬぞと、喚りながら追うてゆく、呂苔も今は背後より、いかなる失のあらんも知らざる恐れあれば、引回して戰はんと心づくに、はやくも黃命、振上げたる一刀、後より過たず、呂苔が肩窩に斬中られ、暫くもためらはず、身を翻して落馬したりける、黃命つゝいて飛下り、首級を砍りけるが、未だ取起得さる所に一人の晉將、手に盡載を持ち、馬を飛し

て馳至る、黃命是を見、刀を橫へ俟かけたり、忽ち听けば、彼音將の後より、高聲に叫んで、黃錫卿、この賊を放ち過ぐすべからず、郭京賊かへせ〳〵と云へる者は、劉靈なり、郭京後を見れば、劉靈勢ひ猛く進みくるに、かなはじと思ひて、馬を跑たて〻走れば、又向ふには、黃命ひかへて、我こゝに住め置くべし、子通、自ら來つて擒にせよと叫びける、郭京、前後に敵をうけ、如何せんと思ひけれども、只先をかけ破らんと、黃命が傍を走りける、黃命是を見て、遯すまじと、卽ち刀を輪し砍りとゞめ、三四合の中に於て、又郭京をも馬下に砍て落しけり、こゝに劉靈が馬追ついたれば、黃命それ首とつて、一般に功を幹てよといふ、劉靈遂に郭京が首を取れば、黃命は呂苦が首級をあげ、回りて嬴州城裏に至り、二人の頭を獻上す、劉玄明大に喜んで、此たび數里の軍兵を折き、湖宻を殺し、副將李璜が手を廢するも、皆是此賊ゆゑなれば、吾れ其逃去られんかと思ひ、心甚だ快よからざりしに、二將軍こゝに大功をたつる事、賀すべし喜ぶべしと命あつて、敵將の頭を以て、命を亡なふ將士に手向、祭り畢れば宴を設け、賞を衆將に行つて、乃ち人を差し、首級文冊を以て、平陽京に上つて、捷をすゝめける、

姜發兄弟與關心避蜀

爰に成都の趙歐は、趙王に逼められ、反逆を謀るのとき、己れ一人の働きになり難きを思ひて、姜發兄弟の者に賴り、かれ兄弟が願ふ處の、劉氏の後を、復び蜀の君となして、共にこれを尊宗ぶべしと云ふ事を、約し誓ひたりけれども、もとより其心、一旦の謀にして、實なき事なりければ、今に至つて其の事は、努々沙汰する事なく、却つて自立の思ひあるゆゑ、姜氏兄弟が才能あるを悅んで、家臣とするの意なるを、姜發は彼れが爲、徒に賺されて、山を出たることを悔む、されども若しや、彼が心の改まり、劉氏の後を立つることも有りなんかと、兄弟屢これを勸め、劉氏の後を尋ねて、民望に從はゞ、長く安堵の道ならんといへば、趙歐は、これを聊か承引せず、劉氏今すでに殄く滅びたり、其の子孫といへども、皆隨てあとかたなし、安樂公洛に入るの後、あに眞の其の子孫あるべきや、然れども、ゆる〳〵とこれを尋ね覓めなば、よしや正しき子孫ならずとも、其の庶流の姓氏つゞいたる者にてもあるべければ、しづかに事を計りなん、一旦に是を爲さんとせば、魚目を玉珠に混ずる、まがひ者を慢まつて、好なき不明の忠義をなし、返りて笑を他人に取るべからずと云へば、姜發は是非なく、座をは

立ちにける、其の後弟の姜飛と議して曰く、吾れ趙歐が今更匹夫の意なるを知る、何ぞや四方流民の族をあつめて、これを爪牙の英雄と思ひ、李特が等を結び納れ、賴みある羽翼とす、其の心を察するに、おのれ自ら此所にて、覇業をなさんと計るなるべし、吾兄弟心に願ひあるを以て、彼れに餌せられ、反て小人の爲に、賺されたるこそ口惜しけれ、豈に久しく此の間にあつて、彼が鷹犬となり、獸を逐の勞に役せられんやと慍を、弟の姜飛聞いて吾れ詳らかに趙歐を觀れば、まことに愚慮凡下なる性質なり、渠焉ぞ大業を成得べき、我れいまだ兄と一計を設け下し、此の匹夫を死し、其の後劉氏を尋ねて建てんに、何の難き事かあらんやと云ふ、姜發が曰く、これ不可なり、人すでに心を以て我に托す、しかるを今これを殺さん事、不義第一と云ふべし、且又、張、杜、許、衛の輩あつて、皆これが心腹たり、其の才尋常なりと雖ども、性つき剛强なり、又李庠、李讓等の外の援もあるなれば、善く圖ること成りがたかるべし、再び良策を思つて、事をなさんぞ好かるべきと云へる折から、忽ち見る、一人あつて、直に外より入り來り、長揖して曰ふやう、彦約兄、別れ來りて事久し、還つて相思ひ出るや否や、姜發は心の外なる、一驚を吃し了りて曰く、兄まことに面をば、よく見知り覺ゆれど、恍惚として相忘れ、其の名を思ひ出さず、關心聞いて、某は關索が子の關心こさんなれ、我父と汝の老爺、もとより金閨の交友たりし、二兄なんぞ頓に舊交を棄てなんや、姜發始めて意づき、まことに往時、總角にて相別れ、今中年に及べば、こゝを以て過てり、吾が罪を宥したまへ、これと云へるも、日月流がごとく、功業つひに成事なうして、朝暮にこの事をなげく故、吾心馳神越えて、骨肉をさへ覺えぬさま、是非なき世上の形勢なりとて、三人一所に相ひあつまり、頭を垂れて哽咽けり、しばらくあつて、關心曰く、吾れ幼年にして、四人の兄と相失したる所以は、母と共に外家にありし故なりき、我が兄等、其の時の亂に乘じ、家を挈げ逃れ避けたり、其の以後、魏兵蜀に入り、鼂會が爲に吾一家の眷屬を殺し果さる、これ吾祖父、鼂會が父鼂德を、誅したる恨に報ゆと聞えたり、吾ひとり奴隷にまぎれて、衝き出でたるを、軍人幸に住めず、危き處を經つくして、今に至れり、我三兄は、劉皇子を尋ね得て相集り、劉淵を立て漢主となし、故舊の功臣、皆々爰に功を立て、將相の職勢甚だ震へる事を語れば、姜發ことを聞いて、大に踊躍つて曰く、我始め、漢業を思ふ意より、趙歐に賺され、空らなる力を勞すれども、蜀民は舊主をしたひ、今の趙歐に思ひつかず、是を以て劉淵とやらんが亂を起せるを聞しゆゑ、これが內應ともな

つて、漢王の業を起さん者かと願ひつるにも、まさに、左賢王劉淵は、これ劉皇子たる事を知らず、先きに劉淵の上將をして、入朝せしめしとき、其の名を問へば、胡延攸といふ、これまた魏氏の子弟たる事を憶はさりし、今又冀北の諸郡を、打破らるゝまで、其の事を知らで、愚兄弟いたづらに秩を守り、この故地のみにあつて、平生の志を展る事もなし、これを如何がすべき、關心きいて、されば其こと候ふよ、吾兄、關繼遠が、平陽よりこゝに來り、各の行衛をも尋ね訪ふがゆゑ、我來り求むるぞや、吾家の眷屬をば、みな〳〵先立て、關繼遠と共に遯し去る、吾れ小弟は、少しく疾にかゝる故、あとより行かんと留てありけるが、此の砌り、貴兄等の消息を尋ね求めて來れと、我が兄云ひし、これについて相尋ね、今二兄のごゝに在る事を聞くより、功業をも立つべきため、特に來りたりと云へば、兄弟よろこび、此の如くは卿弟は先づ家に往て待たまへ、吾れ今家眷をひろひ收めて、共にこの處を立さるべしと約し、關繼忠と共に詐り、故郷に還るの商人の出立となり、旅裝をあらため夜を侵し、葭萌關より路をかへて、わしり去りける、これ趙厥が追かけん事を、避け忍ぶ故なりけり、それより直に上郡に趨き、河州に出て、太原を行去りける、次の日に至りて、趙厥は姜發が、午の剋を過ぐれども、宰相の府に入らさるを、我もとより川蜀に據りて、一方の主たらん事をはかるが、詮ずる所なれば、由しなしとや思ひけん、李特が謀を用ひて、姜發をば遂に追はずぞ成りにける、

蜀李特謀殺趙厥

かくて趙厥は、姜發が去りし後、事を謀議するに其の人を無しうするが故、今は李特が小弟李庠、字は玄序、極めて智識にして善く騎射し、驍勇絕倫にして、少より名を以て、世に聞えあるものなれば、こゝに至りて、即ち李庠を、宰相の府に入れ、朝夕共に計議をなす、李特、李流は、李庠が兄にして、李蕩、李雄、李始、李輔、李譔、李堪等は、皆かれが侄なりけり、或日李庠は、兄李特が前に出て語りけるは、趙益州が形勢を、吾このほど察し見るに、曾より大業を立つべきの才にあらず、諫むれども、わが言を听かず、此の如きんば、敗を取る事目前にして、成都は必ず、他人の爲に據らるべしと云へば、李特は聞いて點首きけり、其の座にありける成都の兵士、舊より趙厥に隨へる者、此の言を聞き得しかば、密かに趙厥がために、この事を告げ報ず、趙厥、是を聞いてより疑ひを生じ、ひそかに其の子趙英と、この事を議して曰く、李特兄弟は、英才の者にして、其の志し磊落なれば、人の下臣に立つべき器量にあらず、恐くは久しうして、必ず川中の患をなさん、趙英が曰く、李特兄弟、其の器量ありと雖ども、惟り李庠のみ、文武の才に勝れたり、これをさへ去る程ならば、李特何の爲事かあらん、今其の言を聞いて、はやく其の心をしりぬ、須らく先つて、これを防きたまへと、父子事を示し合せ、これより李庠を殺すには、意づきたりける、されども曾其の由のなきをはかり、又人とこれを議せんには、他に洩聞れん事を憚るが故により、一日〳〵とことの遲滯に及びける、ある時李庠は、趙厥が人を殺るを見、乃ちこれを勸め諫めて、古より大業を成すものは、皆以て人を殺す事を嗜まず、今主公專ら暴虐を行ひ、仁德を修めず、豈に人の歸し向ふ事あらんや、かくの如くの仕方にては、如何ぞ能く終を永うするに至らんといふ、趙厥、甚だ悅びず、即ちこれを殺さんと欲すれども、法の死にあつべき理にあらされば、心に忍んで言をもいはず、李庠もかくて退出す、又一日、趙厥、宴會を設けて衆をあつめ、言すでに朝事に及ぶ、李庠が曰く、時今に當つて、司馬氏自ら亂れ、朝に正士なく、下悖逆多し、宜しく此に及んで、大位を建て尊號を稱し、以て四方に令し、上は以て關中を爭ひ、中はもつて刑襄の地を圍み、其の下に出でば、險に據つて自ら守り、以て成漢中に於て、鼎足の勢を上ん、此れ三等の謀ごと、い

づれなりともなさん事をと云ふ、趙歐心實にこれを然とし喜べども、意かねて李庠を去るに在りければ、先彼を除きて後こそ、此の計をなさめと思ひ、乃ち色を作し大に怒り、神京今洛に在り、誰か敢て妄りに悖つてこれを伺はん、然るに今、われにこれを計れとや、吾が所爲、もと本心の爲すことにはあらねども、寔に奸黨の爲め、虐し忌れ、歸京すれば害に逢ふが念なさに、逼り迫つて已む事を得ざる處なり、かくて久しく年月を經ば、自ら建て明らむる事あらん、しからば仍ほ、藩鎭を全う守護すべきと思へるこそ、吾本心なるに、今汝が言ふ所に從はゞ、これ反逆を朝廷になせと云ふ事か、これ吾が門を滅し、祀を絶しむべきとの結構なるかなと、即ち心腹なる、別將費遠、許弇、張燦、衞玉が輩に、それはからへと命ずれば、一時こゝに立ち向ひ、數々以つて大臣を愚惑せしめて、反亂の大逆を勠むるぞ不道なる、急度罪を正しうせよと、つひに首を斬りたりける、李特は此由を聞て、これを痛くうらみ、弟の仇を報いんと思へども、趙歐が勢の大なるにつきては、敢て妄に手を動しがたく、胸をおさへて忍びける、趙歐もかく行ひたるを李特聞けば、必ず變を生ぜんかと懼るゝ故、乃ち李特に授くるに、親軍都統の官を以てして、暫く其の心を安ぜんとし、北下の李氏の者共にも、各々職任の事を授け、再び李特を呼んで、これを慰めて曰く、吾れ枉て汝が弟を殺すといへども、かれ身の才あるを恃んで、猖り狂ぜるを如何せん、屢々妄なる事を言ふによつて、是非なくこれをはからひし、然しながら、かくてこそ今、われと君と安かるべき事を得たり、若し彼が妄狂なるを容おかば、ついには事を誤られて、二家の老幼ともに粉にくだかれん、これ故に我れ彼を殺したり、君いま一弟を殺したりといへども、二族を罪せられんに、まさらずや、其の詳にこれを思ひ、恨を抱く事なかれと云ふ、李特は趙歐が言の、己れを愚にするを、恐り懷ふといへども、乃ちよそ知らぬ體にもてなして去りにける、其の後、李流、李譲等に謂つて曰く、趙歐、初め來りて、我に合するは、吾叔侄どもの心を盡して、渠を輔け、事を成さしめんと思へばなり、しかるに今、我强盛なるをにくみ、中にも、李庠が文に精しく武に冠れたるを以て、事を忠意によせて、賢才を僞り責め、これを殺し、反つて詭の言を以て吾を紿く、此の仇まさに是を報ゆべし、されども、彼が勢さかんにして、これを奈んともなしがたし、又棄てこれを去らんとせば、彼かなら予窮め追うて放さじ、又恐らくは、久しく此間に在るならば、終に彼れが爲に害を被り、一族殘なきを致さん、汝等こゝに於て、何なる計あつてか、以てこの時に處せん、李流聞いて、趙歐老賊、德なく謀なし、何ぞよく事を成さんや、今までは全く姜發、姜飛、二人が力に仗るのみなり、今すでに姜氏去りぬれば、羽翼全く摧けたり、徒らに威を以て、人を制せんとすとも、是自ら滅亡をとるの道ならん、他を除んと欲するに、亦其の難からざる處なりと云ふ、時に其の黨、閻式列を進み出で、今彼れ强く、我れ弱し、彼れ多く我寡し、これを謀るに易からず、惟速に發するに在り、たゞ警めて泄れ漏す事なかるべし、明日流民の頭目、二十人を選んで、內には密甲を被らしめ、外面には衣を褁ひ、各々利刀を藏し、府前の側に埋伏して伺候ふべし、又兩人の人をして、流民を領せしめ、巷中に備へさせ、若し趙歐が黨、兵を擧て來らば、即ち府前に至つて、かの兵を通じ過さし、杜淑、許弇が等、六七の將佐をそこに殺り止めば、外に懼もあるべからず、彼れ等もとより、千軍の敵にも非ず、何をか道ふに足るべき、田長身に利刀を帶び、其の初めて門を開き、人いまを集らざるのとき、即ち堂に登りて、詐り言て事を稟くるのまねし、向前してこれを斬れ、一夫の力に過ぎずして、彼を殺すに安すかんなれと云ふ、李特、此の言を聞いて、深く其の計にしたがひ、乃ち親族、弟、侄、李流、李輔、李譲、李國、李遊、李雄、李文、李恭、李超、李攀、父子十人、又流民の頭目、上官晶、任道、任回、鷰碩、鷰順、王辛、羅淮、趙肅、文斌、嚴檉、嚴檢等の十一人、各裝束齊整へて、府前に至りて伏となる、又閻式、楊褒の二人は、流兵を帶領して、相圖の用を伺ひ候ふ、但し喊の起るを聞かば、一齊に殺入れと相約す、さて次日になりぬれば、早天に霧を拂つて、李特は官の文裝をとゝのへ、王角、李祺、兩箇、健黨を召しつれて、趙歐が府前に立て、恭んでことを候ふ、すでに趙歐堂に升るに、近吏の參り至れるは、只に杜淑、許弇二人のみなり、是も內兵房の中にあつて、錢粮を點じ、兵の餉を吟味するをりなりけり、李特は二人の者を帶ゐ內に入り、班に隨うて上言し、李甸長事を受くと云つて、即ち堂に上り、揖禮をなしたるに、趙歐方に座を出て回禮す、時に李特、趙歐が、身の傍に近付きより、刀を抽き頭上を望んで砍り付けたり、趙歐慌て走り去るを、李特、趙歐が、袖をとらへ、肋を望んで猛く刺したる一刀に、趙歐は跌き倒れて、大に叫ぶ事一聲すれば、杜淑、許弇の二人、兵房より赶け來りて、これを救ふに、早く李特が亂刀に殺り死さる、李特大に叫で曰く、趙歐、殘暴くして不仁なり、忠良を妬み害し、妄に罪なきを殺す、某今弟の仇を報ゆるがため、已にこゝに殺死せしめたり、汝等我に意從はんと欲するものは、皆來て評議をなし、有德の者を選んで立てよ、然らずば晉京に入朝して命を請ひ、同じく天子の潘職たれ、衆心

如何と匈りける、杜淑、許奕、堂に上つてこれを取らんとすれども、手に寸鐵をも持せざれば、かれを砍るべきやうなし、即ち側なる椅卓を取つて、李特に向つて罵つて曰く、汝ちはこれ行衛なしの流民、我主の爲に、收錄され、汝に親軍まで授けたるに、其の恩を忘れ、妄りに本官を弑したる、其の罪至極にありながら、猶ほ亂言をなしぬるやと、頭を照つて擊つくる、李特も又是を殺んとしけれども、刀知ければ勝を取る事能はず、時に王角、李棋是を見て、忽ち槍上り、遂に許奕を砍り殺せば、杜淑は恐れて、急に走りて府を出づるとて、費遠が至るを見るより、忙しく叫んで、流民亂を作し、本官を砍り死すと云乘て走りけるが、いまだ門を出でざるに、李讓が赶け至るに逢うて、これも一刀に砍り倒さる、費遠は杜淑が喚はる聲を聞くより、走り轉りて、兄費遠に報ぐれば、費遠大に驚いて、即ち張燦、衛玉、阮邵等を呼んで、兵に將とし、府門に入らんと仕たりける、時に流民の頭目、上官晶等撲て出で、囲へ住めて、門前に相戰ふ、これに依て趙兵共、内に入る事を得さる所に、李特、李祺、王角の三人、亦走り出て相助け、互に刀鎗を相交へ、止に苦闘へる、城の聲は城中に震ふ、この喧しき聲を聞くより、楊褒、閻式、各流兵五千を帶て、前後兩頭より合せ殺る、張燦等身を回して敵をとり、街衢の上にて闘うたり、李雄、李流と流民の首、二十餘人、府門の前より、思ひきつたる氣勢にて、死をいとはで殺出すに、趙卒の殺を被むるもの、城濠に滿々たり、爰に上官晶は、張燦を相手に取て戰ひけるが、忽ち張燦を一刀に砍死す、阮邵これを見、上官晶に搶きかゝつて、仇を報ゆと叫びけるが、無殘やな背後より、費碩が一槍に、これも其の儘刺き倒さる、衛玉、費遠は、勢の好からざるを見るより、東を望んで殺り走るを、李讓は横より囲て住むれば、費遠、勇を奮うて一刀に砍り進む、此の強刀に李讓は、鎗を砍り落され、こは叶はじと退いで走り去るを、衛玉すかさず赶けて、危き程になりたりけるが、李讓が運や好りける、李雄また撞き至つて、衛玉が頭顱を兩片に砍り割れば、衛玉たまらず地に倒る、費遠これを見、いまは叶はじと思ひて、たゞに流軍を衝き出て、遥ちに少城に往き去り、常俊が處に至りたれども、二人が勢ひ孤にして、立ちがたき事をはかり、使者を梁州の羅尚が方に往かしめて、降參を投しけり、流衆は遂に、趙歐が衙に亂入り、趙淡等をはじめとし、悉くこれを斬り平らぐ、李流は趙歐が、我弟李庠を殺せる事を恨みて、趙歐が屍をとり、砍て粉碎になし、其の後郊外に捨たりける、次の日、李特は衆を聚め、評議をなして曰く、今すでに成都を得たり、即ち兵を分つて下縣を徇下さん、

乘て又鄰郡をも併せ、かくて西蜀に覇王となるべしと云へば、楊褒が曰く、此の事尚未だ行ふべからず、今天下一統なるがゆゑ、兵多く將廣ければ、晉とともに敵をなし難し、且へ我乃ち、遠地より流來の人として、もとより川蜀の士人に、恩義も少なき故、民心中々以て、一に服しがたし、少城廣漠の處處、皆な晉朝の轄たれば、倶に守兵をつゝしみ、備へをなせるに、倘官軍の此に來り會合して、我を伐つならば、自ら禍を取るの道ならずや　李特が曰く、すでに虎の背に上る、焉ぞ能く下らん、汝また何を以てこれに處せん、楊褒が曰く、且らく此の城を守り、人をして趙歐等が首は函にし、本を具へて洛陽に至らしめ、自らの罪を請へ、朝廷又吾能く、叛臣を誅するを以て、必然として官職を授けらるべし、那の時に、德を佈きて民をなつけ、其の後にこそ事を成すべけれ、李特これを然りとし、乃ち黨の内の能言の者を撰ぶに、王角に過ぎたる者あるべからずと、遂に王角を使とし、趙歐が反叛し、朝廷の命に違ひて、兩川に弱たらんとして、狹臣李特等を助の爲に招くとすれば、臣等これに從はざれば、臣が弟、府中謀軍李庠を、其の恨みによつて、罪なきを殺せり、臣等忿にたへず、衆を糾ゝ力を協へて、國賊をこゝに剪除けり、あはせて逆黨五人の首を、金闕に、獻ずる所なり、臣また朝に歸して、戮に就かんとす、以て擅閫の罪を正し玉へなんどゝ、辭をつくして相したゝむ、すでに王角、洛陽に至つて、此の由を上言すれば、晉帝疏を見、廷臣を集會して、此の議をはかるに、王衍曰く、李特は乃ち流民の首たり、もと趙歐と相通ぜずんば　焉ぞ克李庠を殺し得ん、今彼妄りに兵戈を構へたるも、必ず緣どころあるべし、當に今、兵を興して罪を問ふべき所なり、みだりに彼が請に任すべからず、御史馮該が曰く、趙歐、造反して朝命を抗ひ拒ぎ、邊を守るの大臣を、狠に殺す、しかるを李特これを誅して、功ある處に、功をば賞せず、返つて兵を彼に加へんとや、若し今これに兵を加ふとせば、自ら彼が激せんことを願ふなり、惟授くるに官職を以てし、國恩に沾はしめよ、但し其の上にて、兵權を去らしめば、自ら亂なからんと奏するに、朝議もこれに從つて、李特に授けて、宣威將軍長樂侯になされ、李流を奮威將軍武陽侯になし、綿竹の地に鎭守たらしめ、其の兵衆皆成都の刺史の、節制を受けしむべきに定められる、又詔を下し、梁州の太守羅尚を、成都の刺史となし　西戎校尉平西將軍の職を總領じ、以て趙歐が徐兵を併せ、又李特が流民の衆をも、兼ね收むべきの旨を承り、即日に兵を帶て任に赴く、更に牙門將軍王敦、上庸都尉龔欽、各兵七千を以て、羅尚が指使にしたがつて、これを助く、又巴郡

太守徐儉、廣漢太守辛冉を益し添へ、共に兵七千の人數にて、羅尚を協へ助け、便宜にしたがつて事を行ずるは、李特が測り難き變をもなすべきかとの警誡なり、詔旨すでに蜀に至つて李特にさづく、李特は兵を罷め、郡を去るの說を見、心甚だ不安なり、それさへあるに、重て羅尚梁州の兵馬を以て、入り代り、李特がひきゐる、蜀川の兵衆を領ずると聞くより、衆を集めて議し、關塞の險を拒ぎ絕て、境内に入れ立じと憤れるを、閻式とゞめて、この計不可なり、吾れ民心の、いまだ附さるを以てのゆゑに、洛陽に至つて、命を請はしめたるにあらずや、然るを今、返つて詔を違き、兵を以て官兵を阻てば、皆是れ先度の情、實に、反すと云ふものか、朝廷より此に王敦を差し越し、川の地に入るゝは、これ上庸、巴郡、廣漢を督ししづむべき監たり、共にこれ我等、變をも爲すべきかと備ふるがためなれば、すべて吾が心腹や、肘腋の病たり、且へ少城の常俊、費遠も、すでに羅尚が方へ降を乞ひたり、何ぞみだりのことに及ばんと曰ふ、李譲聞いて、しからば強を恃にせざるときは、吾等再び綿竹に、去り回るの外なし、何ぞさらに、成都を得る事をなさんや、閻式重ねて、いや〳〵吾先立て、羅尚が襄陽に在りし時、彼が心を詢り得るに、羅敬之が性つき、甚だ貪鄙うして、諛を好み剛を忌むなり、鄉人これが爲に、語して曰ふ、尚が愛する所、邪にあらざるときは則ち佞なり、尚が憎むところ、忠に非ざるときは則ち正なりと、又家に市井を成して、物を賈り其の利を見る、されば人の餓り逐るの物、受けずと云ふ事なし、百貨倶に積み、富み極めてもなほ厭ふ心なし、此れ等の人、愛慾心をふすぼらし、偏僻を以て意を生ずれば、其の念ひ全く暗し、然らば何ぞ誘き賺すに難からんや、但し一人の精細意あつて、能く會説を爲せる者を撰らみ、趙歐が庫藏に多き、寶物の中をとり選み、先つて中途まで行迎へ、禮物に准へ、これに賂ふものならば、渠すなはち貪婪こゝろに、財の珍なるに目くれ、忽ちに喜びの意を生ぜん、若し一度禮物を收め受くる程ならば、再び金銀を盡して、其の左右に結ぶ事を買ひ求めん、かくの如く爲すならば、必ず我に恩報の思ひを發して、或は我を慰し、或は我を親しむべし、此の如くんば、自然と明に說く事を得、吾れ其の心腹の中を、知り盡すの後、民心を買ひ收め、如何なる事を計れども、心のまゝになるべきと、手の裏にをさめしやうに說たりける、李特聞いて大に喜び、卽ち禮物を調へ撰び、楊褒を使者となし、密に途中に往迎へ、羅尚にこれを獻上し、李特が手本と共に呈つれば、羅尚これを見るより心中大悅し、卽ち楊褒を召んで、案前に近づけ、李特が趙歐を殺したる事を問ふ、楊

褒、多辯の者なれば、其の答へ流るゝがごとく、甚だ趙歐が過ある事を道ひ、李特が罪をば掩ひ飾りて、好事のみ述べたりける、羅尚これを然りとし、乃ち曰く、まことに彼が罪誅すべし、儞が主、國に功あり、今われ初めてこゝに到る、禮物を受けん事、他の聞え好からず、恐くは中人の耳目を動かして雅らじ、楊褒曰く、李甸長、曾て言ふ、老爺は乃ち、久しき官位に任じたまふの人なる故、この敬意を奉ず、若しこれ他の官人ならば、此の如くにはせじ、たゞ老爺、恕してこれを容れ玉へと云へば、羅尚遂に許多の寶物を收めをはりける、さて楊褒に問うて曰く、何の故に汝の主をば、甸長と稱する、楊褒曰く、流民、蜀川に入りて活を求む、皆な耕種を以て、山を開き生業となし、各其の甸の數を分つに、恐らくは其の爭ひ競ふ事の起らんかと、これに依つて李特を以て、甸の長となして、衆民を制するのみ、羅尚聞いて曰く、此の事の如きんば、汝が主も亦これ能者なめり、且謹んで法を守り、公に奉ぜよ、吾自らこれを保ち、用ふべきやうあり、かれをして心を放たしむべからすと、乃ち楊褒には重く賞をあたへて回らしむ、楊褒、成都に至り、具に羅尚が喜悅して、楊褒に付囑したる語を以て、李特に告げ報ず、李特、心これに依て、稍しづまつて穩になりければ、關險に據りすまふの意を止め、仍りに賂の事をのみ議りける、ある時は金銀を食籠、菓箱の中に裝ひ入れ、いつはつて食物と稱してこれをすゝめ、我事は閻式と同じく、親ら驛中に往て奉迎す、羅尚、李特が人材を見、又金銀の餌ものを得るより、殊に禮知れる、有能の者と思へば、命ずるに、寶禮を以て交り接し、坐を賜うて、問うて曰く、甸長自來る、必らず何の說話かある、如し其の理に合ふ事ならば、一一吾これに從はん、李特曰く、某し本略陽の蕃族にして、父は魏の牙門將軍、諱で蚩羌校尉に升らる、其の後、荒亂に逢ひ、蜀川に入つて食に就けり、其の從ふ所の者共は、皆外郡の命を寄せて、食を求むる百姓どもなり、もとより兵の類にあらず、倶に散じて窮谷に集まり、荒れたる岡に耕やして、はかなき生命を活るまでの者共なり、朝廷これを知り玉はすして、吾れ亂を慮るとす、かの者往々より、古里に遊らしめんとすれども、衆民すでに家業のすたり果てたるを以て、實に去る事を願はず、悉くみな此處に、寄旅となつて居れるのみ、同じくは蜀郡の籍帳に、名をしるされ、此地の堉たらんとす、前に趙州州が逆をなせしとき、吾等をも、勸めすゝめて、共に反せよと云ふに、吾弟李庠曾より、朝祿を受くるが故、言を爭つて彼に從はざれば、彼この怒を以て、遂に吾が弟を殺せり、其の上に盡く、衆の流民をも勦りすて、ならびに五家をも、族し亡ぼさんとするの

由聞えければ、吾其の罪なうして害に遭ん事を恐れ、乃ち衆を糾し、流民共をあつめ、先づ強暴を收めたるよしを表上して、命を朝廷に請ひ奉る所に、朝廷より赦したまひて死せざるのみか、あまつさへ、職を賜ひ、長樂侯と云ふを以てせらるれども、いまだ衙所の定りなし、願はくは只、老大人の麾下に听用ひられ、人の嫌疑する處を、免れしめ玉へと云ふ、羅尚聞いて、此れまた難からざる處なり、汝は今此の都の帥府に住り、汝が弟、李流は、兵二千を將ゐて、涪江城に往て鎭守たれ、李譏は兵五千に將として、往て劍閣に鎭守たれ、其の外の兵士は、皆幕府に入つて、參軍徐轟が下について、下知を受しめよと云ふ、李特是を聞いて、心に相違ふ處あるゆゑ、いまだ何とも答へざるを、閻式、側より曰ふ、既に府尊老爺の下知なしたまふところ、感德まことに淺からざる事共なりと、乃ち謝し終つて出づれば、羅尚は、李特を引いて城中に回り、府內にとゞめ置きにける、かくて、辛冉、徐健、王敦等も、一同に成都に至り、參拜謁見こと畢りければ、李特が兄弟等も進んで、衆官を拜するに、王敦、辛冉二人は、李特等、一班の人物を見るに、悉く軒昂たる人品にて、語言對答さはやかに。心大いなる者共なれば、中々人の下風に立つべき事にあらず、久しき後に、おりて、必然として亂をなしてん者共ぞと、乃ち私に羅尚に謂て曰く、吾れ李特が英姿凜々たる、兄弟數輩、皆世の勝れ者共なり、今我が兵こゝに集り、彼が兵瓦の如く解くるの時なれば、其の趙益州、沈副判を殺したるを罪にかぞへたて、悉く收めてこれを斬り、以て後の患を斷んと云ふ、されども羅尚、これを肯がはずして曰く、吾すでに、蜀に入る、彼もし早く亂を起さば、早くこれを除くべし、もし又晚く亂を起さば、晚くこれを除くべし、何ぞ必ずしも、彼今、籠の鳥なるを困しましめて、みだりに無能の威を逞しうせんやと云つて、これを殺戮の心なければ、諸將又狼に誅を爲すべき樣もなくて、日數をぞ送りける、

通俗續三國志卷之二十五

辛毘等欲追流民

王敦は羅尚に向つて、幾回となく、李特が後日の害を、なすべき者なれば、これを殺せと云へども、彼れ一旦命を請ひ、法を奉ずるの人を、みだりに誅せば、其の逆臣を伐つの有功をすて、忠良を殺すの名あつて、民望を失はんとて、これを肯がはず、ことに渠いま、我が幕下にあれば、いつとても制するに、難き事なしとのみ云ふを聞いて、辛毘と共に論じて曰く、羅公わが身の勇を恃み、才に矜り、吾儕の言を用ひず、されば必ず、李特がために害せられん、此の老徒に虛名あつて、大略を知らず、一生の名節、あはれやこゝに止らんかなと嘆じける、明日王敦は、入つて辭して曰く、われ京に回り、この趣を申さん、しかれば幾回も申る所の李特が事、其の處をなしたまへと云ふ、羅尚が曰く、王處仲の言ふところは、李特が兵を畜へ、多くの流民、これが羽翼たるを以て、亂を爲し易からんとか、我今爰に在つて、かれ等一所に合ふ事をなさしむべからず、使を發し、みな〳〵農に歸れと下知すべし、惟り李特が兄弟ありとても、孤立にて助なくんば、何の懼るゝに足らんや、王敦聞いて、しかるに非ず、流民乃ち彼が腹心をなし、其の黨又多し、これを散ずるに難からされども、これら聚るも又甚だ易し、李特を殺さゞと思ひ玉はゞ、又流民を逐はらつて、蜀の地に居る事を許さゞし、羅尚聞いて、此の言甚だ善し、但し太急にすべからず、緩々と謀を設け、徐に圖つて驅り逐ふべし、嘱り怨みを生ぜしめて、却つて變を致さしむべからずと云ふ、其の後羅尚は李特を府に呼び來つしめて說く、我儞をこゝに留めて、あらしむべしと思へども、衆官の意に、吾れ私あつて、汝を引たすくとのみ思へり、今且く朝議に勉め從ひ、權りに流衆を散じて、耕に歸らしめ、汝昆仲は、綿竹に往て鎭守たれ、事あらば來て我に見えよ、何事に付いても決ある事を、汝に爲しめんと云へは、李特應うて出でにける、さて宅に回り、閻式、楊褒とこの事を議し、嘆息してやまず、閻式が曰く、すでに羅公、我を愛する心あり、其の言に憑るべからず、亟に身を輕して、遥に綿竹に到り、以て一時の禍を免るべし、否らざるときは、恐らくは辛冉、王敦、不測の變を起さん、李譲聞いて曰く、此の言甚だ善とて、流衆を召び、みな〳〵爰を散去つて、はやく綿竹に至り、約の如く相聚るべしとて、つひに衆兵を散し、それより、閻式、楊褒、李家の兄弟子侄と共に、即日に綿竹に往き去りける、辛冉、王敦等は、羅尚が懦怯も、李特が黨盛なるを懼るゝが故、誅を加ふるに及ばざれば、正に計を設けて、これを抑へんと思ふ折ふし、人あつて報けるは、羅益州すでに李特等を、綿竹に去らしむと、辛冉、王敦これを聞き、羨歎、徐儉を會し、大に悔いて嘆じて曰く、既に脫し去らしむるうへは、是非に及ばず、成都の禍必ず久しからずして起らん、此の公徒らに其の年のみ老して、其の事に老せざる事よ、國を悞る事甚しからん、今彼れ吾言に依らざれば、此に在つて益なし、且く自家の鎭に歸り、洛陽へ使者をつかはし、重ねて朝廷の命を請うて、再び議せんと、各それより辭し去つて、四所

の鎭にぞ歸りける、かくて辛毗は表を具へ、人をして、上言せしめて曰く、羅尚我が勢に乘じ、衆人李特を誅殺し、流民を驅逐へと云へども、此の言に從はず、他日、李特が勢盛ならば、必然として亂をなさんと奏す、王敦もまた入朝して、此の事を言し、遂に兩川、其の害に勝へざらんと、齊王聞いて、此の如くは如何せんとある、時に孫洵、董艾等曰く、一面に行文を、蜀の地に至らしめ、各府郡に觸れて、嚴しく流民を逐しめ、再び人を、雍梁略陽等の諸郡に遣し、川中の流民を召とつて、故里に歸らしめんと、朝議これに定れば、詔を羅尚、辛毗、徐儉、ならびに、雍梁秦隴の六郡に下す、六郡の官人、文書迭に送りて、川中に至る、徐儉、辛毗等、亦さらに榜文を所々に張り掛けて言ふ、流民等すでに本鄉、豐熟なる事多年なり、官府より文書あり、各はやく旅裝して還るべし、再び川中に奔りて、地方を援り害ふ事なかれと、衆の流民ども、榜の張掛りたるを見、皆々李特、閻式、楊褒等が所に至りて、此の事を議するに、李特が曰く、衆人の下心、今如何なる意ぞ、たとへば去得んと思ふとも、又去る事を得ずとも、必定して思ひ定むる所を聞かん、楊褒聞いて、古來天下繁華の地、誰か成都の花錦城に似たるあらん、然れども文書此の如くにして、本鄉に回るべきとせめらる、我れ等久しく外にあり、基の已に失ふ、餘資ありと雖ども、何ぞ能く鄉に還らん、居を構へ業を立て、今以て安逸を得たれば、且く此の間粮なきに苦しみを離れ、地方富で土產の多きに澤へるを、若去て古鄉に還らば、又本の窮人たらん、李譲が曰く、吾すでに衆人の、去る事を願はざるものゝ、多き事を知れり、間に回らんと欲する者あらば、すでに前年還るべき事なり、こゝを以て見るときは、誰か歸る事を欲すべきや、今他の計なし、只禮物を備へ、羅公の方便を、懇に買ひ求むべし、只いへ、此の時水涼まさに盛りにて、路途又險阻なり、川河洶湧いて、恐らくは性命を傷らん、且へ今農作の半にて、耕耘田にあれば、又一年の春の計を棄てん、乞ねがはくは天恩を開いて、則ち數萬の性命、皆府尊の賜ふ所ならんと云はゝ、羅尚かならず以て、吾れ等の處分をなさんと計らん、衆みな喜んで、復た金銀を集めて、任回を使として、羅尚に見え、告ぐるに其の情を以てすれば、羅尚これを信じて、任回に謂つて曰く、われ本より、儞等を逐ふ事を欲せず、これ辛公の書本を、朝廷へ奉ずるにより、故に此の命あるなれば、我また獨此の事を主どりがたし、併しながら、儞が言に據て、八月の秋を收めば、かならず川の地を出去るべし、我を累す事なかれと云ふ、任回よろこび、謝して回りける、其の後羅尚思ひけるは、我れ一箇の心に

て、限りを逃べたりとも、衆の官人の迫りて、流民を逐はんかと恐るゝがゆゑ、ず書本を朝に上りて此の事を請ふ、こゝに於て朝議在つて、羅尚をば京都へ回し、かれを詮議し、罪を考問せんとある處に、侍御史の官、馮該、これも先年、流民の巡檢として蜀川に至り、李特が賄賂を、多く承けたる者なる故、自然に李特を荷擔する意ありて、乃ち入つて齊王司馬冏に見え、前に趙王、趙厥を代らしめんとするに依つて、彼つひに叛して、成都に據り、戰ひ數度に及べども、つひに彼が罪を討ずるの事なく、幾ど西川を失ふに至る、しかるに李特、彼の惡黨どもを剪り除きたるは、寔に其の功をば、たとへ取用ひずと云ふとも、且てこれ反者には非ず、しかるを今、羅尚が、忍びざる情によつて、秋來の限を請ふ、今かれを代らしめて、羅尚を罪に處せんとせば、倘流民ども、其れ羅尚が罪を受る事、己等を憐れむより事起ると思つて、復び趙厥が事をなし、兩川を以て反せば、これ自ら激らして、強て亂を起さしむるに非ずや、吾再び詔を下して、蜀川に至り、秋を收むるまでの、恩を施き、事の宜しきに處せんと云ふ、齊王もとより、決斷のなき意なれば、馮該が言ところを信とし、彼をして、再び蜀に至らしむ、馮該すでに命を奉じて蜀に至り、先づ人を綿竹に差し、李特を召んで相見せんと云ふ、李特これを聞き、自ら行ては、事の變もありなんかと思へば、自體この比疾ありと稱し、李譲をして、金銀珠寶を收もたせ、途中まで行迎ひ、馮該にすゝめける、馮該喜び、李譲に謂つて曰く、汝が叔父の來り見えざるは、これ疾あるには非じ、我に他の意ありやを疑ふ故のみならん、我に少しも異心なしとて、李譲をば回しける、其の後川中に示して曰く、六郡の流民は、皆李特が下知に從へ、ひまを開いて罪を取る事なかれ、又李特等、期を過てこゝに止るべからず、秋を收むるの後、盡く發して本鄉に回るべし、行司また期より先立て、逼り迫つて追ふべからずと下知しける、又上疏して、李特正に、趙厥を誅するの能才あり、委ね用ふるに堪へたりとこそ書きたりける、

流民聚拒辛冉

辛冉は馮該が上疏し、羅尚と同じく、流民を最負し、朝廷へ其の才能まで、すゝめ申すと云ふ事を、知りければ、亦これも書を上りて辯論するは、李特が弟、李庠、趙厥に位を僭み、尊公を稱せん事を訕き勸めたりしを、趙厥これが故に誅したるなり、李特これを仇に挾んで、趙厥を刺死し畢んぬ、これ陰に成都を、竊まんと思ふが故なり、ために臣等慮りをこゝに呈

するに、總じて人臣たるもの、兵を起して後に、僞りて命を朝に請ひぬる類は、實に國の爲にするに非ず、皆是れ吾身の爲に謀るなり、今當に流民を遣除つて、西蜀を安ぜば、固より幸甚しからん、齊王此の書を見て大に怒り、即刻檄文を下して、馮該、羅尙が罪を責むるに、二人の者共、其の情を以て李特が方へ、報げ知らしめたり、李特こゝに於て、人を使として書を辛冉に遣して曰く、

切以足下、上言欲速逐流衆、此固憂國憂民之誠、即僕亦、曉夜兢々於斯者也、但以此輩皆亡命之徒、襤衣食於安逸輕死生於鴻毛、若使逼之太急、恐有物極則反之咎、且寬則得衆、惠則足以使人、信則人任焉、既朝議許過秋收、而足下必欲促之、僕恐數萬無賴、非一成一族之可逆制、

辛冉この書を見るに、羅尙、馮該、みな已とすでに悌れる事を知れば、恐らくは流民どもの、陰かに來つて、己を襲ふ事も有らんかと、亦甚だ兵を會ひて防備をなし、檄文を廻して、梓橦の太守張演と計を合せ、又合騎の太守、李蕊と約し、七月を限り、盛く流民を逐ふ事を起し發すべし、若し違ふ者あらば、こゝに勦殺すべしと約を定むるに、李蕊先日、流民を按察するとき、其の厚き賂を得たるを以て、衆の爲にはかつて、限を寬うしたりき、其後太守となるに及んでより、流民更に賂をも進めねば、此の事を恨み妬んで、こゝに亦辛冉が意に從がひ、榜を張掛たる、其の辭旨、もつとも甚だ嚴密なる條目なり、騫碩等これを見、此の事を推量すれば、復び禮物を備へて、こゝに哀を李蕊に告て、穀栗田に在り、若含てこれを去る時は、前功盡く棄れん、正に何を以てか、行の粮となさん、乞ねがはくは冬に至り、六種の穀皆收まりて、自ら令を奉くべしとなげく、李蕊これを聞き、忽ち意にかなつて、親ら廣漢まで至り、辛冉に見えて議すらく、流民ども哀憫の情、又あはれみ憫れむべし、年を歷て許す事も、又久しく容したり、然るを今暫くの日限と云ひ、殊に自ら限りて今年を過ぎず、若しこれをも免さず、太だ迫めて速かならしめん時、恐くは激して變を生ぜんか、如かじ、暫く此を緩し、冬の初めに至るまでの時節を延べば、生息の物ども俱に登らんに、これを發し除かば、彼者共も、自ら辭の爲すべき樣なけん、辛冉これを昕かずして、切りに李蕊を責め、乃ち令を下し、流民の棟梁魁首たる者共の、名字を問ひ記し、先つてこれを、傘りからめて罪せんとす、流衆此の由を聞いて、大に懲き懼れ、皆々綿竹に至り聚り、李特が宅に一所になり、會議區々にして散ぜず、李特これを見、恐らくは衆官、嘖つて吾を怪み責られんか

と、人を使して各郡に往しめ、其の限を乞ひ求む、また親ら、辛冉が方に往いて乞へども、辛冉これを聊も許さず、各縣に命じ、市廛に目付を出し、流民を防ぎ守り、皆關を閉ぎ、搜捕へ收め捉めよと、令を下す事愈嚴し、李特が本意、つひには亂をなさんと欲すれば、陰かに黨侶の者共に說て、兵器戎具をたくはへ置かしむ、辛冉すでに、李特が其の意あるを探り知る故、こゝに李蕊を會し、共に議して曰く、今流民聚集つて、如何に云へども散ぜず、思ふに李特必ずこれを統て、以て變亂を爲すに一決したり、如かじ其のいまだ整はざるに、速く官兵を出してこれを擊ち、一鼓して勦つくさん、然らずんば將來、必ず制伏し難くして、恐らくは生靈を害せん、皆これ我等の罪ならん、李蕊聞いて、今彼いまだ反せず、我れ先これに迫らず、一下して變起らんのみか、百姓の害をなす事、大なるときは、咎また我等に在り、愚が見に依らば、先づ榜文を出し、流首李特等抗ひ違うて、曉諭事を用ひず、黨を結んで散せず、限を過ぎても發せず、情のかゝる處、强を恃んで、ひとへに獨を戀ふ、こゝに於て李特が首を、能く斬り得ん者は、賞銀五百兩あたふべしと普せ、若し其の首領たる者をだに得たらば、流衆ども無頭の蛇に等しかるべし、逐はずして皆遯らん、何ぞ必ずしも黎庶を動し、妄に兵の釁を起さん、辛冉これを然りとし、乃ち榜を寫して、張掛けたり、人はやく李特にこれを報けたりければ、李特　各處に人を遣し、密に假りの榜を改め換へさせぬ、其の言に曰く、よく流民を募りて、各郡の大姓、魁首、李、任、楊、閻、趙、王、窓、上官等、諸甸甲の首級を、一顆得たらん者、賞銀百兩、羌氐、侯帥等、能く流民の首一級を得ん者は、賞銀五十兩と普て掛けたれば、流衆この榜を見るより、皆李特に詣りて議す、辛太夫かくの如く、怨みを結びて榜を出し、甚だ急なる利害に渡る、辛冉が其の本心、これ我等を驅逐つて、鄉に歸らしめんとには非ず、悉く勦殺さんとにあり、我等のこゝに至れるは、これ其の活らん事を乞むるにあり、豈反つて死に投ぜんや、今將軍、主となつて必ずかれ等を掻き擾り、此方より一番に怨をかへさば、死すともまさに甘心すべしと云ふ、李特衆の意を立つるを見るより、暗に心に歡喜をなせども、假に李流を召んでこれに問ふ、李流が曰く、不可なり、不可なり、朝廷の官兵、もとより訓練ることを經て武に功あり、汝等まことに克し難からん、閻式が曰く、それ雖倘の威信、つひに立さるを以て、辛冉等がなす事此の如し、彼等各、重兵を雍いて、一旦に變をなさんとす、辛冉兵を引いて、今にも發に來り捕へんとき、衆人又、かの兵に敵する事

あたはずんば、汝等が身を保ち全うする事もならず、那時我が眷屬に連り、汝等までの累を、なさん事よと言やみ、わざと嘆息する事、再三に及んでなほ止まざるに、衆の流民、一同に我等老幼共に、十萬に近しとす、去るときは途中に累を受く、しかじ此間に在つて他に對し、味方の兵をそらみ見れば、上品の精勇、戰場を得て爲べき者三萬餘、其餘總たるべき器量、三十餘人、これ等は皆よく、其の力千軍を制して、凡敵軍にも懼なし、其の外の者とても惟へに願はくは自ら死を定めて、これと一戰せん、如し勝事を得ずんば、一同に綿竹關を殺出て、句長を守護し、しきりに略陽に回り、據つてこゝを守らん、若し倖にして勝を得る程ならば、羅公勇なりと雖ども、寛して老遇れり、これ取安きの者ぞや、竟に成都を襲つて、再び廣漢を征せん、乃ち兩川は望みつべし、句長頭に大計を定め玉へと、口々にこそ、勸め逸りける、

李特戰辛冉之兵

李特はすでに、流衆の志を一決して、反逆の事を勸むるを聞き、復び衆民に告く、吾等關外より此に至る、數年を經るまで、流衆と共に事をなし、義氣相ひ孚あり、情意また相感ずるゆゑ、寧忍なりとも、汝の羣に、乖き忤くの事なし、今事既にかくの如く急なるに至つて、安んぞ相棄るに忍びんや、願はくは生死をこゝに、共にすべしと云へば、衆人の曰く、我々も又、敢て公の命を用ひざる者あらば、衆と共にこれを捉へて斬るべしと、こゝに於て衆士の中に、精勇の者三萬を撰び分けて、三屯となす、大將軍、武陽侯李流は、左屯の將となり、上官晶、任回、任道、李奨等、これに副ふ、振威將軍、西陽侯李譲、右屯を掌どる、騫碩、羅淮、騫順、李文、これに副ふ、冠威將軍長樂侯李特、自ら中屯に居る、閻式、楊褒、二人を參謀となして、各々軍にまじはりて、隊伍を操りはかる、王辛、王角、李祺、李超、李輔、李恭、楊粛等、中軍に在つて其の下知を聽き、諸の用に調遣ばる、爰に辛冉は又、人を李特が處に至らしめ、其の流民を逐ひ除ふべき事を、催促せしむるに、李特すでに壘を立ち、旌旗を飾るを見て、使者急き回り、辛冉にこの旨を報れば　辛冉も又急に、張演に會して、今李特此の如し、さきには當に、冬に底りて、この處を去らんと、限りを請ひたりしは、これ事を延緩うして、此の催をなさん爲の辭なりし、もとより流民ども、はじめより去の心なかりしを、羅公貪て決斷の智なく、寇を養つて忠とし、日又日を復ねたる故により、今に至りて、流徒つひに其の好を展る事を得たるなり、且へ、李特兄弟、ならびに雄才あるものなり、吾等倘かの匹夫等に算られたらん時には、豈に笑を後人に貽すに非さらんや、宜しく自ら、決斷すべし、必ず羅公と議すべからずと云へば、李苾、張演等も、これを以て然りとせり、辛冉こゝに於て、廣漢の都尉曹元　牙門將軍張顯、劉幷等に令して、步騎の精兵、三萬を帥ゐしめ、暗に李特が營を襲はんとす、羅尚この由を聞いて曰く、李特はこれ變をなさず、辛冉等が激したるによつて、反をば成さしむるなり、吾將に今安んか處せんとて、亟に參軍徐轡を召んでこれを議す、徐轡これを聞き、今辛公すでに、李特と隙を成す事かならず行はれて爭とならば、將軍亦坐ながらこれを觀るべからず、倘辛公等、戰に於て失計あらば、將軍といへども、其の責まさに逃れ難からんと云ふ、こゝに於て羅尚も又、督護の官、田佐をして、兵五千を帶しめ、辛冉を助けて、共に李特を討んとす、李特は早く、辛冉が兵の到ると聞くより、衆を召んでこれを激せ、其の志を固めんと思ひ、惟今辛冉、汝ぢ衆人と、苦ろに冤仇を結びたり、吾こゝに義に依るが爲に、彼が心に、嫌疑を生じて、今既に此に至れば、禍ひ全く頭に臨めり、しかれば空しく手を束ねて縛を受け、机上の肉と成るべからず、衆宜しく心を齊しうして、共に一臂の力を助け、仇賊を殺退よ、いよ〳〵向前に肯ひたるに、相違ふ事なしや、否やと云へば、衆人踴躍て、聲を齊しうし應へて、願はくは死力を効し、以て大德に報ずべしと曰ふ、李特はこゝに、衆人のすでに用ふべき事を知れば、即ち閻式に向つて謂ふ、兵衆に將とし奇を設け、要隘の所に伏し、以て辛冉が兵の至るを待ち、先だつて彼が不意に出て、これを擊ちなば、自然の勝を得べしと、閻式答へて、將軍心を放つて御座せ、吾等今日、各皆親ら出で、首功を建てゝ見せ申さんとて、即ち三寨の將兵を聚めて、俱にすゝみ、上官晶、騫順、王角、李超の四將に、兵四千を領ぜしめ、左屯の山の後、隘所に伏せしむ、任回、王辛、趙誠、李祺の四將も、兵四千を率ゐ、右屯の山の後、隘所に伏せしむ、皆是廣漢より來る路の要道なり、其とき閻式、伏兵どもに約して曰く、敵兵初め來るとき、其の險路を過るにまかせ、彼を且く留むべからず、只三個の連珠砲の起るを聽かば、一齊に殺出で、彼が皈路を截住めよ、其とき又、後へより進んで殺回さば、少しも悞りあるべからずと、八將計を領して去る、さてまた、李流、任道、李文、李恭の四將は、兵八千を領し、左寨の後に伏し、李譲、騫碩、羅淮、李攀の四將は、兵八千を領じて、右寨の後に伏す、李蕩、李輔、楊褒、閻式、李特は、精勇の兵七千を率ゐ、中寨の後に伏し、李雄、李國等は、兵一千を引いて、往來して救應をなす、時に李特が

探子報來て道ふ、官兵まさに到れり、こゝに隔て止まる事、其の間五十餘里ばかりなりと云ふ、李特其のとき各兵を遣し、埋伏せしむるに、すでに午未の時ばかりに至つて、曾元が兵、隘所にかゝつて、こゝかしこ見るといへども、流兵等の出來て、とりとゞむる樣子も無ければ、官兵共以爲く、流賊もとより備なし、其の計策のある者あらば、こゝこそ敵を阻て止むべき地なるに、これほどの事だに知らざる、李特が兵の分濟、さこそ有らめと思ひ侮り、昂然て直に進む、すでに李特が壘に近づくとき、一齊に喊を發して、中屯の寨に殺入りける、時に忽ち听く、信砲の响き天に連り、喧しきとき、寨後に伏したる、李遊、李輔等の四將、今ぞと云つて殺出すを見て、左屯の李流、任道等の四將も、共に殺て至り、右屯の李譲、羅碩等の四將、發立つてこれも殺みだせば、官將もまた頭を分つて敵を迎ふ、流兵共命を捨て、晋陣を掠むるに、何も勇氣さかんにして、一人當千ならぬはなし、殺りすてたる官兵の屍は、途に横はり疊々りたるに、流るゝ血は、又た溝に滿ちて溢々れたり、官兵つひに截り退けらるゝ事、一里餘りにして、暫く息を休めんとすれば、忽ち听く、背後に於て喊の聲大に震ふ、是はと各々顧れば 上官晶、任回、寥順、王角の四將、風の如く驟に至る、張顯は勇を恃んで、首を轉し敵對するに、流兵の四將、一齊に殺かくれば、張顯これを遮り攔むる事あたはず、上官晶が一刀にて、馬下に斬て落さるゝを見て、流兵共勝に乘じ、混に戰ひ殺り入れば、官兵は、馬の足を立かねたり、李流は、正に田佐と戰を交ふるとき、官將、劉並が殺至るを、李流はこれに眼を轉ずる間、田佐が一鎗に右の臂を刺中られ、持ちたる刀を地に落し、かけはづして走れるを、曾元これを見、逃さじと、赶けたりしが、却つて、任回、李遊が面前に撞き來つて、囲て救ふに逢たりける、曾元は、李遊を接へ住むれば、田佐は任回を敵手にとり、戰ひ未だ下さるに、又李雄救ひ來り、脇より刀をとつて砍り進み、一刀を以て曾元を、馬より下に砍り倒し 遂に三人一齊に、田佐を把て圍み住む、田佐これを意とせず、力を盡し陣を掃やぶり、一鎗をとりのべて、任回を馬より刺し落せば、任道搶ずゝんで、任回をば救ひ得たりしかども、任道また田佐が鎗を、左腿に刺中てられ、叶はじと逃れ行く、上官晶、李遊等これを見、のがさじと戰ひとゞむと雖ども、田佐少しも怯れず、上下八輪に混闘ふ處に、寥順も又至る、田佐は、かくの如くに、四五將の流軍を對手にとりて爭へども、闘ひ益力そふ、李超は田佐が武藝精熟したるを見て、其の勢ひ、力を以ては中々に、とりひしぎ、制し難きを悟りければ、乃ち大弩を取つて、田佐を望み、十分に弓を張り滿て、一矢をこゝに發しける、遲たず田佐が小腹に透り、身翻して馬より落つ、劉並、今は軍の已に敗れたる事を察しければ、血路一條を殺り啓き、はるかに廣漢の方を望みて逃れけるが、路上に於て、又王辛、李祺等の四人の兵に、遮止められるゝと雖ども、こゝの一陣をも、大に殺り破りて跑け出すに、其の身もまた四鎗の傷を被りながら、死を抵して陣を擁きければ、難なく漢中に逃回る、かくて劉並は、辛冉等に相見え、具に曾元等が死さるゝ事を談じ、やう〳〵一身を逃れ得て、此に來ると云ふに、衆皆おどろいて曰ふ、賊兵此の如くに兇なるや、一時には實にこれを收めがたし、川民又其の苦に勝へざらん事よと嘆じける、こゝに李特は大なる勝を得、兵を收めて寨に入る、手合せの闘ひに、大利を得る事を慶賀す、閻式が曰く、今彼の一人を勝つと雖ども、逆情已に露はるゝ上は、羅尚、馮該が、なほ城中に有れば、必ず前み來て、吾黨の罪をたゞし問ふべし、中々油斷あるべからずとぞ盤しめける、

羅尚會兵征李特

成都刺史羅尚は辛冉が兵を起し、綿竹を征伐すと聞えける故、部下の大將田佐を差し、兵を引いてこれを相助けしむれば、正に其勝負の程も心もとなしとて、人を差し、其消息を探り問しむるに、忽ち敗れたる兵共逃回りて、田佐、曾元、張顯、皆殺を被り、三萬の人馬、大半を滅ず、これに依りて、各郡の太守も散じて、其の任に歸りたり、既に李特が兵來り乘じて、成都の地を取らんとす、亟にこれが防ぎをなし玉へかしと告たりける、羅尚言を聞いて大に怒り、我李特を待つの志し薄からざるに、何ぞ彼わが大將を害するや、賊すでに吾を犯す、吾何ぞこれを勦らざるべきと、令を下し兵馬を整へ點じて、以て征伐せんとす、かゝる處に只見る、門上に人あつて、牒を奉り、事を申す者ありと報ぐ、羅尚令して、これを内に入れしむ、其人近づき前み、禮物として、夜明珠二顆、延壽珠一顆、祖母綠一塊、空青一丸を獻上す、羅尚、其の來れる所以を尋ぬれば、此の人すなはち胸前にかけたる、文牒一匣を取出して呈上る、羅尚これを見るに、乃ち李特が哀み訴る情詞なり、羅尚卽ち左右の人を屏け、其事の故を問ふ、其の人の曰く、李甸長、多々拜上す、まことに聖上より忝くも、宣威將軍長樂侯を授けらるゝの恩惠を蒙りぬれば、亦すでに晋の僚屬にあづかりかゝれる身なり、しかるを今辛大爺、其の寓に亡命者を隱し置き、財を盜み富を致すと、詐り誣ひて責はたる、所以の意趣をたづぬれば、其さきに李特に課せて、金子五千兩を

索め、此の金を出すに於ては、此八月の秋を過す事を、寛うして免すべしと云ふ、これによつて衆人進んで、然らばとても事もあるべけれど、今此際に至りては、即ちこれ反亂と云ふものなるを、我もし再び偏に讒の事をなさば、即ちこれ汝と謀を通ずるなり、然らば罪を朝廷に得て、我もまた通ずると言なければ、こゝに至つては決して僉方無處なり、併ながら衆人をして、急に所を去らしめよ、我れ追ひ迫つて捻にし、勦殺す事をなさじ、是等の外に、他の方便を爲すべきやうなし、爾ち速く回りて語れ、遲き事しばらくもして、別郡の行文こゝに到るぞならば、我れ定つて兵を興し、爾が反逆の罪を征し問ふべし、是吾が今日の、職分を盡す處なりと敎ふ、使者すでに回り到り、羅尚が言を以て、委しくつらね道ふ、李特は閻式と共に議して曰く、羅公はこれ德人なり、理宜しく遵ふべし、されども衆人の實に、順事を願ひ欲せざる上は、是非に及ばざる處なり、今羅公我等が行らざるを見れば、即日に兵を會して、こゝに到らん、急に人馬を調へ、險の要害を把住め、官兵をして、我が巢穴に入らしむべからず、勝敗はたゞ此一戰にあり、生死のがるる所今日なれば、各宜しく心を用ひ、力を協へて防ぎ鬪ふべし、衆皆應諾うて分ち守り、それより要害を取りたりける、羅尚は毎日兵を經へ、勢ひを持ち、只李特等が罪を懼れて、自ら逃走らば、これを逆し、然るの後に、兵を進め虛しく赶げ、一將を傷らず、官兵を戮らずんば、吾又如何とも、方便の仕方もあるべけれど、今此際に至りては、即ちこれ反亂と云ふものなるを、我もし再び偏に讒の事をなさば、即ちこれ汝と謀を通ずるなり、然らば罪を朝廷に得て、我もまた通ずると言なければ、こゝに至つては決して僉方無處なり、併ながら衆人をして、急に所を去らしめよ、我れ追ひ迫つて捻にし、勦殺す事をなさじ、是等の外に、他の方便を爲すべきやうなし、爾ち速く回りて語れ、遲き事しばらくもして、別郡の行文こゝに到るぞならば、我れ定つて兵を興し、爾が反逆の罪を征し問ふべし、是吾が今日の、職分を盡す處なりと敎ふ、使者すでに回り到り、羅尚が言を以て、委しくつらね道ふ、李特は閻式と共に議して曰く、羅公はこれ德人なり、理宜しく遵ふべし、されども衆人の實に、順事を願ひ欲せざる上は、是非に及ばざる處なり、今羅公我等が行らざるを見れば、即日に兵を會して、こゝに到らん、急に人馬を調へ、險の要害を把住め、官兵をして、我が巢穴に入らしむべからず、勝敗はたゞ此一戰にあり、生死のがるる所今日なれば、各宜しく心を用ひ、力を協へて防ぎ鬪ふべし、衆皆應諾うて分ち守り、それより要害を取りたりける、羅尚は毎日兵を經へ、勢ひを持ち、只李特等が罪を懼れて、自ら逃走らば、これを逆し、然るの後に、兵を進め虛しく赶げ、一

には則ち、李特が爲に情を貰り、一には則ち、功勞を要めあらはさんと思ひ擂つて、ひそかに細作を綿竹に往しめたるに、回り報じて、李特等兵を分けて各所を守らせ、聊か去るの意なしと云ふ、羅尚は說を聞き、即時に檄文を、各郡縣は云ふに及ばず、ならびに蠻夷の魁長までに回らし、命じて兵馬を集め、流民を追ひ勦らんとす、各方の者ども 頃日流民の混擾るゝ事を、悉く惡み恨むの時節なれば、各々命に應じて相集る、又文書を申べて、東の方荊州に至り、西の方長安に馳すれば、河漢王は羅尚が文書を見、即ち雍州都護衞博に、帶兵一萬と、德陽の太守張徵、ならびに牙將王宛、孫奇を差し、精兵一萬を相添へ、同じく成都に赴いて、賊を勦の戰を助けしむ、又上庸の守南夷校尉義歆も、督護張穉を遣し、兵五千に將として羅尚を助く、巴州の徐建は、兵五千を引ゐ、梓橦の張演は、兵士五千を引ゐて、皆來て賊を討ずるの軍を援く、羅尚は乃ち遠まきにこれを圍んで、綠水より軍營を結び始め、犍爲に至るまで連絡なる事、數百餘里に及べり、李蕊を以て催糧餉給應使となしたりける、さて羅尚は三軍の兵馬をは留め置き、陣營を定めしめて、自ら綿竹に往て、李特に見え、勸めて去すべし、次では彼が兵勢の强弱を觀んと云ひて、單馬にて綿竹へ至りける、李將は羅尚が、輕身にて來るを見、

閻式が曰く、甸長、慢るゝ事を休めよ、吾自ら計あり、用ひて以てこれを破るべし、敵兵尤も各處に多しと雖ども、皆來るが如きは、諸將の心、一ならずして、集る兵は烏合なり、吾兵を分つてこれを禦がせ、安に以て戰ふべからず、若し敵將の領ずる兵、いづれなりとも阻て住めば、其の勢に乘じて、多兵を破る事、いと易かるべし、其の勝に乘じて、又羅尙が軍をも殺破らば、關西の兵は、自ら退くべし、李特聞いて、關西の兵は等閑にて、敵すべきに非らず、吾當に自ら往き、其の勢の緊しきか慢るかを、能くはかつて、後に兵を行るべし、若し西兵未だこゝに至らざるに於ては、卽刻に兵を遣し、葭萌關を奪取り、此方より守住る程ならば、西に顧みるの憂はなからん、乃ち上官晶、寥順、任回、李超、李攀と同じく、兵七千を領じて、關西の兵に行迎ふ、羅尙はまた、李特が自ら兵を領し、西行するを探り知つて、乃ち張龜、張興、徐登の三將に命じ、三路を分つて、李特が本營を擊しむ、卽ち渠等に附囑して曰く、我咋に李特が、其壘の形を看るに、先に廣漢の兵の、破れを取りしこそ理りなれ、廣漢の者共流兵を慢る心ある故に、山險の中をもつゝしまず、此より軍の行列をやる、賊兵窺つて其備なき處を、前後より夾み、攻掩ひ擊つたる故にこそ、安く破れを取りたるなり、且〻彼が兵を計るに、凡そ二萬と稱るべし、李特

今自ら將として、西の方河間の兵に對するならば、是多して萬人を引くべし、然れば此の所に殘る兵は、纔るに足る事なしと、三將令を受け、前進で敵に向ふ、流兵の探事軍、馬を飛せて來り、李流、閻式にこの由を報げたり、閻式聞いて、諸君驚き慌ぐべからず、只彼が攻擊にまかせて、安りに味方動搖すべからず、日午を過るを待たば、敵將すでに、疲倦んは治定なり、時に我が砲聲の相圖を聞け、信砲一たび起りなば、忽ち六路の兵共殺り出でよ、最とも愼り無らんやうに、謹むべしと云へば、衆みな令を受け去つて、伏を定める、官兵共も又下知の如く、三路に兵を分ち、一齊に勢ひをなし、流軍の寨の前に迫つて、端的に攻ほさんと、息をも休めず攻めたりける、衆の流兵は、只是守り住めたるのみにて、如何にすれども動かばこそ、張龜等火急にせめかゝつて、空しき力を一段に糅み出しけるほどに、すでに其の日も午時に過るころは、官兵みな〳〵懈怠りて、倆と我と、こゝかしこに閑談する族もあれば、或は兵刃を側にすて置き、兩足箕のごとくに蹈出し、汗を拭へる者もあり、こゝに三人かしこに二人、隊伍錯亂れ、將倦み卒疲れて、自らに法律を失ひける、閻式はこれを見、人しらず獨笑し、乃ち衆に命じて、號砲を放ち起れば、三屯の中の陣より、李流、任道、李譲、羅淮、李滿、寥碩等、六路を分つて

一齊に、さつと殺出せば、張龜、張興、徐登は、頭を分けて敵を迎ふ、兩陣直に殺り亂れて、征塵日月の光を遮り、號喊雲漢の波を動す、官兵共、刀を著たる者は甲をすて、馬に乘る士は盔をうしなひ、箭を被むつては目を毀り、鎗に刺れて牙を傷る、哭聲數里に聞え、血水積聚つて流をなす、流兵共死力を奮つて殺入れば、其勢ひ當るべからず、官兵こゝに、大に敗れて亂れ奔るを、官軍の三將、喝し止むれども住らず、大勢に引きたてられ、亦奔走したりける、李流、閻式等、勝に乘じて、官兵を追ひ擊事、すでに二十餘里、官寨を見るほどに、近づいて引還す、こゝに李流、閻式議して曰く、適官兵の營寨を見るに、其の多き事、數百里に連なり、兵將甚以て廣し、今一陣を敗ると雖ども、曾て將の一人をも損ぜず、明日再び爰に來るほどならば、必ず分ち佈き齊へ整ひて、與に戰をなし難かるべし、諸君勞を辭すべからず、今官軍新に敗れたれば、必して諸將、商議をなし、いまだ我等と進戰ふの心なく、又我輩の到攻めんと云事も、其の人數の多きに心驕り、さらに以て心づくまじ、されば卽刻、この混雜の所に乘じ、味方の將兵裝束を整へ、各々かくの如くの計策にて、敵兵を計るべしと、諸將と共に密語點頭きて、人知れず謀をば定めける、

通俗續三國志卷之二十六

李流輩夜襲官寨

既に其の日晩はてゝ、山霧野を蔽ひ、暗々たる夜の氣色、最早一更にも過ぎぬるころ、李流、李滿、李輔、李讓、任道、楊褒、寥碩、趙誠、趙說、王辛、以上十員の將等は、此まことに、呉の陸遜が、漢を破りし計ごと募きを以て衆を制するの術なり、我等當先かけて働くべしとて、各精兵一千を帶び、枚を啣み疾起ち、はや二更にも成るらんと思ふとき、官寨に近き見れば、果して備は無かりける、誰か知らん、天より李特を助くるとは、忽ちに西北の風大に作り、官寨へまくりつけて吹たりける、流將ども大に喜び、持せたる火藥柴草に火をつけ、分かつて五路に開き、一齊に殺り出て、寨に逼りて火を放つ、火箭、風中に去る事急に、直に寨内に透れば、官將共慌忙で殺り出す、但喊聲耳に震ひ、敵も味方も辨たばこそ、火勢はすでに熾んになり、風は愈々勵しくふき、半時ばかりの其の内、四方の火先燃發して、たゞ一片の通紅とやけあがれば、官兵どもは亂竄れて、敵に合んとする者なし、李流等は只外邊に於て擊殺りける、羅尙は出て親ら見るに、味方の死せる屍地に滿ち、

數十里の火燄天を燭して、今はこれを救ふべき道を知らず、こゝに於て、密に徐盤を喚んで、最早叶ふまじ急ぎて落ちんと、成都をさして走り回れば、諸路の官兵も、遂に皆な敗れ潰えて、本鎮々々に逃げ還りけり、惟張飛一人のみ、流將李謙を殺り死し、勇に振舞ひたりけるが、官兵の盡く散ずるを見、これまでとや思ひけん、亦これも黒夜に乘じて、上庸に奔歸りけるが、途中にて流兵の追伐に逢ひ、從へる兵卒多く傷られ、ほう〳〵にして歸りける、閻式は諸將に命じ、官軍の連ぬる營數百里につゞいたるを、皆火を放つてこれを燒しむれば、三日に至るまで、烟火は猶ほ滅えざりけり、李特は夜中、綿竹地上にあたつて、火炎さかんに發し、天の紅なるを看て、心中大に懼れ、思ふに商議をなして、はやく兵を回さんか、恐らくは我家基に於て、失あらん事をと云へば、上官晶が曰く、閻公多謀にして善く守れり、必ず過失を致す事あらじ、且へ楊褒あつて助をなす、想ふに是は、我が兵の、羅尚が營を燒ならん、方隅を考ふるに、我が綿竹の方には、なしと云ふにぞ、李特は少し心を安んじける、かゝる處へ探子告げ來り、關中の兵馬、已に近き事、三十里に止ると云ふ、李特乃ち軍を率ゐて、路口を拒ぎ住めて待ちける、程なく衙博が兵到り、陣勢を擺と開き備へて、馬跑け出し叫んで曰く、汝等流衆、皆關外の良民、我が界の百姓ならずや、聊か年の荒るゝについて、悉く皆逃れ竄れて、今故土に還る事をば思はず、たゞに徭役に背き差ふのみならず、川中を亂らしめ、反逆を企つる、是何の道理ぞや、李特が曰く、吾本數代、忠義の家たり、今や已む事得ざるに迫つて起る、汝すでに界を連ぬる鄰の守たり、何ぞ遠く山川の險を超え、爰まで遮に兵を起して吾に迫るや、我等はこれ、死中に活らん事を求む、何ぞ自ら謹まで、乃ち活ける身を以て、來りて易く死につかんとは働くぞ、君に勸む、速に回り去り、殺戮に遭事を免れよ、衙博、言を听くより、大に怒り鎗を捨り、馬を躍らせ出つれば、李特が陣上より、上官晶、向前に敵し住む、兩下鎗來れば刀去つて、戰すでに三十餘合、いまだ勝敗を分たず、衙博は暫く刀を架へ住めて曰く、今此に至り、ことに汝等を招き諭して、鄉に還らしめんとす、思はずも進退路なくして、妄りに官兵を拒がんとはするぞ、上官晶が曰く、すでに虎の背に上る、必ず頭を盡して凶吉を見んと、刀を揮て再び進み、二人それより精神をなげうつて、又戰上二三十合すれば、兩馬俱に疲れ、馳せ驟るに及ばず、衙博喝して、賊將且く住れ、若し還たわれに怕れずば、馬を換て再び來れと云ふ、こゝに於て各本陣に歸りて馬を換ふ、寥順が曰く、倆は戰をとる事すでに久しうして、力も乏しからん、我がすゝんで

かれと手段をなすを待て、上官晶が曰ふ、大丈夫安んぞ信を失ふことあらん、もし又かしこに行かずんば、是れ怯れを示すなりと云ひすてゝ、復び出れば、衙博も又來り、兩將の戰上四十餘合に至るとき、衙博が曰く、汝流徒たりと雖も、頗る勇略あり、是れ何の姓名ぞ、晶が曰く、吾は乃ち上將上官晶なり、敢て問ふ、官將何の名ぞ、衙博が曰く、吾れは乃ち雍州西夷都護軍衙博なり、好々馬より下て降を投し、共に鎮將となれ、愼んで反賊の中に、陷いる事無くばこれ可けん、否さるときは、恐くは自ら保ち難からん、上官晶が曰く、降もまた易からず、榮辱は天にかゝると、刀を揮つて再び戰ふ事、又三十餘合するほどに、漸々として日晩れに及び、こゝに於て、李特金をならし兵を收むれば、各々皆寨にかへれり、李特が曰く、關中の兵將戰にならひ、隊伍嚴整ひて、いま力を以て勝つべき者にあらず、明日まさに暗計を以て、他を破るべしとて、寥順に命じ、陵崩の東なる山嶺を越え、ひそかに衙博が寨の後に出でしめ、精兵五百を領じ、但寨前の喊の起るを聞かば、倆は即ち搶出で、火を放て其柵を燒け、すでに寨を守る兵を殺り散らさば、こなたよりは李超が兵を合せ、同じく大道を望んで、衙博が後を來り攻めよと云ふ、寥順は令をうけて去れば、再び李超を喚んで、兵一千を將ゐて、西山の小徑を越え、是又衙博が營を劫せ、若しすでに火の發するを見ば、彼の兵逃れ散ぜん、即ち寥順と共に殺り轉れ、只關兵の寨を出離る事、遠からんを待と云へば、李超分を承て、兵を引て前去る、次の日早く衆を召んで、計を授けて曰く、今日、衙博軍を出さば、倆數人輪流うて戰を挑め、かれを爰に手間どらせ、詐り住めて衙博が歸るをさゝへ、寥順等が寨に至つて、功を成すを待て、衙博が寨に事あるを見ば、戰をすてゝ必ず救はん、其とき我等後に隨うて掩去り、超順等と殺り轉らば、以て衙博は獲にしつべし、言いまだ畢らざるに、衙博が兵寄來ると云へば、李特も又寨を出で陣を佈く、衙博が曰く、汝昨夜、吾言の理非を、筭と思ひ量りて見たるや、上官晶が曰く、我なにをか思案に及ばん、倆は無禮こそいひつれ、衙博喝して曰く、死に近き賊徒、敢て道ふ、我言無禮なりやと、馬を跑せて殺り出せり、上官晶、刀を輪して接し住む、二人鬪ふ事三十餘合にして、上官晶、馬をひつたて走行く、衙博のがさじ賊奴と、赶け行事、いまだ二三里ならざるに、李攀、擂出て、衙博を住め共に鬪ふ事、二十餘合ばかり爲よと見えしが、李攀も亦退き敗る、しかれども衙博赶けず、李特是を見て、親ら兵を引いて相戰ふ、衙博こゝに勇を奮ひ、鬪ふこと二十合ばかりにして、李特も又詐り敗る、衙博又これをも赶けず、任回是を見て、

衙博に覺られては惡かりなんと、兵を引いて、衙博に敵し住めて戰はず、箭砲を起して拒ぎたり、かゝる處へ、衙博が探馬、飛が如くに馳來り、流賊李超、兵を廻して味方の寨を燒き、粮草をかすめ、呂充、劉輝の二將をとらへて殺り死す、これに依つて、兵皆四方に散じて、走り去んぬと報ず、衙博これを聞き、滿身に怒を生じ、馬を勒して殺り轉る、上官晶、李攀、任回、李特、四處に圍み住めて、擊取らんとするに、衙博は又陳を撞き、原の路に回らんとして、いまだ圍みを出も果さゞるに、李超、寥順、殺至りて、衙博を中にとり圍む、衙博はまた、とり圍まれて叶はじと、左に突き右に撞けども、聊か出るに叶はずして、すでに危く迫らるゝ所へ、巴西郡の丞、毛植、五官の長襄珍、南枝の隊を引いて力を生じ、軍兵をすゝめ、殺つて至る故、縱にこれを救ひ得て、それより衙博、毛、襄、諸ともに、漠中を望んで走りけり、

李特建二年號

かゝる處へ李蕩が一軍殺出して、衙博が逃れたるを惱り、後に隨うて追ひ去りける、上官晶等も、ともにこれを追去て、德陽の地まで至ると雖ども、遂に衙博を逸したりける、李蕩が曰く、汝等急に小路を抄めて、葭萌關を奪ひ取り、回る兵を截

住めよ、衙博をば擒にすべし、然るときは、關西の兵は、再び西に向ふべからずとて、各々馬を放つて赶けたり、行こといまだ二十里ばかりなるに、探馬來り報げて曰く、衙博すでに關に入りて據住ると、李特聞いて、口惜しくも衙博をば逸しけり、天明、毛植、襄珍の二人なかりしかば、渠めを生ながら、獲にせん者をと憤る、李蕩聞いて、些何ほどの事かあるべき、せめて此の二たりの堅なりとも擒にしつべし、寔に惡みつべき者ぞ、吾れ今當先かけて、これを取るべしとて、卽ち本部の兵を引分け、轉巴西の地を掠め去る、毛植、襄珍は、李蕩が兵の盛にして、敵しがたきを看るより、一戰をもむかへ闘はず、おめ〳〵と城郭つて降りたり、李特は渠等が降を受け、李蕩をして、毛植、襄珍の二人を撫で調へさせて、綿竹に回れば、李蕩は百姓を安んじ恤み、毛忽ほどもこれ等を掠めせばむる事なければ、各悅で服し隨ふ、それより兵を進め、葭萌關を攻打たり、衙博と李蕩と、凡て三たび戰をなすと雖ども、官兵堅く守りて、勝を取る事あたはざるに、又寥順が兵を引いて相助くるに過ひにける、衙博も外に、來て援くべき、味方のなきを覺れば、よしなき處の永居とや思ひけん、關をすて〳〵、雍州に遁れ歸りける、李蕩は遂に、葭萌關を奪ひ得て、李特にこの事を達しける、李特はすでに、兩關を得るのみならず、關西の毛植等を味

方としつれば、新なる兵一萬を添へ得たり、乃ちこゝに自ら益州牧と稱し、梁寵の諸軍を都督ける、それより官屬を分ち置き、拔とる處の地方を鎭守せしめて、年號を建立し、建初元年とは號しける、其境内に赦を行ひ、重く降れる將、毛植、襄珍を用て、以て向來の降人を招きすゝめける、こゝに商議を立て兵を進め、德陽をうたんとす、德陽の守將は、撫軍將軍、刺史張徵なり、賊兵すでに堺に入ると云事を探り知り、乃ち將佐劉商、瞿免と與に、高により險に據つて、以て守り相拒ぐ事數日なり、李特兵に將として挑み戰へば、張徵、險に乘じて、これを擊つに、李特が兵、これが爲に折傷るゝもの其數をしらず、故に少し沮んで見えたるを、張徵、夜を俟て兵を將ゐ、直に李特が營を攻む、李特こゝに敗れて、退き走る事二十餘里なり、李特又兵を將ゐ、分て二營を作り、高きに依り、險をかたどつて、これと鬪はんとす、先づ李蕩に命じて、東山の上に營を構へさせ、李特は自ら西山の上に營をとる、張徵このやうを探り知れば、卽ち劉商、瞿免の二將を喚で、各々分ち付けて、今賊兵、又我が高きに依るに習つて險をとる、此また地の利を知ざるものなり、若したゝ渠れ東路を巡つて、吾と死戰するが如きは、渠れ衆く我寡ければ、其の勝敗いまだ逆め料りがたし、しかるに此の如く仕方なれば、これ計を以て取やすきの

み、倆二人、步兵三千を山路に狥つて、遥に李特が營の後に趨け、我まさに馬軍を將ゐて、直に李特が營の前を攻めん、只砲聲の一响くを聞かば、卽ち攻て寨中に殺入り、寨の四面より、火を放つて是を燒けと云へば、二將計を受けて去る、次の日張徵、兵を進めて李特を攻む、李特思ふに、山路崎嶇つて險阻なれば、張徵が兵一時には至り難からんと、これに依りて備をもなさず、油斷に見えたるところへ、其日の午刻ばかり、張徵が兵、にはかのやうに到れば、李特は思ひの外に倉卒て、衆兵を引いて出で拒ぐ、縱に陣を佈き鼓を擂ち、兩邊より砲を放つと齊しく、劉商、瞿免二人の者共、砲の聲の响きに應じ、兵を引いて打入り、李特が寨の風上より、火を放つて燒たつる、李特はこれに驚懼れ、任道、羅淮をして、回り救はしむと雖ども、山徑窄く狹きゆゑ、反りて劉商等が步兵の爲に、殺り退けらる、羅淮すゝんで、山寨すでに失す、宜しく東路より、力を奮て殺出で、東山の兵と一所になつて、再び計議をなすべしと云ふ、李特聞いて、路險に日暗し、若し還つて殺出でば、必ず多損ずる事を致さん、しかし西の方、山險をとり住めて據り、李蕩が救の兵を待ち、兩頭より夾み攻るなら、方に敵をば破りつべしと云ふ、羅淮云ふ、不可なり、險を守らば困しめられん、救兵もまた入難からん、李特つひに听かずして、衆兵と

共に山に登りて據り守る、張徴は兵をひきゐて、李特を圍み住むる處に、早く人在て、李蕩が方に報じて言ふ、父君今、張徴がために困しめられ、西山の危きに迫ると、李蕩この言を听も果さず、卽時に兵に將として、殺り去つて救應ず、行事十里ならざるに、山險しうして路狹く、漸くに一人一騎を容るゝばかりの道なれば、李蕩が兵進みがたく見えたりける、司馬王辛、これを見て、急に人をして、路遥を尋ね求めて、慌りを致す事を免れん、李蕩が曰く、父深險に在り、敵のために危うせらる、安くんぞ路を覓むる事を俟たん、正に吾れ子たり、命を効すの時なりとて、乃ち馬より飛下り、歩より行く、一長矛、一利刀を、左右の手に挾持し、當先して進み、汝等若し大義を念はゞ、後につゞいて相助けよ、敵人には我自ら當らんと大に叫び、直前かけ、此險二三里ならずして、路道漸く濶かりける、向ふを見れば、敵兵千ばかりの人數にて、守り住めて居たりける、李蕩はこれを見るよりも、踴躍てかけ入り、左手は刀、右手は矛、或は砍り、或は撞き、かたはしより殺り得れば、官兵ども此の勢に懼れをなし、紛々として亂倒る、官將瞿兎、鎗をとりて拒ぎ住むれば、李蕩は怒れる目横さまにさけ、厲聲山虚にひゞき、大に喝して躍りすゝみ、瞿兎をゆるさず、一刀に頭顱を砍り破り、一矛を起して、瞿兎が胸をつい て刺死す、衆兵はいよ〳〵敗亡して、近づく者はなかりける、劉音、是を見、向前で恨を報いんと砍かゝりけるが、これも敢なく、李蕩が一鎗を被り、小腹のとほりを刺中られて、頭を轉して逃れ行く、劉商は吾弟の劉音が、山の坡に至つて倒るゝを見、斧を揮つて大に叫び、賊奴なんの無禮なる、好々鎗を棄て吾が手を動す事を免れよ、李蕩は耳にも聞いれず、命をすてゝ對敵し、水火を出して戰ひける、王辛等が後よりもいまだ至らねば、李蕩は一人危難の中にあつて相爭ひけるが、劉商が一斧を、肩の傍に砍中てられ、もつたる刀を打落さる、されども李蕩、喜ぶらくは、甲の厚を掛けたる故、身には傷を負はざりけり、李蕩しばらく、後へに退ぞき走りたるを、劉商はこれを何くまでと、大急に赶けゝるが、倏りに忙しくこれを追ふとて、眼に地を見ず、脚を失して跌き倒る、李蕩これを見電光の如く、轉り返つて起しも立てず、金輪まで と撞く鎗に、劉商はたゞ一刺にさゝれて殺死さる、張徴は李特が救兵大に至り、陰處に於て相戰ふと報ずるを聞くより、乃ち親ら來り助けたるに、諸將みな死するを見、衆兵を喝して、此處歩戰に過ぎず、何ぞ意を用ひざる賊をして此の如くに、志を得せしめたるやと、一齊に下知して箭を放たしむ、こゝに於て官兵ども、死を顧みず兢ひ進む、射かくる箭雨點のごとし、些少の流兵あたり當つて拒げども住まらず、李蕩が身に中る處十餘鎗、箇はたゞ滿體に折掛けて、正に危きに迫るとき、王辛こゝに殺り至る、喊聲天に震ひ、叫聲樹を動し、谷に響いて夥し、李特この聲を听くより、羅准、任道とゝもに、圍の兵を殺散し、內よりして、衝いて出づ、官兵共は上下よりして攻立てられ、盡く奔潰え、或は谷にまくり落され、或は岩崖に、觸あたり、自からの兵器にて、殺傷するも多かりける、こゝに於て官兵の全軍、幾んど盡るに至つて、殘り少なく沒しけり、惟り張徴は、打殘されたる官兵ども、漸く千人ばかりを引まとつて、間道より走り出づ、李特は李蕩が傷重く、兵士の傷く者共の多きを見、涙を垂て言ふ、德陽を取事あたはず、反りて數人の傷を受け、父子あやうく命を喪ふに幾りし、是貪心の慢る所なり、今宜しく張徴を棄て回り、後悔を免れん、時に王辛が曰く、今張徴、兵敗れ將亡び、勢力すでに竭き、一時焉ぞ能く卽ち振はん、正に宜しく其の窘極るに因り、追てこの人を擒にせん、脫去て重ねて餘衆を聚め、鄰兵を會合し、再び來つて仇を復せば、後の患を遺さん、李特これを然りとし、又兵を整へ重ねて進み、直に德陽を扣いて攻めたりける、張徴は城の將に陷らんとするを見るより、兵を出して連に戰ふと雖も、皆敗れたりければ、かなはで城を棄て去りたりける、李特すでに城に入て、しばらく衆を息めんとす、李蕩が曰く、張徴は川中の智將、今幸に險を守り、慢りて敗れたれば、心膽倶に落ちぬらん、正に火速にこれに迫り、以て、後の禍を斷ん、安ぞ緩を縱して悔を取らんとて、遂に傷をつゝんで先づ起てば、上官品、王辛、任道、羅准等、水陸二路より速に赶けゝるが、漸く溶水に至つて、張徴に追付きける、張徴はすでに岸に走り上らんとする時、李蕩が一箭に射られて、馬より下にたふれたり、任道、搶進んで其の首を斬る、上官品、又張徴が子、張存を擒にし、家眷を併せて德陽に押し回る、李特は張徴が忠正を感し念つて、張存に命じ、父の屍を載せて、古鄉に回り葬らしむ、卽ち庫中の錢、千兩を取つて賜し、家の眷屬をゆるし還らしむ、こゝに於て人々皆、李特が德を稱し、爭ひ慕うてこれに歸す、これより李特が勢ひ、漸盛んになりければ、巂順を留めて、德陽を守らせたるに、巂順また東の方、涪陽を掠め取つて回れば、李特は又涪城を攻めて奪ひ取り、又少城を攻め、常俊、費遠をぞ斬りたりける。

李特再破羅尙

こゝに費遠が弟費深は、兄が既にうたれ、職のやぶるゝを見るより、走りて成都の地に至り、羅尙に見えて說きける、今賊將

李讓は、吡橋を守り住め、李特等は又、東の方殘崩を奪ひ、其より轉り巴西を掠め、德陽を下し、涪城を併せ、常俊、我が兄費遠まで討死したるに依り、川中大に震へり、しかるを將軍、既に西都の總主たりながら、進で賊を討ずる事を思はず、坐に流寇をして、妄に剛強ならしむる事、これ忠に處し、任に適ふと云ふべけんや、其責いづれに歸せんと思ひ玉ふぞと云へば、羅尚、此の議を然りとし、こゝに至つて張興を前鋒とし、費深を以て後軍とし、其の兵三萬を引いて、直に吡橋を取らんとす、又人を遣して上庸の張龜を召んで、協へ助けの兵となす、張興等すでに、吡橋に至り近付んとして、都尉錢貫に兵士一萬をあたへて前め、まづ戰を擧ましむ、李讓等、橋に倚りて聊も動ぜず、相持する事一日に及べり、官兵頻りに戰を求むといへども、これを得されば、是非に及ばず、兵を退けて寨中に回りける、次日になりければ、張龜が兵も到りつくに、四人の官將、兩路を分つて一齊に、李讓が寨中を望んで殺かゝる、これよりさき、早く閻式がこゝに計を設け、精兵を寨外五里の地に伏せたれば、只に寨中には、些の小兵卒ばかり內に在つて、わざと行動して敵を欺きける、李攀、任回、鴈碩、趙誠、王角が伏兵となつて、後にあると云事を、張龜等が努にも知らざりけるぞ念なけれ、こゝに力を奮ひ、大に吶り、李讓が營に殺入つて見れば、中には手に立つ兵もなし、これは賊の暗計ならんぞ、早く退ぞき身を回して、殺出よと云ふほどこそあれ、只听く、砲銃天につらなりひびき、李攀、任回、鴈碩、趙誠の四將、頭を分つて殺出す、張龜、錢貫、費深、張興の官將ども、各敵を迎へて、戰いまだ久しからざるに、大に吶をあげ、漸く近き來るを見れば、流將の李輔、趙說、李文、李祺等、四方より合し至つて、終に官將どもを、吡橋上に圍み住めて攻たつれば、官兵こゝに殺みだされ、討れたる其屍積盈て壘々たり、河水も之がために流をとゞむ、張龜、張興が等、これまでとや思ひけん、圍を衝き、血路一條を切ひらき、稍々に走り得て、成都をさして回りける、羅尚は衆將の、敗れて回るを見るより、心甚だ惱み怒り、即日に衆を集め、再び張龜、錢貫に命じ、兵一萬に將として前驅たらしめ、自ら衆將を率ゐて、兵士二萬を領べ、繼いで發し、遥に吡橋に逼りて營をなす、李讓は勝に乘じて心驕り、閻式にも問ひ議らず、便ち自當先かけ、初手の勝に乘じて、羅尚をやすく、擊破らんと到りける、かゝる處に錢貫勇を奮ひて、李讓が軍を殺り敗り、直に起つて橋を過ぐ、閻式はこれを聞き慌ぎ、急に任回、李攀を命じ、截出て囮救ふ、李攀は錢貫を截り住め、戰ふ事二三十合ばかりなるに、錢貫力怯うして、すでに負け色に見えたるところへ、また

任回が攻入れば、錢貫つひに二將を敵し、抵むること叶はず、其の身は早く擒となつて、流軍に獲られたり、李讓はこゝに思の外の勝を得、勢に乘じて吡橋をきり過ぎ、羅尚が大營に打入りたり、張興、張龜、急に來りて救應ずるに、羅尚いまだ一戰にも及ばずして、早かけ出して走りたりければ、遂に官兵の軍心亂れ立たるを、趙誠、李攀等、力を奮ひてこれを擊つ官兵又大に敗れ、粮草、器仗、悉く李讓にこそ奪ひ取れけれ、李讓は猶ほ官軍の後に隨つて追かけ去る、羅尚は漸く走りて本境に入り、柵を閉げば李讓は兵士に命じ、火を放て關隘を燒毀り、進で成都の北界に陣を屯したりける、羅尚これを大に懼れ、思ふに一計を下して張興に命し、詐りて李讓が方へ降を請はしめ、以て內應をなさしめたり、張興命を領ひ去つて、李讓が陣に降をなす、李讓之を誠と思ひ、渠が降を受たりける、斯て張興は李讓が陣の虛實を窺ひ、將の強弱を察するに、其の兵二萬に過ぎず、將軍たゝ任回、李文、趙誠のみに止まれり、よく〳〵これを觀すまし、遂に己が心腹の士をして僞に出し、羅尚と約を定む、羅尚は內通の約をとゝのへ、張龜、徐壁に、兵一萬を引卒させ、枚を啣み疾起つて、遥に李讓を劫しける、寨中の流衆何の備へもなき處へ、官軍大に喊をあげ、寨營に殺て入る、李讓等慌忙ぎ、急に起きてこれを防がんとする故に、人は甲を掛るに及ばず、馬は鞍を排く間もなければ、虛らに譟ぎ動搖きたつ、官兵は氣に乘じて、混りにこれを殺立れば、四散縱橫に亂竄るゝ計なり、中にも李文は死命をいとはず、內より殺出、敵軍を防ぎけるが、傍にありける降將張興が爲、一刀に馬下に斬落さる、李讓は味方の討るゝをも相顧みずして、走り轉つて吡橋に至り、李流が營中にかけ入りける、張龜等あとを赶け、連夜これを追つて、同じく吡橋に至るに、李流は衆を率ゐ殺り出て、これを住む、官兵もこれに依りて追ふ事かなはず、寨を立て相拒ぎたる、未だ三日ならざるに、李特は上官晶と共に軍を回し、吾營に至れば、羅尚と李讓戰を持し李文是が爲斬れたりといへば即刻兵を移して吡橋に至り、李文が爲に仇を報ゆるの一戰を、きびしく爲んと云ふを、羅尚が細作、早く報じて知らしむれば、羅尚が曰く、われこの度の勝をとる事、寨を劫したる倖によりて、偶利を得たるものを、輕々しく兵を以て、こゝに迫れるや、ことに李特兵を回して至れるなれば、其勢ひ必して敵しがたかるべし、しかし早く成都に還らんには、重ねて兵を會して、再びこゝに進まんとぞ云ひける、張興、費深等が曰く、豈大晉の方伯として、此の草寇を懼れ、一度彼と戰はず、みだりに逃げてよけんやと、恥しめければ、羅尚これにや媿ぢたりけん、即ち兵を出して、かれと搦戰

はしむ。李特又兵を引いて陣を佈き、拒ぎ戰ふ、兩邊に鼓を擂し喊つくれは、李蕩は手に大刀を舞して出づるを、官將張興は刀を橫へ、接へ住め、二人各英雄をはたらき、刀は雪を捲くがごとく、惡戰三十餘合すれども、ならびに上下の勢ひなし、費深は張興が、勝を取る事あたはざるを見るより、馬を拍ち衝き入つて相助く、流將任道是を見て、馬跑出し、これをとり住む、四將それより往來し、交に鬪ふ事、約するに二時ばかりなり、正に酣戰するにあたつて、流將の李讓、李攀は鐵騎を以て、下流より偸に渡をこえ、其面に遶出れば、官兵大に亂立つ、羅尚は急に張龜を分けて敵せしむ、李攀は己が勇を恃んで、單馬にして、直に張龜、張興、費深の三人を、敵に取つて戰ひける、三騎の官將ども、此一人に砍立られて、一同に走つて逃けたりけり、李攀是に勇をなし、後に隨つて赶去りけるが、長龜が身に轉して刺す鎗に、撞き死して馬より落つ、流兵これに驚いて、少し囲て追事を止めたりけり、こゝに於て、羅尚方めて安を得、遁れて郭水に至つて軍を止む、ある人羅尚に謂つて曰く、今日、劇賊李攀を除き得たりと雖ども、我許多の粮草、器械を去て、兵士六千ばかりを折きをはり、又一夜に追伐るゝ事四十里なれば、兵力兩ながら疲れ畢んぬ、如かじ且らく成都に回り去つて、軍兵を休せんには、費深が

曰く、これ不可なり、今若し一たび成都に回りなば、賊兵必ず力を盡し、勢に乘じて、城池を圍み困しめらるゝときは、これ渠が制を受けん、しばらくこの處に寨を立て、亟に人を梁州、犍爲、廣漢の諸處につかはし、急に救を求めて、一二處の兵の來るを待ち得ば、便ち賊を敗るべし、羅尚、此言に從つて、卽ち使を四所に往かしめ、兵を借て救援となす、數日をも經ざるに、梁州の刺史許雄は、裨將孔志、張世二人に、兵一萬を相添へて遣せば、廣漢守辛冉は、部將李統に、兵三千を帶しめ、又犍爲の太守李苾は、牙將傅欽、賀仁の二人に、兵五千を授け日を刻み、俱に郭水の寨中に至り援け、羅尚が下知に付かしめたり、羅尚はこれらを接き入れ、勞煩なるを慰むる、爰に南蠻校尉樵登は、副將秦敬、左明の二人に、兵士七千を引かせ來つて、救應せしむるによりて、羅尚が兵威復振ふ、李特は官兵の、四方より集る事を探知り、心中に憂へ懼れ、衆將を召集めて、これに敵對すべき策を問ふ、圖式が曰く、吾に一計あり、夫れ官兵湊り集る、其の心各々別れ、互に強を稱する、これ人情の定まりなり、然れば吾れ今、但これに弱を示して以て誘き、然して後奇を用ひ、策を設けて、一戰に羅尚が衆を破らんに、何の難き事か有るべき、懼るゝに足ずと、何の異ともせざるを見、李特大に喜悅し、乃ち李超、任

回等に分ち付けて、每日出て戰はしめ、常に弱を示し、少らく怯れて以て、渠が其の志を驕せける、されども强て官兵を出さざれば、流兵も、もとより出ず、つねにたゝ、渠が承手にのみなつてあしらふ、これに依りて、官兵ども以爲く、李特が今、我軍へ强兵の、新に集るを怖るゝゆゑに、此の如くなりと慢りて、それよりは怠り出來て、心を皆忽せにし、さらに用心をも爲さゞりける、

李特計敗官兵、

かくて相持する事、十有餘日に至りて、李特は羅尚が備の怠り惰つて、日夜を餐む巡更も嚴ならざるを探り得れば、こゝに上官晶、任回、李流、趙誠の四人をして、精兵を帶領し、夜に乘じ敵軍を劫して、羅尚が大營を伐てと云ふ、四將令を受け、人數をそろへ、電光の如く閃めいて、直に羅尚が本營に斬いるに、羅尚急に鎗を綽ひ馬に乘り、張興とともに殺出しけるが、流兵の箭、雨の如く發し飛ぶに、羅尚が乘つたる馬も、數箭にあたる、されども張興が緊しく馬の後を守り防ぐにぞ、流兵の剛勇も、漸く陣を離れたれば、それより羅尚は、心やすく退きにける、流將任回、羅尚と見るより、馬を跑けさせて赶け去る、官將李統、この急なるを看るより、往てこれを救はん

と、同しく馬を跑たつる、爰に李蕩は、寨外にあつて殺り轉ぐり、官兵を追討つとて、李統が馬に向ふさまに出合ひ、大喝一聲して打つくる刀に、李統が首は、馬より下に轉展けり、右寨に引へたる孔志は、喊聲の起るを听得て、剛叉を綽て馬を馳せ出し、戰はんとする處を、李讓は伏れて寨外に居たりけるが、孔志が去ると見るより、急に弓とつて、先づ一箭を發す、妨げず孔志が左の肋に中れば、身を翻して馬より落ちけるが、これも亂兵のために刺死されて、あへなき死をこそなしにける、張世は孔志があやまてると見るより、急に馳て到りけるが、大寨の前にして、流將任回にはたと遇ひ、馬を交ふる事、三合ばかり、いまだ互の勇劣も見えざるを、後の方より、李讓赶け至り、背より一刀に、これをも砍て馬下に落せば、秦敬、傅欽、雙到つて戰はんとするを、流將趙誠、これを住めて、五合ばかりは鬪ふと見えしが、秦敬は趙誠を生ながら擒にし、馬を跑てゝ行過ぎぬ、李流は趙誠が生擒るゝと見るより、急に矢をとつて、暗に秦敬を射たりしが、其の射あやまつて、趙誠が面門にあたりしは、兎に角に趙誠が、不命の至りと見えたりけり、秦敬即ち趙誠をば、馬より下に投擲て、李流が來るを逆へて鬪ひけるが、縦に五合の間に、秦敬が刺す鎗を架はづし、李流は左の腿をしたゝかに傷りける、されども李流、痛を負ながら、

これを抵り住め、再び七八合、馬を交ふるところに、上官晶、惡夜叉の空をかけるがごとく來り救うて、秦敬と戰ふたり、頃あつて流將李恭、李堪等もまた遏り至り、李恭は傅欽を砍り死し、上官晶は秦敬を斬をはる、羅尚各兵の皆敗るゝを聞知れば、遂に張興等と共に、成都に走り回れば、賀仁、左明も、亦已々が鎭に走り回りける、こゝに至つて李特が兵威大に盛になり、乃ち勢ひに乘じて、旁の郡縣を掠めとる、任臧、李堪に命じて、上邽の地を襲はせ、閻式、李祺に命じて、始昌を侵させ、李武、任道は陳倉を攻め、李遠、羅准は陰平をとるべきの旨を令すれば、四路の主將、兵を領じて前み去る、到處の郡縣、みな〳〵風を望で歸附はずと云ふ事なければ、又に血をも塗らずして、下し從ふる郡縣あまた處なり、こゝに於て、諫議李譲、武陽侯李流、掌兵都尉楊褒、合上封守任臧、始昌令閻式、陳倉令李武、陰平守李遠等上書し、李特を進めて尊號を稱すべきよしをはかるに、李特は未だ、羅尚、辛冉、李苾等の仇敵ありて、俱に大郡を皆な守れば、今尊號を稱すべき時に非ずとて、これに听從はず、閻式、楊褒等、又請ふらく、梁統が昔し、竇融を奉じたる故事の如くにして、一方の霸王と稱し玉へと云ふ、李特これをも辭退をなして曰く、諸軍の推擧るとを蒙むる事は、吾德涼うして、稱すべきなしと雖も、まことに以て愛せらるゝの故なりと知らる、併がら、暫く廣漢成都を奪ひ得るを待たまへ、其後こそ諸君の心にも從がふべけれとて、乃ち兵を發して、先廣漢を攻むべしと、李譲を以て兵一萬をひきゐ、前驅たらしめ、閻式を後備とし、即日に起て軍を出しける、辛冉は李譲が兵の到るよしを、先立つて探り知れば、吾もまた兵を驅り促し、境を出てこれを防ぐ、大小の戰三度に於けるまで、皆辛冉が負けになり、士卒も多く伐れけるゆゑ、かくて平場のかけ合には、叶ふべからずと思ひ、速く退いて城中に入り、固く守りてこれを防ぎ、救を羅尚に求めける、羅尚は李苾と兵を合し、費深、賀仁を五千に大將とし、去つて廣漢を救はしむ、費深、賀仁の二將は、兵を率ゐて廣漢へと急ぎけるが、途にて李譲が勢の盛なるを見るより、大に懼を生じ、中途に留つて、敢て進む事をなさざりける、辛冉は城を堅固に持つといへども、すでに粮盡き兵疲るれば、毎日に成都の方を城中より望み、救の兵の到るやと看れども、遂に到る事もなければ、かくてはとても、守りおほすべき樣なしと、衆兵を率ゐ城を棄て、江陽に奔往く、李譲は是れを赶げず、打すてゝ、我身は乃ち城に入かはり、民を安んじ、李超を留めて廣漢の權の太守となし置き、それより勝を得たるの兵を引いて、此勢ひに乘じ、成都をも攻め破らんと議したりける、李特

が曰く、羅尚もとより我に德あり、我今これに迫らばこれ不義たり、されば今如何して、これを行ふべきやと云へば、閻式が曰く、吾先づ一書を作りて本情を陳ね、その後こそ兵を進めて、これを攻むべけれ、しかるときは自ら、羅尚が怨恨も又のこらじと云ふ、李特は即ちこれを信じて、羅尚が方へ一封の書を送る、其の趣は、李特もと羅公に背く心なく、晉朝へ反すべきの思なきところを、辛冉が讒し妬の意より、みだりに兵士をさし遣し、我等を誅すと云ふ、こゝに於て良民は慍り、忠臣は恨みて、怒りのあまり、田佐等を殺伐すれば、其よりのちは、虎に乘の勢ひ、死命をすてゝ大虎を斃し、以て我身を生らん事を、欲するのみなれば、老大人と云へども、今更敵せずんば非ざることにいたる、これ是非に及ばざるの情に出づる所なりと書おくる、書至ると雖ども、羅尚これに一辭の答もせざる故、李特今はさてこれまでぞ、敵と云ひなづくる者、羅公と云ふとも、執ずんはあるべからずとて、兵を率ゐ城に遏りて、陣列を整へたり、羅尚は出て戰をもなさず、人を梁州寧州の兩處に遣し、救を求むといへども、恐らくは其路遠うして、急に應ずる事、叶ふべからずと思ひければ、其辭を卑うして、書を以て俄に李特にあたへ城を攻むるの事を緩うせんことを請ひもとむ、李特衆將を集めて、進退の議をなすに、楊褒、任回二人が曰ふ、羅公今

此の如くなる書を送る事は、府庫空しく竭き、外より來るべき援の兵もなければ、妄に卑しき辭を以て我に諂ひ、わが意をなだめ置き、其外援の、一たび至る事あらば、其ときに臨んで吾を計らんとなり、しかじ今城中の空虛なるに乘じ、亦虛詞を以てこれに答へて、其心を怠らせ、備なき處を攻むるならば、一舉にしてこれを拔くべしといふを、李譲閻式が曰く、然ば非ず、吾れ昔日、威勢いまだ立さるとき、羅公の義を以て相待事なくんば、焉ぞ今日あらんや、且らく其意にゆるし、一たん人情を買ひ兵を粹きて、廣漢に歸り、銳氣を養ひ粮を積み、人を擇みて郡縣を守らせ、官兵を防ぎ、自ら官廨を立て備へ、羅公の所爲いかんと見ん、若し再び、兵を以て我を伐たば、那時に力を盡し、成都を奪ひ取らんに、何の難き事かあらん、暫く彼の心を甘からしめば、吾義も又全からんと、議するにより、李特乃ちこれを然りとし、廣漢に兵を回しけり、

通俗續三國志卷之二十七

羅尚因敗擒李特

僞益州の刺史李特は、兵威ますゝ盛になれば、羅尚は勢や

うやく徹になり、成都の一城に籠り、兵權を失ふ事に成くだりける、されども李特、彼が恩義を思ひて、城を攻むる事を延引すべきに定り、暫く廣漢に兵をそ回しける、かくて自ら大都督、鎭西大將軍と稱して、多くは天子の禮法を眞似たりける、嫡子李蝭を驃騎將軍とし、輔が弟、李讓を、驍騎將軍、兄の子李始を、武威將軍、己が子蕩を、揚威將軍、次の子李雄、鎭軍將軍、李房が弟、堪を、西夷校尉、堪が子、李離、李國を、前後將軍、李恭、李奕、上官晶、任回、任道、費陀、王角、李祺、趙誠、皆輔國將軍とし、上官惇、王達、勉韶、李文を、粮料使、李遠、李博、文斌、上官琦を、諫議、殿撾、王幸を、司馬とし、楊褒、楊珪を、掌訟獄、李壽、王燉、王懷等を、祿史となして、庶の事を司しむ、閤式を正軍師となし、趙肅、何巨、毛植、襄珍を、光祿太夫となし、大に境内に赦を行ひける、時に羅尚は、貪酷しくして百姓多くしたがはず、李特は又法を約やかにし、刑を寬し、徭を輕し、賦を薄したりければ、民みな大に悅び、意を寄せずと云ふ者なし、羅尚は李特が已に官職を立置き、法をあらため、其恩惠を以て、民心を買ひをさむと聞くにつけ、己に逆ふを怒り、卽日に行文を下し、荊梁關隘に告て、大に軍兵を會し、共に圖つて、李特を勦るべき事を促す、李特此さたを聞知つて、衆人を集めて議して曰く、遥ろ聞く、羅尚、各處に行文を巡し、人數を集めて吾を勦んと謀るとかや、此に軍馬を招き聚る事は、反つて易けれど、只一件の難き事あり、甚是憂ふべし、如何と云へば、連年辛苦等と戰を搏ふが故、粮すくなく儲へ空し、恐らくは羅尚と敵をなし難からん、是を奈何とか爲べき、衆の流黨の曰く、看るに今、蜀中の富饒の大戶ども、此の如く西土の亂あるを悞れ、皆々相集り、五家を保とし、十家を伍として相助け、みな相率て一所に集り、壘柵を深き塢の中に構へ、家を移し、眷屬、老弱、錢粮ともに持はこんで隱れ、中にも壯に力量ある者どもを集めて、是を守護させ、盜賊亂放を防ぐなり、是に依つて處々多く儲へ積む事あり、はじめ趙廣が張燦に命じて、民の財を奪取て、軍用となしたるが如き、其のとき我等の救ひ助くる力によつて、民間多の禍を逃れたるなり、其恩心まことに、民に少なきにあらざれば、今人を諸の村塢に遣し、善言を以て俵粮を假り借らば、民みな應じ允とすべし、然らば數萬の粮米、旬日ばかりの內には、卽ち集つて能く至らん、何ぞ是を慮り、憂とするに及ばんや、李特聞いて、民の粮米を借り用ふる事も如何と、是を許さず、乃ち牛馬を殺して軍士に給し、資帛布疋の類を發し、村塢の處處に遣し、其價を明にして、粮米を買取らせ、分、厘、合、升、

も、民の物を貪らずして、大に粮米を調へけり、李特が行く處、此の如くなりければ、郡民大に其德になつきて、牛米を助け、以て軍門に輸し連び、是を兵士に給したりけるを、李特また其貿をとらせ、或は年の末なる年貢諸役を以て、是を償はんと書付を與ふれば、民皆是を受けず、剩へ其勇壯なる者どもの、能く斧鉞を執れるが類は、願はくは來り從つて、役に走り使はれ、命に効ひ、共に官兵を拒き、其の境域を相保ち、鎭謐せんとて集りければ、已に精卒を得る事こゝに六七千餘、此の如くなれば、軍容は日々にまし、いよ〳〵盛んになりにけり、羅尚は、諸方の兵馬到り集りければ、日を選んで遂に衆隊を引き、賊壘に寄向ひける、漸く其の間、四十里ばかりに到るらんと思ふ時、官軍の探子、爰に回り報じて、李特が兵甚だ備ふる事嚴しうして鳴をしづめ、大軍の此の如く向ふと雖ども、聊か以て懼るゝ體なしと云ふ、羅向是を聞き了り、倉卒には事をなし難かるべし、さらば爰に營寨をとり 定めよと令して、各々軍柵をかまへたり、羅尚は衆將の異見を聞くに、李特此の賊人に假すに仁義を以てし、民を釣るに恩愛を以てす、是に依て、大に衆心を買をさめて、軍兵大に吾軍に倍を加ふ、吾恐くは一とし て、彼に勝を取るべき算なし、事まさに何んか出でん、任明、任歆、修軍徐鑒等が云ふ、賊兵たとひ多しと雖ども、是又まことに懼るゝに足らず、聞くに梁粮米甚少しと、されども誓を李特が心に立て、いさゝかも民間、村粮を援らずと云へば、彼が大軍、餉の給事あらず、必然として、程なく盡るに至らん、されば味方の軍たゞに、堅固を旨として、是を守り備へ、與に妄りに出て戰事なくんば、凡そ半月を過ぎずして、賊衆は倉の米盡ぬべし、然らば自然に、內より變なくて叶ふべからず、那時に吾れ計を以て是を破らんに、必ずしも功を成さんか、羅尚此の議を喜び、諸將を分つて、營寨を嚴しく戒め、軍兵をそろへ、守住めて居たりける、李特は官兵の出で戰はざるを以て、反て此方より軍を出して、羅尚を攻むるに、羅尚たゞ寨に倚て守防ぎ、相持する事數日に及びける、爰に於て李特が兵、射て傷られ砲にて死し、或は折損ずること尤も多し、かくて二十餘日を經れば、李特が軍粮盡き、衆人のこゝろ擾れたつ、李特その變あらん事を慮れば、乃ち諸軍の人數を、皆々放つて、所々の村塢、民寨の中に遣し、食に就て自らを育はしむ、民兵ども是を防ぎて納れざれば、軍士共の云ふ、羅尚まこと、貪る事酷だしきについて、吾等川民と共に、この不仁しかたの人を除き、民の害を鎭めん爲、軍を起せしなり、然るに汝の爲を思ふ者を防いで我に食を與へざるやと云へば、諸塢の民ども、一應の理につまり、

留め納れて食を給す、軍士ども塢にありて、其強にほこり、横行淫亂みだりなる事言ふ可らず、民ども是によつて悦びず、多くは李特に、離れ叛くの心を生じ、人を遣し、この事を楊褒に訴へたりければ、楊褒、即ち、閻式と共に是を議し、李流と一所に入つて、李特を誅めたりける、主公、向の日自ら誓つて、民を擾らじとし玉ふ、是によつて能く此の數軍を得て、以て大なる基を啓かんとす、奈何ぞ已に大業の成に垂とする先にあたつて、又信を失し敗れをなすや、塢の中の民、寨を立て自ら守る、今相附くと云へども、心いまだ測るべからず、亟に宜しく、食に就く兵を召し回し、其の塢中の民の大姓の者より、子弟を選んで招き寄せ、是れに職役をあたへて、事に任じて召使ひたまへ、是を官人になすと云へども、實は是を質となすなり、然して後は、父子兄弟共に晉に從ふの意なく、我につく事を樂しむで、ながく味方の用をなさん、かくの如く軍士を縱にし、各塢の中に遣りて食に就しめば、軍士共みだりに民を侵苦しめん、民是に困窮し、心一變ぜんとき、其の禍測るべからずと云ふ、李特が曰く、吾が兵をやり食に就せたるものは、諸の村塢の民ども吾を信じ、彼れみな吾をたのみて、亂を捍ぐ衛とし、心を傾け、附く事を願ふを知りたる故なり、しかるときは、皆々自らの家人に同じ、それを疑ふの理あらんや、況や玆に大事已に成れり、誰か又吾に背いて、異志ある事をせん、吾心昭らかに是を知る、汝等が知る處に非とて傾はず、二人はしば〳〵諫むれども、李特かつて听されば、是非なく立て我寨に歸りけるが、李流に向つて、主公今自らの能を恃んで、恐らくは算らる〻事あらんか、羅尚又兵を散じて、外にある事を知りなば、必然として來り攻めん、たゞ心を用ひて隄に備へられよと云へば、李流も深く是を然りとす、案の如くに塢中の居民、流兵どもの掻き擾して、婦女を姦し、欺き陵ぐを怨り怨み、期はずも羅尚が方へ、潛に投り訴へ、只今李特が兵、粮已に盡きたり、是に依て士卒皆散じて、山塢の中にあり、強て民家の食に就く、今老爺聰督、何ぞ時に乘じて、民と與に害を除き玉はざると云ふ、羅尚言を听き、乃ち將官を集めて共に議す、今李特粮なし、將兵山寨に散て食に就くとか、此の兵の少に及び、進んで是を擊たば如何、徐鑒が曰く、此れ天より李特を、亡さんとするの時なり、此の事まことにあらん、僞りならじ、衢者に李特、かりに仁義を行ふ眞似して、流衆川民の心を結びたり、是によつて人皆服ふ、此の故を以て事をも成しき、今已に賊心の覘を失ふ、正に爰に乘じて是を擊つべし、乃ち天に應じ人に順ふの時なり、何ぞ爰に狐疑をなさんや、但まづ能言の人を遣し、居民に說き聞せ、

かれと約束を定めん、且へ塢中に壯士多く、能武藝を心得たり、是等を招いて計るべし、今來つて吾に告ぐる事は、李特を恨むる餘りなれば、吾を助けて賊を破るに必定せり、羅尚此言によつて大に喜び、乃ち任叡、任明に令し、親ら諸塢に行しめて、密に塢壘の大姓に說き聞せ、民兵どもと期を約束したるに、諸の山塢の民兵、悉く應ひ順へり、かゝる時に襄陽の太守、宗岱も、兵士三萬を提げ、羅尚が救に到り著く、其の諸郡の兵も皆來り到ると報ぐ、羅尚大に悦て、即日に人馬を集め、總軍を點檢し了り、辛冉が部下の大將、何冲を先鋒と爲し、徐鑒、黃訇、左記、任明を副將とし、遥に李特を攻打しむ、又上庸の將張龜、犍爲の賀仁の二將と、梁州の許雄を、左路の隘口に伏せ、張興、費深は、辛冉が兵將何冲を助けて右路に伏となる、これ流賊の救應の兵を截りとどむべき爲なりける、時は冬の初つかた、天氣陰り、雲垂れ合し、小雨まじりに降雪の、翛然たる空なれば、流衆どもは今日なんど、敵のよもや寄來らんとは思ひもよらず、並びに何の隄防をも備へず、營中に骰子を擲ち、賭を爭ふ族もあらば、或は溫め酒に寒を忘れて、鼻息に雷をなし、南柯の夢を結ぶもあり、思ひ〳〵意々、とり亂したる折ふし、忽ち听く、砲銃雲衢に轟き、喊聲林樹を拂ふ處に、羅尚は親ら大兵を帶び來つて、直に殺て營前に至りける、時に李特が軍中、兵士多くは山に入つて食に就き、殘る兵士少なければ、各々心に懼をなし、敢て出て戰はず、李特大に叫んで曰く、羅尚が兵此に至る、若し努力めて向ひ前まずんば、必して寨壘に攻入られん、李輔聞いて怒をなし、手に雪刃の劍刃を舞し、馬を飛して殺出しけるが、正に何冲にはたと遇ひ、二人敵して相戰ふ事、いまだ十合もせざるに、黃訇、左記も攻入れば、李輔心慌しく、過つて何冲が一刀に、馬下に砍て落されたり、李特是を看大に怒り、親ら兵を率ゐて衝き至り、何冲を斬らんとしたりし處へ、李遠は鎗を挺げて、早く陣の前に進みたり、何冲神威を起し、大刀を奮つてかゝる、李遠これを敵し住むること叶はず、頭を回して陣中に逃げ入れば、李超は是に替つて、急に助け戰うたり、何冲は李遠が北るに氣をまし、いよ〳〵勢ひさかんになり、刀を引きて、再び李超と共に馳騁せて、戰ふ事二十餘合に及ぶころ、徐鑒、任明、雙々たる胡蝶の如く、閃めいて逼り至れば、李超、心を敵に奪はれ、何冲が刀を、遮り欄ぐに及ばずして、空しく頭顱に砍中られ、血は烟雾を起し、雙片に分れて死したりける、李特が兵是に恐れて、大に敗れ走りける、爰に、李文、嚴檀等、村塢の中にかけ往いて、兵を促し接應せんとしたりけるに、誰か知らん、居民どもいつしか敵に

內應し、流兵を賺しつゝ、今日は雪降り寒天なれば、林間の紅楓燒くに宜しき時なりと、居民大姓打集り、處々に酒席を開き、流兵共にしたゝか醉を催させ、思ふさまに強飮せける、流兵ども、今日の雪の徒然なるに、是はよきもてなしやと、何の遠慮にも及ばず、飮み喰ひて心を放し、爰に一群、かしこに一席、枕籍て醉眠す、居民計つて、兵具、器械、刀鎗まで、盡くかくし置き、其の後是等を殺さんと巧みければ、偶酒を吃せざる者、又半は醉の醒めたる者も、是を防ぐに空手にて、敵すべきやうなければ、是非なく方々へ命を逃れけるが、忽ち路上に於て、李文、嚴檉等に出逢ひ、其情を以て告たりけるにぞ、二人大に驚いて、急ぎ本部の寨に復り、李特にかくと報たりける、李特は是を大に悔い、吾れ閻式、楊褒が勸めを、听さりけるこそ無念なれ、果して此失誤りを引出でたり、今更これを奈何せん〳〵と憤る、李流が曰く、定めて李漢、李璜等が、必ず來り救ふべし、急ぎ內よりも殺出で、渠等と一所に相合ひ、重ねて道理をなすべしと云ふ、誰か知らん、二將の來る路すぢは、盡く張龕、張興等に戰ひ住められ、二路の兵の到り得る事かなはず、又李文、嚴檉二人は、李特が衝き出るを保證りて、徐轡、何冲に欄ぎ住められ、李文、嚴檉、死を冒して突きけるが、李文は、左記に砍られ、嚴檉は徐轡に刺されて死にたりけり、李流は事の勢、既に振はざるを見てければ、任回、任道、上官晶等、馬をならべ死戰して路を奪ひ、李特を先に立て、陣を衝き出走りける、爰に羅尚、李特が走るを待かけ居けるが、馬を躍らし截てかゝり、大に叫で、義のなき賊徒、今走りて何の處に去らんとする、李特は羅尚が、自ら來るを看見るより、亦つき進んで是を擒にせんと、互に思ふ志し、馬を交へて相戰ふ、纔に十餘合ばかりするころ、忽ち見る喊一聲大に發ひ、一員の猛將、飛が如くに殺り出すは、乃ち襄陽の前鋒孫阜なり、手に長鎗をとり、直に陣中に進むは、さながら無人の境に入るが如く、當るを幸に流兵を刺死せば、紛々として地に倒れ、孫阜遮に、羅尚が李特と、親ら交戰するを看、赶け來て相助け、三合の中一鎗を持つて、李特を馬よりなき落せば、晉兵ども相集り、李特をとらへて細たておつとり擁で前み去る、流民ども、李特が已に獲らるゝを見るより、悉く器械兵具を打すてゝ、我先にと奔敗れば、官兵大に勝をとり、首を斬ること五千餘級に及びけり、李流、上官晶、任回等、爰をつひに遁れ走り、李蕩、李雄と一所に合はんとして、德陽に奔り往きけるが、又何冲、孫阜等に追付れ、漸く遁れて赤祖山中に入りにける、夫より何冲、孫阜の二將は、德陽に至つて、其の城を攻破り、嚢贓を擒にし、又

墊江を陷れ、守將王回を斬る、李譲大に懼れ、任藏、鷲碩に會し、退いて涪城を保ちたり、川民ども、李特が大に敗るゝを見て、疑の心を生じ、羅尚に歸するも多かりける、羅尚は張興等の五將を遣し、兵を率ゐて、賊のかためし岷橋の砦壘を攻め、流將上官惇を斬る、張龕は羅尚に勸め、勢に乘じて、盡く流民等を勦らんとて、進で赤祖山をぞ擊ちたりける、

李雄復下汶山

李流等は赤祖山に遁れ入つて居たる處へ、羅尚が兵ども來りて、きびしく攻擊つ、其銳氣正に盛なるを見、叶はじと思ひければ、爰をも又逃はしりたるに、官兵又後より是を追ふ、李流は官兵の一面に近づくを見、人を遣し、李譲を催して救應せしむ、爰に於て李譲等兵を引いて、一邊り士卒を以て道を阻て、陣を立て官軍を境の內に入れじと、防ぎ禦りたり、羅尚も敵の備ある事を知れば、親ら張興、張龕、賀仁を率ゐて至り、陣を途中に結び、以て賊の征し進むを伺ひたり、李流が曰く、敵の兵馬の初めて到るに乘じ、誰か味方の一人、其備の定らざる所を、勇を奮つて是を擊つものあらん、しからば渠が鋒を挫くべき者をと云ふ、李蕩は弟の李雄に向つて、吾が父白衣より奮ひ起つて、衆て六郡を併せ玉ふに、一段に運蓋き、敵の爲に執らはれ玉ひたるぞ念なき、されば此の仇羅尚と共に天を戴かざる怨みあり、たとひ我今死なざるとも、この仇報ゆる事を忘るべき所に非ず、汝は叔父と共に緊しく守り、營寨を持つべし、構へて吾と共に、命をすて去るべからず、我もし今此の一陣をきり住めば、幸に勝つ事を得て後、弟と與に心を乘り、力を効して父業、或は望む事あらん、成敗たゞ此の行にありと言訖り、刀を掉ひ馬に上り、勇を奮つて、官軍の陣中に殺入る、人の頭を砍得ては、幾許と云事なく、亂れて路上に滾々たり、流血は砂を染めて紅をなす、爰に官軍の中より、黃囘と名乘つて、李蕩を抵ぎ戰ひけるが、只一合にして、李蕩が刀を被り、頭より項にかけ、砍つて馬下に打倒さる、何冲これを看、刀を橫へて赶け來りて敵し住め、二人各雄を逞しうし、身を奮つて大に戰ふ事、三十餘合すれども、いまだ勝負を分たず、かゝる處に忽ち見る、孫阜が鎗を撚りで、傍より殺至る、李蕩は力めて、敵二人を相手にとれども、並に懼れ怯るゝ色もなし、羅尚は諸將を喝して、一齊にかゝれと云ふ、是に依つて諸將共、一人を中に圍とゞめて、四方より進めば、さしもの李蕩も心慌しく、何冲が一刀を肩胛に砍中てられ、身を翻して馬より落つ、孫阜すかさず再び搶く鎗にて、李蕩はつひに陣中に死したりける、李蕩すでに戰死

すれば、何冲、孫阜の二將、勢に乘じて衝すゝむ、李流が大陣流兵披き靡け、遂に小城に走り入り、緊しく閉ぢて出で戰はず、次の日羅尙は、進んで小城に走り入り、緊しく閉ぢて出で戰はず、次の日羅尙は、進んで小城を圍むに、李流は民どもを叫はつて、城に上つて守禦し防げと雖も、衆みな答ふる者さへなければ、誰か一人上らんとする民もなし、李雄が曰く、人心すでに替れり、此の城何によつて守るべきとて、夜にまぎれ、其の奮き黨の者共ばかり引いて衝き走り、廣漢さして去りければ、羅尙は遂に城に入かはり、百姓どもを安撫して、しばらく休息したりけり、夫より李流は、直ちに走りて廣漢に至るときは復び衆兵二萬餘人になりにける、李雄は衆と議して、李流を權りの益州の牧とし、軍民を安ぜんとするに、李流が曰く、不可なり、若かじ擧つて朝に降を乞んには、今我れが家、父兄のありし日に似ず、其勢ひ衰へたれば、敵を防ぐとも、はかく〳〵しき事あるべらず、李雄が曰く、今又城の據るべきあり、兵の令をなすべきあり、又糧の守るべきあり、何ぞ此言を出して、自ら吾身を以て、鼎鑊に投事をせんとし玉ふぞ、李流聞いて、今我が兵屢敗れ、戰將連りに喪ふ、辛冉が今、あらたにかゝへ來りたる勇士、何冲を以て將となす、かれ誓を立てゝ、晋の城池を、皆克つて取り復さんと云へり、又許雄、宗岱、張龕がやうなる、剛將みな來つて敵の助をなす、吾れ恐る、味方の軍民皆胆を落せば、官兵城下に至るほどにしては、必ず內の變を生ぜんか、小城に入りしが如く、民ども背く事をなさば、重ねては投るべきの處なからん、然らば家族の多き、保たんと思ふとも叶ふべけんや、李雄聞いて、叔父の言差へり、我等敵の將官を多く殺傷し、郡縣をとり據ひては、晋の守官を害ひ逐ふ、たとひ今敵に降を請ふたりとも、あに殺さずして能く免さんや、昔漢の高祖、楚の項王と、大小四十餘戰をなし、鬪ふごとに陣々皆、高祖の敗れとなる、後來九里山前の一戰、竟に全き功を收めて、四百年の天下を子孫に傳ふ、夫れ大丈夫たらん者は、宜しく死中に活事を求むべし、以て大事をなさんと思ふ者、何ぞ一度の敗を以て、即ち志氣を餒すべきや一設へば仇に降るが如きは、籠中の鷄を見るが如し、其宰烹らるゝに任ず、生けらん事に於て、更に路なかるべし、李流が曰く、吾寔に荊梁の二州の兵馬も、亦おしつけ爰に至りて、敵方に加はらん事を懼るゝなり、何を以て目にあまる大勢に、ともに是に敵すべき、其の上何冲、孫阜が驍勇なるをや、李雄が曰く、辛冉老賊なり、何冲によつて戰をなさしむ、何冲又己が勇を恃んで、兵士を約せずして、自ら進んで孤り來るべし、さるほどならば、我死を誓つて、渠が一陣をやぶつて殺り死すべし、何冲をだに殺破らば、官兵重れて、よもや輕

輕しくは進み來らじ、即ち我衆も亦胆壯になつて、心志堅かるべしと、獨りいきつて勇めども、李流は是に返答もせず、たゞに首を低れて沉吟こゑのみを出せり、李雄が曰く、今兵士少しと雖ども、往昔の、初めて手を起せし日より、戰に慣れて、精勇是に過ぐ、叔父何ぞ、前に壯にして、後に怯き、など奮勇して、一令を下さゞる、さても甲斐なき事かな、何故にたゞ默しては懼れ玉ふぞと、勵せば、李流が曰く、吾固に怯なからず、恐くは士卒の命を用ひざらん事を、汝ち試に激して見よ、李雄乃ち流黨どもを召び集めて、是に謂て曰く、昔し亡命によつて、衆と共に川蜀に入りて、活らん事を計る、吾父子、叔侄、皆な汝等が鄕に還る事を肯はざるより、大國と兵を連れて、禍を結ぶ事を致し、今吾一門皆、義に依て身を傷る、今吾れ叔父と、衆人の濟怯くを見るにつけては、恐くは力を効さゞらんかと思へり、それについては、又出て降らんとするときは、先日朝命に違ひあらそひ、官兵を拒ぎ敵したるを以て、一たび降ると云ふとも、つひには是れ汝等も我等も、皆爰に死されん、汝等の意を立つる事、是に於て如何にぞや、まさに明らかに心底をあらはし云へ、吾よく是を決斷せん、衆人の曰く、昔年將軍の一家、其身を顧みず、我が等の爲に死力を出して、命の絶ゆるを延べたまふ、何ぞ今日に至つて、敢て其死を避けんや、情を盡して、兎にも角にも、生命をかへりみず、辛冉と一たび勝負を決し、以て甸長の恩に報ずべし、若し還た勝を得るならば、即ち天の我等を、絶さる處と知らるゝなり、たとひ不幸なる事ありとも、田橫先生の衆にならつて、塚に付て皆死し、以て大義を明すべし、豈に自ら網の中に墜入りて、敵に降ると云ふ事あらんやと、涙をながして訴ふるは、思ひ切つたるありさまなり、李雄は衆人の言ところを听くに、其必死の勇あつて、用ふべき事を知れば、即ち臂を奮つて大に呼び、甲を貫き銳を執て、上官晶と先當かけ欵出し、以て辛冉が陣を衝て湊り遇ふ、辛冉が兵たま〳〵至つて、正に漸く城を圍まんとする仕たくも、いまだ調へざる比なるに、李雄は大に城門を開き、打死と思切つたる敢死の士、千人を率ゐ、號呼ひ、先首かけて湧き出づる、辛冉未だ列をもなさゞるに、流兵ども死を冒して、敵陣に殺入りたるは、凡そ一人を以て、百の敵に當らずと云ふ事なし、此の勢に官兵ども欵たてられ、紛々として亂れ倒れ、疊々として交に横ふ、其屍は路に滿ち溝をうづむ、何冲は李雄が衆に違はず、己れが勇をたのんで、衆にすぐれ、軍にぬきんで、獨り往來し、流兵をなぎ倒すに、却つて好し、李雄が飛が如くに至つて、何冲をとつて相撞き、鉾を交ふる事二十餘合に及ぶ比、閻式、楊褒が、外より散亂

したる流兵どもを、招き集めて到來し、遥か城下に戰あると見るより、忙しく殺りすゝむ、是に依て流兵の勢ひ大に振ふ、辛冉は、上官晶が一箭に刺中てられ、既に秩死さるべき處へ、劉並が救住むるにあうて、やうやくに逃れ去る、楊褒は、味方を助けんと、衝て城下に至れば、爰に何冲と李雄、死を限りに戰ふ、楊褒是を見るより、慌しく弓を取り、箭を拔てかなぐり發しに射たりける、あやまたず何冲が小腹に、ずはと立てば、身を飜して馬より落ちたりけるが、羅軍の費深、たま〳〵爰に至り値うて、何冲をば救得て、軍隊に引入れたり、是によつて辛冉が兵、大に敗れて走りける、李雄、上官晶、是に氣を得て、力を極めて追ひ去りけり、辛冉が兵、退く事四十里に至つて、方めて足を立て定む、爰に人馬を計へて見るに、其三の內二分を折いて、わづかに一分ばかりに擊なさる、何冲も寨に至つて死すれば、辛冉は傷重うして、まさに危く見えたりけり、かくて李雄は、兵を收めて城にかへり來れば、李流は親ら出むかへて、李雄が背を撫で、吾れ眼は有りながら、珠なしと云ふべし、ほとんど乃の事を悞らんとしき、英雄即ち我が家にあるを知らざる事よ、今より何ぞ敵人を懼れんと、乃ち宴を設け賀しよろこぶ、次の日、羅尙は、兵を進むる事を待とゞめて、先づ味方のやうを探り見るに、何冲は死し、辛冉は傷重く、宗岱は疾ありと云へば、羅尙が勢ひ、孤となつて援けなし、かくては戰ふ可らずと、遂に退いて少城に還る、李雄は、羅尙が退き去るを見れども、其の何故と云ふ事を、いまだ知らされば、細作を以て探らするに、回り報じて、宗岱病重くして襄鎭に回りけるが、途中にて死したり、其の外辛冉旅甚だ痛で起つ事あたはず、何冲すでに亡びたり、此の故に羅尙は、ひとり迸げ回ると云ふ、李雄言を聽いて大に慶び、叔父李流に曰く、今四處の兵解け退き、辛冉、宗岱斃るゝが如きは、羅尙が勢單にして是弱し、料るに渠が兵を以て、再び擧ぐる事叶ふべからず、吾兵も切りに敗れ、粮食以て給がたし、それに付ては、汶山の地、密に通うして、太守常深、無謀の輩なり、侄に兵士萬人を假したまへ、夜半に城下に至り、其の不意を襲つて、一陂にこれを下すべし、是敵の測る事なき機きなるべき、今此の一郡の錢粮を得るならば、又以て事を立つべしと云ふ、李流是に從へば、李雄は精兵をすぐつて一たび起ち、一晝一夜に道を行き馳すること三百里、汶山の界上におしつけたれば、正に今日も黃昏の時候なり、遂に衆士に令して、皆々飽食せしめ、粮をつゝみ枚を含みて進み行き、其の夜の三更ばかりに、其の城下におし寄せ、雲梯を數處に竪起し、上官晶、李國、殿檢、王達等、真先にとり上れば、衆々

の軍士是に從ひたり、已に皆々城に上るの比、城を守るの兵士醒起きて、あわてさはぐ處を、こと〴〵く殺り散し、城門を打開けば、李雄は兵に將とし、常深が府を衝て攻入る、常深、城すでに陷いる事を知りぬれば、其子の常松と家眷を帶び、南を望んで落行きたり、常深は向前に逃れ去りて、曾て後を顧みず、家の眷屬どもをば、嚴檢がおしつめ、俱に奪ひ擒にして引回す、常深はそれをも思はず、只一騎にて馬を馳せ、少城に奔り行いて、羅尙と一所に成りにけり、汶山の郡の亟、王懷も降人に出でたりける、李雄は令を下して、殺掠むる事を許さず、はやく榜をかけて、民を安じたりけるにぞ、衆みな是を悅びける、李雄は李遠を留め、兵士五千に將として、此の所の鎭守たらしめ、自らは錢粮の半分をとりて、新に降參したる所の兵士萬人を引つれ、凱をとなへて、廣漢にこそ還り來りけれ、

徐盭范長生歸李流

李雄危き敗の內に、大なる勝を得るのみか、復び汶山の軍にまで理運を得、其錢粮をとり持せ、降兵を引卒し、威猛大に振つて還るに、李流は心中大に喜悅し、李雄に向ひ、不意き今日、危中に安を得、死中に生を得んと云ふ事を、剩へ城地までを取得る事、是皆汝が能なり、謂つべし、父兄の器量に背かざる者なりと、李雄が曰く、是みな叔父の威福と、諸將の力によるとのみと謙退したりける、李流は乃ち、酒宴を開き、衆將に謝して、酒も過ぎ、各退出したりけり、爰に羅尙は、兵士を退け、少城に居たりしが、流賊又汶山をも併せ取りたると聞き、殊には閻式、上官晶が謀あり、勇あつて侮りにくき者と聞き、即ち徐盭等と議すらく、李流復たび妄に肆にして、忌み憚る事なく、又汶山を奪へりと聞く、理まさに早速是を征伐すべき事ながら、但し新に、何冲を破るの後なれば、味方の士卒心おくれ、彼は又心すでに壯ならん、若かし先、此時に乘じて、東の方涪城を取て後、再び謀を行つて、かれをば討伐すべしと云ふ、徐盭も此の論きはめて善しと定むれば、羅尙兵士を列ねて、逕に涪水に赴きけり、李讓は此の事を探り、任藏と談じて曰く、今兵あらたに敗れ、粮また少なければ、とても此處保ち難し、早くあけ退んぞましならめとて、俄に城をあけ退き、郫城にこそ走りける、羅尙は涪城に入て民を安んじ、庫中に入て點檢すれば、錢粮毫髮も留めず、已に貯へ盡れば、兵士飢うる事甚し、徐盭ときに謀を獻じて曰く、我が兵東を攻るときは、賊兵西に掠む、我軍南を取るときは、賊又北に寇をなすべし、然る時には此戰、いつが何迄も終る

日なきに似たり、此の如きに至ては、人寧ろ事を得る隙なく、地しづかなる時なけん、然して、禍の根つひに斷ゆべからず、今此郡の內ち、青城山中に一りの豪傑あり、即ち汶山の人氏にて、姓は范、名は長生と云ふ者なり、庫に數萬の粮を儲へ、家に金帛多く富めり、其の上謀深く、勇武に勝れたる者にして、手の者に壯士をかゝへ、士兵數千人を屯めて、まことに一方の大戶、保障ぐの首領たり、渠れ、流賊の亂を嫌つて、遠く山林に遁れたり、今小將願はくは、かれが處に赴き、謀を合せて寇賊を平げん、君まづ前より兵を進めて攻めば、吾と長生とは、其の後より遶出て、汶山を取るべき事、猶ほ掌を反すが如くならん、那時、賊徒獨り、廣漢の一城に據るばかりにては、能く事をなすべからず、其の後、范長生をは、涪城に鎭守たらしめ、小將は汶山に鎭守となつて、君は成都に坐まして、三處にて賊兵を苦しましめば、半年を過ざさる內に、李流をば擒になすべし、もし兩川を平定する事を得ば、君の功績は古に超えん、まことに大ならずやとすゝむ、羅尙、此言を直に聞かずして、徐盤が願ひ、汶山の太守を要むるに心あり、故に此謀を設け、事余くなるときは、彼の太守を得べし、若し戰ひ敗るゝときは、罪を我に歸せんと云ふ事にこそと、邪氣をまはしたりければ、中々以て其の議にしたがはさるのみか、返つて徐盤を難じて曰く、吾數處の大將を招き、椅棟りたる兵士を大に會してだに、尙また勝つ事を得さる强賊なり、然るに一介の村夫の野翁を以て、事を謀りたりとて、豈其の男が、何沖、張毬、劉並、田佐、曾元等の人に能く勝らんや、此の言理の當らさるのみならず、さても迂談りやと、呵々と大笑ひける、徐盤は是を大に憤れども、羅尙が前をば事なく去り、退いて大口しける、あゝ此の懦夫、大事をなすの器量にあらず、今吾言を用ひずして、終に吾身に禍を引起さんこそ、ふびんなれと獨言を、眼近にありし小軍が聞きつけて、ひそかに羅尙に告しらせて、徐盤が尊府を惡口する事、此の如しと語るに、羅尙は是を聞き、大に怒つて、早速に徐盤を罪に行はんとすれども、かれが過、さして科となすべき事なければ、暫く思つて過しける、或日に徐璧又進むで、羅尙に向ひて、咋には李讓、任滅、こゝを開いて退くと云へども、亦是梟獍賊徒なり、渠れ吾兵に敵せさるを知る故に、一段風を望んで遁れ去るとは云へども、其の必ず復來るの心あらん、當に預じめ、是を防いで用心あれと云ひける、羅尙きいて、先の意趣ある心より、彼をそつと當かへさんと存ずれば、徐璧に向ひ、汝まことにあまりて、何故さのみに分別すぐるぞ、但し賊ばし慣しきか、彼の李特を擒にし、其の外の賊將多く斬りたるを、汝は是を見さりしや、

是に依て兇賊の、吾を畏るゝ事虎の如く、我が聲を聞き影を寫しても、慙き走つて近かづかず、最も勢のしからしむる所以なり意を安く落著けて、慙き譟ぐ事なかれ、惣じて事には、自らの主あつて爲す上は、皆面々の計策あり、汝たち懦夫知るべき所にあらずと、にがり切つて云ひたりける、徐盤は羅尙が言を聞き、忽ち胴慾せきあげ、好りし意は惡心に變じ、赤き面は青くなつて、半時ばかりは言をも出す事あたはさるが、稍くに氣息をおさめて、閑に言を發し、使君已に僕が過ざたる論を、とり用ひ玉はざる上は、請は僕も又、自ら一つの營を立て守らん、もし緩急の事ありとも、相救ふに好らん、且うは賊人の暗計を、ふせぐ爲なりと望む、羅尙是を思案し、彼が自ら、我が下知を受さる處より、科を構へこしらへて、陷入るゝに好けんと覺り、然らば汝兎も角もせよとて、其意に任せける、夫より徐盤は兵士五千を分ち、別に一つの營寨をこしらへ、賊を防ぐの用心よりも、若や羅尙が計つて、己を害せんかと、日夕恐をなしたりけり、此に李讓は、已に郫城に安堵して居たりしが、徐盤と羅尙と、其の中不和なりと聞き、復た涪城を取つて還るべきの意ありながら、彼の地粮少して保ちがたき事を愁ふれば、使者を廣漢に乞はかりける、李雄是を聞き、早く閻式をして、粮米を押させ、自ら精兵を帶び、往て李讓を助けゝる、李雄已に郫城に至れば、李讓も共に議をなし、進取るの計を定めたり、閻式が曰く、且く事をしづめ、敵軍の形を細に察し要むべし、頃日の沙汰として、徐盤、羅尙が中合はずと說く、其の事決して寔ならば、計を中るに用て爲べき手立幾くも有らん、先間諜を入れて是を窺ふべしとて、人を遣し、其因を探り訪はしむ、それより數日を過ぎて、いまだ實事も知れさるに、忽ち趙誠は、羅尙が兵士一人を捉へ來る、閻式は即ち此の諜を軍中に入れ、繩を解き、多く賓をあたへ賺して問ふ、羅使君と徐參軍は、隙を構へて何故にか睦しからさる事を致すや、兵士の曰く、某は即ち羅使君の部下の者にて、親しく近所に召し仕ふる士なり、されば徐參軍の故を、外より是を察するに、恐くは徐參軍の異心にても、あるやうに思はれ候なり、其の事故羅爺も是を是と思はれず、其の折から范長生と交を結び、ともに汶山を取り返すべきと望れたるを、羅爺の推量には、徐參軍が、汶山の太守を心に願はるゝより計るぞと思はるゝ故、疑が彌々起つて、中あしう成候なり、しかしながら、吾等の勘へには、徐參軍の此の事は、忠義の言と承る、羅爺のあやまりに、疑ひ過ての事にや有るべしと、己等が同志にては、沙汰至す事なりと、打解て語るに、閻式は彼者によく語せ畢つて、けに理りく、是より先き惟しかりつる

事は、徐璧が方より人を遣し、我を召して、涪城を共に討てと云ひしは是故なりけりな、さりながら我兵新に敗れて、士を喪ふが故、今又鋭氣の挫るによりて、少事を延べんと思ひ、それ故未だ行さりしぞ、今此の言を聞けば、仔細は知れつと、獨り點頭く處へ、李雄は來つて閻式に向ひ、彼は正に羅尚が軍卒とかたるに、何ぞ密語を以て語り聞するぞや、すでに言を漏すが上は、這ゆるすべからず、早く砍て棄てんと、刀斧を取つて彼の軍卒を、自ら斬らんと引立つる、閻式、實しやかに是を驚きとめ、いや〳〵免して斬るべからず、正しく監をつけて軍中に置き、涪城を破の後、是を免し放つべし、無罪の人誅すに及ばずとて留むれば、李雄も是を免して斬らず、番の監怠るべからずと云つて、小軍に引渡し、わさと囚のにげ行くやうにしたりける、羅尚が軍卒、是計にてかくするとは知らず、夜にまぎれ潜に城を逃げ出で、此の言を以て羅公につげ、恩賞を得んと思ひすまして、竊に是を告知せたり、羅尚は是を聞いて大に怒り、常深を使とし、徐璧が營に往かしめ、かれを責るに大義を以てし、野心ある事を罪するに、徐璧かつて意に知らぬ科なから、今更これを言を以て云ひたりとも、其理立ちがたければ、何とすべきやうもなく、中心はなはだ恐をなす、やうやうに理を述べて是を謝し、常深を回しける、爰に閻式は、小軍の逃げ走りたるを見るより、謀を行ふべき時なりと、李流に請うて、我身はひそかに徐璧が營寨にゆき、徐璧に向つて說いて曰く、羅尚すでに老至つて、其心悖り惑ふが故、賢良を用ふる事あたはず、公の嘉き謀をなすにも、反つて是が故に公を害せんとす、此等皆匹夫の爲と云ふものなり、豈に大事を興に謀るに足らんや、吾れ公のため是を慮るに、願はくは、公と共に兩川を奪ひとりて、事ならば吾等二國を傾けて是を听かん、但し汶山の太守のみに留まらじ、李益州も此の事を願ひ思はるゝに依り、今僕をしてこゝに至らしめ、公の利害をのべしむるのみと云ふ、徐璧は閻式が言を聞くより、我身の危き事、旦夕をもはからず、如何すべきと思ふ時なれば、大に悦び、即ち此議に從つて、火を放ちて營寨を燒き、人數を引つれ、夜にまぎれ郫城に至りて、それより又李雄、閻式と共に、廣漢に赴きて李流に見ゆ、李流は徐璧が、味方に來り投ると聞くより即ち諸將を率ゐ廓を出で迎へ、城内に伴ひて、大に酒宴を開き、彼が勞困を慰めをはり、拜して行軍副總官になしたり、それより同じく、武藝をまなぶ敎場に至り、各々起つて、兵藝をつくして見せければ、徐璧感き、我今諸將と兵士との藝術を觀るに、其委しき事云ふばかりなし、寔に用ふるに足れりと云ふべし、嗣王の業をなさん事、何の難き事かあらん、只

缺く處は粮米なり、李流が曰く、此の地久しく職場となる故に、人多く走りて他の州に徙りぬれば、官窮し民疲る、是に依りて粮實にある事なし、是を奈何がなすべきや、徐璧が曰く、昔は、孫伯符、事を起すとき、魯肅を得て竟に吳の國を起したり、今范長生は、一方の豪傑の任俠しき人なり、若し往てこれを求め得ば、數萬の粮米を得んに、力を勞せずしてなすべきものなり、吾請ふ、かしこに往て、此の人に說て味方とせん、彼をだに說きおほせたらんに、粮を出して吾軍を養はゞ、大事は爰に成すべしと云ふ、李流は大に喜び、乃ち金寶の禮物を備へ、楊褒を使者とし、徐璧に隨へ、范長生が方へ行しめける、徐璧は已に青城山に至り、長生に見え、李流が方よりの禮幣を送りて、粮を求むるの事を述ぶ、范長生、堅く是を受けず、再拜して辭謝す、吾は乃ち是清高を立て、自ら道を守るの士なり、若し今其の意に從ひ、反逆の人を益して粮を出さば、萬代の後まで誚の名をとゞめて、人に罵れん事こそ糞はねと云ふ、徐璧聞いて、羅公貪つて且つ酷し、民の脂を剝しぼりて苦しましむ、これに依つて、各郡縣響の如くに應じて、李益州に從はん事を願へり、しかれども李益州、民を害ふる事をあはれんで、兵を挙げて遁れ避ると雖ども、宗伋許雄等がために獲にせらる、是によりて、已に敗に至らんとするを、今や蜀川の民ども、咸前の李益州の仁恩に感じ、願はくは死を以て廣漢を守らん、如何なればとて、羅尚が酷き政には、從ひ難しと云つて勤むるにより、遂に再び、汶山を奪とり、兵威大に振ふ、されども玆になほ民を擾らん事を欲せざるを以て、軍粮の竭くる事を致せり、聞く先生、義高く、困また多く滿ちたりと、故に僕をして來せり、望むらくは春澤の濡ひ施し、廣漢の軍を濟ひ玉ひて、以て益州をすくふの名をなし玉へ、されども長生うけがはざるを、楊褒が曰く、徐璧公は羅公の參軍たる事、先生の知り玉ふ所なりされども羅公、百姓を殘ひ玉ふを以て、此事を諫め勸めらるゝ故、金言私を思ふの怒に觸れ、妄に害を加へんと欲す、亦我、今の李益州の仁心、衆を感じ、義氣人を動かすを以ての故、此に相歸し玉ふも、共に民を水火に救はんためなり、吾れ關外の流民たりと雖も、粗大禮を知らざるにも非ず、今晉朝大に亂れ、南川終に失す、先生肯て出て、抑其むかし南陽の諸葛が功を、今青城の范家より起し玉へと、さまざまに辨をあらせ、理をせめて云へば、長生今は止む事を得ず、粮を出し、以て流軍に給すべきに定めたり、李流はかくて粮を得、乃ち議して、復び涪城の二郡を取らんと云へば、范長生が曰く、此空城を爭ふべからず、今羅尚、涪城、少城を新に復したる事なれば、必ず力をつく

して爭ひなん、我是に依て思ふに、羅尚が兵粮は、是を犍爲郡より取れり、犍爲の太守李苾は文官なれば、元より兵の道を知らず、若し跋うちて東に向ひなば、手に唾きして犍爲をば得つべし、又成都の臂を斷に同じけんと云ふ、李流大に喜び李雄に命じ、兵を提げ去つて、犍爲を襲はしむ、角て李雄兵を進めて、夜は行き日は住り、潜に城下に至るを、李苾爰に於て始めて知り、急に衆人を集めて、評議をなして曰く、賊兵城に寇す、賀仁は粮を廻して、成都に往ていまだ回らず、如何して敵を迎へん、賀仁が弟、賀俊すゝみ出て、吾願くは兵を領じて、賊を退けんと云つて、即ち甲冑を披掛けて、城を出で、直に衝て李雄と戰ひけるに、李雄が勢の勇なるを見、慌しく刀を舞して戰ひける、いまだ十合ならずして、賀俊架ふるに及ばず、李雄が爲に活ながら擒と成て、流軍の中に入りにける、李苾は城上に在つてこれを看るより、走りて衙の中に入り、眷屬どもを纏ひて、北門より逃出で、成都をさして落行きたり、是に依て城中に主なければ、軍兵共盡く、李雄が陣に下りける、李雄は早く人を遣し、廣漢に報たりけり、李流大に喜び、郫城に往て李讓を召び、犍爲の鎭證とし、李雄に代つて、李雄が軍を回へさしめ、評議して、進取の計をぞなしにける、

通俗續三國志卷之二十八

李流病死李雄嗣

李雄はかくて軍を回して、李流と事を謀りける、今叔父、敬甫の郫城を去つて、犍爲に行たまへば、郫城勢ひ孤にして、覺束なし、さるに因つては、先づ少城を取りをさめて、共に相助け、郫城の援けを爲さしむべしと云ふに、李流もこれを然りとし、上官晶、任回、任道、王幸を遣し、兵馬一萬を領して前進す、少城の主將洪蕃、常深是を聞いて、兵を進めて出で戰ひけるが、上官晶が一刀を、洪蕃が乘たる馬の頭に砍中られ、馬は驚きかけ出せば、主は陸地に倒れたり、上官晶、再び刀を起しかけて、洪蕃を砍らんと爲とき、洪蕃は起もあがらず、大に叫んで、命を助けよ、願はくは降らんと云ふにぞ、上官晶は可笑ながらに、さらば起きよと引立る、常深はこれを看、再び戰ふ心もなく、馬を飛せて成都にぞ走りける、これに依て上官晶は、全き一戰もなくして少城をば下しける、羅尚は折ふし馬どもを引出させ、湯洗ひ場のりなどして、寛々たる所へ、常深は馬を衙門に乘はなつて、少城を奪ひたりと告ぐ、羅尚はこれを聞くより、心中大に怒りつゝ、親ら衆士を帥ゐて、

少城を來り爭ふ、上官晶、任滅、相會し、犄角勢をなして相爭ふ、羅尚はこれと連戰し、互に勝負をなしけるが、羅尚がために遂に再び取かへさる、斯て羅尚は、少城を十日餘り守りけれども、羅軍の倹粮米は、もと犍爲より轉輸びたるに、犍爲を李雄に取られしかば、粮のつゞくべき樣なくして、是非に及ばず城を捨て、成都へこそ歸りける、羅尚少城を棄れば、踉へは又流軍入替りける、爰に於いて流軍の大將上官晶は、任道、王幸をとゞめて、少城を守らせ、任滅、任回、洪蕃と共に同じく、廣漢に回りけり、李雄は此の由を聞て大に喜悅し、此の勢に乘じ、涪城をとらんと議し、正に兵を起さんとするに當りて、李流俄に病に染んで惱みければ、しばらく軍を停止せよと、其の事は止みにける、李雄は叔父李流が疾に侍り、十餘日までに及べども、藥餌いさゝかの効なし、形容日々に衰へて、其遂に起さらん事を、李流自ら覺りければ、即ち李雄を召んでこれに謂つて曰く、汝ち心を煩して、我が爲にもはや勞する事をやめよ、吾病すでにかぎりと知らる、はやく人を遣はして、犍爲の李讓、綿竹の李堪、巴西の李離、李國、汝山の李遠をこゝに召來らしめよ、我いま人世の限となれば、遺言すべき事ありと云ふ、李雄聞いて、急に使者を遣して、一々に告たりければ、親族共數日を經ずして、火速に皆々來り集り、

李流に謁見すれば、李流が曰く、吾れ今日まで、弟侄諸友の輩ら推しすゝむるによりて、竇に心を同じ力を協へ、兄侄の大なる仇を報い、再び吾家の餘光を開けり、しかるに吾今不幸にして、此重き疾を得て、日に增し、衰へ甚しうして、爰に保たざるに至る、請ふらくは軍師、衆將官を招き、吾れに一たび面せしめよ、以て相共に談ずべきの義あり、須臾あつて閻式、楊褒、上官晶、任滅、任回、王角、趙離等倶にいたれり、李流が曰く、吾諸君と、今や冕冠珮玉を帶び、官位ある身となつて、軍民を統るに至る、これみな吾が兄と弟、及び侄の李始、李蕩等、皆戰に力を盡したるが故なり、然るに渠皆今亡びたるは、甚だ憂ふべき事なり、念ふに李雄は、亦吾兄の子なり、殊には恢に事を弘むべき英武の材在つて、衆を禦ぎ强を拒ぐべきの略あまれり、汝等必ず諸の衆を保ち全うし、先祖の祀をつゞけ、子孫を永く育はんと思ふ心あらば、最も李雄を立つるに非ずしては不可なり、惟り吾言に違ふ事なくば、これ幸ならん、李讓が曰く、謹で賢兄の命を承く、敢て心を盡さずんばあらじ、復た閻式、楊褒等に謂ふ、吾乃ち李益州の兄弟たる、兄堪と面あたり許して、姪を輔けんと約したり、君等も當に亡兄、李兄特公の昔の惓を念ひわすれず、共に忠を盡して、相負く事なかれと云へば、衆みな唯諾ひ、涙を垂れて誓

をなす、李流も目を張り泪を含んで訣をなし、一日も主なくしては、闔亂の日叶ふべからず、吾死するの時、卽日に李雄を立て、國主となし、兵衆を統させよと云ひやんで、昏沈へず、夜に至つて終に死す、次の日、李壻、李讓、衆將と共に李雄を立て主とし、禮式事畢りぬれば、哀をなし喪を治めて、李流が骸を青城山の麓に葬して、喪禮も全かりける、かくて上官晶、任滅等、衆將と共に議して、李雄に王號をすゝめ尊ばんと云へば、楊褒、閻式が曰く、此の事いまだ行ふべからず、ゆゑ如何んと云ふに、時に東を下し得るとすれば、西また失ふ、これに依て民なほ兩の端をうかゞつて堅からず、士人の心かくの如くなるに、若し還つて妄に自ら矜り尊大ならば、必ずこれを惡まん、恐くは變を生ずるに易けん、上官晶が曰く、これを立て王とせば、全く蜀に號令しやすけん、如何んとなれば、富家、豪民、其の外自らを貴うして、人を賤しうするの族ども、官や位を進まんと來り附いて、多くこれを爭そはゞ、共に闔るによからん、吾まさに面のあたり、主公と擬らんとて、李雄が前に至つて、此事をすゝむるに、李雄が曰く、吾が才線の如く、其の德なきに同じ、みだりに諸君の推戴く事を蒙りて主となれり、猶これだにも恐らくは、吾が身過ぎて堪へ當らざらんかと思へり、況や豈に王號を稱し、其の品を超え、分なうして人を罔り

味さんや、且へ叔父の喪いまだ終らず、外に羅尙の強き仇あり、吾自立する事を聞くほどならば、彼かならず晉朝に奏して、四方の兵を以て吾を攻むるときは、亡びを取るの道なり、安んぞこれを行ふべき、閻式が曰く、しかりと雖ども、衆の意全く拂るべからず、權りに益州の牧たるべし、大將軍の事を行ひ、以て軍民を令するに、威あらしめよとすゝむれば、今は李雄もこれに同じて、つひに其の議に從ひけり、

李雄取成都

こゝに羅尙は、少城を失して後、部下鄰郡の將兵どもは、軍中粮の乏しきゆゑ、皆々おのれ〳〵が在鄕へ、兵を引いて還りければ、羅尙心甚これを恨み憤ると雖も、詮方なし、この比、何事に依てか、李雄、李讓等、皆廣漢に回るのよしを探り得て、便ち兵を起し、又爭取らんと其の用意をなす處へ、忽ち報じて、李流、病死に至り、李雄、今新に立つて益州の牧となる、一時にいまだ兵をば出し得べからずと、羅尙大に悅んで、常深、許汜、賀仁、費深、李玆等に命じ、精兵一萬を統べさせ、郭城、少城の二ヶ所を取らんと進みける、任道、王幸は、早くこの事を聽知りて、人を馳せて李雄に報ず、李雄大に怒り、羅尙今吾叔父死にたるを侮つて、安に兵を興せるや、今

此の一戰、往日の比にあらず、務めて勝を取んと欲す、始めて事を立つるに、大方にては成るまじと思ふ、叔父自ら行たまはゞでは、彼を破る事叶ふべからずと云へば、李讓が曰く、主公言を發せされ、吾亦願うて行き、以て精卒五千を假り、羅尙を破り、始めて功を弘めん事必せりと云ふ、李雄大に喜び、卽ち上官晶、任回、楊褒、王角に、兵一萬を引ゐさせ、李讓に隨へ、往いて二處を救はしむ、李讓は少城の堺の上に至り、羅尙が兵の、郭城にあるを探り得て、卽ち日夜となく、路程を兼倍して進みけるが、程なく郭城近く着きにける、爰に於て李讓、上官晶は兩路より、官兵の後に遶り出づ、常深是を見て曰く、是れ賊兵の救ひ至ると見えて、塵頭の大に起るは心もとなし、早く其用意せよと、忙しく圍を徹て陣を整へ、戰を始めけるが、上官晶等に殺みだされ、少し備の亂れけるを、任道等城上にあつてこれを看、亦鬪門を啓いて突出づれば、官軍首尾より打たてられ、防ぎ戰ふべき樣なく、皆々我がちに逃走る、上官晶等、後に隨ひ追討てば、官兵大に敗れける、足に因て器杖盔甲を奪ひ取る事算なし、斯くて常深等、退いて成都に回りければ、李讓もまた兵を收めて還りける、李雄は自ら出て迎へ、李讓に向つて、恭しく喜ぶらくは、叔父の大に英武を展べたまふことや、已に敵の膽を破らん、但し羅尙老賊、いつまでか吾と冤を結ぶもとかしい、今六軍の兵を起し、直に成都に造り以て父兄の大なる仇を報ゆるの一勝負を、これと決すべし、方に吾志を遂げんとすと云ひければ、閻式是を聞いて、未だ造次にことを爲すべからず、必ず敵の虛實を探り得て、彼れが其の兵を他處に出すの跟つけ、輕騎をひそかに分ち遣し、羅尙が留守を襲ひ擊たば、成都は遂に吾手に墜つべしと云ふ、李雄これを然りとし、細作を入れて彼の動靜を察しける、わづかに一月ならずして、探子回つて、羅尙が軍士粮なきによつて、牙門將軍羅特を留め、兵士一萬を添へて成都を守らしめ、又任明に兵士五千を授けて、涪城を守らしむ、羅尙は自ら大兵を引いて、廣州閬中に住つて、食に就き去ると告ぐ、李雄所能で衆を集め、共に計をなす、副總官徐鑒が曰く、今羅尙遠く出て、成都を以て竪子に託す、此れ天これをして、將軍に資らせんとなり、羅特年幼して謀なし、若し精兵を以てこれに臨まば、必ず恐れて降らざるときは走らん、涪城の任明は、謀ありと雖ども決斷なし、亦これ取りやすきのみ、丞に兵を起して伐たまへ、時節をば失ふべからず、李雄其の計策を善として、楊褒を留めて李壻が輔とし、其留主を司どらしめ、自ら六軍の兵を統ぶ、上官晶を前鋒とし、李讓を總の帥とし、閻式、徐鑒を參謀と